一般社団法人日本家政学会 第72回大会

研究発表要旨集

2020年5月29日（金）〜5月31日（日）

会場：高崎健康福祉大学

一般社団法人日本家政学会
新型コロナウイルス感染拡大の状況を踏まえ、2020年5月29～31日に予定していました高崎健康福祉大学においての大会開催は中止となりました。

研究発表会は紙上で開催いたします。

要旨集およびJ-STAGEへの要旨の掲載、演者の参加費の納入をもって、紙上開催の研究発表の実績といたします。

P-001〜P-014が若手研究者ポスター賞にエントリーした演題です。残念ながら、今大会では、ポスター賞の投票は行いません。
第67回大会より、若手研究者の研究奨励・応援のために「若手研究者ポスター賞」を設けています。この賞は、演者かつ筆頭発表者としてポスター発表する若手研究者（2020年4月1日現在45歳未満）の会員個人に授与するものです。

<table>
<thead>
<tr>
<th>講演番号 (ポスター)</th>
<th>講演番号 (口頭)</th>
<th>分 野</th>
<th>演題名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>P-001 3L-05</td>
<td>食物 - 栄養</td>
<td>間食におけるフルーツグラノーラのセカンドミール効果 - オープンランダム化クロスオーバー試験ー</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>P-002 3C-03</td>
<td>食物 - 食品</td>
<td>新タマネギ葉の抗酸化能と嗜好性に関する検討</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>P-003 3L-02</td>
<td>食物 - 食品</td>
<td>新潟砂丘さつまいも“いもジェンヌ”の冷蔵及び常温保存による品質変化</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>P-004 3C-04</td>
<td>食物 - 食品</td>
<td>酒粕の添加が蒸し菓子（松風）の物理特性および食嗜好性に及ぼす影響</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>P-005 3I-06</td>
<td>食物 - 食文化</td>
<td>写真で残す家政学～魅せる写真で「映える」を導くテクニック～関東支部若手の会活動報告（令和元年度）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>P-006 3I-04</td>
<td>食物 - 食育</td>
<td>小学生の食選択力の育成</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>P-007 3F-09</td>
<td>被服 - 材料・整理・染色</td>
<td>市販部屋干し用洗濯洗剤の性能評価 一塩のコロニー数に及ぼす洗浄効率の影響—</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>P-008 3F-08</td>
<td>被服 - 材料・整理・染色</td>
<td>スカート形状の「しっとり」と触感における「しっとり」との関係</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>P-009 3F-10</td>
<td>被服 - 材料・整理・染色</td>
<td>シューズ用グリーンコンポジットの試作とその疲労耐久性評価</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>P-010 2F-05</td>
<td>被服 - 構成・衛生</td>
<td>衣素材のなぞり運動時における皮膚の振動・摩擦特性と触感に関する検討</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>P-011 3E-12</td>
<td>児童</td>
<td>地域を包括した子育ち支援の検討 一地域資源を生かした他業種・企業などの連携ー</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>P-012 3J-07</td>
<td>家政教育</td>
<td>ドギーバックにみる食品ロス削減と大学生の社会的想像力</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>P-013 3E-10</td>
<td>児童</td>
<td>児童教育におけるスマートデバイス活用について 一保護者の子どもの頃の経験が及ぼす影響—</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>P-014 3J-06</td>
<td>家政教育</td>
<td>学習観を指標とした生徒の防災教育受講希望に関わる価値観の検討</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
### 目次

#### 大会概要
- 日程・会場案内図

#### 研究発表プログラム
- 和文
- 英文
- 特許手続き上の証明について

#### 公開講演会等要旨
- 第72回大会公開講演会「子どもの生活を支える家政学」
  - 講演1 「ネグレクトの原因の解明とその回避に向けて—生理学の立場から—」
  - 講演2 「日本の子育てと専業母のゆくえ—家族関係学の立場から—」
  - 講演3 「家政学で「子どもの生活を支える」ということ—家庭生活アドバイザーの視点から—」
- 教育講演「最近のスポーツ栄養のトピックス」
- シンポジウム「多様な使用者の視点と家政学 —群馬の事例から—」
  - 基調講演「佐藤芽子（ケネ）・須藤いな子—二人の先覚者に学ぶ」
- 家庭生活アドバイザー認定証交付式・活動報告会
- 東日本大震災生活研究プロジェクト活動報告会
- 若手の会・国際交流委員会共催セミナー
  - 「グローバルに拡げる家政学の未来 —先達に聞く国際的研究の進め方—」

#### 部会企画

#### 研究発表要旨
- ポスター発表（掲示：5月30〜31日 発表：5月31日）
- 口頭発表（5月30日）
  - 住居
  - 被服
  - 食物
- 家政学原論・家族・児童
- 口頭発表（5月31日）
  - 食物
  - 被服
  - 住居
  - 児童

#### 人名索引
<table>
<thead>
<tr>
<th>月 日</th>
<th>時 間</th>
<th>内 容</th>
<th>会 場</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>5月29日(金)</td>
<td>17:30～19:00</td>
<td>代議員懇談会</td>
<td>ホテルメトロポリタン高崎</td>
</tr>
<tr>
<td>5月30日(土)</td>
<td>8:30～17:00</td>
<td>総合受付</td>
<td>1号館1階 エントランス</td>
</tr>
<tr>
<td>5月30日(土)</td>
<td>8:30～9:20</td>
<td>午前の研究発表（口頭）PCデータ受付</td>
<td>2号館2階（D・E会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月30日(土)</td>
<td>8:30～12:00</td>
<td>ポスター発表受付・掲示開始</td>
<td>1号館2階（F・I・J・K会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月30日(土)</td>
<td>12:00～31日</td>
<td>ポスター掲示</td>
<td>6号館2階体育館（P会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月30日(土)</td>
<td>9:30～10:45</td>
<td>研究発表（口頭）</td>
<td>1～2号館2階（D・E・F・I・J・K会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月30日(土)</td>
<td>9:30～11:00</td>
<td>東日本大震災生活研究プロジェクト活動報告会</td>
<td>6号館1階（B会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月30日(土)</td>
<td>9:30～11:00</td>
<td>若手の会・国際交流委員会共催セミナー</td>
<td>6号館1階（C会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月30日(土)</td>
<td>10:50～13:00</td>
<td>部会総会等（7部会）</td>
<td>1号館2階（F・G・H・J・K・L・M会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月30日(土)</td>
<td>12:00～13:00</td>
<td>ランチョンセミナー</td>
<td>2号館2階（D・E会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月30日(土)</td>
<td>13:20～15:00</td>
<td>代議員総会・学会賞授与式・学会賞受賞講演</td>
<td>6号館1階（A会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月30日(土)</td>
<td>15:10～17:30</td>
<td>公開講演会「子どもの生活を支える家政学」</td>
<td>6号館1階（A会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月30日(土)</td>
<td>18:30～20:30</td>
<td>懇親会</td>
<td>ホテルメトロポリタン高崎</td>
</tr>
<tr>
<td>5月30日(土)</td>
<td>9:30～15:00</td>
<td>総合受付</td>
<td>1号館1階 エントランス</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>8:30～14:10</td>
<td>ポスター掲示</td>
<td>6号館2階体育館（P会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>8:30～8:50</td>
<td>午前の研究発表（口頭）PCデータ受付</td>
<td>6号館1階（B・C会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>9:00～10:45</td>
<td>研究発表（口頭）</td>
<td>1号館2階（F・J会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>9:00～9:50</td>
<td>教育講演「最近のスポーツ栄養のトピック」</td>
<td>6号館1階（A会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>9:00～10:30</td>
<td>家政学原論部会シンポジウム</td>
<td>1号館2階（I会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>10:00～11:50</td>
<td>シンポジウム「多様な生活者の視点と家政学—群馬の事例から—」</td>
<td>6号館1階（A会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>10:20～11:50</td>
<td>児童学部会シンポジウム</td>
<td>1号館2階（F会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>10:50～12:10</td>
<td>部会総会等（5部会）</td>
<td>1号館2階（H・I・J・K・M会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>12:00～13:00</td>
<td>ランチョンセミナー</td>
<td>2号館2階（D・E会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>13:00～13:50</td>
<td>午後の研究発表（口頭）PCデータ受付</td>
<td>1号館2階（F・I・K・L・M会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>13:10～14:10</td>
<td>ポスター発表</td>
<td>6号館2階体育館（P会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>14:15～16:15</td>
<td>研究発表（口頭）</td>
<td>2号館2階（D・E会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>14:15～16:15</td>
<td>家庭生活アドバイザー認定証交付式・活動報告会</td>
<td>6号館1階（A会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>14:15～15:45</td>
<td>服飾史・服飾美学部会公開講演会</td>
<td>1号館2階（J会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>15:00～16:30</td>
<td>家政教育部会報告と討議</td>
<td>1号館2階（H会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>15:30～16:30</td>
<td>全体部会長会</td>
<td>1号館2階（第1会議室）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>14:10～15:00</td>
<td>ポスター撤去</td>
<td>6号館2階体育館（P会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>9:30～15:00</td>
<td>総合受付</td>
<td>1号館1階 エントランス</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>9:30～14:10</td>
<td>研究発表 (口頭)</td>
<td>6号館1階（A・B・C会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>9:00～9:50</td>
<td>教育講演「最近のスポーツ栄養のトピック」</td>
<td>6号館1階（A会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>9:00～10:30</td>
<td>家政学原論部会シンポジウム</td>
<td>1号館2階（I会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>10:00～11:50</td>
<td>シンポジウム「多様な生活者の視点と家政学—群馬の事例から—」</td>
<td>6号館1階（A会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>10:20～11:50</td>
<td>児童学部会シンポジウム</td>
<td>1号館2階（F会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>10:50～12:10</td>
<td>部会総会等（5部会）</td>
<td>1号館2階（H・I・J・K・M会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>12:00～13:00</td>
<td>ランチョンセミナー</td>
<td>2号館2階（D・E会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>13:00～13:50</td>
<td>午後の研究発表（口頭）PCデータ受付</td>
<td>1号館2階（F・I・K・L・M会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>13:10～14:10</td>
<td>ポスター発表</td>
<td>6号館2階体育館（P会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>14:15～16:15</td>
<td>研究発表（口頭）</td>
<td>2号館2階（D・E会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>14:15～16:15</td>
<td>家庭生活アドバイザー認定証交付式・活動報告会</td>
<td>6号館1階（A会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>14:15～15:45</td>
<td>服飾史・服飾美学部会公開講演会</td>
<td>1号館2階（J会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>15:00～16:30</td>
<td>家政教育部会報告と討議</td>
<td>1号館2階（H会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>15:30～16:30</td>
<td>全体部会長会</td>
<td>1号館2階（第1会議室）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>14:10～15:00</td>
<td>ポスター撤去</td>
<td>6号館2階体育館（P会場）</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日(日)</td>
<td>9:30～15:00</td>
<td>総合受付</td>
<td>1号館1階 エントランス</td>
</tr>
</tbody>
</table>
1. 第72回大会公開講演会 『子どもの生活を支える家政学』
5月30日（土）15：10～17：30  6号館1階（A会場）
司会 群馬大学… 京子 氏
講演1  「ネグレクトの原因の解明とその回避に向けて—生理学の立場から—」
高崎健康福祉大学… 下川 哲昭 氏
講演2  「日本の子育てと産業母のゆくえ—家庭関係学の立場から—」
金城学院大学… 宮坂 靖子 氏
講演3  「家政学で「子どもの生活を支える」といったこと—家庭生活アドバイザーの視点から—」
家庭生活アドバイザー… 工藤由貴子 氏
質疑応答

2. 教育講演  「最近のスポーツ栄養のトピックス」
5月31日（日）9：00～9：50  6号館1階（A会場）
高崎健康福祉大学… 木村 典代 氏

3. シンポジウム  「多様な生活者の視点と家政学—群馬の事例から—」
5月31日（日）10：00～11：50  6号館1階（A会場）
コーディネーター… 群馬大学… 西薗 大実 氏
基調講演  「佐藤夕子（タネ）・須藤いま子—二人の先覚者に学ぶ—」
高崎商科大学… 熊倉 浩靖 氏
問題提起 家族の立場から
…  高崎商科大学… 安達 正嗣 氏
福祉の立場から
…  群馬医療福祉大学… 竹山裕美子 氏
パネルディスカッション

4. 家庭生活アドバイザー認定証交付式・活動報告会
5月31日（日）14：15～16：15  6号館1階（A会場）
1. 認定交付式… 会長… 大塚美智子 氏
2. 活動報告会

5. 東日本大震災生活研究プロジェクト活動報告会
5月30日（土）9：30～11：00  6号館1階（B会場）
報告1 全体報告… 石巻専修大学… 坂田 隆 氏
報告2  「石巻じちれんアンケート報告」
大阪市立大学… 宮野 道雄 氏
報告3  「仙台市応急仮設住宅オープンデータの解析」
大阪市立大学… 生田 英輔 氏
報告4  「東日本大震災支援の一端を地元の災害支援への展開」
ビースポート災害支援センター… 小林 深吾 氏
報告5  「東日本大震災の被災者支援に基づく人づくり、地域づくり」
石巻市社会福祉協議会… 阿部 由紀 氏

6. 若手の会・国際交流委員会共催セミナー
5月30日（土）9：30～11：00  6号館1階（C会場）
「グローバルに拡げる家政学の未来—先進国に聞く国際的展開の進め方—」
第一部 基調講演… 京都女子大学… 表 真美 氏
第二部 相談会… 神奈川工科大学… 飯島 陽子 氏
…  横浜国立大学… 薩本 弥生 氏
…  共立女子大学… 小原 敏郎 氏
…  西南学院大学… 倉元 綾子 氏
…  京都女子大学… 表 真美 氏

7. ランチョンセミナー
○花王株式会社
テーマ：「人生100年時代の親と子」（講演＋ワークショップ）
講 師：青木 基 氏
○東洋水産株式会社
テーマ：食品添加物のおはなし—お客様によりおいしく安全に便利な食品をお届けするために—
講 師：宮澤 光史 氏
○群栄化学工業株式会社
テーマ：糖×化学～素材で支える健康生活～
講 師：大久保明浩 氏
○株式会社ロッテ
テーマ：「噛むこと」の重要性～子供から高齢者まで～
講 師：宮野 篤 氏
○NPO法人うまい情報センター
テーマ：うま味健康（世界が注目する第五の味覚）
講 師：二宮くみこ 氏
○ケンコーマヨネーズ株式会社… 5月31日（日）12：00～13：00… 6号館1階（C会場）
テーマ：マヨネーズのあれこれ雑学
講師：西田毅氏
○マックス株式会社… 5月31日（日）12：00～13：00… 2号館2階（D会場）
テーマ：1. 未来に向けた安心・快適な住環境づくり（浴室乾燥機・ディスポーザー・車イスなど）
2. 環境にやさしく用途に応じた文具シリーズ
講師：山崎博氏
○東京ガス株式会社… 5月31日（日）12：00～13：00… 2号館2階（E会場）
テーマ：世代研究からのアプローチ「令和の暮らしを考える」
講師：松葉佐智子氏, 木村康代氏, 三神彩子氏
8. ポスター発表
ポスター発表受付 5月30日（土）8：30～
ポスター掲示 5月30日（土）12：00～5月31日（日）14：10
ポスター発表 5月31日（日）13：10～14：10
講演番号が奇数のポスター 13：10～13：40
講演番号が偶数のポスター 13：40～14：10
※発表者は、この時間帯は会場において説明・討論を行ってください。
9. 部会企画
(1) 家政学原論部会（シンポジウム）… 5月31日（日）9：00～10：30… 1号館2階（I会場）
家政学・家政学原論の今日と未来の方向性を探る：国連SDGsや国際家政学会が提起するもの
(2) 児童学部会（シンポジウム）… 5月31日（日）10：20～11：50… 1号館2階（F会場）
児童学の本質を問う —児童学は何を発信すべきか—
(3) 食品組織部会（ポスター掲示）… 5月30日（土）12：00～17：00… 6号館2階体育館（P会場）
食品を顕微鏡で覗く —小麦粉・米粉製品—
(4) 被服秋季学会部会（ポスター掲示）… 5月30日（土）12：00～31日（日）14：10… 6号館2階体育館（P会場）
科学的調査報告会（基礎研究(A)研究成果最終報告）
(5) 家政教育部会（公開講演会）… 5月31日（日）14：15～15：45… 1号館2階（J会場）
富岡製糸場と日本の繊維産業（仮）
(6) 家政教育学会（報告と討議）… 5月31日（日）15：00～16：30… 1号館2階（H会場）
家庭生活アドバイザーを支える研究グループの報告と討議
10. 部会総会等
家政学原論部会… 5月31日（日）10：50～11：50… 1号館2階（I会場）
家族関係学部会… 5月30日（土）11：00～13：00… 1号館2階（G会場）
児童学部会… 5月30日（土）10：50～11：50… 1号館2階（H会場）
被服材料学部会… 5月30日（土）12：00～13：00… 1号館2階（J会場）
被服構成学部会（運営委員会等）… 5月30日（土）11：10～13：00… 1号館2階（F会場）
被服衛生学部会（役員会）… 5月30日（土）10：50～11：50… 1号館2階（M会場）
被服生活学部会（総会）… 5月31日（日）10：50～11：50… 1号館2階（H会場）
被服心理学会部会… 5月31日（日）10：50～11：50… 1号館2階（K会場）
色彩・意匠学会部会… 5月30日（土）10：50～11：50… 1号館2階（L会場）
服飾史・服飾美学部会… 5月31日（日）10：50～11：50… 1号館2階（J会場）
住居学会部会… 5月31日（日）10：50～11：50… 1号館2階（M会場）
家政教育部会… 5月30日（土）10：50～11：50… 1号館2階（K会場）
11. 全体部会長会… 5月31日（日）15：30～16：30… 第1会議室
12. 研究発表分野別会場等一覧
ポスター発表

<table>
<thead>
<tr>
<th>月日</th>
<th>時間</th>
<th>講演番号</th>
<th>研究発表分野</th>
<th>会場名</th>
<th>会場</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>5月30日（土）</td>
<td>8：30～12：00</td>
<td>発表受付</td>
<td>食物・被服・住居・家庭経営・経済・家族・児童・家政教育・環境・健康・国際・震災・福祉</td>
<td>P−001〜P−158</td>
<td>6号館2階体育館</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日（日）</td>
<td>13：10～13：40</td>
<td>発表・討論</td>
<td>～14：10</td>
<td>携帯終了</td>
<td>P</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日（日）</td>
<td>13：40～14：10</td>
<td>講演番号奇数番号</td>
<td>～14：10</td>
<td>携帯終了</td>
<td>P</td>
</tr>
<tr>
<td>発表日</td>
<td>時間</td>
<td>講演番号</td>
<td>研究発表分野</td>
<td>会場名</td>
<td>会場</td>
</tr>
<tr>
<td>--------</td>
<td>--------</td>
<td>----------</td>
<td>-------------------</td>
<td>--------</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>5月30日（土）</td>
<td>9:30~10:45</td>
<td>2D-01~2D-05</td>
<td>住居</td>
<td>D</td>
<td>2号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>9:30~10:45</td>
<td>2E-01~2E-04</td>
<td>被服・心理・意匠・服飾</td>
<td>E</td>
<td>2号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>9:30~10:45</td>
<td>2F-01~2F-05</td>
<td>被服・構成・衛生</td>
<td>F</td>
<td>1号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>9:30~10:45</td>
<td>2I-01~2I-05</td>
<td>食物・食文化・食育</td>
<td>I</td>
<td>1号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>9:30~10:45</td>
<td>2J-01~2J-05</td>
<td>食物・食品・栄養</td>
<td>J</td>
<td>1号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>9:30~10:45</td>
<td>2K-01~2K-05</td>
<td>家政学原論・家族・児童</td>
<td>K</td>
<td>1号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>9:15~10:45</td>
<td>3B-01~3B-06</td>
<td>食物・調理・加工</td>
<td>B</td>
<td>6号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>9:15~10:45</td>
<td>3C-01~3C-06</td>
<td>食物・食品</td>
<td>C</td>
<td>6号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>9:00~10:00</td>
<td>3D-01~3D-04</td>
<td>被服・構成・衛生</td>
<td>D</td>
<td>2号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>9:00~10:45</td>
<td>3E-01~3E-07</td>
<td>被服・心理・意匠・服飾</td>
<td>E</td>
<td>2号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>9:00~10:00</td>
<td>3F-01~3F-04</td>
<td>被服・材料・整理・染色</td>
<td>F</td>
<td>1号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>9:00~10:45</td>
<td>3J-01~3J-07</td>
<td>家政教育</td>
<td>J</td>
<td>1号館</td>
</tr>
<tr>
<td>5月31日（日）</td>
<td>14:15~16:15</td>
<td>3D-05~3D-12</td>
<td>住居</td>
<td>D</td>
<td>2号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>14:15~16:00</td>
<td>3E-08~3E-14</td>
<td>児童</td>
<td>E</td>
<td>2号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>14:15~15:45</td>
<td>3F-05~3F-10</td>
<td>被服・材料・整理・染色</td>
<td>F</td>
<td>1号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>14:15~15:45</td>
<td>3I-01~3I-06</td>
<td>食物・食育・食文化</td>
<td>I</td>
<td>1号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>14:15~15:45</td>
<td>3K-01~3K-06</td>
<td>家庭経営・経済</td>
<td>K</td>
<td>1号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>14:15~15:30</td>
<td>3L-01~3L-05</td>
<td>食物・食品・栄養</td>
<td>L</td>
<td>1号館</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>14:15~16:00</td>
<td>3M-01~3M-07</td>
<td>環境・福祉・健康・震災</td>
<td>M</td>
<td>1号館</td>
</tr>
</tbody>
</table>

13. 懇親会  5月30日（土）18:30~20:30  ホテルメトロポリタン高崎
14. 企業展示・書籍販売  5月30日（土）9:30~17:00  6号館2階体育館  5月31日（日）9:30~15:00
### 日本家政学会第72回大会日程（於 高崎健康福祉大学）2020.5.30（土）

<table>
<thead>
<tr>
<th>時間</th>
<th>1号館</th>
<th>2号館</th>
<th>3号館</th>
<th>4号館</th>
<th>5号館</th>
<th>6号館</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>08:00</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>08:10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>08:20</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>08:30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>08:40</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>09:00</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>09:10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>09:20</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>09:30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>09:40</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>09:50</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10:00</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10:10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10:20</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10:30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10:40</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>10:50</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11:00</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11:10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11:20</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11:30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11:40</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>11:50</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12:00</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12:10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12:20</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12:30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12:40</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>12:50</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>13:00</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>13:10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>13:20</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>13:30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>13:40</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>13:50</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>14:00</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>14:10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>14:20</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>14:30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>14:40</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>14:50</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>15:00</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>15:10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>15:20</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>15:30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>15:40</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>15:50</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>16:00</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>16:10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>16:20</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>16:30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>16:40</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>16:50</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>17:00</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>17:10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>17:20</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>17:30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>17:40</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>17:50</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18:00</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18:10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18:20</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18:30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18:40</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>18:50</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>19:00</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>19:10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>19:20</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>19:30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>19:40</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>19:50</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>20:00</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>20:10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>20:20</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>20:30</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
日本家政学会第72回大会日程（於：高崎健康福祉大学）2020.5.31（日）

<table>
<thead>
<tr>
<th>会場</th>
<th>1/2F</th>
<th>1/2F</th>
<th>2/2F</th>
<th>2/2F</th>
<th>2/2F</th>
<th>2/2F</th>
<th>2/2F</th>
<th>2/2F</th>
<th>2/2F</th>
<th>3/3F</th>
<th>3/3F</th>
<th>3/3F</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1号館</td>
<td>A</td>
<td>B</td>
<td>O</td>
<td>D</td>
<td>E</td>
<td>F</td>
<td>G</td>
<td>H</td>
<td>I</td>
<td>J</td>
<td>K</td>
<td>L</td>
</tr>
<tr>
<td>2号館</td>
<td>C</td>
<td>D</td>
<td>E</td>
<td>F</td>
<td>G</td>
<td>H</td>
<td>I</td>
<td>J</td>
<td>K</td>
<td>L</td>
<td>M</td>
<td>N</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>時間</th>
<th>8:00</th>
<th>8:10</th>
<th>8:20</th>
<th>8:30</th>
<th>8:40</th>
<th>8:50</th>
<th>9:00</th>
<th>9:10</th>
<th>9:20</th>
<th>9:30</th>
<th>9:40</th>
<th>9:50</th>
<th>10:00</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1号館</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2号館</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>時間</th>
<th>10:00</th>
<th>10:10</th>
<th>10:20</th>
<th>10:30</th>
<th>10:40</th>
<th>10:50</th>
<th>11:00</th>
<th>11:10</th>
<th>11:20</th>
<th>11:30</th>
<th>11:40</th>
<th>11:50</th>
<th>12:00</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1号館</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2号館</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1号館</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2号館</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>時間</th>
<th>14:20</th>
<th>14:30</th>
<th>14:40</th>
<th>14:50</th>
<th>15:00</th>
<th>15:10</th>
<th>15:20</th>
<th>15:30</th>
<th>15:40</th>
<th>15:50</th>
<th>16:00</th>
<th>16:10</th>
<th>16:20</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1号館</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2号館</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>時間</th>
<th>16:30</th>
<th>16:40</th>
<th>16:50</th>
<th>17:00</th>
<th>17:10</th>
<th>17:20</th>
<th>17:30</th>
<th>17:40</th>
<th>17:50</th>
<th>18:00</th>
<th>18:10</th>
<th>18:20</th>
<th>18:30</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1号館</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2号館</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

| 時間 | 18:40 | 18:50 | 19:00 | 19:10 | 19:20 | 19:30 | 19:40 | 19:50 | 20:00 | 20:10 | 20:20 | 20:30 | |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------| |
| 1号館 | | | | | | | | | | | | | |
| 2号館 | | | | | | | | | | | | | |

vii
発表者の皆様へ

□ 発表データは、USBフラッシュメモリでご持参ください。（その他メディアは受け付けられませんのでご注意ください）

□ 発表者は、各時間帯に各自発表会場PCにてデータをインストールして下さい。
  お持ち込みのメディアは必ずウィルスチェックをしておいてください。
  なお、メディアを差し込んだ状態で発表することはできません。
  30日（土）午前の発表分は、当日の8:30～9:20
  31日（日）午前の発表分は、当日の8:30～8:50
  31日（日）午後の発表分は、当日の13:00（又は13:10）～13:50
データのインストールは代理の方でも構いませんが、指定時間帯にお越しいただきますようお願いします。なお、31日（日）午後の発表者で、かつ「若手研究者ポスター賞」にエントリーされている発表者につきましては、当日の8:30～8:50にデータをインストールすることが可能です。

□ 発表会場に設置されるPCは下記の通りです。
  OS: Windows 10
  アプリケーション: Microsoft PowerPoint 2016

□ 会場プロジェクターのケーブルコネクタの形状はD-Sub15Pinミニです。

□ ファイル名は、演題番号（半角）＋筆頭者氏名としてください。
  （例: 2C-01 家政花子.pptx）
  使用するフォントについては標準で装備されているフォント（MS・MSP・游明朝、MS・MSP・游ゴシック、Times New Roman、Century等）を使用してください。

□ Macintoshで作成されたメディアでお持ちの場合は、Windows PCで発表できるよう事前にご調整ください。
学内・会場案内

高崎健康福祉大学 〒370-0033 群馬県高崎市中大類町37-1 TEL:027-352-1290（代表）

（交通案内）
●車を利用する場合:
高崎ICから約5分
高崎駅から約5km タクシー代 1,600円程度

●バスを利用する場合:
JR高崎駅東口からスクールバス 15分
JR高崎駅東口から、市内循環バス「ぐるりん」（群馬の森 系9健大先回り）で大学下車
JR高崎駅西口から、群馬中央バス（県立女子大行）で「寄居」バス停下車・徒歩5分
JR高崎駅東口から、日本中央バス（高崎駅～大胡駅線）で「南大類町」バス停下車・徒歩5分

●スクールバスの運行について（高崎駅東口）↔高崎健康福祉大学（発表会会場）
○5月30日（土）
 高崎駅発 8:10, 20, 30, 40, 50, 9:00, 10:00, 11:00, 12:00, 13:00, 14:00, 15:00, 16:00, 17:00
 大学発→高崎駅行き 9:30, 10:30, 11:30, 12:30, 13:30, 14:30, 15:30, 16:30, 17:30
 ホテルメトロポリタン高崎行き 17:40, 17:50
○5月31日（日）
 高崎駅発 8:10, 20, 30, 40, 50, 9:00, 10:00, 11:00, 12:00, 13:00, 14:00, 15:00
 大学発→高崎駅行き 9:30, 10:30, 11:30, 12:30, 13:30, 14:30, 15:30, 16:30, 17:00
※バスは8時台は10分間隔で運行予定ですが、交通状況により変更する可能性があります。
※利用料金は無料です。

（主な交通手段と所要時間（各地から高崎へ））
●新幹線でアクセス（上越新幹線、北陸新幹線）
・東京から約50分
・大阪から約30分
・長野から約50分
・金沢から約2時間
・仙台から約1時間30分（大宮乗り換え）
懇親会会場
ホテルメトロポリタン高崎
〒370-0849 群馬県高崎市八島町222
TEL：027-325-3311
（交通案内）
懇親会会場へは、高崎健康福祉大学から専用バスを運行します。

学内・会場案内
高崎健康福祉大学 〒370-0033 群馬県高崎市中大類町37-1 TEL：027-352-1290（代表）

■総合受付・救護室 : 1号館1階
■クローケ : 6号館1階
■代議員総会・公開講演会・教育講演 : 6号館（A会場）
■各部会総会・役員会 : 1号館、2号館、6号館（B〜M会場）
■研究発表・ランチョンセミナー : 1号館、2号館、6号館（B〜M会場）
■ポスター発表・休憩コーナー : 体育館（P会場）
■展示・販売 : 体育館（P会場）
■休憩室 : 1号館（204・205）
■校内案内図

※キャンパス内は、全面禁煙です
会場案内図

1階（1号館・2号館・6号館）

※1号館・2号館・6号館は廊下でつながっています。
※6号館2階へは階段の中2階で連絡しています。
会場案内図

■ 会場案内図

※ 1号館・2号館・6号館は廊下でつながっています。
※ 6号館2階へは階段の中2階で連絡しています。
新型コロナウイルス感染予防の対策について

新型コロナウイルス感染拡大の影響に鑑み、本大会において次に該当する方は参加をご遠慮いただきます。

・体温が37.5℃以上の方
・海外帰国後2週間以内の方
また、参加される方についても、手指の消毒（アルコール消毒液）やマスクの着用などの咳エチケットを守ってください。
大会運営に関しては、会場の換気に十分に留意します。

大会会場における地震発生時の行動について

本大会で使用する建物は、耐震基準を満たしており、建物内でも地震時の安全を確保することができます。ただし、天井・壁・ガラス・棚などの二次部材の落下・剥離などが発生する場合もありますので、地震時には次のように行行動して下さい。

【地震が起きたら】
A. 教室の場合
・天井や照明が落下する場合があります。姿勢を低くして、机の下に潜り込んだり、カバン等で頭や体を覆ったりするなど揺れがおさまるまで静かに待機してください。
・ガラスが割れるときがありますので、窓のそばから離れてください。
・扉の近くにいる場合は、できれば扉を開けて出口を確保してください。

B. エレベーターに乗っている場合
・最寄り階のボタンを押してください。機種によっては、自動的に最寄りの階に停止するので、停止したらすぐに退出し、揺れがおさまってから階段で避難してください。
・閉じ込められた場合は、非常連絡ボタンを押して救助を待ってください。可能であれば、携帯電話等で閉じ込められていることを外部に伝えてください。

C. 階段にいる場合
・安全確認をして、その場にしゃがんで手すりをしっかり持って階段から転がり落ちないようにしてください。

D. 建物の外にいる場合
・外壁やガラスが落下物として落ちてくる場合があります。建物から離れて、揺れがおさまるまで待ってください。

E. 揺れがおさまったら
・非常放送、係員の指示に従って避難場所（グランド）に避難してください。
ポスター発表  5月31日（日）

食物

P-001 間食におけるフルーツグラノーラのセカンドミール効果 —オープンラベルランダム化クロスオーバー試験—
○増富裕文1, 石原克之1, 平尾和子2, 古谷彰子2,3 (1カルビー（株）, 2愛国学園短大, 3早稲田大)

P-002 新タマネギ葉の抗酸化能と嗜好性に関する検討
○湯浅正洋1, 上野真由子1, 森川真帆1, 川辺田晃司1, 石見百江1, 松澤哲宏1, 塚永美穂子2
(1長崎県大, 2広島大)

P-003 新潟砂丘さつまいも“いもジェンヌ”の冷蔵及び常温保存による品質変化
○春日景太, 石黒志実, 忍田真一郎, 小嶋優常, 寒河江侑加, 鈴木奈美, 大谷真広, 筒浦さとみ, 西海理之, 山口智子(新潟大)

P-004 酒粕の添加が蒸し菓子（松風）の物理特性および食嗜好性に及ぼす影響
○鳥居優理香1, 村上陽子2 (1静岡大・院, 2静岡大)

P-005 写真で残す家政学～魅せる写真で「映える」を導くテクニック ―関東支部若手の会活動報告(令和元年度)―
○金高有里1, 五十嵐清子2, 色川木綿子3, 竹内晶子4, 佐藤清香5, 新實五穂6, 和田佳苗7, 矢部えん8, 鴨下澄子1, 芝崎本実9 (1十文字学園女大, 2文化学園大, 3東京家政大, 4二葉栄養専門学校, 5愛国学園短大, 6お茶の水女大, 7東京栄養食糧専門学校, 8人間総合科学大, 9帝京平成大)

被服

P-007 市販部屋干し用洗濯洗剤の性能評価 ―菌のコロニー数に及ぼす乾燥時間と洗浄効率の影響―
○塚崎舞, 落合詩歩, 本多素子, 牛腸ヒロミ(実践女大)

P-008 スカート形状の「しっとり」と触感における「しっとり」との関係
○末弘由佳理1, 鎌柄好子2 (1武庫川女大, 2京都芸術繊維大)

P-009 シューズ用グリーンコンポジットの試作とその疲労耐久性評価
○加藤木秀章, 恒川弥子(実践女大)

P-010 衣素材のなぞり運動時における皮膚の振動・摩擦特性と触感に関する検討
○伊豆南緒美1, 佐藤真理子1, 田中由浩2 (1文化学園大, 2名古屋工業大)

児童

P-011 地域を包括した子育ち子育て支援の検討 —地域資源を生かした他業種・企業などの連携—
○田島大輔1, 金井玲奈2 (1和洋女大, 2桜美林大)

家政教育

P-012 ドギーパックにみる食品ロス削減と大学生の社会的想像力
○宮川有希, 上村協子(東京家政学院大)
ポスター発表 5月31日（日）

6号館2階体育館（P会場）
掲示時間 30日 12:00－31日 14:10
討論時間 31日 講演番号奇数 13:10－13:40 講演番号偶数 13:40－14:10

児童

P-013 子育てにおけるスマートデバイス活用について-保護者の子どもの頃の経験が及ぼす影響-
○神宮文代, 岡野雅子 (東京福祉大)

P-014 学習親を指標とした生徒の防災教育受講希望に関する価値観の検討
○大塚啓太1,3, 桁原智美2,4, 桑原智美2,4
(1東京大, 2東京学芸大附属高, 3広瀬病院, 4東京農工大・院)

家政教育

P-016 テキストマイニングを用いた食事マナーのエピソード分析と共食頻度との関係
○岩森三千代 (新潟青陵大短)

P-017 元気な地域在住高齢者の食品摂取多様性得点の特徴と食料品アクセス状況
○佐藤信実, 池上志恵, 萩野麻枝, 矢野有梨 (仁愛大)

P-018 在宅高齢者の調理と生活の質に関する文献レビュー
○久保田のぞみ (名寄市大)

P-019 若年者における習慣朝食欠食者の特徴
○雀部沙絵 (淑徳大)

P-020 妊娠および授乳期の葉酸欠乏が出生仔の脂質代謝に及ぼす影響
武島奈つ乃, 井沼瞳, 桑山ほか, 井上裕康, ○中田理恵子 (奈良女大)

P-021 小胞体ストレス応答に対するビタミンCの影響
○菅根保子, 山本彩矢, 小林詩歩, 中川理紗 (高崎健康福祉大)

P-022 ニホンジカ (Cervus nippon) 角の有効利用方法の開発
○小木曽加奈1, 北村俊英2
(1長野県大, 2長野市農林部)

P-023 加熱した白花豆からのレクチンの精製とその性質
○崎五月1, 秋山純一2, 島田陸士3, 中田理恵子4 (1香川大, 2吉備国際大, 3奈良学園大, 4奈良女大)

P-024 デキストラン修飾により生じる鶏筋原線維タンパク質の機能改変
○長谷川京加1, 佐伯宏樹2, 西村公雄3 (1同志社女大, 2北海道大)

P-025 植物種子抽出分画成分による時計遺伝子の活性化
○岡田悦政1, 岡田瑞恵2 (1愛知県大・院, 2Yms Laboratory)

P-026 フキノトウによる時計遺伝子の転写因子への影響
○岡田瑞恵1, 岡田悦政2 (1Yms Laboratory, 2愛知県大・院)

P-027 植物種子抽出分画成分による時計遺伝子の活性化
○岡田悦政1, 岡田瑞恵2 (1愛知県大・院, 2Yms Laboratory)

P-028 米麹の種類が麹甘酒の成分および食嗜好性に及ぼす影響
○鈴木絢子, 村上陽子 (静岡大)

P-029 台湾産鶏皮蛋と家鴨皮蛋の成分の違い
小泉昌子2, ○工藤美奈子1, 峯木真知子2 (1新渡戸文化短大, 2東京家政大)
ポスター発表 5月31日（日）

6号館2階体育館（P会場）

掲示時間 30日 12:00～31日 14:10
討論時間 31日 講演番号奇数 13:10～13:40 講演番号偶数 13:40～14:10

P-030 異なる培地組成で培養した黒酵母 Aureobasidium pullulans 由来多糖についての基礎的研究
 ○川崎祐子,風見早紀,山崎南々帆,宗宮奈々（同志社女大）

P-031 古代小麦の製パン性とタンパク質の挙動
 ○池田昌代,秋山聡子,鈴野弘子（東京農大）

P-032 酵母の違いがパンの品質に与える影響
 ○山田真粋,小泉昌子,峯木眞知子（東京家政大）

P-033 自作センサを用いたさつまいものグルコース変動のモニタリング
 ○日比香子（國學院大學栃木短大）

P-034 麦飯の物性に及ぼす保存条件の影響
 ○齋久保美夏,柿崎礼香（東洋大）

P-035 長野県上水内郡飯綱町産リンゴの品質評価と調理・加工特性
 ○中澤弥子,小木曽加奈（長野県大）

P-036 近江の伝統野菜「伊吹大根」および「山田ねずみ大根」の特性評価
 ○久保可奈子,佐藤瑞子,香西みどり（お茶の水女大）

P-037 切断操作がニンジンの細胞壁成分と加熱後の物性に及ぼす影響
 ○森口可奈子,佐藤瑞子,香西みどり（お茶の水女大）

P-038 水の硬度がじゃがいもの水煮に及ぼす影響 —食塩添加の場合—
 ○鈴野弘子,秋山聡子,池田昌代（東京農大）

P-039 野菜の過度の加熱による性状変化に関する研究
 ○中田清子,土田美登世,佐藤瑞子,香西みどり（お茶の水女大）

P-040 真空調理法と植物酵素による豚肉の軟化 —高齢者と若年者の官能評価による検討—
 ○佐藤清香1,2, 田村朝子3, 木下伊規子（1愛国学園短大, 2共立女大, 3新潟県大）

P-041 コマツナの低温スチーミング加熱がアスコルビン酸代謝におよぼす影響
 ○後藤昌弘1, 岩田惠美子2（1神戸女大, 2畿央大）

P-042 低温スチーム加熱を用いて調製した米粉食品の物性に及ぼす米粉のアミロース含量の影響
 ○村平緩子, 舟木愛美, 藤井恵子（日本女大）

P-043 乳酸菌が異なるヨーグルトの力学的特徴と女子学生の嗜好性
 ○小出あつみ, 間宮貴代子, 山中なつみ（名古屋女大）

P-044 かつお昆布を用いた天然だしと市販顆粒だしの相異
 ○岡本洋子1, 多山賢二1, 吉田恵子2（1広島修道大, 2つくば国際大）

P-045 長崎県（対馬）産乾ししいたけだしの呈味特性と嗜好性
 ○冨永美穂子1, 名嘉真千怜2, 湯浅正洋3（1広島大, 2長崎県大）

P-046 まぐろ節だしの調製方法および食味特性
 ○小泉昌子, 池田壽文, 峯木眞知子（東京家政大）

P-047 スターター添加した調理済み野菜における黄色ブドウ球菌の消長と毒素産生の有無
 ○小西大喜1, 杉村芳多子1, 佐藤啓造1, 青木友香2, 神戸美恵子2, 高梨美穂1, 縄部英子1（1高崎健康福祉大, 2桐生大）

P-048 エスプーマ法による高齢者向けの食事のレシピ開発
 ○小泉和子, 小泉昌子, 和田涼子, 峯木眞知子（東京家政大）

P-049 調理実習履修前後の学生の調理に関する意識の比較（第2報）
 ○伊藤有紀, 三宅紀子（東京家政学院大）
6号館2階体育館（P会場）
掲示時間 30日 12:00～31日 14:10
討論時間 31日 講演番号奇数 13:10～13:40 講演番号偶数 13:40～14:10

P-050 ご飯茶碗の内側の染付絵柄が飯のおいしさに与える影響
○川島比野1, 数野千恵子2（1戸板女短大, 2実践女大）

P-051 締り切り（和菓子）の色彩構成が季節感に及ぼす影響
○村上陽子（静岡大）

P-053 古代史料に見られる食生の保存性 II
○西念幸江1, 吉村香子1, 宮田美里1, 大道公秀1, 五百藏良1, 三舟隆之1
（1東京医療保健大, 2奈良文化財研）

P-054 万宝料理秘密帳「卵百珍」に掲載されたたまご料理について
○名倉秀子（十文字学園女大）

P-055 女子大学生とその親世代の料理の伝承について
○塚本敦子1, 駒場千佳子1, 卫藤久美1, 神保夏美1, 松田康子1
（1女子栄養大, 2帝京平成大, 3東都大）

P-056 インドネシア人日本語教師における来日時の食事に関する調査
○佐田ももか1, 市山貴子2, 田辺久美子1（1東洋大, 2お茶の水女大）

P-057 東南アジアにおける乳製品の受容実態～ベトナムに着目して～
○宇都宮由佳（学習院女大, 文教大）

P-058 保育所での食育指導が保護者の食生活に及ぼす影響
○曾川美佐子1, 瀧巌しおり（四国大）

P-059 普及期の子どもを持つ親の食育としての弁当作り～弁当作りを行う親の意識調査をもとに～
○川辺淳子1, 海切弘子2, 今川真治1（1北海道教育大, 2広島大）

P-060 幼児期における食育活動の改善にむけて～弁当作りを行う親の意識調査をもとに～
○川辺淳子1, 海切弘子2, 今川真治1（1広島大, 2北海道教育大）

P-061 重回帰分析を用いた中学生のエネルギー及び栄養素摂取量と食品群別摂取量との関係
○土海一美（美作大）

P-062 中学生の食育活動と学童期に受けた食育の関係について
○中野未恵, 三澤朱実（東京家政学院大）

P-063 子ども期の調理・食環境のパターンによる青年期の自立の差異
○手島陽子1, 長谷川智子1, 外山紀子1（1早稲田大, 2大正大）

P-064 大学生の食生活と学童期に受けた食育の関係について
○石見百江1, 永尾美佑1, 森川真実1, 下崎里美1（1長崎県大, 2広島女学院大）

P-065 食事を通じた楽しい記憶の振り返りの効果～食べるものの日誌を手がかりにして～
○松栄佐智12, 佐藤瑞香1（1東京ガス（株）, 2筑波大）

P-066 食事バランスガイドを活用した食育教材の作成と地域大学生の朝食の実態調査
○阿部明恵, 三澤朱実（東京家政学院大）

P-067 色彩を視点とした食育が食事バランスガイドの各栄養の摂取量に及ぼす効果～その2～スマートフォンのカメラ機能を活用した食事調査による検証～
○三澤朱実, 阿部明恵（東京家政学院大）
ポスター発表 5月31日（日）

6号館2階体育館（P会場）　掲示時間 30日 12:00～31日 14:10
　討論時間 31日 講演番号奇数 13:10～13:40 講演番号偶数 13:40～14:10

被服

P-068 被服素材を取り入れた児童向け高視認性安全ベストの提案
　○小野寺美和1, 谷明日香2, 竹本由美子3（1甲南女大, 2四天王寺大短, 3武庫川女大）

P-069 高視認性安全服における反射素材の位置検討
　○青木識子1, 朴順子2, 佐藤真理子1（1文化学園大, 2韓国仁荷大学校）

P-070 機能性インナー着用時の衣服気候—汗冷えに着目して—
　○松井有子1, 山田慎一郎2, 佐藤真理子（文化学園大）

P-071 殿溝近傍における蒸散量計測と車椅子着座時の衣服気候の検討
　長澤瞭1, 松井有子2, 佐藤真理子1（1文化学園大, 2京都女大）

P-072 衣服設計のための立位姿勢の経年変化
　○加藤千穂1, 上甲恭平2, 石原久代（1甲南女大）

P-073 シニア世代の靴着用の現状と課題
　○高田里実1, 〇角田由美子（昭和女大）

P-074 妊娠後期の腹部形状に沿ったオフィス用パンツデザインの提案
　○田中あゆみ1, 丸田直美2（1和洋女大, 2共立女大）

P-075 マタニティウェアに関する研究—産前産後対応のマタニティウェアの設計—
　○小松美和子1, 甲斐今日子2（1尚絳大短, 2佐賀大）

P-076 中年女性の三次元計測データによる体型分類
　○小松千佳1, 丸田直美（共立女大）

P-077 剥離実習への一提案
　○小山京子1, 川畑昌子2（1大分大, 2お茶の水女大）

P-078 分割型ウェディングドレスの製作と着用時の着用パラメータの提案
　○花田朋美1, 竹田涼花（東京家政学院大）

P-079 天然染料によるポリ乳酸繊維の染色
　○長鶴直子（金城学院大）

P-080 水洗洗濯による染料の可溶化メカニズムの解明
　○金崎悠1, べリージェームズ2, 清水青史2（1広島大, 2ヨーク大）

P-081 クロロホルム/エタノール混合溶媒法による収縮加工したポリ乳酸繊維布の着色量の変化
　○花田朋美1, 竹田涼花（東京家政学院大）
ポスター発表 5月31日（日）

6号館2階体育館（P会場）
掲示時間 30日12:00～31日14:10
討論時間 31日講演番号奇数13:10～13:40 講演番号偶数13:40～14:10

P-088 紫外線遮蔽に関する藍染布と市販青色布との比較
○福井ともこ1, 有内則子1, 近水多佳子1, 福井典代1（鳴門教育大学, 2四国大学）

P-089 天然染料によるクレーズポリプロピレン繊維の染色と消臭
○山本薫, 清津結佳, 道木光, 森俊夫（東京家政大学）

P-090 部分加水分解による羊毛繊維の消臭性向上 -加齢臭に対する消臭機能-
○小屋奈津子（昭和女子大学）

P-091 繊維製品の消費性能に関する研究 -ウールニットのビルディングに関する調査-
○佐藤木麻紀子, 坂間みずき（東京家政学院大）

P-092 9種の医療用防水シーツの熟と水分に関する消費性能と快適性
○川崎久子1, 米田緑2, 牛腸ヒロミ2（1富山県立大学, 2実践女学院）

P-093 赤外線とデジタル技術を活用した常盤紺型の調査
○川又勝子1, 佐々木栄一2（1東北生活文化大学, 2EHS高材研）

P-094 酸・アルカリを利用した洗浄に関する消費者情報の問題点
○勝崎順子1, 大矢勝2（1長崎大学, 2横浜国立大学）

P-095 天然染料上タンパク質のビシンコニン酸による簡易定量
○南村敏子1, 船澤千穂2, 塚崎舞3, 森田みゆき2（1東京学芸大学, 2実践女学院）

P-096 機械学習による洗濯堅ろう度の等級判定
○森俊夫, 今井佐衣, 赤城実里, 岩本里沙（東京家政大学）

P-097 ウルトラファインバブルの洗浄効果 -水質の変化と洗浄効果-
○下村英子1, 坂田彩美2（1昭和女子大学, 2実践女学院）

P-098 大阪府立女子大学所蔵の掛図に見る服飾教育 -服装史教授用掛図をめぐって-
○水野夏子, 森優子（大阪府立女学院大学）

P-099 衣服のデザイン画を布貼り絵で描く子ども向けワークショップについて
○池田仁美, 坂田彩美（武庫川女子大学）

P-100 地域連携ハンメドメイドショップの実践と成果
○阪中早苗, 大塚有里, 塚居ゆう（東京家政大学）

P-101 服飾資源を活かす試み -公開講座から-
○大塚有里, 塚田恭子（東京家政大学）

P-102 女子大生の着物に対する意識と消費者行動について
○田中淑江, 高橋由子, 宮武恵子（共立女子大学）

P-103 住生活文化の継承と住教育に関する研究（第1報） -中学生を対象とした語句調査の分析-
○鈴木真代1, 田中愛希1, 有友里沙1, 古田愛1, 豊増美喜2（1福岡教育大学, 2大分大学）

P-104 住生活文化の継承と住教育に関する研究（第2報） -日本家庭に関する語句の中学生への継承実態-
○古田愛1, 田中愛希1, 有友里沙1, 鈴木真代1, 豊増美喜2（1福岡教育大学, 2大分大学）

P-105 住生活文化の継承と住教育に関する研究（第3報） -伝統的な住まいとまち並みに関する中学生の経験と意識-
○有友里沙1, 古田愛1, 田中愛希1, 鈴木真代1, 豊増美喜2（1福岡教育大学, 2大分大学）

P-106 中高年の住空間管理をめぐる現状と課題
○金良均（鳴門教育大学）
ポスター発表 5月31日（日）

6号館2階体育館（P会場）
掲示時間 30日 12:00～31日 14:10
討論時間 31日 講演番号奇数 13:10～13:40 講演番号偶数 13:40～14:10

P-107 若年世代における防犯対策への関心と取組み —熊本市の大学生の事例より—
○中迫由実（熊本大）

P-108 居住者参加型賃貸コレクティブハウスに関する研究 —「コレクティブハウスかんかん森」の16年目の生活実態と居住者評価—
○大橋寿美子1，鈴木歩実1，岡崎愛子2（1大妻女大，2住総研）

P-109 高齢期の住環境整備に関する一考察 —ドイツの取り組みから—
○村田順子1，田中智子2（1和歌山大，2兵庫県大）

P-110 生活環境が幼児の手首の動きに及ぼす影響
○正岡さち，水師美佳（島根大）

P-111 美術館の外部空間とロビーにおける人の行動と心理に関する研究 —建築形態により心理の影響—
○ロクンジョ，藤本麻紀子（共立女大）

家政学原論

P-112 韓国・家庭科教育における実践的推論プロセスへの哲学者的アプローチ —「実践的問題中心カリキュラムに基づく家庭科授業：理論と実践」（ユ・テミョン，イ・スヒ著，倉元綾子翻訳，南方新社，2020）から—
○倉元綾子（西南学院大）

P-113 夫の家事参加が定年を迎えた夫に対する妻の意識に与える影響
○小林陽子1，井元りえ2，小野瀬裕子3，佐藤真弓4，宮田安彦5
（1群馬大，2女子栄養大，3共立女大，4川村学園女大，5大妻女大）

家庭経営・経済

P-114 時代背景と食生活から見る世代区分ごとの「性別役割分業」に関する実態と意識
○木村康代，松葉佐智子．桜本淳史（東京ガス（株））

P-115 大学生の携帯電話の使用と意識に関する一考察
○佐藤真弓，江村緒野，開田町子（川村学園女大）

P-116 エンゲル係数からみた食料消費に関する分析
○谷穂子，草薙仁（高崎健康福祉大）

P-117 妻の働き方が子育て家族の「性別役割分業」と「生活意識」に与える影響
○津田圭子，松葉佐智子，木村康代，桜本淳史（東京ガス（株））

P-118 ニュージーランドにおけるエシカル（倫理的）消費に関する一考察
○財津庸子（大阪大）

P-119 女性の家事労働時間／外部化志向に世代差はあるか
○渡瀬典子（東京学芸大）

家族

P-120 性別役割分業意識と実態 —韓国の未就学児の親調査にもとづいて—
○李琬媛1，呉貞玉1，柳根真理1，平井晶子4（1岡山大，2昌原女子大学校，3愛知教育大，4神戸大）

P-121 父親の育児参加と養育態度が未就学児の知的好奇心に与える影響
○高橋桂子1，倉元綾子2，笠井直美3，長谷川宏之3（1実践女子大，2西南学院大，3新潟大）
<table>
<thead>
<tr>
<th>ポスター発表 5月31日（日）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>6号館2階体験館（P会場） 掲示時間 30日 12:00-31日 14:10</td>
</tr>
<tr>
<td>討論時間 31日 講演番号奇数 13:10-13:40 講演番号偶数 13:40-14:10</td>
</tr>
</tbody>
</table>

| P-122 | 農村直系制家族における世帯形成と世代更新の世代的変化——結婚コーホート間分析—— |
| P-123 | 夜型子育てサロンの実態 |
| P-124 | 家族意識の変化が墓と葬送の多様化に及ぼす影響 |
| P-125 | お片づけ実践からの家族研究・家族生活教育への示唆 |
| P-126 | 親との関係が大学生の将来の家庭展望に及ぼす影響——家族親形成を媒介して—— |
| P-127 | 親からの愛情認識と青年期女子の結婚・出産に対する意識との関連 |

児童

| P-129 | ピゾン着衣行動の子ども——保育者の協同構成過程 |
| P-130 | 表現活動に必要な指導に関する考察 |

家政教育

| P-131 | 現代の輝く女性を採る（第2報）——「ミス・ユニバース・ジャパン」日本代表候補者たちに対する先入観—— |
| P-132 | 食品のDNA検査を体験する授業が高校生の食意識に及ぼす効果 |
| P-133 | 家庭科における魚を題材とした授業の開発 |
| P-134 | 子育て支援のための手申し事業講座における保護者の変容——異世代交流による「背守り」刺繍の実践を通して—— |
| P-135 | 教科授の構想を目指す家庭科学教養カリキュラムに関する研究——シンポジウム参加者の認識から捉える課題の整理—— |
| P-136 | 女性の素養として推奨された生活技量——女性誌に連載された「家庭科」講座を例に—— |
| P-137 | 「シルバーリハビリ体操」を教材とした高校家庭科授業の実践と検討 |
| P-138 | 中学生のエンタメ消費に対する意識の変容——「総合的な学習の時間」での実践を通じて—— |

---

6号館2階体育館（P会場） 掲示時間 30日 12:00-31日 14:10
討論時間 31日 講演番号奇数 13:10-13:40 講演番号偶数 13:40-14:10
ポスター発表　5月31日（日）

### 環境

| P-139 | サイレント・カリキュラムの視点からみた教師の服装 |
|       | ○内田直子（大妻女大） |
| P-140 | 家庭科教育における「持続可能な開発目標（SDGs）を達成するための6つの変革」 |
|       | ○竹下浩子（愛媛大） |
| P-141 | 「装い」教育についての戦後の家庭科における変遷 |
|       | ○柴田優子（和洋女大） |

### 環境

| P-142 | ファッション雑誌におけるファッションアイテムのトレンド調査 |
|       | ○坂野世里奈1, 熊谷伸子2（1：株）アダストリア, 2：文化学園大） |
| P-143 | 生活者の処分衣類に対する意識 |
|       | ○熊谷伸子1, 岡林誠士1, 小林幹彦1, 北方晴子1, 森岡千里2, 井田民男2（1：文化学園大, 2: 近畿大） |
| P-144 | 高密度固形化による処分衣類の再資源化 |
|       | ○岡林誠士1, 熊谷伸子1, 森岡千里2, 金田奈実1, 井田民男2（1：文化学園大, 2：近畿大） |
| P-145 | 台風19号により浸水した郡山市の放射線量と化学物質について |
|       | ○影山志保, 諸岡信久（郡山女大） |

### 健康

| P-146 | メディカルウィッグにおける内側の状況について知識を得ることの效果 — 関節中の患者のQOL向上のために — |
|       | ○金笑榮1, 宮本昭男2（1：笑田嶋（株）, 2：（一社）日本かつら協会） |
| P-147 | 福島県相双地区における保護者の精神的健康度が子どものうつ・肥満へ与える影響（2） |
|       | ○今野晴子, 小泉嘉子, 池田和浩（高崎学院大学） |
| P-148 | 男性の身体障がい者の体組成 |
|       | ○田中俊季1, 金谷由希2, 藤部園子1, 大和田浩子2（1：高崎健康福祉大, 2：山形県立米沢栄養大） |
| P-149 | 各務原市特産の各種原産米を活用した地域健康づくりII |
|       | ○デュアー貴子1, 小関竜治1, 久保裕子2, 河村裕太1, 足立恵美2, 村井大輔2, 岩田晴和2, 小林由孝2, 竹山稔3, 村瀬辰典4（1：東海学院大学, 2：各務原市, 3：JA ぎふ） |
| P-150 | 市販陰イオン界面活性剤のヒト培養細胞に対する毒性の基礎的研究 |
|       | ○田中進, 秋山珠璃, 片山豪, 曽根保子（高崎健康福祉大） |

### 福祉

| P-151 | 官学連携事業としての「ケアラーズサロン」運営上の課題 — 企画・運営の立場から — |
|       | ○宮野美重子, 叶内茜, 宮本昭男, 高橋裕子, 篠築香澄, 永崎久美子, 今井久美子, 大坂佳保里, 甲山恵美, 佐倉俊雄, 藤原昌樹（川村学園大学） |
| P-152 | 盛岡市内企業における女性活躍推進の効果的な手法の開発と検証 — 女性従業員の人材育成を中心に — |
|       | ○吉田仁美（岩手県大） |
| P-153 | 保育園における子どもの靴の着脱への支援 |
|       | ○松田典子（岩手県大） |
| P-154 | 家族介護者への情報提供 — 生活ガバナンスの視点から — |
|       | ○倉田あゆ子（日本女大） |
ポスター発表  5月31日（日）

6号館 2階体育館（P会場）
掲示時間  30日 12:00-31日 14:10
講演時間  31日 講演番号奇数 13:10-13:40 講演番号偶数 13:40-14:10

P-155  社会関係資本創出を想定した高齢者へのジェロントロジー教育の展開
○細江容子, 高橋桂子, 水野いずみ, 大澤朋子, 越山沙千子（実践女大）

P-156  介護施設に入所している高齢女性に対するメイクアップとハンドマッサージの効果
○内田幸子, 傳谷裕可, 高橋桂子, 水野いずみ, 大澤朋子, 越山沙千子（実践女大）

震 災

P-157  災害時における要配慮者への給食提供に関する給食業務従事者の意識
○上田慎子1, 藤田宏美1, 野坂奈緒美1, 櫻井美徳2, 船原千恵子2, 熊谷麻依子2, 三嶋碧2, 井田優也2, 河原千秋2, 森本美由紀2, 澤裕子2（1鳥取大, 2鳥取県栄養士会）

P-158  東日本大震災後の生活再建過程における衣生活の課題と解決方法（第3報）—岩手県陸前高田市・大船渡市での調査—
○植池直子1, 佐々井啓2, 久慈るみ子3, 山岸裕美子4（1岩手県立大盛岡短, 2日本女大, 3尚絃学院大, 4群馬医療福祉大）

口頭発表  5月30日（土）

2号館 2階（D会場）
9:30-10:00 座長 [古賀 繭子]
2D-01 自治体と民との連携による危険空き家の予防対策に関する調査研究
○大谷由紀子（拓南大）

2D-02  口頭発表 5月30日（土）

10:00-10:45 座長 [大谷 由紀子]
2D-03  地域活性化のための「場」の形成に関する研究 —伊予を想う会の事例—
○柳井妙子1, 佐々木政2（1一社四国自然文化保全研究会, 2岡山理科大）

2D-04  低層集合住宅における管理経営活動及び共用空間利用からみたコミュニティ形成に関する研究
○古賀繭子, 定行まり子（日本女大）

2D-05  小中学生を対象とした洪水前の体験を伝承する防災絵本の読み方
○田中麻里, 岩下朋美（群馬大）

被服

2号館 2階（E会場）
9:45-10:15 座長 [森 理恵]
2E-01  保護者の視点から見た衣生活を形成する小学生親子のファッション観
○増田智恵1, 梶本実穂香2, 村上かおり3（1三重大, 2津市立修成小学校, 3広島大）
口頭発表 5月30日（土）

1号館 2階（F会場）

10：15－10：45
座長【水野 夏子】

2E-02 近代女子教育における園芸 ―樟蔭高等女学校の植物園からの考察―
○小出治都子（大阪樟蔭女大）

10：00－10：45
座長【前田 亜紀子】

2F-01 大学生における手縫いの基礎的技能に関する実態調査
○前田亜紀子1, 佐藤晴香2（1群馬大, 2前橋市立桃木小学校）

2F-02 幼児期における手指の巧緻性の測定方法に関する検証
○高橋美登梨1, 濱田美恵子1, 道下彩子1, 川端博子2（1元東京学芸大, 2埼玉大）

2F-03 日本人女性の下腿と足における冷感受性
○深沢太香子（京都教育大）

2F-04 布・空気積層系の熱伝達におよぼす布の作用
○今井素惠, 藏澄美仁, 上甲恭平（椙山女大）

2F-05 衣素材のなぞり運動時における皮膚の振動・摩擦特性と触感に関する検討
○伊豆南緒美1, 佐藤真理子1, 田中由浩2（1文化学園大, 2名古屋工業大）

1号館 2階（I会場）

9：30－10：00
座長【大田原 美保】

2I-01 福島県における江戸期婚礼献立の比較 —福島市・郡山市・相馬市—
○津田和加子1, 菊池節子2（1桜の聖母短大, 2郡山女大）

2I-02 居住形態の異なる大学生における日本の家庭料理（和食）の喫食状況の違い
○平島円1, 磯部由香1, 堀光代2（1三重大, 2岐阜市立女短大）

2I-03 木桶仕込み醤油に対する印象と評価 —食物・栄養系大学生へのアンケート調査および官能評価の結果—
○福留奈美（東京聖栄大）

2I-04 「地域に近づいた教育」実践校川上小学校における給食の特徴 —卒業生へのインタビュー調査結果より—
○和井田結佳子1, 河村美穂2（1東京学芸大・院, 2埼玉大）

2I-05 小学生の家庭における食事の実態について
○磯部由香1, 平島円1, 中井茂平2, 紀平征希1（1三重大, 2上野ガス（株））

1号館 2階（J会場）

9：30－10：15
座長【光永 伸一郎】

2J-01 高知県農産物の食味評価について
○谷口（山田）亜樹子1, 半杭真1, 風見真千子1, 野口治子1, 内野昌孝1,2（1東京農大, 2高知大）
1号館 2階（K会場）

9:30-10:15 座長 [佐藤 真弓]
2K-01 持続可能な社会を創るグローバルシティコンサバッドの理論構造 —国際連盟『連帯』の自然共生と共生社会の原理から—
  ○小野瀬裕子（共立女大）

2K-02 地方の家庭科学研究会にみる小学校家庭科の展開 —「鹿児島県家庭学校資料」をもとに—
  ○八幡彩子（熊本大）

2K-03 高校生向け伝統工芸デザインコンクールの開催意義と進路選択における影響 —伝統工芸品「博多織」の継承者育成に向けた取組を通じて—
  ○大淵和憲（九州産業大）

10:15-10:30 座長 [井上 清美]
2K-04 育児中女性が働く場としての NPO 活動の実証 —均等法第一世代のキャリア変遷における NPO の位置付け—
  ○赤松瑞枝（跡見女大）

2K-05 幼児期の食育についての意識 —箸の作法を中心に—
  ○篠原久枝（宮崎大）

6号館 1階（B会場）

9:15-10:00 座長 [鈴野 弘子]
3B-01 グルテンフリー米粉パンの製パン性に対するアミロース含量と加水温度の影響
  ○大河内万彩1, 齋藤公美子2, 武智多与里3, 畠中芳郎2, 萩原俊彦1
  (1奈良女大, 2千里金蘭大, 3(独)大阪産業技術研究所)

3B-02 生地の特性がキヌアパンの製パン性に与える影響
  ○石井和美、小林三智子（十文字学園女大・院）
口頭発表  5月31日（日）

3B-03  ホワイトソルガム粉の製パンへの利用Ⅱ
○片山佳子, 大貫拓馬（東京聖栄大）
10:00−10:45  座長 [藤井 恵子]

3B-04  ミルクゼリーの性状に及ぼす植物性ミルクの影響
○松本美鈴（大妻女大）

3B-05  天ぷらのおいしさの評価 — 蛋白質食品と野菜類について —
○小林由美, 千年橋児, 上田善博, 横木晃, 石田康行, 小川宣子
(1中部大, 2日清オイリオ（株）, 3岐阜女大)

3B-06  栄養学専攻女子大学生の食事づくり力と自己評価料理作成能力及び食行動の関連
○駒場千佳子, 雉藤久美, 神保夏美, 野原健吾, 宮下ひろみ, 松田康子
(1女子栄養大, 2帝京平成大, 3東京大)

6号館  1階（C 会場）

9:00−9:30  座長 [長野 隆男]

3C-01  瀬戸内海沿岸で養殖されたマガキ含有成分の季節および地域差の解析
○山下広美, 護野千晶, 板谷智恵美, 孫宝軍, 丸田ひとみ（岡山県大）

3C-02  米タンパク質分解による製パン改良効果
○奥西智哉, 根井大介（農研機構）

3C-03  新タマネギ葉の抗酸化性と嗜好性に関する検討
○関西正洋, 上野真由子, 森川真桝, 川辺田晃司, 石見百江, 石原美穂子
(1長崎県大, 2広島大)

10:00−10:45  座長 [小林 理恵]

3C-04  酒粕の添加が蒸し菓子（松風）の物理特性および食嗜好性に及ぼす影響
○酒粕香澄, 柳内志織, 髙橋貴洋（川村学園女大, 2昭和学院短大, 3（株）味香り戦略研究所）

3C-05  水質の違いによる水出し紅茶の成分特性
○瀬戸内海沿岸で養殖されたマガキ含有成分の季節および地域差の解析
○酒粕香澄, 柳内志織, 髙橋貴洋（川村学園女大, 2昭和学院短大, 3（株）味香り戦略研究所）

3C-06  ホワイトソルガム粉の製パンへの利用Ⅱ
○片山佳子, 大貫拓馬（東京聖栄大）

6号館  1階（C 会場）

9:00−9:30  座長 [村上 かおり]

3D-01  3次元ディスタンスフィールドに基づく個別型トルソーの開発
○山本高美, 中山雅紀, 藤代一成（1和洋女大, 2慶応大）

3D-02  立位と座位姿勢に適したズボンパターンの検討 — 運動機能に障害がある高齢者の着脱動作の分析 —
○東野有里, 角田千枝, 阿部子, 藤田善司, 徳永千尋
(1日本女大, 2相模女大, 3東京ちどり病院, 4日本医療科学大)

9:30−10:00  座長 [野上 游夏]

3D-03  高校生と母の睡眠および皮膚温に関する検討
○水野一枝, 水野康, 水野一枝, 長田朱美, 阿南豊正, 栗秋純子, 西澤幸子, 石見百江, 石原美穂子
(1浦和実業高等学校, 2日本食行動科学研究所, 3埼玉県茶研)
3D-04 3Dスキャナを用いたファウンデーション着用効果の測定
○潮田ひとみ（東京家政大）

口頭発表 5月31日（日）

2号館 2階（D会場）

14:15 - 15:00 座長 [藤平 真紀子]
3D-05 夏季における大学生の温熱環境の実測調査 — 温熱環境の経時変化と環境評価の関係—
○莫羽郁子（東京学芸大）
3D-06 局所暖房器具使用による冷えの軽減に効果的な温める部位に関する研究
○佐々尚美、稲葉裕香、山浦真唯（武庫川女大）
3D-07 若年者における携帯型扇風機使用時の生理心理反応
○東実千代、荒木智哉、田辺拓（奈央大）

15:00 - 15:30 座長 [薬袋 奈美子]
3D-08 居心地の良さを創出するグリーンインテリアに関する基礎的研究
○延原理恵、三宅佳香（京都教育大）
3D-09 英国Worcestershire Wildlife Trustsの活動における自然環境保全活動に関する研究
○辻本乃理子（流通科学大）

15:30 - 16:15 座長 [延原 理恵]
3D-10 社会実験への反復参加による道環境への意識の変化
○原わかな、薬袋奈美子（日本女大）
3D-11 婦人雑誌掲載記事からみた住居管理の変遷 — 1946年から1955年を中心として —
○藤平真紀子（奈央女大）
3D-12 日本女子大学出身者による住居学の研究の歴史
○薬袋奈美子、矢島浩子（日本女大）

3号館 2階（E会場）

9:00 - 9:30 座長 [薩本 弥生]
3E-02 ビジュアル・マーチャンダイジングへの満足感と効果に関する男女間の差異性の考察 — ファッション商品をネット店舗で購入する消費者の行動研究—
○吉井健（大妻女大）

9:30 - 10:00 座長 [吉井 健]
3E-03 フェアトレードファッションに対する購入心理
○辻幸恵（神戸学院大）
3E-04 大学生の衣生活自立度の実態調査
○大矢幸江、薩本弥生（1昭和学院短大、2横浜国立大）

10:00 - 10:45 座長 [辻 幸恵]
3E-05 アパレル分野における色彩調和の検討（4） — アイテムによる色彩調和の差異—
○石原久代、鷲津かの子、小町谷寿子、熊田亜矢子、戸田賀志子、畑久美子
（1椙山女学園大、2名古屋学芸大、3名古屋女大、4広島女学院大、5神戸松蔭女大、6愛国学園短大）
口頭発表  5月31日（日）

3E-06  生活行動を支援するカラーユニバーサルデザイン（3）—未就学児における「開ける」表示の「わかりやすさ」評価—
○内藤章江1, 石原久代2（1お茶の水女大, 2福山大学）
3E-07  子ども服の色とジェンダー —ピンクをめぐる言説からのアプローチ—
○平田麻里子（お茶の水女大）

児童

2号館 2階（E会場）

14:15－14:45  座長［西隆太朗］
3E-08  保育所の食事場面における保育者の子どもへの働きかけ
○佐々木郁子, 吉川はるな（埼玉大）
3E-09  家庭保育と集団保育における子どもの要求表現と迂回
○高江江芳枝1, 柳本亜紀2, 浅生浩美3, 金田利子4
（1昭和女大, 2清水平易幼幼園, 3東京福祉大, 4東京国際福祉専門学校）

14:45－15:30  座長［川村はる奈］
3E-10  子育てにおけるスマートデバイス活用について —保護者の子どもの頃の経験が及ぼす影響—
○神宮文代, 岡野雅子（東京福祉大）
3E-11  保育者のわが子の子育てと園での保育経験の関連
○岡野雅子1, 阿部綾奈2（1東京福祉大, 2生出塚保育所）
3E-12  地域を包括した子育ち支援の検討 —地域資源を生かした他業種・企業などの連携—
○田島大輔1, 金井玲奈2（1和洋女大, 2桜美林大）

15:30－16:00  座長［倉持清美］
3E-13  中学校家庭科「ふれあい体験学習」での学び—遊びの違いによる検討—
○藤島衿香1, 吉川はるな1, 吉山怜花3, 大関さわ子4, 安東英里佳1
（1埼玉大, 2埼玉大学, 3春日部女高）
3E-14  学童疎開体験の伝承の困難性と, その課題
○佐々木剛1,2, 川本亜紀1（1第一幼児教育専門学校, 2星槎大）

被服

1号館 2階（F会場）

9:00－9:30  座長［牟田緑］
3F-01  尿ケア専用ナプキン吸収体部の構造と快適性
○濱田仁美, 小柴美波, 松井みのり（東京家政大）
3F-02  乳幼児の口周り用清拭素材についての実態調査
○松尾久仁子1, 中村邦子2, 大野久子3, 美谷千鶴1
（1日本女人, 2大妻女子大, 3山野美容芸術短大）

9:30－10:00  座長［倉本玲］
3F-03  ブランドマネジメントを通じた地域産業活性化と社会人基礎力育成プログラム —青咲の前処理加工と被服制作—
○井上実紀, 川又愛子（東北生活文化大）
3F-04  織物の埃付着の評価に関する研究
○井上真理（神戸大）
口頭発表 5月31日（日）

1号館 2階（F会場）
14:15—15:00 座長［雨宮 敏子］
3F-05 ラム波を用いた織物の力学物性評価
○赤坂修一，西川晃司，浅井茂雄，牛腸ヒロミ（東京工業大）
3F-06 夏衣材料としての芭蕉布の特性
○長谷川千鶴，松原文子，野村陽子（日本女大）
3F-07 浴衣，アロハシャツ，かりゆしウェアの視覚的特徴と機械学習による分類判断
○浅海真弓，長浜小春，森俊夫（鹿児島県短大）（東京家政大）
14:15—15:45 座長［花田 朋美］
3F-08 スカート形状の「しっとり」と触感における「しっとり」との関係
○末弘由佳理，鈴木里千子（京都産業大）
3F-09 市販部屋干し用洗濯洗剤の性能評価 —菌のコロニー数に及ぼす乾燥時間と洗浄効率の影響—
○塚崎舞，落合詩歩，本多やす子，牛腸ヒロミ（実践女大）
3F-10 シューズ用グリーンコンポジットの試作とその疲労耐久性評価
○加藤木秀章，恒川弥子（実践女大）

1号館 1階（I会場）
14:15—14:45 座長［名倉 秀子］
3I-01 保育園児の運動器機能と生活習慣および食事摂取との関連
○田村朝子，伊藤豊志，村山伸子，堤川千嘉，山岸あづみ，小島優美（新潟県大）
3I-02 子ども向けの弁当の献立の絵に登場する食材からみた食育の検討
○千田真喜子（花園大）
14:45—15:00 座長［田村 朝子］
3I-03 若年層の野菜摂取における効果的な食育手法のための一考察
○原知子（滋賀短大）
15:00—15:45 座長［村上 朋子］
3I-04 小学生の食選択力の育成
○長方美千子，関部優子，亀田明美，伊藤恵里，後藤あゆ（北里大）
3I-05 唐菓子の生産に関する基礎的研究 —唐代における畳染の普及について—
○馬建穂（東北大）
3I-06 写真で残す家政学〜魅せる写真で「映える」を導くテクニック —関東支部若手の会活動報告（令和元年度）—
○山崎有里，五倉清子，色川木綿子，竹内晶子，佐藤香里，新茅五郎，和田佳蔵，矢部えん，鴨下澄子（愛国学園短大）
（十文字学園女大，文化学園大，東京家政大，二葉栄養専門学校，愛国学園短大，お茶の水女大，東京栄養食糧専門学校，人間総合科学大，帝京平成大）

食 物
口頭発表 5月31日（日）

家政教育

1号館 2階（J会場）

9:00 - 9:45 座長 [堀内 かおる]
3J-01 札幌市・石狩管内中学校の調理実習における食物アレルギー対応の実態
○佐藤佐緒1, 増渕哲子2（1札幌市立柏丘中学校, 2北海道教育大）
3J-02 小・中・高等学校家庭科における既製服の選択に関する学習内容の分析
○福井典代1, 大塚美智子2（1鳴門教育大, 2日本女大）
3J-03 若年女性のライフプランにおける就業意識への影響要因に関する研究 —予備的研究—
○横田友梨香1, 重川純子2（埼玉大）

9:45 - 10:15 座長 [赤堤 朋子]
3J-04 大学生の家事と子ども時代のお手伝いの関係
○澤島智明1（佐賀大）
3J-05 地域生活を創り出す実践に取り組んだ高校生のライフストーリー
○土岐圭佑1（北海道教育大）

10:15 - 10:45 座長 [木村 範子]
3J-06 学習機を指標とした生徒の防災教育受講希望に関わる価値観の検討
○大塚啓太1, 桟原智美2（1東京大, 2東京学芸大附属高）

家庭経営・経済

1号館 2階（K会場）

14:15 - 15:00 座長 [大藪 千穂]
3K-01 大学生の外食店舗選択行動および消費行動に関する考察 —性差・地域差からの検討—
○和泉志穂1（武庫川女大）
3K-02 消費者教育イベントにおけるボランティア養成プログラムの開発 —体験型イベント「キッズタウン」の地域での普及に向けた実践—
○小田奈緒美1, 東珠実2（1就実短大, 2椙山女学園大）
3K-03 消費者市民社会の実現を目指した消費者教育 —京都府消費者教育推進事業の成果と課題—
○沖松信子1（大阪教育大）

15:00 - 15:45 座長 [ガンガ 伸子]
3K-04 わが国の女性労働問題に対する意識調査 —女子留学生が考える就労支援—
○赤羽根和恵1（愛国学園大）
3K-05 ひとり親世帯における体験活動の意義と影響
○大貫千穂1, 木原悠花2（岐阜大）
3K-06 長期家計簿からみた生活史と生活設計（第2報） —1967年から1999年の核家族世代の家計管理の事例から—
○中川美子1, 重川純子2（1宇都宮短大, 2埼玉大）
1号館 2階（L会場）
14:15—14:45 座長［高村 仁知］
3L-01 大豆の加工時におけるリポキシゲナーゼの脂肪酸含量への影響
○黑田久夫（東京家政学院大）
3L-02 新潟砂丘さつまいも“いもジェンヌ”の冷蔵及び常温保存による品質変化
○春日景太、石黒寛実、忍田真一郎、小嶋優、寒河江靖か、鈴木雅史、平井奈実、大谷典広、
筒浦さとみ、西海理之、山口智子（新潟大）
14:45—15:30 座長［久保 加織］
3L-03 高脂質ゲルにおける油脂の冷凍耐性への影響
○中島聡史、松本拓矩、秋山亜希子、増田麻衣、崎谷宣孝、渡邉裕一、上田佳宏（ソマール（株））
3L-04 ナノセルロース摂取が肥満と腸内フローラに与える影響
○長野隆男１、矢野博己２（１石川県大、２川崎医福大）
3L-05 間食におけるフルーツグラノーラのセカンドミール効果—オープンラベルランダム化クロスオーバー試験—
○増冨裕文１、石原克之１、平尾和子２、古谷彰子２,3、（１カルビー（株）、２愛国学園短大、３早稲田大）

環境・福祉・健康・震災
1号館 2階（M会場）
14:15—14:30 座長［大竹 美登利］
3M-01 福島県産山菜の放射性セシウム濃度の動向と問題点
○広井勝、影山志保、諸岡信久（郡山女大）
14:30—14:45 座長［大竹 美登利］
3M-02 婦人科がん患者の医療用帽子に関する研究
○水谷浩（東北生活文化大）
14:45—15:00 座長［大竹 美登利］
3M-03 臀部の圧力には性差はあるのか
○貝淵正人（新潟リハビリテーション大）
15:00—15:15 座長［浜島 京子］
3M-04 家庭における親子の省エネルギー意識・行動の推進に関する研究—その3介入方策が住民の意識・行動およびエネルギー使用量に及ぼす影響—
○高田宏１、水馬義輝２、小松朋弘２（１広島大、２広島ガス（株））
15:15—15:30 座長［浜島 京子］
3M-05 高校生を対象とした防災グッズ提案ワークショップの効果と課題
○生田英裕（大阪市大）
15:30—15:45 座長［髙羽 郁子］
3M-06 好みの香りがVDT作業に及ぼす影響
○長谷博志１、平林由果２（１（株）シャローム、２金城学院大）
15:45—16:00 座長［髙羽 郁子］
3M-07 農村部在住高齢者における生活行動と活動量・睡眠・QOLの関連
○城戸千晶１、久保博子１、高橋幸子２、佐々尚美２、須川真奈江１、星野聡子１、磯田憲生１、
（１奈良女大、２畿央大、３武庫川女大）
Food and Nutrition

P-001 Second-meal effect of fruit granola as snacks — Open Label Randomized Crossover Study —  
○MASUTOMI Hirofumi1, ISHIHARA Katsuyuki1, HIRAO Kazuko2, FURUTANI Akiko3,4  
(1Calbee, Inc., 2Aikoku Gakuen Junior College, 3Waseda University)

P-002 Study on antioxidant activity and palatability of fresh onion leaf  
○YUASA Masahiro1, UENO Mayuko1, MORIKAWA Maho1, KAWABETA Koji1, IWAMI Momoe1,  
MATSUZAWA Tetsuhiro1, TOMINAGA Mihoko2  
(1University of Nagasaki, 2Hiroshima University)

P-003 Change in the quality of sweet potato paste made by “Imogenne” during storage  
○KASUGA Keita, ISHIGURO Nozomi, OSHIDA Shintiro, KOJIMA Yujo, TSUTSUURA Satomi, NISHIUMI Tadayuki, YAMAGUCHI Tomoko (Niigata University)

P-004 Effects of sake lees (sakekasu) on physical properties and palatability of steamed confectionery (matsukaze)  
○TORII Yurika1, MURAKAMI Yoko2  
(1Graduate School of Shizuoka University, 2Shizuoka University)

P-005 Home economics left in the photograph - technique swaying “haeru” in fascinating photos  
— Report on the activities of young members of the Kanto Branch (R1) —  
○KINTAKA Yuri1, IGARASHI Kiyoko2, IROKAWA Yuko3, TAKEUCHI Akiko4, SATO Sayaka5,  
NIIMI Iho6, WADA Kanae7, YABE En8, KAMOSHITA Sumiko9, SHIBASAKI Motomi10  
(1Jumonji University, 2Bunka Gakuen University, 3Tokyo Kasei University, 4Futaba Nutrition College, 5Aikoku Gakuen Junior College, 6Ochanomizu University, 7Tokyo Syokuryo Dietitian Academy, 8University of Human Arts and Sciences, 9Teikyo Heisei University)

P-006 Development of dietary choice skills for elementary school students  
○ZEMPO Michiko1, OKABE Satoko1, KAMETA Akemi1, ITO Shinya2, GOTO Aya3  
(1Koriyama Women’s University, 2Kitasato University, 3Fukushima Medical University)

Textiles and Clothing

P-007 Evaluation of the detergents for the indoor drying  
— Influence of the drying time and the detergency to give to the colony count of bacteria —  
○TSUKAZAKI Mai, OCHIAI Shiho, HONDA Motoko, GOCHO Hiromi  
(Jissen Women’s University)

P-008 Relationship between “Shittori” skirt form and “Shittori” in tactile sensation  
○SUEHEIO Yukari1, SUKIGARA Sachiko2  
(1Mukogawa Women’s University, 2Kyoto Institute of Technology)

P-009 Trial production and fatigue durability of green composite for shoes  
○KATOGI Hideaki, TSUNEKAWA Hisako (Jissen Women’s University)

P-010 A study on skin vibration, friction characteristics and tactile sensations during finger stroking on clothing materials  
○IZU Naomi1, SATO Mariko1, TANAKA Yoshihiro2  
(1Bunka Gakuen University, 2Nagoya Institute of Technology)
Poster Presentation  (Sunday, May 31)

**Child Study**

P-011  Examination of child-rearing and child-raising support that encompasses the area — Cooperation between other industries and companies utilizing local resources —
○TAJIMA Daisuke1, KANAI Rena2 (1Wayo Women’s University, 2Obirin University)

P-013  How to use smart devices in parenting — Impact of parents’ childhood experiences —
○JINGU Fumiyo, OKANO Masako (Tokyo University of Social Welfare)

**Home Economics Education**

P-012  Food loss reduction and social imagination of the university student to see in the doggy back
○MIYAGAWA Yuki, UEMURA Kyoko (Tokyo Kasei Gakuin University)

P-014  Student’s motivation and conception of learning in class practice with familiar nature.
○OTSUKA Keitu1,2, KUWAHARA Tomomi3,4
(1The University of Tokyo, 2Tokyo Gakugei University Senior High School, 3Hirose Hospital, 4Tokyo University of Agriculture and Technology)

**Food and Nutrition**

P-016  Analysis of Food Manners Episode Using Text Mining and Relationship between Frequency of Communal Dining
○IWAMORI Michiyo (Niigata Seiryo University Junior College)

P-017  To provide survey of food access and dietary diversity is to find ways to improvement a dietary life among cheerful elderly living local in fukui
○SATO Mami, IKEGAMI Siho, TERAKI Mao, YANO Yuri (Jin-ai University)

P-018  A Review of the Literature on Cooking and quality of life for the elderly at home
○KUBOTA Nozomi (Nayar City University)

P-019  Characteristics of habitual breakfast skippers in young subjects
○SASABE Sae (Shukutoku University)

P-020  Effects of maternal folate deficiency on lipid metabolism of the offspring in mice
TAKESHIMA Natsuno, INUMA Hitomi, KUWAYAMA Honoka, INOUE Hiroyasu, ○NAKATA Rieko (Nara Women’s University)

P-021  Effect of vitamin C on endoplasmic reticulum stress
○SONE Yasuko, YAMAMOTO Saya, KOBAYASHI Shiho, NAKAGAWA Risa (Takasaki University of Health and Welfare)

P-022  The development study of effective utilization method of staghorn
○KOGISO Kana1, KITAMURA Toshihide2
(1The University of Nagano, 2Nagano City)

P-023  Purification and characterization of lectin from boiled white kidney beans
○UNE Satsuki1, AKIYAMA Junichir2, NONAKA Koji3, NAKATA Rieko4 (1Kagawa University, 2Kibi International University, 3Naragakuen University, 4Nara Women’s University)
P-024 Functional alteration on chicken myofibril proteins caused by glycation with dextran
○HASEGAWA Kyoka¹, SAEKI Hiroki², NISHIMURA Kimio³
¹(Doshisha Women’s College, ²Hokkaido University)

P-025 Activation of clock genes by fractions extracted from plant seeds
○OKADA Yoshinori¹, OKADA Mizue²
¹(Yms Laboratory, ²Aichi Prefectural University)

P-026 Effects of Japanese butterbur (Petasites japonicus) on transcription factors of the circadian clock genes in TIG-1 cells.
○OKADA Mizue¹, OKADA Yoshinori² (¹Yms Laboratory, ²Aichi Prefectural University)

P-027 A comparison of taste components in three type of green tea and effect of green tea intake on brain waves.
○EBIZUKA Hiroko, FUJIMOTO Tomoko, DAIJIMA Mika, MAEJIMA Natsuki
(Tokyo Kasei University)

P-028 Effects of rice koji on components and palatability of koji amazake
○SUZUKI Ayako, MURAKAMI Yoko (Shizuoka University)

P-029 Differences between the component of the Taiwan chicken egg Pidan and duck egg Pidan
KOIZUMI Akiko, KUDO Minako², MINEKI Machiko²
¹(Nitobe Bunka College, ²Tokyo Kasei University)

P-030 Basic study on polysaccharide produced by Aureobasidium pullulans cultured in the different medium compositions.
○KAWASAKI Yuko, KAZAMI Saki, YAMAZAKI Nanaho, SOUMIYA Nana
(Doshisha Women’s College)

P-031 Bread making quality and protein composition of ancient wheat flour
○IKEDA Masayo, AYIYAMA Satoko, SUZUNO Hiroko (Tokyo University of Agriculture)

P-032 Effect on bread quality by the differences of yeast
○YAMADA Masaho, KOIZUMI Akiko, MINEKI Machiko (Tokyo Kasei University)

P-033 Glucose monitoring of sweet potato with prepared sensor
○HIIBI Kyoko (Kokugakuin Tochigi Junior College)

P-034 Effect of storage conditions on physical properties of cooked rice with barley (mugimeshi).
○TSUYUKUBO Mika, KAKIZAKI Reika (Toyo University)

P-035 Quality evaluation and cooking and processing characteristics of apples from Iizuna-machi, Kamiminochi-gun, Nagano.
○NAKAZAWA Hiroko, KOGISO Kana (The University of Nagano)

P-036 Characterization of the traditional vegetables “Ibuki Daikon” and “Yamada Nezumi Daikon” in Shiga
○KUBO (MUKAI) Kaori, SHIMADA Kana, MORI Taro (Shiga University)

P-037 Effect of cutting process on cell wall components and physical properties of carrot after heating
○MORIGUCHI Kanako, SATO Yoko, KASAI Midori (Ochanomizu University)

P-038 Effect of water hardness on the boiled potato — Salt addition —
○SUZUNO Hiroko, AYIYAMA Satoko, IKEDA Masayo (Tokyo University of Agriculture)

P-039 Study on characteristic changes of vegetables due to excessive heating
○TANAKA Momoko, TSUCHIDA Mitose, SATO Yoko, KASAI Midori (Ochanomizu University)

P-040 Softening of pork used by vacuum cooking method and plant protease
— Examination by sensory evaluation of elderly and young adults —
○SATO Sayaka¹, TAMURA Asako², KINOSHITA Ikiko³
¹(Aikoku Gakuen Junior College, ²Kyoritsu Women’s University, ³University of Niigata Prefecture)

P-041 Influence of low temperature steam heating on ascorbic acid metabolism in Komatsuna (Brassica rapa var. perviridis).
○GOTO Masahiro¹, IWATA Emiko² (¹Kobe Women’s University, ²Kio University)
P-042 Effect of amylose content of rice flour on the physical properties of rice flour food prepared with low temperature steam heating.
○MURAHIRA Yasuko, FUNAKI Ami, FUJII Keiko (Japan Women’s University)

P-043 Mechanical properties of yogurt with different lactic acid bacteria and palatability in female students
○KOIDE Atsumi, MAMIYA Kiyoko, YAMANAKA Natsumi (Nagoya Women’s University)

P-044 Sensory differences between fresh and instant bonito-kelp stocks
○OKAMOTO Yoko1, TAYAMA Kenji1, YOSHIDA Keiko2
(1Hiroshima Shudo University, 2Tsukuba International University)

P-045 Characterizations of taste components and palatability of soup stocks made from dried shiitake mushrooms produced in Tsushima, Nagasaki
○TOMINAGA Mihoko1, NAKAMA Chisato2, YUASA Masahiro2
(1Hiroshima University, 2University of Nagasaki)

P-046 Preparation method and palatability characteristics of dried tuna stock
○KOIZUMI Akiko, IKEDA Hisahumi, MINEKI Machiko
(Graduate School of Tokyo Kasei University)

P-047 Growth of Staphylococcus aureus and presence of enterotoxin production in cooked vegetables with starter
○KONISHI Taiki1, MURAMATSU Kanako1, SATO Kotona1, AOKI Tomoka1, KANBE Mieko2, TAKANASHI Miho1, AYABE Sonoko1
(1Takasaki University of Health and Welfare, 2Kiryu University)

P-048 Development of dietary recipes for the elderly people by espuma method
○KOIZUMI Aiko, KOIZUMI Akiko, WADA Ryoko, MINEKI Machiko (Tokyo Kasei University)

P-049 Comparative survey on attitudes toward cooking of university students before and after the participation of the cooking practice —2nd report —
○ITO Yuki, MIYAKE Noriko (Tokyo Kasei Gakuin University)

P-050 The influence of the blue and white pattern inside the rice bowls on the deliciousness of rice.
○KAWASHIMA Hino1, KAZUNO Chieko2 (1Toita Women’s College, 2Jissen Women’s University)

P-051 Effect of nerikiri (wagashi) color composition on seasonal feeling
○MURAKAMI Yoko (Shizuoka University)

P-052 Preservability of salmon seen in ancient historical documents II
○SAINEN Sachie1, YOSIMURA Kyouko1, MIYATA Misato1, OHMICHI Kimihide1, IOROI Ryo1, YAMAZAKI Takeshi2, MIFUNE Takayuki1
(1Tokyo HealthCare University, 2Nara National Research Institute Cultural Properties)

P-053 An analysis of egg dishes in cookbook of the Edo period
○NAGURA Hideko (Jumonji University)

P-054 Transmission of dishes between female university students and parents’ generation
○TSUKAMOTO Atsuko1, KOMABA Chikako1, ETO Kumi1, JINBO Natsumi2, NOHARA Kengo2, MIYASHITA Hiromi2, MATSUDA Yasuko1
(1Kagawa Nutrition University, 2Teikyo Heisei University, 3Tohoto University)

P-055 Survey on meals of indonesian japanease teachers when they come to Japan
○SAKUTA Momoka1, KOURIYAMA Takako2, IJIMA Kumiko1
(1Toy University, 2Ochanomizu University)

P-056 Effect of nerikiri (wagashi) color composition on seasonal feeling
○MURAKAMI Yoko (Shizuoka University)
P-057 Research on the acceptance of dairy products of Southeast Asia — in Vietnam —
○UTSUNOMIYA Yuka¹, FUKUNAGA Toshiko²
(¹Gakushuin Women's College, ²Bunkyo University)

P-058 The effect that the food education in the nursery school gives to the eating habits of their parents
○SOGAWA Misako, WAKISAKA Shiori (Shikoku University)

P-059 Lunch box making by parents of young children as dietary education
— A case study of the attitude survey of parents who make lunch boxes —
○KAWABE Junko¹, KAIKIRI Hiroko², IMAKAWA Shinji²
(¹Hokkaido University of Education, ²Hiroshima University)

P-060 Toward an effective improvement of the practice of dietary education activities in early childhood
— A case study of the attitude survey of parents who make lunch boxes —
○KAIKIRI Hiroko¹, KAWABE Junko², IMAKAWA Shinji²
(¹Hiroshima University, ²Hokkaido University of Education)

P-061 Relationship between energy, nutrient intakes and food group intakes by multiple regression analysis of junior high school students
○DOKAI Kazumi (Mimasaka University)

P-062 Report on dietary education program for junior high school students using theory of planned behavior
○NISHI Shoko, YAMAMOTO Sayaka, ASANO Yuki, OBATA Yuina, TADA Yuka, KODAMA Rina, SATOU Ruka (Fukuyama University)

P-063 The differences in independence in adolescence in relation to the patterns of cooking/eating environment in childhood
○TESHIMA Yoko¹, HASEGAWA Tomoko², TOYAMA Noriko¹
(¹Waseda University, ²Taisho University)

P-064 The Relationship between Dietary Habits and School age Nutrition Education in University Students
○IWAMI Momoe¹, NAGAO Miyu¹, MORIKAWA Maha¹, SHIMOOKA Rie²
(¹University of Nagasaki, ²Hiroshima Jogakuin University)

P-065 The effect of retrieval of enjoyable food and eating behavior — Using the food diaries —
○MATSUBASA Tomoko¹,¹², AYABE Saho² (¹Tokyo Gas Co., Ltd., ²University of Tsukuba)

P-066 Development of food education teaching materials using a Japanese Food Guide “spining top” and a survey of breakfast at regional college students
○ABE Akie, MISAWA Akemi (Tokyo Kasei Gakuin University)

P-067 The effect that the food and nutrition education that assumed a color viewpoint gives to the intake of each dishes of Japanese Food Guide Spinning Top-2
— Inspection by a dietary survey that utilized the camera function of the smartphone —
○MISAWA Akemi, ABE Akie (Tokyo Kasei Gakuin University)

Textiles and Clothing

P-068 Proposal of high visibility safety vest for children incorporating phosphorescent material
○ONODERA Miwa¹, TANI Asuka², TAKEMOTO Yumiko³
(¹Konan Women's University, ²Shiitennouji University Junior College, ³Mukogawa Women’s University)

P-069 Consideration of position of reflective material in high visibility safety clothing
○AOKI Satoko¹, PARK Soonja², SATO Mariko¹ (¹Bunka Gakuen University, ²Inha University)

P-070 Study on clothing climate of functional inner — Focusing on the cold sensation from sweating —
○MATSUI Yuko, YAMADA Shinichiro, YUMOTO Lei, SATO Mariko
(Bunka Gakuen University)
<table>
<thead>
<tr>
<th>Poster Presentation (Sunday, May 31)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td><strong>P-071</strong> Measurement of evaporation rate around gluteal sulcus and clothing climate of seating surface in wheelchair</td>
</tr>
<tr>
<td>NAGASAWA Ryo¹, MATSUI Yuko¹, ŌSATO Mariko¹, MOROOKA Harumi²</td>
</tr>
<tr>
<td>(¹Bunka Gakuen University, ²Kyoto Women’s University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-072</strong> Secular change of the standing posture for the clothing design</td>
</tr>
<tr>
<td>ŌKATO Chihoko, JOKO Kyoko, ISHIHARA Hisayo (Sugiyama Jogakuen University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-073</strong> The actual conditions and problems of wearing shoes for seniors</td>
</tr>
<tr>
<td>TAKADA Satomi, TSUNODA Yumiko (Showa Women’s University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-074</strong> Proposal of office pants design corresponding to abdominal shape in late pregnancy</td>
</tr>
<tr>
<td>ŌTANAKA Ayumi¹, MARUTA Naomi² (¹Wayo Women’s University, ²Kyoritsu Women’s University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-075</strong> A Study on Maternity Wear — Maternity Clothes Design for Pregnancy and Lactation Periods —</td>
</tr>
<tr>
<td>KOMATSU Miwako¹, KAI Kyoko² (¹Shokei University Junior College, ²Saga University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-076</strong> Body classification of middle-aged women using three-dimensional measurement data</td>
</tr>
<tr>
<td>KOMATSU Chika, MARUTA Naomi (Kyoritsu Women’s University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-077</strong> Explication of sewing skills of Kimono — The kimono which no cutting (part 2) —</td>
</tr>
<tr>
<td>ABE Eiko (Otsuka Women’s University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-078</strong> One proposal for practical training in kimono sewing</td>
</tr>
<tr>
<td>KOYAMA Kyoko, KAWABATA Masako (Mimasaka University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-079</strong> Research about clothing cultural succession for university students — making of azuma bag —</td>
</tr>
<tr>
<td>CHIBA Keiko (Fukushima University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-080</strong> Making of division type wedding dress and its wearing variations after the wedding ceremony</td>
</tr>
<tr>
<td>YASUKAWA Akemi, IHATA Arisa (Hirosaki University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-081</strong> Morphology of the thumb and index finger of the elderly as a factor in button and buttonhole design</td>
</tr>
<tr>
<td>FUKUDA Noriko (Shinshu University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-082</strong> The proposition of a way that a upcycle does discarded clothes</td>
</tr>
<tr>
<td>ISHIKI Keito, ŌSUDA Rie (Bunka Gakuen University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-083</strong> Dyeing of poly-lactic acid fiber with natural dyes</td>
</tr>
<tr>
<td>NAGASHIMA Naoko (Kinjo Gakuin University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-084</strong> Solvation thermodynamic studies of dye solubilization by hydrotrope</td>
</tr>
<tr>
<td>KANASAKI Yu¹, PERRY James², SHIMIZU Seishi² (¹Hiroshima University, ²University of York)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-085</strong> Studies on dyeing teaching materials for junior high school home economics using orange peel.</td>
</tr>
<tr>
<td>KOMATSU Emiko (Hokkaido University of Education)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-086</strong> Dyeability of multifiber test cloth by cochineal with microwave heating</td>
</tr>
<tr>
<td>TOGO Yukiko¹, AMEMIYA Toshiko² (¹Oita University, ²Ochanomizu University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-087</strong> Change of the dyeing quantity of the shrunken Poly (lactic acid) (PLA) fiber fabrics by the mixture of chloroform and ethanol.</td>
</tr>
<tr>
<td>HANADA Tomomi, TAKEDA Suzu (Tokyo Kasei Gakuin University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-088</strong> Comparison of indigo and commercial blue cloths for ultraviolet shielding</td>
</tr>
<tr>
<td>FUKUI Tomoko¹, ARIUCHI Noriko², HAYAMI Takako¹, FUKUI Michiyo¹ (¹Naruto University of Education, ²Shikoku University)</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>P-089</strong> Dyeing and deodorization for crazed polypropylene fibers with natural dyes</td>
</tr>
<tr>
<td>KOYAMA Natsumi, HAYATSU Yuka, SASAKI Haruka, MORI Toshio (Tokyo Kasei University)</td>
</tr>
<tr>
<td>Poster Presentation (Sunday, May 31)</td>
</tr>
<tr>
<td>-------------------------------------</td>
</tr>
</tbody>
</table>
| P-090 | Deodorization performance of partially hydrolyzed wool fibers — Deodorization of age-related odor —  
  ○KOHARA Natsuko (Showa Women’s University) |
| P-091 | Study on consumption performance of textile products — Survey on pilling of wool knit —  
  ○SASAKI Makiko, MOROOKA Mizuki (Tokyo Kasei Gakuin University) |
| P-092 | Comfort properties of nine waterproof bed sheets for hospital Use  
  ○KAWASAKI Hisako¹, MUTO Midori², GOCHO Hiromi²  
  (¹Toyama Prefectural University, ²Jissen Women’s University) |
| P-093 | Research of Tokiwa-kongata using infrared and digital technology  
  ○KAWAMATA Shoko¹, SASAKI Ehichi²  
  (¹Tohoku Seikatsu Bunka University, ²EHS Polymer Material Laboratory) |
| P-094 | Problems of consumer information on cleaning using acid and alkali  
  ○KOMATSU Junko¹, ² OYA Masaru² (¹Nagasaki University, ²Yokohama National University) |
| P-095 | Simple quantitative analysis of protein on natural soiled cloth with bichinonic acid  
  ○AMEMIYA Toshiko¹, FUNASAWA Chihō², TSUKAZAKI Maï², MORITA Miyuki²  
  (¹Ochanomizu University, ²Tokyo Gakugei University, ³Jissen Women’s University) |
| P-096 | Evaluation of grades for colorfastness to washing and laundering bases on machine learning  
  ○MORI Toshio, IMAI Yui, SEKIYOU Miori, IWAMOTO Risa (Tokyo Kasei University) |
| P-097 | Study of detergency on effect by ultra fine bubble — Effect of dtergency by quality of water —  
  ○SHIMOMURA Kumiko (Showa Women’s University) |
| P-098 | Fashion education seen in wall charts owned by Osaka Shoin Women’s University  
  — based on wall charts for teaching of costume history —  
  ○MIZUNO Natsuko, MORI Yuko (Osaka Shoin Women’s University) |
| P-099 | About the workshop of fashion design drawing by cloth pasting picture for kids  
  ○IKEDA Hitomi, SAKATA Ayami (Mukogawa Women’s University) |
| P-100 | Practice and results of handmade shops through regional cooperation  
  ○TANAKA Sanae, OTSUKA Yuri, KURA Miyuki (Tokyo Kasei University) |
| P-101 | An attempt to take advantage of clothing resources — Analysis of open courses —  
  ○OTSUKA Yuri, TERADA Kyoko (Tokyo Kasei University) |
| P-102 | A study of attitude survey and consumer behavior for the kimono of female university students  
  ○TANAKA Yoshie, TAKAHASHI Yuko, MIYATAKE Keiko (Kyoritsu Women’s University) |

### Housing

| P-103 | A study on housing cultural succession and housing education (1st report)  
  — Analysis of the words and phrases investigation of junior high school students target —  
  ○SUZUKI Sayo¹, TANAKA Yuki¹, ARITOMO Risa¹, FURUTA Akira¹, TOYOMASU Miki²  
  (¹University of Teacher Education Fukuoka, ²Oita University) |
| P-104 | A study on housing cultural succession and housing education (2nd report)  
  — The actual situation of succession to junior high school students of the words and phrases about Japanese traditional house —  
  ○FURUTA Akira¹, TANAKA Yuki¹, ARITOMO Risa¹, SUZUKI Sayo¹, TOYOMASU Miki²  
  (¹University of Teacher Education Fukuoka, ²Oita University) |
| P-105 | A study on housing cultural succession and housing education (3rd report)  
  — Junior high school students’ experience and consciousness about traditional residence and townscape —  
  ○ARITOMO Risa¹, FURUTA Akira¹, TANAKA Yuki¹, SUZUKI Sayo¹, TOYOMASU Miki²  
  (¹University of Teacher Education Fukuoka, ²Oita University) |
P-106  Current situation and issues on the dwelling space management among middle-aged and elderly
○KIM Jeonggyun (Naruto University of Education)

P-107  A study on interest and practice to crime prevention among young generations
— A case study of university students in Kumamoto —
○NAKASAKO Yumi (Kumamoto University)

P-108  A Study on Rental Collective Housing with Residents’ Participation
— Living Conditions and Residential Evaluation in the 16th year of The Collective House Kankanmori —
○OHASHI Sumiko¹, SUZUKI Fumi², OKAZAKI Aiko³
¹(Otsuma Women’s University, ²Housing Research Foundation JUSOKEN)

P-109  A study on the improvement of living environment in the elderly — Through German cases —
○MURATA Junko¹, TANAKA Tomoko²
¹(Wakayama University, ²University of Hyogo)

P-110  Effects of living environment on wrist movements of infants
○MASAOKA Sachi, MIZUSHI Haruka (Shimane University)

P-112  Philosophical approach to practical reasoning process in Korean home economics education
— Based on Home economics based on practical problem-centered curriculum: theory and practice (Yoo Tae-myung, Lee Soo-hee, translated by Ayako Kuramoto, Nanpou Shinsha, 2020) —
○KURAMOTO Ayako (Seinan Gakuin University)

P-113  Influence of husband’s participation in household work on wife’s consciousness of retired husband
○KOBAYASHI Yoko¹, IMOTO Rie², ONOSE Hiroko³, SATO Mayumi¹, MIYATA Yasuhiro⁵
¹(Gunma University, ²Kagawa Nutrition University, ³Kyoritsu Women’s University, ⁵Kawamura Gakuen Woman’s University, ⁵Otsuma Women’s University)

P-114  Actual situation and consciousness of “gender division of labor” by generation classification from the background and dietary style
○KIMURA Yasuyo, MATSUBASA Tomoko, ENOMOTO Atsushi (Tokyo Gas Co., Ltd.)

P-115  A study of university students’ usage of mobile phones and feelings to them
○SATO Mayumi, EMURA Ayano, SEKINE Takiko (Kawamura Gakuen Woman’s University)

P-116  Analysis of food consumption focusing on Engel coefficient
○TANI Akiko, KUSAKARI Hitoshi (Takasaki University of Health and Welfare)

P-117  Influence on “gender division of labor” and “life consciousness” of child care families by wives working style
○TSUDA Keiko, MATSUBASA Tomoko, KIMURA Yasuyo, ENOMOTO Atsushi (Tokyo Gas Co., Ltd.)

P-118  A study of ethical consumer behavior in New Zealand
○ZAITSU Yoko (Oita University)

P-119  Is there the generation differences in women’s housework time and socialization intention?
○WATASE Noriko (Tokyo Gakugei University)
Family

P-120  
Awareness and current situation of gender roles — Based on a survey of parents of preschoolers in Korea —  
○LEE Kyoung Won¹, OH Jeong Ok², YAMANE Mari³, HIRAI Shoko⁴  
¹(Okayama University, ²Changwon Moonso University, ³Aichi University of Education, ⁴Kobe University)

P-121  
How fathers' childcare participation effects to intellectual curiosity of their preschool children?  
○Takahashi Keiko¹, Kuramoto Ayako², Kasai Naomi³, Hasegawa Hiroyuki⁴  
¹(Jissen Women’s University, ²Seinan Gakuin University, ³Niigata University)

P-122  
A follow-up study of changes in household formation and alternation of generations among stem families in a rural area of Japan — Marriage cohort analysis —  
○SATO Hiroko (Wayo Women’s University)

Child Study

P-129  
Child-teacher co-constructive process of putting on pants  
○KOHGA Takashi (Hamamatsu Gakuin University Junior college)

P-130  
A study of the teaching of expressive activities  
○NAKAMURA Mioko (Shukutoku Junior college)

Home Economics Education

P-131  
Exploring active women in today’s world (part 2) — Preconceptions about the finalists of Miss Universe Japan —  
○KIM Soyoung (Sodajima Co., Ltd.)

P-132  
The effects of an experimental class that analyzed the DNA of food products in promoting positive attitudes towards diet and health for high school students.  
○FUJITA Hiromi¹, KITAHARA Atsuko², NOZAKA Naomi³, OTSUKA Yuzuru⁴, UETA Etsuko⁵  
¹(School of Health Science, Faculty of Medicine Tottori University, ²Tottori Prefectural Yonagominami high school, ³Ochanomizu University)

P-133  
Development of lessons on fish in home economics  
○HAYAMI Takako, TAMAKI Chihiro (Naruto University of Education)
P-134  The impact of “handicraft experience lecture for child care support” on participating parents
— Through the practice of “SEMORI” embroidery by intergenerational communication —
○KAIJIYAMA Yoko, NAKAMURA Takako, WEI Xiaomin, TAKEYOSHI Akihito, MURAKAMI Kaori, SUZUKI Akiko (Hiroshima University)

P-135  A study on home economics teacher training curriculum aiming at construction of the subject view
— Arrangement of issues to be grasped from recognition of symposium participants —
○SUZUKI Akiko1, HIRATA Michinori2, KUDO Yukiko3, OKA Yoko4, SHOUHO Masae2, SATO Yukari5, MURAKAMI Kaori1, TOMINAGA Mihoko1, KAIJIYAMA Yoko1, IMAKAWA Shinji3, MATSUBARA Kiminori1, TAKATA Hiroshi2, KANASAKI Yu1
(1Hiroshima University, 2Former Professor of Hiroshima University, 3Former Professor of Yokohama National University, 4Saga University, 5Fukuyama City University, 6Joetsu University of Education)

P-136  Recommended living skill as female sophistication
— Using home economics courses serialized in women's magazines as example —
○Takahashi Yoko (Niigata University)

P-137  “Silver rehab exercises” added to high school home economics education
○SATO Yukari1, ISHIBIKI Kumi2 (1Joetsu University of Education, 2Tsuru University)

P-138  Changes in consciousness of junior high school students about ethical consumption
— Through practical activities in “The Period for Integrated Studies” —
○MIYAKE Motoko, SHIRAI Yasutoshi (Nagoya Women’s University)

P-139  Teacher clothes from the viewpoint of the silent curriculum
○UCHIDA Naoko (Otsuma Women’s University)

P-140  “Six transformations to achieve the sustainable development goals (SDGs)” for home economics education
○TAKESHITA Hiroko (Ehime University)

P-141  Historical trends of attirement in home economics education after World War II
○SHIBATA Yuko (Wayo Women’s University)

---

Environment

P-142  Investigate fashion item trends in magazines
○BANNO Serina1, KUMAGAI Shinko2 (1Adastria Co., Ltd, 2Bunka Gakuen University)

P-143  Consumer consciousness of discarded clothing
○KUMAGAI Shinko1, OKABAYASHI Satoshi2, KOBAYASHI Mikihioko1, KITAKATA Haruko1, MORIOKA Chisato1, IDA Taibo2 (1Bunka Gakuen University, 2Kindai University)

P-144  High-density solidification of recycled discarded clothing
○OKABAYASHI Satoshi2, KUMAGAI Shinko1, MORIOKA Chisato1, KANEDA Nami2, IDA Tamio2 (1Bunka Gakuen University, 2Kindai University)

P-145  Radiation dose and chemical substances in areas flooded by Typhoon No.19 in Koriyama city
○KAGEYAMA Shiho, MOROOKA Nobuhisa (Koriyama Women’s University)

---

Health

P-146  Effects of gaining knowledge about the condition inside of a medical wig
— To improve QOL of patients suffering from illness —
KIM Soyoung1, IE Kunio2 (1Sodajima Co., Ltd, 2Japan Wigmaker Association)

P-147  The effects of mental health of parents on caries and obesity of their children in Soso area, Fukushima (2)
○KONNO Akiko, KOIZUMI Yoshiko, IKEDA Kazuhiro (Shokei Gakuin University)
**P-148** Body composition of men with motor disability
○TANAKA Yuki¹, KANAYA Yuki², AYABE Sonoko¹, OHWADA Hiroko²
(¹Takasaki University of Health and Welfare, ²Yamagata Prefectural Yonezawa University of Nutrition Sciences)

**P-149** Using Kakamigahara's Specialty Produce, Kakamigahara Carrots, to Improve Regional Health II
○DEWAR Takako¹, OZEKI Ryuji¹, KUBO Yuya¹, KOMURA Yuta¹, ADACHI Norihiko², MURAI Daisuke², IWATA Takekazu², KOBAYASHI Yoshitaka², TAKEYAMA Minoru³, MURASE Tatsunori³
(¹Tokai Gakuin University, ²Kakamigahara City, ³Japan Agricultural Cooperatives Gifu)

**P-150** Basic study on the toxicity of commercially available anionic surfactants to human cultured cells
○TANAKA Susumu, AKIYAMA Syuri, KATAYAMA Takeshi, SONE Yasuko
(Takasaki University of Health and Welfare)

**Welfare**

**P-151** The challenges of carers’ salon for government-academia collaboration — The point of the planning and management —
○SAITO Mieko, KANOUCHI Akane, SATOU Mayumi, TAKAHASHI Yoko, TSUKIDATE Kasumi, NAGASHIMA Kumiko, IMAI Kumiko, OSAKA Tomoko, KOUYAMA Emi, SASAKI Yui, FUJIWARA Masaki (Kawamura Gakuen Woman’s University)

**P-152** Development and verification of effective methods for promotion of women’s participation and advancement in the workplace in companies in Morioka — Focus on human resource development for female employees —
○YOSHIDA Hitomi (Iwate Prefectural University)

**P-153** Support for putting on and removing shoes for children in nursery schools
○MATSUDA Noriko (Bunkyo University)

**P-154** Providing information for informal family carers — From a life governance perspective —
○KURATA Ayuko (Japan Women’s University)

**P-155** Development of gerontology education for the elderly assuming social capital creation
○HOSOE Yoko, TAKAHASHI Keiko, MIZUNO Izumi, OSAWA Tomoko, KOSHIYAMA Sachiko (Jissen Women’s University)

**P-156** Effects of makeup and hand massage for elderly women in nursing home
○UCHIDA Yukiko¹, DEMPOYA Ayano²
(¹Takasaki University of Health and Welfare, ²Kanagawa University)

**Earthquake Disaster**

**P-157** Awareness of staff working in meal facilities about providing meals in the event of a disaster to people who need special support.
○UETA Etsuko¹, FUJITA Hiromi², NOZAKA Naomi², TARUI Miho², FUNAHARA Chieko², KUMAGAI Maiko², MISHIMA Miori², IDA Yuuya², KAWASHARA Chikako², MORIMOTO Miyuki², SAWA Yuko²
(¹School of Health Science, Faculty of Medicine Tottori University, ²Tottori Dietetic Association)

**P-158** Problems and solutions of clothing lives in the process of rebuilding victims’ lives after the Great East Japan Earthquake — 3 — Research of Iwate prefecture, Rikuzentakata city and Ofunato city —
○KIKUCHI Naoko¹, SASAI Kei², KUJI Rumiko², YAMAGISHI Yumiko¹
(¹Iwate Prefectural University, Morioka Junior College, ²Japan Women’s University, ³Shokei Gakuin University, ⁴Gunma University of Health and Welfare)
Oral Presentation (Saturday, May 30)

Room D

9:30 – 10:00  Chairperson [KOGA Mayuko]

2D-01 Research on preventive measures for dangerous vacant houses by cooperation between local government and private sector
○OTANI Yukiko (Setsunan University)

2D-02 The survey on actual situation of the the Children’s cafeteria held at the elementary schools
○MAEDA Hiroko (National Institute of Technology, Toyota College)

10:00 – 10:45  Chairperson [OHTANI Yukiko]

2D-03 Study on the formation of “places” for regional activation — Case study of “Think Iyo Associtaion” —
○YANAI Taeko¹, YANAI Tokuma²
(¹Shikoku Shizen Bunka Hozen Association, ²Okayama University of Science)

2D-04 A study on formation of the local community by management association activity and use of common space in low-rise Housing
○KOGA Mayuko, SADAYUKI Mariko (Japan Women’s University)

2D-05 Storytelling targeting elementary school children and junior high school student by using storybook based on the flood experience
○TANAKA Mari, IWASHITA Tomomi (Gunma University)

Room E

9:45 – 10:15  Chairperson [MORI Rie]

2E-01 Fashion perception for parent-child of elementary school student based on clothing life style from point view of parents
○MASUDA Tomoe¹, HONDA Mizuki², MURAKAMI Kaori³
(¹Mie University, ²Shiusei Elementary School, ³Hiroshima University)

2E-02 Horticulture in modern women’s education — A study from the botanical garden of Shoin girls’ high school —
○KOIDE Chitoko (Osaka Shoin Women’s University)

10:15 – 10:45  Chairperson [MIZUNO Natsuko]

2E-03 Self-estimations of their own naked and dressed bodies in 18- and 19-year-old women
○HANARI Takashi (Sugiyama Jogakuen University)

2E-04 The psychological effects of aromatherapy clothing on human body under hypoxic conditions
○Takahashi Tetsuya¹, HAYASHI Makoto², WATANABE Yudai³, MATSUMOTO Kentaro⁴, SHONO Eisaku⁵
(¹Shimane University, ²Daiwabo Rayon Co., Ltd., ³Daiwabo Co., Ltd.)

Room F

9:30 – 10:00  Chairperson [SUZUKI Akiko]

2F-01 Survey on the basic skills of hand sewing in college students
○MAEDA Akiko¹, SATO Haruka²
(¹Gunma University, ²Maebashi Municipal Momonoki Elementary School)
## Oral Presentation (Saturday, May 30)

### 2F-02  Method for measurement about skillfulness in fingers and hands in early childhood
- TAKAHASHI Midori¹, NARUMI Taeko¹, MICHIISHITA Saiko¹, KAWABATA Hiroko²
  (¹Ex-Tokyo Gakugei University, ²Saitama University)

### 2F-03  Cutaneous cold sensitivity for leg and foot in Japanese females
- FUKAZAWA Takako (Kyoto University of Education)

### 2F-04  Effects of Cloth on Heat Transfer of Cloth and Air Laminate Systems
- IMAI Motoc, KURAZUMI Yoshihito, JOKO Kyohei (Sugiyama Jogakuen University)

### 2F-05  A study on skin vibration, friction characteristics and tactile sensations during finger stroking on clothing materials
- IZU Naomi¹, SATO Mariko¹, TANAKA Yoshihiro²
  (¹Bunka Gakuen University, ²Nagoya Institute of Technology)

### Food and Nutrition

#### Room I

### 2I-01  A comparison of Edo period’s wedding banquet menus in Fukushima Prefecture
- TSUDA Wakako¹, KIKUCHI Satsuko²
  (¹Sakura no Seibo Junior College, ²Koriyama Women’s University)

### 2I-02  The effects of residence of college students on the situations of eating homemade Japanese home cooking (Japanese-style meal)
- HIRASHIMA Madoka¹, ISOBE Yuka¹, HORIZ Mitsuyo²
  (¹Mie University, ²Gifu City Women’s College)

### 2I-03  Impressions and evaluations of soy sauce prepared in huge wooden tubs
- results of a questionnaire survey and sensory evaluation by college students of food and nutrition division —
  - FUKUTOME Nami (Tokyo Seiei College)

### 2I-04  The characteristics of school lunch at Kawakami Elementary School known for “the education based on the community”.
- WAIDA Yukako¹, KAWAMURA Miho²
  (¹Graduate School of Tokyo Gakugei University, ²Saitama University)

### 2I-05  Dietery survey of elementary school students at home
- ISOBE Yuka¹, HIRASHIMA Madoka¹, NAKAI Moeti², KIHIRA Masaki³
  (¹Mie University, ²Ueno Gas Corporation)

#### Room J

### 2J-01  Sensory evaluation of vegetables in Kochi prefecture
- TANIGUCHI (YAMADA) Akiko¹, HANGUI Shinichi¹, KAZAMI Machiko¹, NOGUCHI Haruko¹, UCHINO Masataka¹,²
  (¹Tokyo University of Agriculture, ²Kochi University)

### 2J-02  The effect of orally administered pisiferic acid in the P/8 line of the senescence-accelerated mouse model (SAMP8)
- SHIBATA Sachi¹, ISHIZU Maki¹, MURAKAMI Moe¹, ISHIDA Haruka¹, DANURA Hinano¹, KAIKIRI Hiroko², KAYASHIMA Tomoko³, MATSUBARA Kiminori²
  (¹Fukuoka University, ²Hiroshima University, ³Saga University)
Oral Presentation (Saturday, May 30)

**2J-03** Ingredient Analysis of Apples in Aomori

○AIHARA Miki\(^1\), SATO Yuko\(^2\), TANIGUCHI (YAMADA) Akiko\(^3\), YOSHIDA Masafumi\(^3\), NIIHARA Kinuko\(^1\) (\(^1\)Tokyo City University, \(^2\)Tokyo Healthcare University, \(^3\)Tokyo University of Agriculture)

10:15 - 10:45  Chairperson [OKUNISHI Tomoya]

**2J-04** Anti-aging effect of Natto-kin, Bacillus subtilis.

○HARADA Marina, IMANAKA Yukari, KAIKIRI Hiroko, MATSUBARA Kiminori (Hiroshima University)

**2J-05** The effect of age on oral fatty acid sensitivity and fat intake in premenopausal women

○UESHIMA Kyoko, YAMAUCHI Yuho, MORIMOTO Keiko (Nara Women’s University)

Philosophy of Home Economics • Family • Child Study

Room K

9:30 - 10:15  Chairperson [SATO Mayumi]

**2K-01** Theoretical foundations of global citizenship for a sustainable development society

— Theories of natural solidarity and social solidarity of the league of nations’ “solidarity” —

○ONOSE Hiroko (Kyoritsu Women’s University)

**2K-02** Development of the study of home economics education in Japan, viewing from the letters of local societies on home economics education in elementary school

○YAHATA (TANIGUCHI) Ayako (Kumamoto University)

**2K-03** Consideration of the significance of holding the traditional craft design contest for high school students and its effect on their career choices — Through efforts to develop successors of traditional crafts “Hakata Ori” —

○OBUCHI Kazunori (Kyushu Sangyo University)

10:15 - 10:30  Chairperson [INOUE Kiyomi]

**2K-04** Inspection of the NPO activity as a place that a lady works during child care

— Positioning of the NPO in the carrier change of the equality law first generation —

○AKAMATSU Mizue (Atomi University)

10:30 - 10:45  Chairperson [INOUE Kiyomi]

**2K-05** The consciousness of infant’s food and nutrition education — focusing on chopstick manner —

○SHINOHARA Hisae (University of Miyazaki)

Oral Presentation (Sunday, May 31)

Food and Nutrition

Room B

9:15 - 10:00  Chairperson [SUZUNO Hiroko]

**3B-01** Effects of amylose content and water temperature on gluten-free rice flour bread baking

○OKOCHI Maya\(^1\), SAITO Kumiko\(^1\), TAKECHI Tayori\(^2\), HATANAKA Yoshiro\(^3\), MANNARI Takayo\(^1\), TAKAMURA Hitoshi\(^3\) (\(^1\)Nara Women's University, \(^2\)Senri Kinran University, \(^3\)Osaka Research Institute of Industrial Science and Technology)
**Oral Presentation (Sunday, May 31)**

**3B-02** Effects of dough characteristics on breadmaking properties of quinoa bread.
- ISHII Kazumi, KOBAYASHI Michiko (Graduate School of Jumonji University)

**3B-03** Use of white sorghum millet for bread making II
- KATAYAMA Yoshiko, OONUKI Takuma (Tokyo Seiei College)

**10:00—10:45** Chairperson [FUJII Keiko]

**3B-04** Effects of various plant-based milks on the milk gel properties
- MATSUMOTO Misuzu (Otsuma Women’s University)

**3B-05** Evaluation of the taste of tempura — About protein foods and vegetables —
- KOBAYASHI Yumi1, CHIAYA Ryuji1, UEDA Yoshihiro2, ICHIKI Ayami3, ISHIDA Yasuyuki1, OGAWA Noriko1 (1Chubu University, 2Nisshin Oilio, 3Gifu Women’s University)

**3B-06** Association of self-reported meal preparation competency, self-rating cooking skills and eating behavior among female university students
- KOMABA Chikako1, ETO Kumi1, JINBO Natsumi1, NOHARA Kengo2, MIYASHITA Hiromi2, MATSUDA Yasuko1 (1Kagawa Nutrition University, 2Teikyo Heisei University, 3Tohto University)

**Room C**

**9:15—10:00** Chairperson [NAGANO Takao]

**3C-01** Seasonal and regional variation in major components of Crassostrea gigas from Seto Inland Sea
- YAMASHITA Hiromi, ISONO Chiaki, ITATANI Chiemi, SON Baojun, MARUTA Hitomi (Okayama Prefectural University)

**3C-02** Improvement of rice flour bread by degradation of including protein
- OKUNISHI Tomoya, NEI Daisuke (NFRI, NARO)

**3C-03** Study on antioxidant activity and palatability of fresh onion leaf
- YUASA Masahiro1, UENO Mayuko1, MORKAWA Maho1, KAWABETA Koji1, IWAMI Momoe1, MATSUZAWA Tetsuhiro1, TOMINAGA Mihoko2 (1University of Nagasaki, 2Hiroshima University)

**10:00—10:45** Chairperson [KOBAYASHI Rie]

**3C-04** Effects of sake lees (sakekasu) on physical properties and palatability of steamed confectionery (matsukaze)
- TORII Yurika1, MURAKAMI Yoko2 (1Graduate School of Shizuoka University, 2Shizuoka University)

**3C-05** Characteristics of the components of black tea brewed with cold water of different quality
- TSUKIDATE Kasumi1, YANAI Shiori2, TAKAHASHI Takahiro3 (1Kawamura Gakuen Woman’s University, 2Showa Gakuin Junior College, 3Taste & Aroma Strategic Research Institute Co., Ltd.)

**3C-06** Characteristics of Flavor on the Tea components and Taste Sensor with Post-Heated Fermented Tea
- UCHIYAMA Yumiko1, ITO Atsuko2, OSADA Akemi2, ANAN Toyomasu2, KURIKAKI Yunko2, NISHIZAWA Yukiko2, NIWA Kinuko2, IMAI Kuniko2, OYAMA Kana2, ONUMA Yaeo2, OCHI Katsura2, OGAWA Hideyuki2, IWASAKI Takeshi2, OMORI Masashi2, TAKEDA Yoshiyuki2 (1Urawa Jitsugyo Gakuen High School, 2Institute of Food Behavior Science of Japan, 3Saitama prefecture Tea Research Institute)
Room D

9:00 - 9:30  Chairperson [MURAKAMI Kaori]
3D-01  Development of individual torso based on 3D distance field
○YAMAMOTO Takami¹, NAKAYAMA Masanori², FUJISHIRO Issei²
(¹Wayo Women’s University, ²Keio University)

3D-02  Examination of a trousers pattern suitable for both standing and sitting postures
— Analysis of dressing and undressing by elderly persons with motor impairments —
○SODA Tamami¹, TSUNODA Chie², ASUWA Kimiko³, TOKUNAGA Chihiro⁴
(¹Japan Women’s University, ²Sagami Women’s University, ³Tokyo Chidori Hospital, ⁴Nihon Institute of Medical Science)

9:30 - 10:00  Chairperson [NOGAMI Yuka]
3D-03  Sleep and skin temperature in high school student and their mothers
○OKAMOTO (MIZUNO) Kazue¹, MIZUNO Koh¹, MAEDA Akiko²
(¹Tohoku Fukushi University, ²Gunma University)

3D-04  Measures of effectiveness on foundation garments by using the 3D scanner
○USHIODA Hitomi (Tokyo Kasei University)

Room D

14:15 - 15:00  Chairperson [FUJIHIRA Makiko]
3D-05  Survey of the thermal environment of university students in summer
— Relationship between change of thermal environment and environmental evaluation —
○BAMBA Ikuo (Tokyo Gakugei University)

3D-06  The study on the effective region to warm for the reduction of the cold by using the part heating instrument
○SASSA Naomi, INABA Yuuka, YAMAURA Mai (Mukogawa Women’s University)

3D-07  Physiological and psychological responses of young people using portable electric fans
○AZUMA Michiyo, ARAKI Tomoya, TANABE Hiroki (Kio University)

15:00 - 15:30  Chairperson [MINAI Namiko]
3D-08  A fundamental study on the elements of green interior constituting comfortable living space
○NOBUHARA Rie, MIYAKE Haruka (Kyoto University of Education)

3D-09  A Study on Action for Reserved of Nature Environment by Worcestershire Wildlife Trusts in UK
○TSUJIMOTO Noriko (University of Marketing and Distribution Sciences)

15:30 - 16:15  Chairperson [NOBUHARA Rie]
3D-10  Changes in awareness of street environment by repetitive participation to the social experiments
○HARA Wakana, MINAI Namiko (Japan Women’s University)

3D-11  The change of the house maintenance and management reading from a woman’s magazine publication article
— Mainly on 1946 through 1955 —
○FUJIHIRA Makiko (Nara Women’s University)

3D-12  Chronological Analysis of Housing Studies of Japan Women’s University Graduates
○MINAI Namiko, YAJIMA Hiroko (Japan Women’s University)
Room E

9:00 – 9:30 Chairperson [SATSUMOTO Yayoi]

3E-02 A study of gender differences about consumer’s satisfaction with the visual merchandising and the effect
— The research of consumer’s purchasing behavior for apparel products through the online store —
○YOSHII Ken (Otsuma Woman’s University)

9:30 – 10:00 Chairperson [YOSHII Ken]

3E-03 Customers’ psychology of fair trade fashion
○TSUJI Yukie (Kobe Gakuin University)

3E-04 Self-supported degree survey in clothing life of college students
○OYA Sachie1, SATSUMOTO Yayoi2
1(Showa Gakuin Junior College, 2Yokohama National University)

10:00 – 10:45 Chairperson [TSUJI Yukie]

3E-05 Consideration of color harmony in the field of apparel (4) — Difference of color harmony degree by fashion item —
○ISHIHARA Hisayo1, WASHIZU Kanoko2, KOMACHIYA Hisako3, KUMADA Ayako4, TODA Kashiko5, HATA Kumiko6
1(Shigiyama Jogakuen University, 2Nagoya University of Arts and Sciences, 3Nagoya Women’s University, 4Hiroshima Jogakuen University, 5Kobe Shoin Women’s University, 6Aikoku Gakuen Junior College)

3E-06 Color universal design which assists living behaviors
— Difference in “ease of understanding” of “opening” behaviors in preschooler —
○NAITO Akie1, YAMASHITA Ken2, ISHIHARA Hisayo3
1(Ochanomizu University, 2Sugiyama Jogakuen University)

3E-07 Color and gender relation in childhood clothes — approaching from discussion in pink —
○HIRATA Mariko (Ochanomizu University)

Room E

14:15 – 14:45 Chairperson [NISHI Ryutaro]

3E-08 Involvement of childcare approach for children in meal scene in a nursery school
○SASAKI Ikuko, YOSHIKAWA Haruna (Saitama University)

3E-09 Children’s demanding expression and detour behavior in home and group childcare
○SAGAE Yoshie1, YANAGIMOTO Aki2, ASAO Hiromi2, KANEDA Toshiko1
1(Showa Women’s University, 2Yurikago Kindergarten, 3Higashitachikawa Kindergarten, 4Tokyo International Welfare College)

14:45 – 15:30 Chairperson [YOSHIKAWA Haruna]

3E-10 How to use smart devices in parenting — Impact of parents’ childhood experiences —
○JINGU Fumiyo, OKANO Masako (Tokyo University of Social Welfare)
Oral Presentation (Sunday, May 31)

3E-11 Relation between the nursery teachers’ rearing of their own children and their experience at nursery school
○OKANO Masako1, ABE Ayana2
(1Tokyo University of Social Welfare, 2Oinezuka Nursery School)

3E-12 Examination of child-rearing and child-raising support that encompasses the area — Cooperation between other industries and companies utilizing local resources —
○TAJIMA Daisuke1, KANAI Rena2
(1Wayo Women’s University, 2Obirin University)

15:30 – 16:00 Chairperson [KURAMOCHI Kiyomi]

3E-13 Learning from Junior High School Family Economics “Interaction Experience Learning” — Examination by the difference of play —
○FUJISHIMA Erika1, YOSHIKAWA Haruna1, YOSHIYAMA Reika1, OZEKI Sawako2, ANDO Erika1
(1Saïtama University, 2Saïtama University Junior High School, 3Saïtama Prefectural Kasukabe Girls High School)

3E-14 The difficulties and problems in handing down evacuation experience for school children.
○SASAKI Tsuyoshi1,2, KUSANO Atsuko3
(1Daiichi Nursey Teachers College, 2Seisa University, 3Shiraume Gakuen University)

Textiles and Clothing

Room F

9:00 – 9:30 Chairperson [MUTA Midori]

3F-01 Structure and comfort of absorbent pads
○HAMADA Hitomi, KOSHIBA Minami, MATSUI Minori (Tokyo Kasei University)

3F-02 Survey on wiping cloth around the mouth of infants
○MATSUNASHI Kuniko1, NAKAMURA Kuniko2, OHNO Yoshiko3, MITANI Chizu4
(1Japan Women’s University, 2Otsuma Women’s University Junior College, 3Yamano College of Aesthetics)

9:30 – 10:00 Chairperson [YUMOTO Lei]

3F-03 The program of local industrial activation and fundamental competencies for working person education through the brand management
○INOUE Miki, KAWAMATA Shoko (Tohoku Seikatsu Bunka University)

3F-04 Study on evaluation of dust adhesion of woven fabrics
○INOUE Mari (Kobe University)

Room F

14:15 – 15:00 Chairperson [AMEMIYA Toshiko]

3F-05 Evaluation of mechanical properties of woven fabrics by Lamb wave
○AKASAKA Shuichi1, NISHIKAWA Koji2, ASAI Shigeo1, GOCHO Hiromi2
(1Tokyo Institute of Technology, 2Jissen Women’s University)

3F-06 Characterization of Bashofu textile as summer clothing material
○MITANI Chizu1, KAKIHARA Fumiko2, NOMURA Yoko3
(1Japan Women’s University, 2OIST Okinawa Traditional Textiles Club, 3Okinawa Institute of Science and Technology Graduate University)

3F-07 Visual features and classification based on machine learning for yukatas, aloha shirts and kariyushi shirts
○ASANOMI Mayumi1, NAGAHAMA Koharu2, MORI Toshio3
(1Kagoshima Prefectural College, 2Gifu Women’s University, 3Tokyo Kasei University)
### Oral Presentation (Sunday, May 31)

**15:00—15:45**  
**Chairperson** [HANADA Tomomi]

#### 3F-08  
**Relationship between “Shittori” skirt form and “Shittori” in tactile sensation**  
○SUEHIRO Yukari\(^1\), SUKIGARA Sachiko\(^2\)  
\(^1\)Mukogawa Women’s University, \(^2\)Kyoto Institute of Technology

#### 3F-09  
**Evaluation of the detergents for the indoor drying**  
— Influence of the drying time and the detergency to give to the colony count of bacteria —  
○TSUKAZAKI Mai, OCHIAI Shiko, HONDA Motoko, GOCHO Hiromi  
(Jissen Women’s University)

#### 3F-10  
**Trial production and fatigue durability of green composite for shoes**  
○KATOGI Hideaki, TSUNEKAWA Hisako (Jissen Women’s University)

#### Food and Nutrition

### Room I

**14:15—14:45**  
**Chairperson** [NAGURA Hideko]

#### 3I-01  
**Relationship between body muscle strength, daily living habits and dietary intake in nursery school children**  
○TAMURA Asako, ITO Kiyoshi, MURAYAMA Nobuko, HIRAKAWA Chika, YAMAGISHI Azumi, KOJIMA Yui, TSUJI Tomomi (University of Niigata Prefecture)

#### 3I-02  
**A study of food education based on the ingredients in the picture of the menu of the lunch box for children**  
○SENDA Makiko (Hanazono University)

**14:45—15:00**  
**Chairperson** [TAMURA Asako]

#### 3I-03  
**Vegetable intake and dietary habits of young people**  
— A study on the recognition, preference and intake of vegetables —  
○HARA Tomoko (Shiga Junior College)

**15:00—15:45**  
**Chairperson** [MURAKAMI Yoko]

#### 3I-04  
**Development of dietary choice skills for elementary school students**  
○ZEMPO Michiko\(^1\), OKABE Satoko\(^1\), KAMETA Akemi\(^1\), ITO Shinya\(^2\), GOTO Aya\(^3\)  
\(^1\)Koriyama Women’s University, \(^2\)Kitasato University, \(^3\)Fukushima Medical University

#### 3I-05  
**Basic research in the production of Togashi — The spread of the “Tengai” during the Tang dynasty —**  
○MA Jiansui (Tohoku University)

#### 3I-06  
**Home economics left in the photograph - technique swaying “haeru” in fascinating photos**  
— Report on the activities of young members of the Kanto Branch (R1) —  
○KINTAKA Yuri\(^1\), IGARASHI Kiyoko\(^2\), IROKAWA Yuko\(^3\), TAKEUCHI Akiko\(^4\), SATO Sayaka\(^5\), NIIMI Iho\(^6\), WADA Kanae\(^7\), YABE En\(^8\), KAMOSHITA Sumiko\(^1\), SHIBASAKI Motomi\(^9\)  
\(^1\)Jumonji University, \(^2\)Bunka Gakuen University, \(^3\)Tokyo Kasei University, \(^4\)Futaba Nutrition College, \(^5\)Aikoku Gakuen Junior College, \(^6\)Ochanomizu University, \(^7\)Tokyo Syokuryo Dietitian Academy, \(^8\)University of Human Arts and Sciences, \(^9\)Teikyo Heisei University)
Oral Presentation  (Sunday, May 31)

Home Economics Education

Room J

9:00 – 9:45 Chairperson [HORIUCHI Kaoru]
3J-01 The current state of responding to food allergies in junior high school cooking practice in Sapporo and Ishikari
   ○SATOH Saori1, MASUBUCHI Satoko2
   (1Sapporo Kashiwagoka Junior High School, 2Hokkaido University of Education)
3J-02 Analysis of the learning contents on selection of ready-made clothes in home economics
   ○FUKUI Michiy1, OHTSUKA Michiko2
   (1Naruto University of Education, 2Japan Women’s University)
3J-03 Determinants of life plans and career attitudes among female adolescents — preliminary study —
   ○YOKOTA Yurika, SHIGEKAWA Junko (Saitama University)

9:45 – 10:15 Chairperson [AKATSUKA Tomoko]
3J-04 Relationship between university students’ housework and participation of household work in their childhood.
   ○SAWASHIMA Tomaoki (Saga University)
3J-05 Life stories of high school students tackled the practice of creating community life
   ○DOKI Keisuke (Hokkaido University of Education)

10:15 – 10:45 Chairperson [KIMURA Noriko]
3J-06 Student’s motivation and conception of learning in class practice with familiar nature.
   ○OTSUKA Keita1,3, KUWAHARA Tomomi2,4
   (1The University of Tokyo, 2Tokyo Gakugei University Senior High School, 3Hirose Hospital,
    4Tokyo University of Agriculture and Technology)
3J-07 Food loss reduction and social imagination of the university student to see in the doggy back
   ○MIYAGAWA Yuki, UEMURA Kyoko (Tokyo Kasei Gakuin University)

Home Management

Room K

14:15 – 15:00 Chairperson [OHYABU Chiho]
3K-01 A study on restaurant choice and consumption behavior of university students
   — Analysis of the gender difference and regional difference —
   ○IZUMI Shiho (Mukogawa Women’s University)
3K-02 Development of volunteer training program at consumer education event
   — Practice for the spread of event “Kidstown” in the region —
   ○ODA Naomi1, AZUMA Tamami2 (1Shujitsu Junior College, 2Sugiyama Jogakuen University)
3K-03 Consumer education for consumer citizenship
   — Achievements and issues of the Kyoto Prefecture consumer education on promotion project —
   ○OHIMOTO Kumiko (Osaka Kyoiku University)

15:00 – 15:45 Chairperson [NGANGA Nobuko]
3K-04 Survey on awareness of female labor issues in Japan — Working support which female foreign students thinks about —
   ○AKABANE Kazue (Aikoku Gakuen University)
3K-05 The meaning and influence of experience activities of single parent
   ○OYABU Chiho, KIHARA Yuka (Gifu University)
3K-06  A secret of successful life analyzed from long-term household account books
— A case study of money management of nuclear family household from 1967 to 1999 —
○NAKAGAWA Hideko1, SHIGEKAWA Junko2 (1Utsunomiya Junior College, 2Saitama University)

Room L
14:15—14:45  Chairperson [TAKAMURA Hitoshi]

3L-01  Effect of lipoxygenase action on fatty acid contents during processing of soybean products
○KURODA Hisao (Tokyo Kasei Gakuin University)

3L-02  Change in the quality of sweet potato paste made by "Imogenne" during storage
○KASUGA Keita, ISHIRO Nozomi, OSHIDA Shintiro, KOJIMA Yujo, SAGAE Yuka, SUZUKI Masashi, HIRAI Nami, OTANI Mahiro, TSUTSUURA Satomi, NISHIUMI Tadayuki, YAMAGUCHI Tomoko (Niigata University)

14:45—15:30  Chairperson [KUBO Kaori]

3L-03  Effect of lipids on the freeze-thaw stability of high-lipid-containing gels
○NAKAJIMA Satoshi, MATSUMOTO Takunori, AKIYAMA Akiko, MASUDA Mai, SAKIYA Nobutaka, WATANABE Yuichi, UEDA Yoshihiro (SOMAR Corporation)

3L-04  Effect of dietary nanocellulose on obesity and gut microflora in high-fat-fed mice
○NAGANO Takao1, YANO Hiromi2 (1Ishikawa Prefectural University, 2Kawasaki University of Medical Welfare)

3L-05  Second-meal effect of fruit granola as snacks — Open Label Randomized Crossover Study —
○MASUTOMI Hirofumi1, ISHIHARA Katsuyuki1, HIRAO Kazuko2, FURUTANI Akiko2,3 (1Calbee, Inc., 2Aikoku Gakuen Junior College, 3Waseda University)

Room M
14:15—14:30  Chairperson [OHTAKE Midori]

3M-01  Trends of radiocesium concentration of wild plants in Fukushima prefecture and problematic point
○HIROI Masaru, KAGEYAMA Shio, MOROOKA Nobuhisa (Koriyama Women’s University)

14:30—14:45  Chairperson [OHTAKE Midori]

3M-02  A Study on the Surgical Caps for gynecologic cancers
○MIZUTANI Hiroshi (Tohoku Seikatsu Bunka University)

14:45—15:00  Chairperson [OHTAKE Midori]

3M-03  Is there sex difference in the pressure of the bottom?
○KAIFUCHI Masato (Niigata University of Rehabilitation)

15:00—15:15  Chairperson [HAMAJIMA Kyoko]

3M-04  A study on promotion of energy-saving consciousness and behavior of parents and children in the household
— Part 3 Effects of intervention strategies on the consciousness, behavior and energy consumption —
○TAKATA Hiroshi1, MIZUMA Yoshiteru2, KOMATSU Tomohiro2 (1Hiroshima University, 2Hiroshima Gas Co., Ltd.)
<table>
<thead>
<tr>
<th>Time</th>
<th>Session</th>
<th>Title</th>
<th>Presenters</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>15:15-15:30</td>
<td>3M-05</td>
<td>Effects and issues of a workshop on proposal of emergency goods for high school students</td>
<td>IKUTA Eisuke (Osaka City University)</td>
</tr>
<tr>
<td>15:30-15:45</td>
<td>3M-06</td>
<td>Effects of favorite scents to visual display terminal work</td>
<td>HASE Hiroko¹, HIRABAYASHI Yuka² (¹Shalom Co., Ltd., ²Kinjo Gakuin University)</td>
</tr>
<tr>
<td>15:45-16:00</td>
<td>3M-07</td>
<td>Relationship between living behavior and daily activity, sleep, and quality of life among the elderly living in rural areas</td>
<td>KIDO Chiaki¹, KUBO Hiroko¹, AZUMA Michiyö², SASSA Naomi³, SUGAWA Manae¹, HOSHINO Satoko¹, ISODA Norio¹ (¹Nara Women's University, ²Kio University, ³Mukogawa Women's University)</td>
</tr>
</tbody>
</table>
特許出願は研究発表前に行うことが原則ですが、特許庁の指定を受けた学術団体（日本家政学会は平成8年12月18日に指定）が主催する学術研究集会で発表された内容については、日本では例外規定が適用され、発表6ヵ月以内であれば特許を出願することができます。この際、大会要旨集に記載されていることから関連して、刊行物と認められます。大会要旨集に記載のないことがらについての発表を保護したいときにのみ、次の手続きとなります。

1. 発表者は、発表のもとになる「文書」（全文または必要部分）およびプレゼン資料のコピーをあらかじめ座長に提出し、発表後、口頭で発表したことの事実を座長に「確認」してもらいます。（大会要旨集のコピーのみを特許庁に提出される場合は座長の確認の必要はありません。）
2. 座長の確認を受けるには、例に示す「確認書」を発表者が作成して、上述の「文書」等とともにあらかじめ座長に提出します。（座長の確認書は学会に提出。）ポスター発表の場合も同様に、「確認書」と、掲示資料のコピーを発表当日持参し、会場責任者に提出します。
3. 出願者が本会発行の証明書を特許庁に提出するときには、座長の捺印した「確認書」1通、「文書」等2通（正・副）のほか、下記に示すような「証明書」（学会の控1通を含む2通）を作成して、返信用封筒（宛名記入、切手添付）を同封し、本会あてにその証明を請求してください。本会ではこの証明書に「文書」等のうち1通（正）を添付して捺印の上、返送します。
4. 発表者が連名の場合は「確認書」「証明書」「文書」とも全員の名前を記入します。
5. 発表後に特許出願の必要が生じ、後日、座長による発表確認が必要な場合は、学会事務局にご連絡ください。
6. 特許申請の場合、事前に出願を依頼する弁理士に申請方法をお問い合わせください。
講演１「ネグレクトの原因の解明とその回避に向けて—生理学の立場から—」
高崎健康福祉大学
下川 哲昭

厚生労働省は、児童虐待の相談対応件数159,838のうち29,479件（18.4％）が「保護の怠慢・拒否（ネグレクト）」が占めると報告しています（平成30年度社会福祉行政業務報告）。しかし、ネグレクトの原因に関しては「幼児期にネグレクトされた人は将来も親となった際に今度は自分の子供をネグレクトする」といった断片的な知見が先行するもその科学的理解は極めて低い現状です。

私達の研究グループは、CIN85という分子が細胞膜受容体のエンドサイトーシスに関与していることを報告しました[1]。この機構の個体での意義を明らかにする目的でCIN85ノックアウト（KO）マウスを作製したところ、このKOマウスは「多動性」と「ネグレクト」の表現型を示しました。多動性の原因はCIN85欠損による脳線条体ドパミン受容体のエンドサイトーシスの破綻がドパミン刺激の過剰を招き多動を誘発していることを明らかにしました[2]。

一方、このマウスは出産数も乳児の機能も正常ですが、子育てに全く興味を示しません。このマウスに対して受精卵の交換移植やホルモン投与実験等を行いネグレクトの原因を解析しました。その結果、（1）将来子育てするか？しないか？は、従来から考えられてきた母親の妊娠期や出産後の性格ではなく、母親自身がその母親の子宮内にいた胎児期の神経内分泌環境によってその方向性が決定される、（2）その決定には、胎児期の脳内環境、特に母体の脳下垂体から分泌されるホルモンであるプロラクチンが重要である、（3）母体からのプロラクチンによって将来育児行動に必要な脳内育児神経回路が活性化する、などが明らかになりました。

本講演では、これまでの研究を紹介すると共に、生理学の立場からネグレクトの原因とその回避についてお話します。

＜参考文献＞

講演２「日本の子育てと専業母のゆくえ—家族関係学の立場から—」
金城学院大学
宮坂 靖子

子どものウェルビーイングを保障する一つの、しかも重要な条件は、保育者（親）のウェルビーイングが維持されていることであろう。子ども一人ひとりが人権を保障され心身ともに健やかに育つための課題を、親の育児・家事遂行状況に着目し、報告者らが2018-19年に実施した日本の中国・デンマークの母親を対象とした比較調査研究に基づいて明らかにすることが本講演の目的である。

日本の子育ての特徴は、性別役割分業による母親への負担の集中、育児ネットワークや育児支援の少なさなど、一言で言えば、専業母による「孤育て」であり、これは近代家族特有のジェンダーを固定化する要因となった「三歳児神話」によりもたらされていた。しかし、近年は社会経済環境の影響もあり、女性一般のみならず、乳幼児期の子どもをもつ母親の労働力率も上昇傾向にある。にもかかわらず、ワンオペ育児という言葉の定着が示すように、「孤育て」状況は今もなお実態として存在している。

3ヶ国比較調査において、日本の母親は育児に対する肯定感が低く、働き、女性の正規雇用労働力率が高いデンマーク、中国の順に高くなっていた。デンマークにおいては、子どもとのスキンシップやコミュニケーション。子どもへの愛情を注ぐことに高い関心が払われると同時に、実際そのような行動をとることができていると主観的に認識されていた。しかし、大変興味深いことに、子育てにおいて愛情規範が重視される一方で、家事を愛情の表れとみなす「家事＝愛情規範」は最も弱かった。
講演3「家政学で「子どもの生活を支える」ということ—家庭生活アドバイザーの視点から—

家庭生活アドバイザー
工藤 由貴子

今、子どもの生活をめぐって様々な課題がある。体力、運動能力、精神的状態や意欲といった子どもの発達に関わるもののから、生活時間、空間、人間関係等子どもの生活環境の変化として捉えられるもの、更には不登校、引きこもり、虐待、貧困等々、社会的な背景のもとで捉えられるものまで、課題は多様化し、深刻化している。このような状況の中で、たくさんの課題を抱える子どもを助け、保護することを目的にした様々な支援が提供されている。どれも重要であるが、家政学の観点からみると、子どもは自らの生活を創る主体であるという観点から、子どもを中心にすえ、そこから生活の全体を捉える総合的な視点をもった支援が十分とはいえないように思われる。

2017年のパイロット事業を経て、2018年に創設された日本家政学会認定家庭生活アドバイザーは、本格的活動開始から3年、資格取得者59名という段階にある。多様な学問分野から構成され、学際的かつ総合的に研究・活動をするという家政学の専門性に立脚し、様々な分野の研究者・教育者・実践家が連携して人間の生活を総合的に捉え、独自の視点で課題を見出し、それを乗り越えていくために必要な支援・教育・協働を行うことを目的に活動を展開している。

家庭生活アドバイザーによる活動は、①その人自身のエンパワメント：当事者の観点で課題を捉える、選択肢を示す、課題解決に向かってその人自身が最も良い選択肢を選べるように助言・支援する。②生活全体のウェルビーングの向上：衣食住の生活諸側面における生活の質という観点から課題にアプローチする。生活環境を整えることによって課題を乗り越えることができるようにする。その課題解決だけに留まることなく、それを通じて生活力を高め、問題回避、予防ができるようになる。③個人や家族・家庭生活の課題を個人の責任として解決する方法ではなく社会的な共通課題としていく、そのことによって防止、予防、社会的包摂のための社会が動くようになる、この3点に特徴がある。

本報告では、そうした家庭生活アドバイザーの視点から子どもの生活をめぐる課題を捉え、必要なことは何かを検討する。それを通じて、これまでの「支援策」に欠けている視点を発見し、家政学の活動領域を示せるのではないか。

教育講演「最近のスポーツ栄養のトピックス」

6号館 1階（A会場）
5月31日（日） 9:00-9:50

高崎健康福祉大学
木村 典代

スポーツ栄養学の常識は、この20年間で大きく変化してきている。本教育講演では、スポーツ栄養学の研究分野で近年、注目されている栄養学的戦略法3つと、実践現場でのサポートにいかせる栄養教育学的手法をいくつか紹介する予定である。

栄養学的戦略の2つ目は、筋たんぱく質合成に対する効果と、筋グリコーゲンの回復効果に関するものである。これまでの手法では単体の栄養素摂取に関する研究が主流であったが、近年ではWhole foodsや栄養素の混合物摂取の良さが見
シンポジウム「多様な生活者の視点と家政学　―群馬の事例から―」

基調講演「佐藤タネ（タネ）・須藤いま子　―二人の先覚者に学ぶ―

高崎商科大学　特任教授　熊倉 浩靖

SDGs（持続可能な開発目標）が世界共通の課題とされるなか、経済・社会・環境を常に一体のものとして把握し、生活の質の向上を理論的・実践的に求めてきた家政学に期待するものは多い。

歴史学の立場からすれば、時代時代にあってSDGsを形にして来た人々や地域の事例を提示し、今を生きる人々の糧とすることが一つの役割となる。

そこで私は、群馬に生まれ育ち暮らす者として、様々な人々を例としてきたが、考えてみれば、女子教育の場を率先して設立し、家政学を個人・家族・地域に根づかせ花開かせてきた佐藤タネ（1875~1953）・須藤いま子（1913~1990）こそ第一の先覚者であることに改めて気づかされた。

佐藤タネは上信国境の碓氷郡坂本（現・安中市松井田町）に生まれ、実子を舅夫婦に預けながら教師の道を求めて東京裁縫学校（現・東京家政大学）に進学。渡辺辰五郎に学び、三島高等女学校を経て1906（明治39）年31歳の時「良妻賢母・婦徳の涵養・掣肘のない私立学校」を掲げて高崎市柳川町に佐藤裁縫女学校を創立。60名での出発だったが、現在私も奉職している高崎商科大学へと発展を遂げている。

「良妻賢母・婦徳の涵養」と書くと「保守的・封建的」と見られるが、彼女が求めていたのは男女を問わず求められる普遍的人間像の育成であり、そのためには自立できる技術を身に付けることであった。一週間の授業時間を36時間と定め裁縫31時間・修身2時間・家政2時間・洗濯1時間に割り振っていることにも明らかである。「修身」もまた本来のリベラルアーツであった。

須藤いま子は安中市小園（現・安中市安中）に生まれ、6歳の時に大病を得、3年間生きていたが、考えてみれば、女子教育の場を率先して設立し、家政学を個人・家族・地域に根づかせ花開かせてきた佐藤タネ（1875~1953）・須藤いま子（1913~1990）こそ第一の先覚者であることに改めて気づかされた。

須藤いま子は安中町小園（現・安中市安中）に生まれ、6歳の時に大病を得、3年間生きていたが、考えてみれば、女子教育の場を率先して設立し、家政学を個人・家族・地域に根づかせ花開かせてきた佐藤タネ（1875~1953）・須藤いま子（1913~1990）こそ第一の先覚者であることに改めて気づかされた。

須藤いま子は安中町小園（現・安中市安中）に生まれ、6歳の時に大病を得、3年間生きていたが、考えてみれば、女子教育の場を率先して設立し、家政学を個人・家族・地域に根づかせ花開かせてきた佐藤タネ（1875~1953）・須藤いま子（1913~1990）こそ第一の先覚者であることに改めて気づかされた。

須藤いま子は安中町小園（現・安中市安中）に生まれ、6歳の時に大病を得、3年間生きていたが、考えてみれば、女子教育の場を率先して設立し、家政学を個人・家族・地域に根づかせ花開かせてきた佐藤タネ（1875~1953）・須藤いま子（1913~1990）こそ第一の先覚者であることに改めて気づかされた。

須藤いま子は安中町小園（現・安中市安中）に生まれ、6歳の時に大病を得、3年間生きていたが、考えてみれば、女子教育の場を率先して設立し、家政学を個人・家族・地域に根づかせ花開かせてきた佐藤タネ（1875~1953）・須藤いま子（1913~1990）こそ第一の先覚者であることに改めて気づかされた。

須藤いま子は安中町小園（現・安中市安中）に生まれ、6歳の時に大病を得、3年間生きていたが、考えてみれば、女子教育の場を率先して設立し、家政学を個人・家族・地域に根づかせ花開かせてきた佐藤タネ（1875~1953）・須藤いま子（1913~1990）こそ第一の先覚者であることに改めて気づかされた。
家庭生活アドバイザー認定証交付式・活動報告会

6号館 1階（A会場） 5月31日（日） 14:15〜16:15

1. 認定交付式
   会長 大塚美智子氏

2. 活動報告会

東日本大震災生活研究プロジェクト活動報告会

6号館 1階（B会場） 5月30日（土） 9:30〜11:00

報告1 「全体報告」
プロジェクト代表 石巻専修大学 根田隆

2011年3月11日に発生した東日本大震災をうけて、日本家政学会は阪神淡路大震災での研究実績を踏まえ、大震災直後の生活上の困難状況や復興に取り組む中での生活上の課題を明らかにし、家政学からの生活支援体制を確立すると共に今後の生活のあり方を追求するために「東日本大震災生活研究プロジェクト」を立ち上げました。人的にも経済的にも最大の被害自治体となった石巻市を対象として、同市に立地する石巻専修大学と協定を結び、活動を進めてきました。

第一期の5年間では、被災者と支援団体の両面から避難所と仮設住宅での生活を主に調査しました。その結果を2冊の書籍「東日本大震災石巻市における復興への足取り」、「東日本大震災ボランティアによる支援と仮設住宅」（ともに建帛社）や報告会を通じて発表するとともに、自治体に情報提供しました。この研究を通じて、発災から約2年経過で被災者支援団体の業務が変化し、現地化する過程が明らかになりました。さらに、震災前からの信頼をもとに復興を進める地域企業の姿や、震災支援のために外部から移住した若者が復興に参加する姿も明らかになりました。いっぱい、調査対象となった支援団体からの要望を受けて、「家政学からの提言 震災にそなえて」および「炊き出し衛生マニュアル」という一般市民向けのブックレットを作成し、後者は熊本地震以降の災害支援に活用されています。

2017年度からの第二期では、震災後の初等・中等教育機関の調査や、心のよりどころとしての視点も含めた震災後の心生活の研究を続けるとともに、望ましい仮設住宅での暮らしや災害公営住宅の運営等についての提言をめざして研究を進めています。

今回は生活拠点が復興公営住宅などの仮設住宅に移行した時点で振り返ったみなし仮設住宅もふくめた仮設住宅の生活の様子と、東日本大震災後の支援活動がその後の災害支援にどのような影響をあたえたのかに注目して報告を致します。
報告２ 「石巻じちれんアンケート報告」
大阪市立大学
宮野 道雄

本プロジェクトでは住居グループのメンバーが中心となって石巻市の災害復興住宅等に居住する被災者を対象として、
避難所から仮設住宅、さらに災害復興住宅などの恒久住宅へと居住環境が変化する中での生活上の支障や改善点、
生活行動の変化などについてアンケート調査を行ってきた。第1回を2016年12月から2017年1月にかけて実施し、176世帯
（回収率23.2%）から回答を得た。また、2回目を2019年2月から3月に実施し、369世帯（回収率31.0%）から回答を得た。
なお、アンケート調査は石巻市のぞみ野地区全世帯を対象とし、一般社団法人石巻じちれんの協力の下で行った。

本報告では上記のアンケート調査結果に基づき、災害復興における居住環境の変化がもたらす課題について他の災害と
比較しながら概観する。具体的には、発災直後の避難行動として就寝できる場所をどこに求めたか、避難所から仮設住宅
および仮設住宅から復興住宅へ移って改善されたことと不都合だったこと、発災直後と調査時点それぞれでの生活復興感
や石巻市の復興感の比較などである。その結果、生活環境が改善されるにつれて睡眠やプライバシーへの評価が高まるが、
生活費や近所付き合いが課題としてあがってきた。また、外出頻度が震災前と比べて、あるいは仮設住宅入居当初や現在
の住まい入居当初と比べて増えたと回答した人の割合はいずれも2割に満たないが、減ったと回答した人の割合は徐々に
下がっており、改善の傾向が現れていた。

報告３ 「仙台市応急仮設住宅オープンデータの解析」
大阪市立大学
生田 英輔

本プロジェクトの第1期では石巻市の応急仮設住宅を中心とした活動が中心で、仮設住宅住民に対する活動を継続してきた。しかし、プレハブ仮設住宅は最大131団地7,153戸、借上げ民间賃貸住宅は2,830戸という被災地で最多の石巻市の応急仮設住宅の全てを調査するには至らなかった。特に借上げ民間賃貸住宅の実態は明らかにできていない。

一方、宮城県仙台市が応急仮設住宅に関するオープンデータを公開している。市内被災8,637世帯、市外被災4,185世帯について、世帯主基本属性や仮設住宅属性、仮設住宅入居期間、再建方針・結果、震災時状況、世帯収入、生活再建課題等のデータが整備されている。対象にはプレハブ仮設住宅のみではなく、借上げ民間賃貸住宅や借上げ公営住宅等も含まれている。仙台市内被災世帯に限ると、プレハブ仮設住宅の1,315世帯（15.2%）に対して借上げ民間賃貸住宅は6,457世帯（74.8%）と、借上げ民間賃貸住宅のデータも豊富に含まれている。また、仮設住宅退去時期、すなわち住まいの再建時期も把握できるので、世帯属性や被災状況、再建課題、仮設住宅種別等と再建の関係を明らかにすることも可能である。

本データから大規模災害後の応急仮設住宅における課題や生活復興へ向けた支援の在り方を考察できると考えて分析を進め、本報告では仙台市内被災世帯を対象とした分析結果を報告する。

報告４ 「東日本大震災支援のひと段落と各地の災害支援への展開」
ビースポート災害支援センター
小林 深吾

ビースポート災害支援センター（PBV）は2011年3月17日に外部支援団体として石巻市に入った。以降、延べ約9万人
のボランティアと共に物資配布や食事支援、被災者支援、漁業支援など多彩な支援活動を行ってきた。時期により変化する被災者ニーズに伴って活動内容も変化した。時がたつにつれて、元々あった少子高齢化や中心市街地の空洞化、地域産業の課題などがより顕著化して、PBVの活動も街づくりや地域振興という要素が強くな
り、2016年にPBVとしての災害支援活動は終了をむかえ、地域に根付いた団体を新たに設立した。外部支援者が、被災
地で実施する支援活動をどのように終息させ、何を地元に残すのかは大きなテーマである。

その後の災害支援に活かされた石巻での活動を終息する一方で、多くの被災地で存在し続ける課題もある。石巻で取り
組まれた支援団体間連携や行政・社会福祉協議会・NPOの3者連携は大震災以降に設立された全国災害ボランティア支援
団体ネットワーク（JVOAD）を中心に、情報共有会議として各被災地で定着しつつある。食事支援では日本家政学会の研
究チームが炊き出しの栄養評価をまとめ、『炊き出し衛生マニュアル』を作成して活用されている。一方で、在宅避難者や民間借り上げ住宅（みなし仮設）など、実体を把握しづらい方々への支援アプローチには課題が残る。石巻での災害支援の学びが以後の災害支援活動にどのように活かされ、どのような課題が残されているのかを検討する。

報告5 「東日本大震災の被災者支援に基づく人づくり、地域づくり」
社会福祉法人石巻市社会福祉協議会
阿部 由紀

宮城県では大規模災害時に「災害ボランティアセンター」を各市町村社会福祉協議会が運営することの覚書が平成17年9月に取り交わされた。災害時における石巻専修大学施設の提供に関する協定が平成23年3月末に大学と石巻市で締結される予定で、宮城県沖地震への対応を協議していた。

石巻市では大地震の被害と沿岸集落や市の中心部への津波被害を想定して各中学校や公共施設を中心に避難所を開設することとなっていた。しかし、東日本大震災後の市民生活支援には市内の社会資源の取捨や原発関連の被害なども含めて臨機応変の対応が迫られた。

地元団体である社会福祉協議会は、発災直後から石巻専修大学での災害ボランティアセンター設置の協議をはじめ被災者支援の初動体制を検討し、通常の全事業を停止し、施設利用者や職員の安否確認を行い、石巻市と連絡調整を行った。

平成23年3月15日から同年11月末まで石巻専修大学において災害ボランティアセンターを運営し、以降は学外へ移転して平成26年3月まで継続した。平成23年8月以降は応急仮設住宅等への入居者支援事業（134団地7,153世帯）を市の委託事業として実施し、みなし仮設住宅入居者（4,000世帯）への支援活動は10月から開始した。現在は、復興公営住宅等への入居者支援事業や、既存地域でのコミュニティへの支援事業を展開中で、支援の主体である「人」を養成することも活動の要となっている。

若手の会・国際交流委員会共催セミナー
グローバルに拡げる家政学の未来 ——先達に聞く国際的研究の進め方——

国際的に家政学研究を展開し、キャリアを形成することは重要であると認識しつつも、その一歩を踏み出せずにいる若手研究者や2019年に実施された国際家政学会（ARAHE）、2020年に開催予定のアジア地区家政学会（IFHE）をきっかけに国際的な調査を始動させた研究者も少なくないだろう。そこで本セミナーでは、『国際研究・調査についての大相談会』をコンセプトとし、研究者に抱える様々な疑問、課題を解決することで、国際的な研究活動のスタート支援、促進に寄与することを目指す。

セミナーは二部構成で実施し、第一部は、基調講演として、ヨーロッパ各国で家庭科教育の現地調査を実施されている京都女子大学の表真美氏にこれまでの国際研究の調査から論文執筆までのご経験、海外での研究生活などについてご講演いただき、国際的な研究活動に関して理解を深めることを目的とする。第二部では、小グループに分かれ、相談会を行う。講師には、各分野（食物・被服・児童・原論・教育）より国際的にご活躍の先生方をお招きし、講師、参加者間で自由に質問、意見交換の場を設ける。

これらを通じ、学会全体の国際的な研究活動が活性化する契機になることを期待する。
趣味説明
若手の会・国際交流委員会

第一部 基調講演
「国際的研究に求められること--ヨーロッパでの体験を通じて--」
京都女子大学 表 真美氏

第二部 相談会
講師
【食物】神奈川工科大学 飯島 陽子氏
【被服】横浜国立大学 薩本 弥生氏
【児童】共立女子大学 小原 敏郎氏
【原論】西南学院大学 倉元 綾子氏
【教育】京都女子大学 表 真美氏

家政学原論部会
1号館 2階 (I会場) 5月31日(日) 9:00-10:30
シンポジウム「家政学・家政学原論の今日と未来の方向性を探る：国連 SDGs や国際家政学会が提起するもの」
家政学原論部会は2019年3月以降、日本の家政学の位置づけと今日の課題について議論してきた。次々と生起する多様な生活課題に対して、家政学が果たすべき役割について、国連 SDGs や国際家政学会が提起している課題を参考に、家政学会長及び関係部会とともに議論し、家政学の今日と未来の方向性を探りたい。議論を土台に、家政学の指針も模索した。講師には日本家政学会長（大塚美智子氏）のほか、家政学原論部会、生活経営学部会、家政教育部会、家族関係学部会の各部会長を予定している。

児童学部会
1号館 2階 (F会場) 5月31日(日) 10:20-11:50
シンポジウム「児童学の本質を問う—児童学は何を発信すべきか—」
この2年間、児童学部会ではシンポジウム「児童学の本質を問う」として、そのサブタイトルに、2018年は「その軌跡と未来」、2019年は「家政学における位置と学としての独自性」を掲げ、児童学の使命について考えてきた。そこで今回は、さらに児童学が他分野どうかかわり、その中で何を発信していくべきなのかを、講師の言葉をヒントに、部会員相互通で考えていきたい。
食品組織部会
6号館 2階体育館（P会場） 5月30日（土）12：00－17：00
ポスター掲示「食品を顕微鏡で覗く—小麦粉・米粉製品—」
小麦粉・米粉を用いた調理品は世界中にあり、身近でしかも大変多い。その組織構造は、大きくテクスチャーに関与している。マクロな構造を中心に、それらの構造の観察法を紹介する。

被服整理学部会
6号館 2階体育館（P会場） 5月30日（土）12：00－
5月31日（日）14：10
ポスター掲示「科学研究費助成事業（基盤研究（A）課題番号17H00814、研究代表者：共立女子短期大学 山口 庸子）研究成果最終報告」
研究課題「ファインバブル水を活用した次世代型繊維製品処理システムの開発」の3年間にわたる研究成果の報告を研究代表者、研究分担者が2枚のポスターにより報告を行う。繊維製品の洗浄や染色加工にマイクロからナノサイズの微細気泡を扱うファインバブル水を活用し、大気、酸素、オゾン、香り成分を用いたファインバブル水の機能や繊維処理のメカニズム解明のための種々の研究について報告する。

服飾史・服飾美学部会
1号館 2階（J会場） 5月31日（日）14：15－15：45
公開講演会「富岡製糸場と日本の繊維産業（仮）」
第72回大会の開催地である群馬県の世界遺産であり、2020年にリニューアルオープンが予定されている富岡製糸場に関する公開講演会を開催する。周知のとおり、富岡製糸場は日本の近代化の原動力である繊維産業発展の基礎となった施設であるとともに、そこで働いた若い女性を始めとする人々の暮らしを知ることができる施設であり、さまざまな分野の家政学の研究者にとって、その詳細を知ることは非常に有益である。本部会では、群馬県で大会が開かれる今回を絶好の機会ととらえ、内外より注目されている富岡製糸場について、専門家をお迎えし、最新の研究成果とともに解説していただく予定である。

家政教育部会
1号館 2階（H会場） 5月31日（日）15：00－16：30
報告と討論「家庭生活アドバイザーを支える研究グループの報告と討議」
家政教育部会では、2019年度から、「家庭生活アドバイザー」資格を側面と後方からサポートするために、学校教育・生涯学習・企業との繋がりの中で、家政学がどのように社会貢献できるかに関する研究チームがスタートしている。
具体的には、①「家庭生活に関する教育の理論と実践プログラムの構築—米国家族生活教育を参考に—」と、②「豊かな暮らしを構築するための活力 UP 研修プログラム開発」という2本の研究グループが研究を進めている。それぞれの中間報告と、討議を行う。
目的  長時間の絶食は血糖値のスパイクの要因になることが知られ、間食が血糖値のスパイクの抑制に有用である可能性が示唆されている。シリアルは、ビタミン・ミネラルが強化され食物繊維も豊富に含まれているが、主に朝食で食されることが多く、間食での影響は知られていない。本研究では、間食におけるフルーツグラノーラ（FGR）のセカンドミール効果を検討した。方法  被験者は愛国学園短期大学にて公募し、参加希望者31名の間食および夕食内容を無作為に割付した。血糖値測定にはFreeStyleリブレプロを使用し、装着後4日間観察を行った。観察後、被験者は1サイクル4日間のクロスオーバー試験「間食なし（N）、間食にグルコース（G）、間食にFGR（F）、夕食にFGR追加（A）」を2サイクル実施した。結果および考察 希望者のうちBMI30以上3名、辞退者4名、プロトコール非順守者4名、機器不良者1名を除外し、19名を解析対象とした。F群はN群・G群に比べて夕食時の血糖値および血糖値最大変化量を抑制した。AUCは、F群とN群・G群で差は認めなかった。F群とA群は血糖値最大変化量、AUCともに差を認めなかった。間食によるセカンドミール効果に加えて、FGR（1食26g）には2.7gの食物繊維が含まれており、食物繊維による血糖値上昇抑制効果も考えられる。間食におけるフルーツグラノーラの摂取は夕食時の血糖値上昇を抑制し、セカンドミール効果が示唆された。
目的 日本酒は、我が国の伝統的な発酵食品である。日本酒は米・麹・水を原料としてつくられ、酒粕は日本酒を搾った後に生成される副産物である。酒粕は、糊漬け、糊汁など様々な料理に利用されている。酒粕は、日本酒由来の香りや風味、旨味を呈し、アミノ酸やビタミン、ミネラルなど各種栄養成分を多く含んでいる。中でもレジスタントプロテインは、血中コレステロール低下作用や脂質代謝改善作用を示すことから、近年、健康効果も期待されている。一方、酒粕は副次的な食品であることに加えて、食の洋風化などにより、家庭内での利用が減少している。そこで本研究では、酒粕を「松風」という蒸し菓子に添加した場合の物理特性や食嗜好性に及ぼす影響を検討した。

方法 松風の基本の材料は、薄力粉、砂糖、卵白、シロップ、イスパタとした。酒粕は、薄力粉の代替として0〜50%まで段階的に添加した。松風は、高さ、膨化率、保形率、色彩構成、水分含量、かたさなどを測定した。官能評価は大学生を対象に行った。

結果 酒粕の添加がかたさに及ぼす影響を検討したところ、酒粕の添加割合の増加に伴い、有意に低下した。膨化率は、酒粕の添加割合の増加とともに有意に低下した。官能評価において、酒粕の添加により、松風のしっとり感と甘みが有意に強かった。総合評価の結果から、酒粕10〜30%の添加により松風の嗜好性が向上することが示唆された。

目的 関東支部若手の会では、様々な企画を通して、新しい視点での家政学の魅力を見出し、若手や異分野の研究者にも家政学に興味を持ってもらうことを目的として活動している。令和元年度の活動では魅せる写真の撮り方について学ぶ機会を設けた。

方法 令和元年8月に、フードコーディネーターによる講演会とカメラマンによる撮影の実演、参加者がサラダの盛り付けから撮影までを実践する体験会を実施した。

結果 講演会では食べ物を美味しそうに見せるためのテクニックを中心に、被写体に応じた写真撮影のコツを学んだ。具体的には、被写体となる食材の選び方や彩り・高さ・バランスを軸とした盛り付けのポイント、撮影時の真俯瞰・斜俯瞰というアングル、ライティング等の基本とともに、撮影方法による写真の見え方の違いを学んだ。体験会では食材の盛り付けや照明、撮影を講師に実演して頂いた後、参加者は学習したテクニックをとり入れてサラダの盛り付けと各自のカメラによる撮影を行い、実践しながらコツを修得した。

参加者からは活発な質問があり、アンケートにおいても、講演会で学んだテクニックを体験会で実践することによって、具体的な技術を修得できたという意見を得た。今回、魅せる写真の撮り方(美しく記録を残すこと)を学ぶことができ、参加者の評判も高く満足度の高い企画となった。今後も家政学へ興味を持つ端緒となるような企画を開催したいと考えている。

目的 東京都の貧血調査では、月経が始まる中学2年生頃より貧血率が上昇し、鉄摂取量向上が重要としている1)。本研究は、鉄の摂取状況とそれに伴う貧血症状について現況調査する。また、調理体験介入を行い、調理に対する自己効力感をあげることで、子どもの食選択性と健康行動の実践能力の向上を目指す。

方法 1) 横断研究：令和元年9月に福島県M市の小学5年生120名、中学2年生144名を対象に、食物摂取頻度調査と合わせて貧血症状、食生活状況に関するアンケート調査を実施した。2) 同年8月にK市の小学3年生から5年生の児童7名を対象に、一人で作れ、鉄を強化した調理教室を実施した。

結果 1) 横断研究の有効回答率は89%で、小学生の鉄摂取量平均は7.6±2.8mg、中学生は7.3±3.4mgであった。鉄の推定平均必要量を満たさない者の割合は、小学生50.8%、中学生51.8%であった。貧血の症状として訴えが高かったものは、小学生では「経日にかじる」、中学生では「疲れやすい」であった。2) 調理教室参加の児童の感想では、実践した内容について理解を示す記述が認められた。

考察 調査対象となった小・中学生において、鉄の摂取は推奨レベルを下回り、貧血の典型的な症状も認められた。今後は、調理教室をより実践的な機会として展開していくことが望まれる。

[文献]
1) 前田美穂：東京都予防医学協会年報. 42, 53-56 (2013)
被服

6号館 2階体育館（P会場）

掲示時間
30日 12:00-31日 14:10

討論時間 31日
講演番号奇数 13:10-13:40
講演番号偶数 13:40-14:10

ポスター発表 5月31日（日）

P-007 市販部屋干し用洗濯洗剤の性能評価 一部コロニー数の及ぼす乾燥時間と洗浄効率の影響
○塚崎舞, 落合詩歩, 本多素子, 牛腸ヒロミ（実践女大）

目的 部屋干し用として市販されている洗濯洗剤および洗剤を用いて、湿式人工汚染布の洗浄試験を行った。洗浄後の汚染布を寒天培地に押し付け、所定条件で菌を培養し、菌のコロニー数と洗浄効率との関係について検討した。

方法 2019年6月までに市販されている部屋干し用洗濯洗剤および洗剤を6種選定した。これらは粉末洗剤2種（ともに弱アルカリ性）、粉末洗剤1種（アルカリ性）、界面活性剤入りの液体洗剤2種（ともに中性）、ジェルボール洗剤1種（中性）に分類される。洗浄条件は、家庭用ドラム式洗濯機で洗い10分、すすぎ2回の後、乾燥時間を0分、30分、120分と変化させた。乾燥後の汚染布表面へ培養した繁殖菌の定数を、35±3℃の環境で24時間、48時間、72時間で2回目の培養を実施し、2回目の菌のコロニー数を記録した。

結果 洗浄効率の結果では粉末洗剤が最も洗浄効率が高くなり、次いでジェルボール、液体洗剤となり、界面活性剤が含まれない粉末洗剤の洗浄効率が最も低くなった。全ての洗濯条件において、洗浄後の乾燥時間の影響については、明確な関係は見られなかった。一方で、洗浄効率10〜35%にかけて、洗浄効率が高いほど菌のコロニー数が大幅に減少し、洗浄効率とコロニー数の明確な相関が確認された。

文献

P-008 スカート形状の「しっとり」と触感における「しっとり」との関係
○末弘由佳理1, 萬柄佐千子2（1武庫川女大、2京都工芸繊維大）

目的 「しっとり」という言葉は触感や食感のみならず、音楽、人の物腰など広範囲で用いられる。布を触れると、触感を強め、「しっとり」を強く感じる布はあたたかく、圧縮やわらかく、せん断力を高いことを報告した1)。本研究ではアパレルCADにより作製したスカート画像から受ける「しっとり」の印象と手で触って感じる「しっとり」の関係を調べ、将来触感情報を画像に表現する上での基準を明らかにする。

方法 45種の布を手で触って実施した官能検査結果に基づき「しっとり」の差が明らかである6種を選定した。
(1) テクノア社製のi-Designer上でバーチャル布を6種作製し、用いた布は目付け、厚さ及びKESで得た曲げ・せん断・引張り特性である。
(2) ギャザースカートを作図し、3Dバーチャルフィッティングソフト上で6種の着装を行った。
(3) 画像を被検者に提示し、「しっとり」「やわらかい」「重い」「美しい」「かわいい」「ドレッシー」「好み」についてSD法で評価した。

結果 画像から受ける「しっとり」は「重い」を含む5項目と正の相関がみられた。触感評価の「しっとり」は乾燥時間の影響を基にした画像が「しっとり」が高い場合がみられた。

P-009 シューズ用グリーンコンポジットの試作とその疲労耐久性評価
○加藤木秀章, 恒川弥子（実践女大）

目的 日常生活の身近なスポーツには、ランニングがある。そのランニングで使用するシューズは男性・女性ともに1年間で4足購入（2012年）されている1)。ランニング中に繰り返し変形がシューズに生じるため、構成材料の疲労耐久性の評価が必要である。近年、持続可能な開発目標では、環境にやさしい製品開発も重要となる。そこで本研究では、生分解性樹脂と植物繊維を用いたシューズ用複合材料（以下、グリーンコンポジット）の試作とその疲労耐久性評価を行った。

方法 グリーンコンポジットの構成材料には、水分散型ポリ乳酸樹脂とジェットスラバーレイバーを用いた。成形方法は真空圧縮成形とした。成形したグリーンコンポジットの疲労試験（応力比:0.1、繰返し締結荷重:10Hz）を実施した。

結果 温度170℃、時間20分、圧力0.3MPaの条件で成形した場合では、一方にジットスラバーを開閉するシューズ用グリーンコンポジットを作製することができた。成形したグリーンコンポジットの表面性状は、平滑であった。最大応力14MPaで疲労試験を行った場合、母材のき裂が支配要因となるものの、繰返し数10回までグリーンコンポジットが耐えることを明らかにした。

文献 1) 内藤真人;法政大学スポーツ健康学研究,p. 9-14 (2012).
### P-010

**衣素材のなぞり運動時における皮膚の振動・摩擦特性と触感に関する検討**

○伊豆南緒美1, 佐藤真理子1, 田中由浩2

（1文化学園大, 2名古屋工業大）

**目的**
より良い着心地の衣服提供に向けた基礎データ収集を目指し、衣素材に触れた際に生じる皮膚の振動・摩擦特性と触感について検討を行った。

**方法**
健康な若年女性10名を対象とし、試料を指先でなぞる被験者実験を実施した。環境は20℃65%RHとし、試料は組成6種（綿・毛・絹・キュプラ・ナイロン・ポリエステル）×組織2種（織・編）計12種の衣素材を用いた。測定項目は皮膚振動、皮膚特性、官能評価、物性試験である。皮膚振動については、得られた振動波のFFT解析より振動強度及び周波数中央値を、また素材の下に設置した力センサの値から摩擦係数を算出した。皮膚特性では皮膚温、水分量、粘弹性を測定、官能評価では、ざらざらした-なめらかな、嫌い-好き等の7項目を申告させた。物性試験については、試料の水分率、摩擦・摩擦度、透湿性・吸水性・通気性・接触冷温感の評価を行った。

**結果**
皮膚振動の振動強度では織組織の毛及びナイロンの値が、摩擦係数では織組織のナイロン及びポリエステルの値が高かった。また、皮膚振動と官能評価においては、振動強度、摩擦係数共に有意な相関が認められた。

なお本研究は、科研費19K22871（挑戦的研究（萌芽））の助成を受けて行った。

### P-011

**地域を包括した子育ち子育て支援の検討 —各地域資源を生かした他業種・企業などの連携—**

○田島大輔1, 金井玲奈2

（1和洋女大, 2桜美林大）

本研究は、子育ち子育てニーズとそれに対応する地域資源を生かした実践に関する研究である。

子ども・子育て支援制度が2015年度以降スタートし、すべての子どもと子育て世代を、社会全体で支えていく仕組みを形成することが新制度の目的として掲げられている。子育て環境をよりよく変える試みとして、住民が参画した地域独自の事業計画の中で、地域住民・専門家・企業が共同した子育て支援のあり方を検討・実践した。

子育て・子育ち支援に関心があるスタバパック家の店長1名・A市で子ども食堂を運営するスタッフ（子育て中保護者）1名・A市の助産院院長1名・A市子育て広場保育士2名・A市社会福祉法人保育所主任2名／子育て支援担当保育士2名・の役人材が子育て相談カフェをスタートパックにて月に1回開催している。行政でもなく民間でもない、他業種・企業の連携により、子育て相談支援を必要としている保護者が顕在化し、A市における支援のニーズ（不登校支援・孤食支援・父子家庭支援・多胎児子育て支援・育児不安相談・子育て世代へ情報提供の希薄さ）が明らかになってきた。

---

**児童**

<table>
<thead>
<tr>
<th>6号館</th>
<th>2階体育館（P会場）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td><strong>掲示時間</strong></td>
<td>30日 12:00－31日 14:10</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>討論時間</strong></td>
<td>31日</td>
</tr>
<tr>
<td>講演番号奇数 13:10－13:40</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>講演番号偶数 13:40－14:10</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
P-012 ドギーバックにみる食品ロス削減と大学生の社会的想像力

○宮川有希, 上村協子
（東京家政学院大）

目的 2019年「食品ロスの削減の推進に関する法律」が施行され、消費者・事業者・行政が連携した活動が求められている。なかでも、外食分野の食べ残しをドギーバックにより持ち帰る活動を活性化するには、消費者の自己責任をめぐる事業者・行政の関係性、コミュニケーションの再検討が喫緊の課題である。本研究では消費市民社会でのコミュニケーションのキー概念となる社会的想像力についてドギーバックをテーマに、検討することを目的とした。

方法 T大学プロシューマー（生産消費者）実習授業内で作成した2016年～2019年の4年分の食品ロスに関する大学生の基礎調査・意識調査報告書を主な資料としプロシューマー実習生の授業を通しての変化を分析した。

結果 2019年大学生意識調査では、飲食店で食べ残しをした場合、持ち帰りたいが持ち帰っていない29.3%，持ち帰っていない45.5%と回答した。日本では普及していないドギーバックを自己決定・自己責任で取入れることはハードルが高い。しかし、授業を履修しアンケート等の調査に関わった学生と、ボランティアを通しフードバンク活動に関わった学生は食品ロスに対する意識の変化は顕著に表れている。ドギーバックをファッションの一部のように取り入れる事を大学生が自ら発信していく等持続可能なリカレントな社会を築くためには社会的想像力を高めるアクションリサーチが重要であると示唆された。

P-013 子育てにおけるスマートデバイス活用について
－保護者の子どもの頃の経験が及ぼす影響－

○神宮文代, 岡野雅子
（東京福祉大）

目的 スマートデバイスは、子育てにおいても切り離せないものとなりつつある。しかし、その積極的な使用の賛否に関する情報が錯綜する中で、保護者のスマートデバイス使用状況に関して十分な情報が整理されているとは言い難い。本研究では、保護者のスマートデバイス活用の実態を把握することを目的とした。

方法 未就学児の保護者計300名を対象に質問紙調査を行った。資料収集時期は、2019年3月～6月である。

結果と考察 ①多くの家庭がスマートデバイスを所有していることが確認できた。②スマートデバイス使用場面は、自宅と自宅外とで違いが見られ、自宅外では「使わせがけが全くな」割合が自宅での使用よりも高い傾向にあった。③保護者のスマートデバイス使用状況は、子育て下で育てておいたが見られた。「子育てにおいて視聴制限や時間などを決めて見させている」割合が高かったに対し、「子育て以外において（保護者自身のために）視聴制限や時間などを決めて見させている」割合は低かった。④保護者の子どもの頃のテレビゲーム等の使用状況は、保護者の半数以上が身近にあったことが観察された。自分自身のためにスマートデバイス活用している保護者は、子どもの頃にテレビゲーム等に対して親和性のある傾向が見られた。以上より、スマートデバイスは生活の中に深く入り込んでおり、保護者の子どもの頃の経験が現在のスマートデバイス活用に影響を及ぼしていると考えられる。
### ポスター発表 5月31日（日）

#### P-014 学習観を指標とした生徒の防災教育受講希望に関わる価値観の検討

○大塚啓太, 松原聡美（東京大, 東京学芸大附属高, 広瀬病院, 東京農工大・院）

目的 学習への積極性は各生徒が持つ学習への価値観により変化すると言われている。つまり、教師がいくら授業実践を熱心に計画したとしても、生徒の価値観によっては住環境に関して真剣に考えようとしない。しかし、その価値観を評価するのでは難しい。そこで本研究は、総合的学習（選択制）にて防災教育選択者と別テーマ選択者の価値観を比較する。ここから、防災教育に熱心な者の価値観を検討し、今後の授業設計への示唆を得ることを目的とした。

方法 2016年から2年間、東京都A中学校の生徒へ心理測定尺度を用いた質問紙調査を実施した。この回答は、選択授業のテーマに沿って環境系、理科系、社会科系、芸術系に分け、ロジスティック回帰分析した。また、環境系から選択した者の中で、防災教育選択者の回答傾向を確認した。

結果 初年度313名、次年度306名の回答を得た。環境系を選択した者の価値観は、初年度「環境に疑問を持ち、理解を深めた」と、次年度「環境学ぶ意義はわからないが生活に関わることは学んだ方が良い」となった。特に防災教育選択者は、「日常生活に関わることは大事」という価値観が両年とも強かった。防災教育を学ぶ志向を持ちれば、日常生活環境に関心があり、学ぶ価値を認めていると考えられる。被災時の非日常生活を強調よりも日常生活を印象付け、応用する授業設計により、生徒の積極性は強化されることが予想できる。

#### P-016 テキストマイニングを用いた食事マナーのエピソード分析と共食頻度との関係

○岩森三千代（新潟青陵大短）

目的 ライフスタイルが多様化している現代において、若い世代の食事マナーの定着にどのようなきっかけがあったかについて、その要因の整理を行うことで今後の食育の一助となることを目的とした。

方法 対象者は新潟青陵大学および新潟青陵大学短期大学部の男子14名、女子331名計345名とし、2019年2月〜4月に無記名自記式質問紙調査を実施した。質問内容は、共食実態や家庭での料理の頻度等背景的要素に加え、マナーについて教わったエピソードについて自由記述形式で記入してもらった。結果の分析にはKHCoderを使用し、抽出語リストの出力、共起ネットワーク、対応分析を行った。

結果 出現頻度上位150語をKJ法によりカテゴリ分析を行った結果、マナーに関する記述では「基本」、「教わる」が多く、次いで「親」「教える」が多く、共起ネットワークにより抽出語同士のつながりをみると、「基本」、「親」、「教わる」の語が近くに位置し、共食について家族からの教育が強かった。共食頻度が低いほど「保育園」が多出しており、家庭外からの教育の傾向が見られた。
P-017
元気な地域在住高齢者の食品摂取多様性得点の特徴と食料品アクセス状況
○佐藤真実,池上志萌,寺田麻緒,矢野友梨 (仁愛大)

目的 独居高齢者において「買い物が大変」と感じる主観的食料品店アクセスは食品摂取多様性の低さと関連する（吉葉他 2015）。本研究では、在宅高齢者の自由生活を対象に食品摂取多様性と主要食料品店アクセ

結果 食料品アクセス得点(平均値)は、男性が3.7点、女性が5.1点であった。とくに男性は、食品摂取多様性の「偏食群」、「低群」の割合が高く、肉、大豆、牛乳を食べる頻度が低かった。家族のつながりが「強い」、「欠食なし」群は食品摂取多様性が高く、地域のつながりが「強い」群は食料品アクセス状況を「とても容易」と回答する割合が高かった。買い物の手段として「徒歩」、「車(自分)」、「もらう」を利用する人は、食料品アクセス状況を「とても容易」と回答する人が多い。一方、「公共交通」、「宅配サービス」、「移動販売」を利用する人は、食料品アクセス状況を「困難」と回答する人が多かった。本調査から、男性や欠食する人は肉や大豆などのタンパク源となる食品を毎日摂取し、地域とつながることなどの課題が明らかになった。

P-018
在宅高齢者の調理と生活の質に関する文献レビュー
○久保田のぞみ (名寄市大)

目的 健康寿命の延伸要因の1つに適度な栄養摂取がある。日本では多様な配食サービスが普及しているものの、在宅高齢者の食生活は、家庭内で調理された食事が中心と予測される。高齢者の居宅生活において、ひとり暮らしが増加すると、高齢者が自立し、健康寿命を延ばすための栄養摂取が問題となると考えられる。そこで在宅高齢者の調理と生活の質に関する近年の研究動向を把握するために、研究論文をレビューした。

結果 研究デザインは、介入研究2件(食生活指導1件、調理実習および栄養教室1件)、横断研究6件(自記式質問紙調査2件、聞き取り調査3件、内閣府調査の2次データ利用1件)であった。健康状態が良好、女性、ひとり暮らしでは高齢者が自身が調理している割合が高く、要支援、要介護1・2対象者も調理を行っていた。一方、健康であっても男性は妻、女性は親族の同居で調理をしない傾向がみられた。食料品の買い物が困難な地域では、移動販売車や地域の食料品店、家庭菜園の収穫物が高齢者の調理、食生活を支える要因となっていた。

P-019
若年者における習慣朝食欠食者の特徴
○鶴部沙絵 (淑徳大)

目的 国民健康・栄養調査結果によると20歳代の朝食欠食率は他の年代に比べ最も高が、朝食欠食の定義として菓子類、飲料のみ摂取した場合も含まれている。朝食欠食の習慣は肥満と関連すると報告されている。しかし、その重要性に関する実験的検証は十分ではない。一方で、胎児期に低栄養状態にあった低出生体重児は、成人期以降に生活習慣病等の発症リスクが高いという報告があ り、その機構としてDNAメチル化などのエピジェネティクス制御が注目されている。葉酸は、生体内のメチル基転移反応に必須であるため、この制御に関わる栄養素と考えられる。そこで、本研究では、葉酸欠乏食を与えた雌マウスを妊娠させ、出生仔の成長と脂質代謝反応性について検討した。

結果 各群の母マウスの産仔数および仔の離乳時体重に差は認められなかった。一方、母親が葉酸欠乏であった仔に高脂肪食を摂取させた群では、母親が対照食であった場合に比べ、体重および脂肪組織重量の増加、肝臓脂質の蓄積亢進、肝臓における脂肪酸分解関連遺伝子の発現誘導の抑制が認められた。以上より、母親の葉酸欠乏状態が、出生仔の高脂肪食負荷に対する脂質代謝に影響を及ぼす可能性が示唆された。

P-020
妊娠および授乳期の葉酸欠乏が出生仔の脂質代謝に及ぼす影響
武島奈つ乃, 井沼瞳, 桑山ほのか, 井上裕康, ○中田理恵子 (奈良女大)

目的 妊娠期の葉酸欠乏により、新生児の神経管閉鎖障害のリスクが高まることが報告され、妊娠前からの葉酸摂取が推奨されている。しかしながら、その重要性に関する実験的検証は十分ではない。一方で、胎児期に低栄養状態にあった低出生体重児は、成人期以降に生活習慣病等の発症リスクが高いという報告があり、その機構としてDNAメチル化などのエピジェネティクス制御が注目されている。葉酸、生体内のメチル基転移反応に必須であるため、この制御に関わる栄養素と考えられる。そこで、本研究では、葉酸欠乏食を与えられた雌マウスを妊娠させ、出生仔の成長と脂質代謝反応性について検討した。

方法 妊娠前4週間から授乳終了時まで、葉酸欠乏食(葉酸0.07mg/kg diet)または対照食(葉酸4.07mg/kg diet)を摂取させた雌性マウスから生まれた出生仔(雄性)に、離乳後から高脂肪食または普通食を摂取させ、8週間後に各種解析を行った。

結果 各群の母マウスの産仔数および仔の離乳時体重に差は認められなかった。一方、母親が葉酸欠乏であった仔に高脂肪食を摂取させた群では、母親が対照食であった場合に比べ、体重および脂肪組織重量の増加、肝臓脂質の蓄積亢進、肝臓における脂肪酸分解関連遺伝子の発現誘導の抑制が認められた。以上より、母親の葉酸欠乏状態が、出生仔の高脂肪食負荷に対する脂質代謝に影響を及ぼす可能性が示唆された。
ポスター発表

**P-021** 小胞体ストレス応答に対するビタミンCの影響
○曾根保子, 山本彩矢, 小林詩歩, 中川理紗
(高崎健康福祉大学)

目的：タンパク質の立体構造の構築にはレドックス環境が重要であり、細胞内ではタンパク質の立体構造に有利なレドックス環境が厳密に制御されている。ビタミンCは、生体内で種々のレドックス反応に関与しているが、小胞体ストレス応答の発現態度におけるビタミンCの影響は明らかになっていない。そこで、本研究では疾患の予防的観点から、小胞体ストレス応答に対するビタミンCの影響について検討することとした。

方法：予めビタミンCを十分に取り込ませたHepG2細胞に小胞体ストレスを誘導させ、Western Blotting法により、小胞体ストレス応答因子のタンパク質発現レベルを解析した。

結果：ビタミンCをほとんど含まないHepG2細胞では、小胞体ストレスを惹起させることにより、小胞体ストレス応答遺伝子が著しく誘導された。

**P-022** ニホンジカ(Cervus nippon)角の有効利用方法の開発
○小木曽加奈1, 北村俊英2
(1長野県大, 2長野市農林部)

目的：マンシュウジカの角、特に雄のまだ角化していない、もしくはわずかに角化した幼角は鹿茸と呼ばれ漢方薬として珍重されている。鹿茸については心臓機能の回復作用、筋肉疲労回復作用、消化機能促進作用のほか、黄体化ホルモンやヒト成長因子すなわちインスリン様成長因子1（IGF-1）の存在が報告されている。一方、ニホンジカの角については現在、一部がクラフトなどに加工利用される以外は廃棄されており、その活用方法が待たれている。今回、ニホンジカの角について新たな活用方法を見出し、加工特性とIGF-1様活性を検討した。

方法：シカの角は長野市で2019年中に採取されたもので、使用されるまで-20℃で保管されていた。シカの角の比較対象として市販のブタとウシの骨を用いた。それぞれ乾燥粉末化したものをサンプルとした。IGF-1様活性についてはELISA kit(enzolifescience 社)を用いた。

結果・考察：ニホンジカの角はウシやブタの骨より簡易に粉末化ができることから、加工特性が優れていることがわかった。また、髄の割合が大きいほどIGF-1様活性が高いことが示唆された。

**P-023** 加熱した白花豆からのレクチンの精製とその性質
○畦五月1, 秋山純一2, 野中紘士3, 中田理恵子4
(1香川大, 2吉備国際大, 3奈良学園大, 4奈良女大)

目的：現在豆類は、粉末の状態で各種食品に添加され、水分の少ない状態で加熱され利用されている。Phaseolus vulgaris（イソゲン豆）に属する白花豆にはレクチンが含有されることが知られている。レクチンは多量では抗栄養作用を示すとされているが、本研究では加熱後も試料に残るレクチンに着目する。すなわち、加熱後の白花豆からレクチンを精製し、その生物学的な性質、特にレクチンの機能性に着目して研究した。

方法：豆を乾熱と湿熱の条件で加熱した後、含有されるレクチンをマウス赤血球凝集活性を指標にしてアフィニティーカラムにて精製した。マウス脾細胞を使用してマイトジェン活性を、さらにマウスB16メラノーマ細胞を使用して細胞増殖抑制効果を測定した。

結果：白花豆に含有されているレクチンは、湿熱及び乾熱の加熱条件での最大限可溶なレクチンと精製された。Phaseolus vulgaris（イソゲン豆）に属する白花豆にはレクチンが含有されることが知られている。レクチンは多量では抗栄養作用を示すとされているが、本研究では加熱後も試料に残るレクチンに着目する。すなわち、加熱後の白花豆からレクチンを精製し、その生物学的な性質、特にレクチンの機能性に着目して研究した。

方法：豆を乾熱と湿熱の条件で加熱した後、含有されるレクチンをマウス赤血球凝集活性を指標にしてアフィニティーカラムにて精製した。マウス脾細胞を使用してマイトジェン活性を、さらにマウスB16メラノーマ細胞を使用して細胞増殖抑制効果を測定した。

結果：白花豆に含有されているレクチンは、湿熱及び乾熱の加熱条件で最大限可溶なレクチンと精製された。Phaseolus vulgaris（イソゲン豆）に属する白花豆にはレクチンが含有されることが知られている。レクチンは多量では抗栄養作用を示すとされているが、本研究では加熱後も試料に残るレクチンに着目する。すなわち、加熱後の白花豆からレクチンを精製し、その生物学的な性質、特にレクチンの機能性に着目して研究した。

方法：豆を乾熱と湿熱の条件で加熱した後、含有されるレクチンをマウス赤血球凝集活性を指標にしてアフィニティーカラムにて精製した。マウス脾細胞を使用してマイトジェン活性を、さらにマウスB16メラノーマ細胞を使用して細胞増殖抑制効果を測定した。

結果：白花豆に含有されているレクチンは、湿熱及び乾熱の加熱条件で最大限可溶なレクチンと精製された。Phaseolus vulgaris（イソゲン豆）に属する白花豆にはレクチンが含有されることが知られている。レクチンは多量では抗栄養作用を示すとされているが、本研究では加熱後も試料に残るレクチンに着目する。すなわち、加熱後の白花豆からレクチンを精製し、その生物学的な性質、特にレクチンの機能性に着目して研究した。

方法：豆を乾熱と湿熱の条件で加熱した後、含有されるレクチンをマウス赤血球凝集活性を指標にしてアフィニティーカラムにて精製した。マウス脾細胞を使用してマイトジェン活性を、さらにマウスB16メラノーマ細胞を使用して細胞増殖抑制効果を測定した。

結果：白花豆に含有されているレクチンは、湿熱及び乾熱の加熱条件で最大限可溶なレクチンと精製された。Phaseolus vulgaris（イソゲン豆）に属する白花豆にはレクチンが含有されることが知られている。レクチンは多量では抗栄養作用を示すとされているが、本研究では加熱後も試料に残るレクチンに着目する。すなわち、加熱後の白花豆からレクチンを精製し、その生物学的な性質、特にレクチンの機能性に着目して研究した。

方法：豆を乾熱と湿熱の条件で加熱した後、含有されるレクチンをマウス赤血球凝集活性を指標にしてアフィニティーカラムにて精製した。マウス脾細胞を使用してマイトジェン活性を、さらにマウスB16メラノーマ細胞を使用して細胞増殖抑制効果を測定した。

結果：白花豆に含有されているレクチンは、湿熱及び乾熱の加熱条件で最大限可溶なレクチンと精製された。Phaseolus vulgaris（イソゲン豆）に属する白花豆にはレクチンが含有されることが知られている。レクチンは多量では抗栄養作用を示すとされているが、本研究では加熱後も試料に残るレクチンに着目する。すなわち、加熱後の白花豆からレクチンを精製し、その生物学的な性質、特にレクチンの機能性に着目して研究した。
**ポスター発表 5月31日（日）**

**P-025 植物種子抽出分画成分による時計遺伝子の活性化**
○岡田悦政1,岡田瑞恵2（愛知県大・院,1Yms Laboratory）

目的 植物種子抽出成分による時計遺伝子制御を目的に、Per1, Bmal, Sirt1の発現に影響を与える食用植物を検索した結果、特に、効果的な知見を得ている。（2015-2016家政学会）

方法 乾燥種子に水を加えてホモジネートし、湯煎にて加熱（10分間）、留澄して加熱（10分間）後留澄して熱水抽出サンプルとした。HPLC分画した。ヒト肺由来線維芽細胞TIG-1-20（PDL20）は調製培養後、サンプルを加え37℃、5% CO2条件下で4時間培養した。培養後、時計遺伝子Bmal1, Per1, Sirt1の活性化への影響をRT-PCRにて測定した。

**P-026 フキノトウによる時計遺伝子の転写因子への影響**
○岡田瑞恵1,岡田悦政2（1Yms Laboratory,2愛知県大・院）

目的 フキノトウの花蕾抽出成分（JBB）は、時計遺伝子およびその調節因子の発現に影響を与えた（2016報告）。本報告は、転写因子であるタンパク量へのJBBの影響を検討し、さらに、既に報告した関連遺伝子との関係を検討することを目的とした。

方法 JBBはメタノール抽出し、dry-up後DMSOにより溶解後、1/10,1/100の濃度調製し、比較物質として10μMスルフォラファン（Sulf）、100μMレスベラトロール（Res）と同様に0.22μmフィルター処理をした。線維芽細胞TIG-1-20（若齢）,TIG-1-60（老齢）は同調培養後、サンプル、Sulf, Resをそれぞれ加え37℃、5% CO2条件下で4時間培養した。タンパク量はELISA法により測定した。

結果 若齢と比較して、若齢の値の方が高いことから細胞感受性の違いが示された。若齢の場合、BMAL1は100μM Sulfがコントロールの7.52倍、JBBが7.34倍とほぼ同様な値が示され、PER1は1/100JBBが2.77倍、SIRT1は100μM Resが1.38倍と最も高い値であった。老齢の場合、BMAL1は10μM Sulfがコントロールの2.10倍、PER1は100μM Sulfが1.92倍、SIRT1は1.06倍を示した。また、いくつかの遺伝子間関係が認められた。

**P-027 緑茶の製法による呈味成分の比較と脳波に及ぼす影響**
○海老塚広子,藤本智子,代島実佳,前島菜月（東京家政大）

目的 茶の起源は諸説あるが、中国では薬として考えられており、2000年以上前から飲用されている。本研究では緑茶の中でも製法の異なる煎茶,釜炒り茶,玉露の3種類を用いて成分の特徴について比較し、煎茶を飲用した際の脳波に及ぼす影響について検討した。

方法 日本食品標準成分表の浸出方法を基準として、煎茶,釜炒り茶,玉露の茶葉より浸出液を得た。遊離アミノ酸,アスコルビン酸,タンニン,カフェインおよびカテキン類の定量を実施した。脳波に及ぼす影響についての実験協力者は、21~22歳の女性12名であった。ミューズブレインシステム（株式会社デジタルメディック）により、オドボール課題を用いて事象関連電位の計測により脳波への影響を測定した。

結果 遊離アミノ酸の中で多く含有されているものは、テアニン、アスパラギン酸、アルギニンなどであり、テアニンの占める割合は53-55%程度であった。遊離アミノ酸濃度は、玉露において有意に高値であることが認められた。アスコルビン酸濃度は煎茶において有意に高値を示した。カフェイン、カテキン類については玉露が高値を示し、釜炒り茶、煎茶の順であった。脳波の計測では、水、煎茶、香吉の解析結果について比較するとき、煎茶を摂取した時に、振幅と潜時よりリラックス効果が認められた例もあった。しかしながら、個人によるパラッキがあり、今後詳細な検討が必要である。

**P-028 米麹の種類が麹甘酒の成分および食嗜好性に及ぼす影響**
○鈴木絢子,村上陽子（静岡大）

目的 我が国の食文化は、微生物を利用した発酵食品によって支えられている。甘酒には、米麹を用いるものと、酒粕を用いるもの2種類に大別される。米と米麹で作る甘酒（麹甘酒）はアルコール分を含まないため、老若男女すべての世代で飲用できる。また、自然な甘味を呈するために、甘酒として飲用する以外に、砂糖やみりんなどに代わる調味料としての活用も期待できる。近年、麹甘酒は、栄養効果の高さから注目を集めているが、その調製方法は経験の必要が高い。材料の一つである麹は、原料や製法により様々なが、甘酒の成分組成や嗜好性に及ぼす影響については殆ど検討されていない。そこで本研究では、麹甘酒の種類が麹甘酒の成分および食嗜好性に及ぼす影響について検討した。

方法 材料として、市販の米麹を用いた。精白米（うるち米）を洗米・吸水後、炊飯器にて粥状に炊き、水および米麹を加えてよく混合し、60℃で麹甘酒を調製した。試料の糖度,マルトース濃度などについて経時的に測定した。食嗜好性は、大学生を対象に官能評価を行った。

結果 乾燥麹と生麹を比較した結果、乾燥麹を用いた甘酒の方が生成糖量は有意に高かった。また、麹の種類によって、甘酒の各種成分に相違がみられた。これは、米麹に含まれるアミラーゼなどの糖化酵素活性（糖化力）の相違によるものである。食嗜好性は、大学生活を対象に官能評価を行った。
P-029 台湾産鶏皮蛋と家鴨皮蛋の成分の違い
小泉昌子1, 工藤美奈子1, 峯木真知子2
（1新渡戸文化短期大学、2東京家政大学）

目的 皮蛋は、アルカリによるタンパク質の凝固性を利用し、中国独特の家鴨卵の貯蔵加工品である。そして皮蛋は、卵白の表面に肉眼で観察できる「松花」と呼ばれる白い結晶がある。これは、アミノ酸の結晶であるとされてきたが、その根拠はなく、成分も明らかでない。そこで本研究の目的は、この白い結晶の成分を明らかにすることとした。また近年、鶏の卵を用いた皮蛋も開発されており、この皮蛋にも「松花」が確認されることがから、家鴨・鶏の卵を用いた皮蛋についても検討した。

方法 皮蛋は2種で、国内で販売されている家鴨の卵で作られた皮蛋(D試料)、海外で販売されている鶏の卵で作られた皮蛋(H試料)を用いた。卵白の成分は、一般成分分析、アミノ酸分析を行った。卵白結晶の成分は、電子顕微鏡による元素分析により測定し、卵白表面の結晶有部分と結晶無部分の2か所について元素割合を比較した。

結果 卵白の一般成分において、H試料はD試料に比較して、炭水化物量・K量が低く、ナトリウム量が高かった。アミノ酸分析では、H試料がD試料に比較して、Phe,Met,Glu,Ser,Thrが低かった。電子顕微鏡による元素分析は、H・D試料ともに、O,Mg,P,K,Caにおいて、「結晶有>結晶無」であった。また、「結晶有<結晶無」であった成分は、C,Si,Nであった。このことから、皮蛋の卵白結晶の成分は、ミネラル成分である可能性が高いと考えられる。

P-030 異なる培地組成で培養した黒酵母 Aureobasidium pullulans 由来多糖についての基礎的研究
○川崎祐子, 風見早紀, 山崎南々帆, 宗宮奈々
（同志社女大学）

目的 黒酵母は二形性を有する真菌で、α-、β-グルカンを生産し菌体外に分泌する。黒酵母由来β-グルカンは増粘多糖類として食品添加物に指定されるほか、免疫賦活作用、がん抑制作用などの効果を期待して健康食品として市販されるが、製造方法の詳細はほとんど公開されていない。そこで、異なる培地組成で黒酵母を培養して得られる多糖の基礎的な研究を行った。

方法 菌株は A. pullulans NBRC6353を使用し、フラクトオリゴ糖生産(FOS)培地または改変ポテトデキストロースブロス培地(PDA)を用いた。25℃で72時間培養後に殺菌、遠心分離した上清を1倍、2倍、5倍量エタノール(Et-OH)で沈殿させ凍結乾燥して粗多糖を得、各試料中のα-、β-グルカン量を測定した。また、FOS培地1倍、5倍Et-OH試料のおよそ分子量をHPLC法で分析した。

結果 粗多糖は両培地とも高分子(1倍Et-OH)試料が最も多かったが、改変PDA培地は全体に生産量が少なく、1倍Et-OH試料のβ-グルカン量はFOS培地963mg/L、改変PDA培地198mg/Lであった。FOS培地の粗多糖の分子量ピークは主に約240000と約720で、酵素的にα-体を分解しβ-体のみにした1倍Et-OH試料の分子量ピークは約43000であった。

なお、本研究の一部は2018年度同志社女子大学研究助成金（個人研究）により行われた。

P-031 古代小麦の製パン性とタンパク質の挙動
○池田昌代, 秋山聡子, 鈴野弘子
（東京農大）

目的 古代小麦とは普通小麦の原種にあたり品種改良されていない小麦を指す。普通小麦と比べ食物繊維が多く、低GI食品であることが知られている。一部の古代小麦はアレルギー発症率が低いことが報告されていることから、本研究では古代小麦の製パン性とタンパク質の挙動について検討した。

方法 試料は古代小麦としてスペルト小麦粉及びデュラム小麦粉（株）富澤商店、対照として普通小麦粉（カメリヤ、日清製粉株）を用い、ホームベーカリーでパンを調製し、比容積、気孔率、破断強度測定、色彩色差測定、官能評価を行った。また各小麦粉及びパンからタンパク質を抽出し電気泳動を行った。

結果 普通小麦パンに比べスペルト小麦パンの気孔率は有意に高かった。内相の破断荷重は、焼成後24時間でいずれの試料にも有意差は見られなかったが、焼成後72時間ではデュラム小麦パンの破断荷重は有意に高かった。分析型官能評価では、パンの表皮及び内相の「色」は普通小麦パンの方が薄いと評価されたが、「小麦の香り」、「硬さ」、「弾力」、「しっとり感」の項目では有意差が見られなかった。塩可溶性タンパク質の電気泳動では、いずれの小麦粉でもAcyl-CoA oxidaseと見られる27KDaのバンドが明確に確認できたが、製パン後にはスペルト小麦パン、デュラム小麦パン共に薄くなっていった。

P-032 酵母の違いがパンの品質に与える影響
○山田密穂, 小泉昌子, 峰木真知子
（東京家政大学）

目的 天然酵母パンは、通常のイーストを使用したパンよりも「自然な」「美味しい」というイメージがあるが、それらの風味や食感を比較した研究は少ない。さらに、酵母の違いがパンの品質に与える影響に関する研究も少ない。そこで、インスタンクトライイースト（以下D）と、白山こだま酵母（以下S）、ホシノ天然酵母パン種（以下H）の特性を明らかにすることを目的として今回はブリオッシュ生地に使用した。

方法 モデル実験は、各酵母の発酵をみるために、いずれも2.0%を用いたドウを調製し、36℃の恒温器で120〜240分発酵させて、その体積を測定した。ブリオッシュについては、強力粉、無塩バター、全卵、卵白、酵母3種、水、食塩を用いて調製した。焼成はホームベーカリーを用い、体積・重量・比容積・水分含有率・テクスチャーを測定した。

結果 モデル実験における発酵体積はD試料が最も大きかった。S試料は発酵速度が速かったが、発酵経過時間が100分において、D試料と同様の発酵体積であった。H試料の発酵体積は、他2試料に比べてかなり低かった。焼成したブリオッシュでは、比容積および体積はD試料が5.15、2001.5cm³で最も大きく、S試料>H試料の順であった。ブリオッシュのかたさにおいては、D試料で低く、S試料およびH試料で高かった。凝集性はD試料およびS試料で高く、H試料で低かった。それらの違いは、がしりが違った。

59
P-033 自作センサを用いたさつまいもグルコース変動のモニタリング
○日比香子（国学院大学樹木短大）
目的 さつまいもは60℃程度で加熱するとデンプンを糖化する酵素が働いて甘味が増す。この性質により甘味を最大限に引き出す調理法が求められてきた。調理法の模索に役立つと思われる。しかし、加熱調理過程におけるグルコース量の変動をリアルタイムでモニタリングすることは難しかった。そこで、自作でセンサを作成し加熱調理の違いによるグルコース変動のモニタリングを試みた。
方法 金線と銀／塩化銀を使用したセンサを作成した。センサにポテンショスタットにて650mVの電圧を印加することによりグルコースを分解させた。その際に放出する電子量をとらえ、これをグルコース量に変換した。この原理によりグルコース水溶液やさつまいも片のグルコース量の測定を行った。
結果 作成したセンサを用い、グルコース水溶液の測定を行ったところ、グルコース量に応じた応答を得ることが出来た。そこで、さつまいも片にセンサを差し込み、水中に入れ75℃まで加熱を試みたところ、加熱に応じてグルコース量も増加することが確認できた。さらに、さつまいも片にセンサを差し込み異なる加熱調理法での測定も試みたところ、調理法によるグルコース量の違いを確認できた。

P-034 麦飯の物性に及ぼす保存条件の影響
○露保美夏、柿崎礼香（東洋大）
目的 近年、大麦の健康機能への関心が高まっており研究が進められているが、炊飯後の保存に伴う物性変化の評価は明らかにされていない。本研究では、大麦と玄米大麦（以下、玄米大麦）の炊飯温度、保存条件による物性変化や食味に関して明らかにすることを目的とした。
方法 大麦と玄米大麦をそれぞれ単独炊飯および混炊飯したものについて（加水比：玄米大麦1.5倍、玄米大麦1.8倍）、保存温度を室温、冷蔵庫、冷凍庫で行った。測定項目は外観、物性、水分とし、官能評価は炊飯直後の試料及び混炊飯を基準に室温、冷蔵、冷凍保存した保存したものについて行った。
結果 外観では、いずれの試料においても保存条件、放置時間によった見た目や色の変化は見られなかった。炊飯後の麦飯粒内部の硬さは、保存条件、放置時間の変化に伴う変化が確認された。水分は、炊飯直後、保存開始時に玄米大麦で高かったが、保存中に肉眼で確認できる変化は見られなかった。官能評価では、炊飯直後の試料及び混炊飯を基準に、保存条件、放置時間の影響が観察された。また、混炊飯の炊飯直後、保存開始時の官能評価で、炊飯後の食味は玄米大麦で高かったが、保存中に変化は少なかった。これより、炊飯後の保存条件により、炊飯後の保存条件、保存方法によって、食味の変化が見られ、保存条件により、炊飯後の保存条件、保存方法によって、食味の変化が見られ、保存方法が有効に高かった。
P-037 切断操作がニンジンの細胞壁成分と加熱後の物性に及ぼす影響
○森口か奈子, 佐藤瑞子, 香西みどり
（お茶の水女大）

目的 野菜の切断に伴う植物の傷害応答が加熱後の物性に及ぼす影響についての報告は少ない。本研究では、切断が加熱後の物性にどのような影響を与えるのかを調べ、さらに物性変化と細胞壁成分の関係を把握することを目的とした。

方法 ニンジンを5mm角と3cm角に切断し、24時間まで放置し、試料とした。試料を沸騰水中で加熱した際の硬さ及び試料の総フェノール量、ヒドロキシプロリン量、ペクチンのエステル化度を測定した。また、試料のベクチンを3つずつの溶液で抽出し、各区分に含まれるガラクツロン酸量を測定した。さらに、Caを存在形態別に分画した。

結果 いずれの放置時間でも、5mm角と3cm角外側試料の硬さは、加熱5分以降は同程度であり、5mm角の軟化が抑制され、体積当たりの表面積の割合が大きいことが加熱後の硬さに関与すると考えられた。総フェノール量、ヒドロキシプロリン量、エステル化度には、放置時間や形状による違いはなかったが、ペクチンの分画では、放置時間によらず5mm角は3cm角よりもペクチンとヘミセルロースなどの細胞壁成分との結合が関与する区分の量が多かった。Caを存在形態別に分画したところ、放置時間に伴って遊離のCaイオンを含む画分が減少し、放置時間を通して3cm角よりも5mm角の方が少なく、他の物質と結合したと考えられた。

P-038 水の硬度がじゃがいもの水煮に及ぼす影響—食塩添加の場合—
○鈴野弘子, 秋山聡子, 池田昌代
（東京農大）

目的 近年、硬度の異なるミネラルウォーターが出回り、炊飯や煮込み料理などの調理にも利用されている。演者らは、調理の際、水の硬度が調理素材の硬度や味、成分の溶出などに影響を及ぼすことを明らかにしてきた。しかし、これらの報告は、実際の料理の調製に必要な調味料等の添加を行っていない。そこで本研究では、異なる硬度の水で煮る際に、食塩の添加がじゃがいものの硬さとミネラル含有量に与える影響を検討した。

方法 1) 試料: じゃがいも(北海道産、男爵)、食塩(NaCl)。試料水: 南アルプス天然水(硬度30mg/L)、エビアン(304)、コントレックス(1468)、純水。2) 測定: じゃがいもは、直径1cm、高さ1cmに切り、1%食塩添加の試料水で所定の時間加熱した。煮熟後のじゃがいもについて、レオナー(山電製)を用いて破断強度、原子吸光光度法にてミネラル含有量を測定した。

結果 破断応力は、コントレックスでは食塩添加による差はなかったが、他の試料水では食塩添加が無添加より有意に小さかった。Na含有量は、いずれの食塩添加試料水の間で有意差が認められなかったため、水の硬度が異なってもNaの浸透には影響はないと考えられた。Ca含有量は、エビアンでのみ食塩添加の方が無添加より有意に低くなった。300mg/L程度の硬度では食塩の存在によってCaの吸着が抑制された。K含有量は純水以外で、Mg含有量はすべての試料水で食塩添加と無添加に有意な差はなかった。

P-039 野菜の過度の加熱による性状変化に関する研究
○田中萌々子, 土田美登世, 佐藤瑞子, 香西みどり
（お茶の水女大）

目的 野菜の煮熟による軟化はペクチンのβ脱離によって起こることが報告されている。植物細胞壁は高分子多糖類どうしが水素結合等で連結した複雑なマトリックス構造をとるが、適度な軟化を越える過度の加熱における構造変化については不明でない。本研究では、加熱による細胞壁構造の変化を把握するため、過度の加熱を行った際の野菜の性状変化を体系的に明らかにすることを目的とした。

方法 直径3.4cm、高さ3.2cmの円柱に成型したダイコンを試料とし、RO水をともに100℃および圧力鍋を用いた117℃で最長180分間まで加熱した。試料の硬さ、上面から一定荷重(0.2~0.8N/cm²)で圧縮した際の歪率および離水率、水平方向の摺動によるずり変形を測定し、ペクチン量の変化も調べた。共焦点レーザー顕微鏡を用いて細胞壁の観察を行った。

結果 117℃加熱の試料の硬さは17分で適度となり、30分以降の変化は小さくなった。180分間加熱では100℃と117℃は同程度であった。一方、歪率や離水率、ずり変形は117℃加熱では30分以降も増加し、特に離水率は100℃加熱の約2倍であった。ベクチンの溶出は117℃加熱試料で大きく、顕微鏡観察では117℃30分以降の加熱において細胞壁間隔の構造が不明瞭であった。以上より、野菜の過度の加熱では細胞壁のマトリックス構造が崩れ、細胞壁が疎構造化したと推定され、100℃加熱と異なる性状をもたらしたといえる。

P-040 真空調理法と植物酵素による豚肉の軟化—高齢者と若年者の官能評価による検討—
○佐藤清香1,2, 田村朝子3, 木下伊規子2
(1愛国学園短大, 2共立女大, 3新潟県大)

目的 特定給食施設において、低温スチーミングを活用し、肉らしさと軟らかさを併せ持つ豚肉の調製方法を開発することを最終目的とし、本研究では、施設利用の高齢者と若年者に対して官能評価を実施し、低温スチーミングによる豚肉の肉質の特徴を明らかにすることを目的とした。

方法 試料には豚ロース肉を用い、キウイフルーツ粗酵素液での浸漬時間と加熱時間を変更し、破断強度測定によって肉質の軟化効果の高かった3種類: 酵素浸漬なし・15時間加熱(V0-15)、浸漬9時間・加熱13時間(A9-13)、浸漬12時間・加熱7時間(A12-7)を官能評価の試料とした。官能評価は高齢者(83.5±9.0歳)21名、若年者(22.0±0.2歳)21名を評価パネルとし、順位法により実施した。

結果 試料の破断応力は、V0-15が13.07±3.45(×10^5N/㎡)、A9-13が6.21±2.12(×10^5N/㎡)、A12-7が8.22±2.55(×10^5N/㎡)であった。分析型評価では、若年者は「味」、「硬さ」、「印象」でV0-15に対しA9-13、A12-7で有意差が得られ、V0-15が1位であった。「残留感」はV0-15に対しA9-13、A12-7で有意差が得られたが、1位はA9-13であった。高齢者は「硬さ」で若年者と同様にV0-15が1位であった。「飲み込みやすさ」では、V0-15に対しA12-7で有意差が得られ、A12-7が1位であった。
P-041 コマツナの低温スチーム加熱がアスコルビン酸代謝におよぼす影響
○後藤昌弘1, 岩田惠美子2（1神戸女大, 2滋賀大）

目的 前報でコマツナを低温スチーム加熱した場合、アスコルビン酸含量が増加することを報告したが、そのメカニズムを明らかにするためにコマツナを外葉と内葉及び葉身部と葉柄部に分け、60℃と70℃の低温スチーム加熱で各々5〜15分加熱し、部位別にアスコルビン酸及び還元糖含量の変化を調査した。

方法 コマツナ（兵庫県産）は仲卸業者から購入し、外葉部と内葉部に分けてスチームコンベクションオーブン（ニチワ電機製 SCOS-4RS）で加熱し、葉身部と葉柄部について、それぞれ加熱前と加熱5, 10, 15分の各々のアスコルビン酸含量（HPLC法）及び還元糖含量（ソモギ・ネルソン法）を測定した。

結果 アスコルビン酸含量は、内葉部の60℃加熱では加熱前と比べて加熱5分で大幅に減少し、加熱10, 15分では加熱5分より増加した。しかし、70℃加熱では加熱前と比べて有意な変化はなかった。還元糖含量は60℃、70℃加熱共に5分で加熱前よりも減少し、5分から15分の間で変化はなかった。また、60℃と70℃を比較するといずれの場合でも70℃のアスコルビン酸含量が高かった。葉身部では60℃加熱の外葉、内葉とも加熱5分と比べ10, 15分の含量が増加する傾向にあった。葉身部の70℃加熱では60℃に比べて含量が高かった。葉柄部では加熱前、加熱5分及び加熱10, 15分の間に変化はなかった。

P-042 低温スチーム加熱を用いて調製した米食品の物性に及ぼす米粉のアミロース含量の影響
○村松晴子, 舟木愛美, 藤井恵子（日本女大）

目的 米の消費拡大に繋がる米粉の特性を把握するため、アミロース含量及び調製方法の違いが米粉食品の物性に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

方法 試料に高アミロース米ともち米の米粉を使用して配合割合を100:0, 75:25, 50:50, 25:75, 0:100とし、35℃の水とベーキングパウダーを加えて以下の加熱条件で加熱して米粉食品試料を調製した。すなわち130℃で20分のスチーム加熱、70℃で10分加熱後130℃で10分のスチーム加熱、60℃の温水を加水して70℃で10分加熱後130℃で10分のスチーム加熱の3パターンとした。調製した試料をブレッドミルで急速冷凍した後3日間冷凍保存し、解凍したものについてテクスチャー特性、破断特性、比容積、水分含量を測定した。

結果 米食品試料の比容積はいずれもアミロース含量が高くなるほど大きくなり、初期弾性率も増加した。40%圧縮時応力は高アミロース米を50%以上添加すると顕著に増大した。一方、凝集性は減少した。米粉食品試料のテクスチャー特性の硬さについては、130℃20分加熱試料に比べ70℃10分130℃10分加熱試料で全体的に水分含量が増え、軟らかいテクスチャーの試料となったが、高アミロース米の試料では顕著な違いはみられなかった。もち米100%の試料は130℃20分と比較して70℃10分130℃10分では比容積は小さくなった。

P-043 乳酸菌が異なるヨーグルトの力学的特徴と女子学生の嗜好性
○小出あつみ, 間宮貴代子, 山中なつみ（名古屋女大）

目的 本研究は製造法と乳酸菌が異なるヨーグルト（Y）の力学的特徴と嗜好性を検討し、特徴を活かした料理提案を行った。

方法 試料は明治ブルガリアY（Br）、ナチュレ恵プレーンY（Me）、小岩井生乳100%Y（Ko）、カスピ海Y（Ca）である。ヨーグルトの離水率、色調、テクスチャーを測定した。官能評価は分析型評価を採点法で、嗜好型評価を順位法で行った。結果は多重比較検定（Tukey-Kramer）とNewell&MacFalanで解析し、統計的有意水準を5%とした。

結果 離水はMEとBrに認められ、MEで値が高かった。色調はKoとCaが有意にBrとMeより明度が高く黄色みが薄かったが、赤みはMeが最も薄かった。テクスチャーは、Br＞Me＞Ko＞Caの順番に硬度が強かった。凝集性は、Me＞Ko＞Ca＞Brの順番に強かった。官能評価の採点法では、色調に差はなく、Koの香りが最も強く、软らかく、滑らかで、味と酸味が薄いために評価された。総合ではBrが最も悪いと評価された。順位法では色調、香り、滑らさ、味、酸味、総合で、KoとCaが好まれた。よって、ハードタイプのBrの特徴（硬い・強い酸味）とソフトタイプのKoの特徴（軟らか・滑らか・酸味が弱い）を活かした料理を3品提案した。また、脱脂粉乳が添加されたヨーグルトの色は黄色が濃く、長期熟成で前発酵のヨーグルトは離水せず、軟らかく、滑らかであった。

P-044 かつお昆布を用いた天然だしと市販顆粒だしの相異
○岡本洋子1, 多山賢二1, 吉田恵子2（1広島修道大, 2つくば国際大）

目的 日本のだしの代表素材である、かつお節と昆布を用いただしについては好ましく受容できることが重要であると考え、「かつお昆布を用いた手作り天然だし」ならびに「市販だし」を用いた調理食品を調製し、識別と嗜好性を調べ、さらに成分分析を行い、考察を加えた。

方法 健康な女子学生32-41名を評価者として、「天然だし試料」と「市販だし試料」を調製し、3点識別嗜好試験法による官能評価を行った。2種のだしについて、遊離アミノ酸20種類および核酸系物質7化合物を、それぞれ、アミノ酸自動分析機、高速液体クロマトグラフィ装置によって定量した。

結果 2種のだしを用いた14試料について、天然だしと市販だしを有意に識別できた（p<0.01）。また、天然だしと市販だしの嗜好性に有意差がみられ（p<0.01）。天然だしが好まれる食品群と市販だしが好まれる食品群に分類された。液状に調理される食品では天然だしが好まれ、固体系に調理される食品は市販だしが好まれる傾向を示した。天然だしでは、アスパラギン酸、グルタミン酸、アラニン、ヒスチジン、イノシン、アイシン、アデノシン−リリン酸等の成分を含んでおり、低濃度であるが、多種類にわたっていた。市販だしでは、グルタミン酸、ヒスチジン、アイシンの3成分を中心に含んでおり、高濃度であった。2種のだしは、顕著に呈味成分の組成が異なり、これが識別と嗜好性に影響を与えたのではないかと考えた。
P-045 長崎県（対馬）産乾ししいたけだしの呈味特性と嗜好性
○富永美穂子1, 名嘉真千怜2, 湯浅正洋2（広島大, 長崎県大）

目的 乾ししいたけは仏の肉厚い冬菇と薄い香信の2種類がある。乾ししいたけ産地として長崎県では対馬が挙げられるが、全国的には知られておらず、だしの成分を含め、その特徴を明らかにした報告はほとんどないとされている。乾ししいたけについて、加熱の有無、産地、種類別に呈味成分、味覚応答の分析を行い、官能評価により嗜好性を評価した。

方法 対馬および大分県産乾し冬菇および香信しいたけ6種を用い、重量が2%になるように超純水を加え、5℃で8時間浸漬した。これらを濾過したものを「非加熱」、浸漬後に加熱濾過したものを「加熱」として測定に供した。呈味成分に関わる核酸、遊離アミノ酸をUFLC、糖類を測定用キット、旨味、苦味などの味覚応答を味認識装置により分析した。対馬、大分産冬菇、香信4種の「加熱」だしおよび塩分濃度0.8%に調整しただしの嗜好性を評価した。

結果 産地、種類に関わらず全てのだしこの加熱により5'-グアニル酸量が増加し、大分産の方が多い傾向にあった。だしの加熱前後で遊離アミノ酸量に大きな差はみられなかったが、種類、産地により検出アミノ酸量の傾向が異なるとともに味覚応答も異なった。産地に関わらず、香信系のだしは冬菇系よりも香りや後味が強く、濃色で総合評価が高い傾向にあったが、調味料を添加し、塩分濃度を統一すると種類、産地に関わらず嗜好性の差はほとんどみられなくなった。

P-046 まぐろ節だしの調製方法および食味特性
○小泉昌子、池田壽文、峯木眞知子（東京家政大）

目的 まぐろ節は、欧米において昆布のオーシャン臭やかつお節の生臭さのため、敬遠されることが少なくない。そこで本研究では、現在料亭で高級食材として使われるまぐろ節に着目した。まぐろ節を用いた調製方法に関する報告はなく、食味特性についても明らかでない。

方法 まぐろ節、かつお節、昆布3種を用い、だしの調製には、まぐろ節、かつお節、昆布を用いた。だしの種類は、まぐろ節(T試料)、まぐろ節とかつお節(TB試料)、昆布とまぐろ節との混合(KT試料)の3種とした。T、TB試料およびKT試料は、沸騰で0、0.5、1、2分加熱した後3分静置の有無、80℃で1、2分加熱、25℃で10、30分浸漬、5℃で10、30分浸漬の条件で調製した。KT試料では、昆布を25℃の水に30分浸漬した後、先述した加熱条件で調製した。各だしの味は、酸味としてpH、塩味として塩分濃度、うま味としてイノシン酸量(HPLC法)を測定した。

結果 まぐろ節T試料のpHは、沸騰0分静置有の試料で5.4と低く、他の調製条件の試料では差がなかった。イノシン酸量は、参考としたかつお節だし沸騰1分静置有の試料に比較して、すべてのT試料において、約2倍の値を示した。TB試料のpHおよび塩分濃度は、調製条件の違いにより、差はなかった。KT試料では、塩分が高く、イノシン酸量が多かったことがわかった。

P-047 スターター添加した調理済み野菜における黄色ブドウ球菌の消長と毒素産生の有無
○小西大喜1、村松芳多子1、佐藤琴和2、青木友香1、神戸美恵子2、高梨美穂1、綾部園子1（高崎健康福祉大、桐生大）

目的 学校給食は「学校給食衛生管理基準」に基づき、二次汚染の観点から野菜類の使用は原則として加熱調理することとされているが、野菜類を用いた献立を原因とする集団食中毒事案は発生し続けている。そこで本研究は、学校給食をより安全に提供するための基礎資料となるように、二次汚染を想定した場合の食中毒菌の消長および毒素産生について検討した。

方法 平成30年度本学給食経営管理実習で大量調理された16献立の副菜を用いた。調理後の副菜（スターター無添加）および調理直後に黄色ブドウ球菌をスターターとして添加した副菜を試料とした。スターター添加試料は、3温度条件（5℃、5℃→30℃、30℃）で2.5時間保存し、一般生菌数および大腸菌群数、黄色ブドウ球菌数を混釈平板法により測定した。また、16献立の副菜および生食頻度の高い野菜（キャベツ、レタス、きゅうり）において、黄色ブドウ球菌を添加した場合のエントロトキシン産生の有無を検討した。

結果 生菌数は、スターター無添加、添加はそれぞれ<2.4～3.4log CFU/g、<2.4～6.9log CFU/gの範囲にあり、保存温度による影響に一定の傾向はみられず、さらに黄色ブドウ球菌の毒素産生ても確認できなかった。このことから、調理後においに呈味成分、衛生管理に必要な増殖抑制成分を含むことがわかった。表示基準の調理時間2.5時間、保存時間が2.5時間の試験で、いずれの試料においても、テストトキシン産生が確認されなかった。官能評価においても、いずれの試料も飲み込みやすく、食べやすかった。この結果から、今回の試験に用いた材料は、学校給食として活用できると考えられた。
P-049 調理実習履修前後の学生の調理に関する意識の比較（第2報）
○伊藤有紀,三宅紀子（東京家政学院大学）

目的 食の外部化など食生活の変化とともに家庭での調理頻度は減少している。その中で学校教育における調理実習は新たな観点を有し、体系的に学べる数少ない機会である。調理実習の効果を明らかにするため、実習を通した調理に関する意識の変化について昨年の日本調理科学会で報告した。本研究では、主観的評価のみならず、客観的評価も加えて検討することを目的とした。

方法 令和元年度に本学現代家政学科の調理学実習の履修者90人を対象に自記式質問紙調査を行った。1回180分、15回の実習の履修前後の2回行い、回答を比較した。質問項目は、①居住形態などの他、調理頻度、調理の好き嫌い、調理に対する得意・苦手意識などの項目②調理や食事作りに対する考え方に関して、食材の切り方など22項目③調理技術として、炊飯など18の料理とした。さらに履修後に調理の知識定着度テスト（真偽法25問）を実施した。

結果 調理頻度は履修後が有意に高く、調理に対して履修前よりも得意意識を持つ傾向があることがわかった。自己評価や調理に関する考え方では、食材の切り方や段取りなど15項目で履修後の方が評価が高く、18中17の料理で、履修後の方がより調理ができると捉えていた。食事つくりに対する考え方と調理の知識定着度との関連についても、献立構成、理論などの12項目について差が認められた。調理実習を通じて調理に対する意識が全体として高くなったことが示唆された。

P-050 ご飯茶碗の内側の染付絵柄が飯のおいしさに与える影響
○川嶋比野1,数野千恵子2（1戸板女短大,2実践女大）

目的 食は食べている時に見えているご飯茶碗の内側の染付絵柄の違いが、白米や味付きご飯をおいしく見せ、食欲を増進するのかについてアンケート調査を行った。

方法 茶碗の絵柄は特徴の異なる①絵柄無しの白茶碗（以下白茶碗）②絵柄は無く縁に青枠のみの茶碗（以下青枠）③伝統的な網柄の茶碗（以下網）および④十草柄の茶碗（以下十草）⑤帯状の線で囲われた絵柄のある茶碗（以下線入り帯）⑥帯状に花柄の絵柄のある茶碗（以下花柄帯）とした。飯は家庭や給食で喫食頻度が高い白飯および塩味の味付きご飯としてわかめご飯、しょうゆ味の味付きご飯として五目ご飯を盛り付けた。女子大生（71名〜88名）を対象に、白茶碗を基準の0として、どの程度「食欲を感じたか」、-3〜+3の7点評点法で集計した。

結果 最も食欲を増進したのはいずれの飯でも花柄帯であり、網および青枠との間には常に有意差がみられた。網と青枠以外の絵柄では、いずれの飯でも評点がプラスの数値であったことから、ご飯茶碗の内側に飯を囲うように、白色と青色のコントラストがはっきりとした染付の絵柄が描かれていると食欲を増進することがわかった。一方、全体的に白飯は味付きご飯よりも評点平均値が低かったことから、白飯の方が白茶碗に対する絵柄付き茶碗の食欲増進効果が小さい可能性が示唆された。

P-051 練り切り（和菓子）の色彩構成が季節感に及ぼす影響
○村上陽子（静岡大）

目的 和菓子は我が国の伝統的な菓子である。和菓子は、材料や製法、使用道具などによって様々に分類され、種類により、味、色、形状、テクスチャーなどが異なる。練り切りは上生菓子の一つであり、茶席の菓子として用いられる。練り切りは、色彩の美しさや造形の多様性を特徴とし、季節感を繊細に表現することから、我が国の重要な食文化である。本研究では、練り切りの色彩が食嗜好性に及ぼす影響を検討し、発達段階や性別に関わらず共通して嗜好性の高さがあること、一方で、発達段階や性別によって異なる嗜好性を示す色彩があることを報告してきた。本研究では、練り切りの色彩構成が着目し、練り切りの色彩構成が季節感に及ぼす影響について検討した。

方法 各色相について色調（明度と彩度：トーン）の異なる練り切りを作成し、実際に見てもらい、感じる季節を「春」「夏」「秋」「冬」、「季節を感じない」の中から1つ選択してもらった。色相系列は6段階とし、着色には天然色素と合成着色料を用いた。色のトーンは色彩色差計により、L*a*b*値を計測した。調査対象は、静岡大学教育学部学生とした。

結果 同じ色相であっても、色相系列や着色料の種類によって、季節感の感じ方に相違が見られた。黄色は合成着色料よりも天然色素の方が「秋」を感じる割合が高く、濃いトーンでは過半数を超えている。練り切りは、色相のみならず、トーンによって季節感を多様に表現していることが示唆された。
P-053 古代史料に見える生鮭の保存性II
○西念幸江1, 吉村香子1, 宮田美里1, 大道公秀5, 五百藏良1, 三舟隆之1
(1東京医疗保健大, 2奈良文化財研)
目的 平城宮跡出土木簡や『延喜式』などの史料には、「鮮鮭」、「生鮭」の記載が見られ、生の魚が都に貢進されていたことが判明している。運搬に最も日数がかかっているのは伯耆国の13日間であったが、どのように保管・運搬していたか、史料では明らかではない。
これまで、塩やワサビの添加など各条件で処理した鮭の保存性を検討したが、個体差などの影響が大きかった。そこで試料数を増やして検討することとし、本実験ではニジマスを用いて保存性を検討した。
方法 养殖のニジマスを長野県の養鱒場から購入した。全ての試料は洗浄し、エラおよび内臓を除去した。無処理、鱗・頭部の有無、食塩の有無、食塩水への浸漬・わさび(地下茎・葉・粉末)使用の各条件で処理をした。その後、晒で表面を覆い、屋外(2月中旬)で約7日間放置した。放置したニジマスについて、保存前後の重量の測定、一般細菌数および大腸菌群数の測定を行った。
結果 保存前と保存後の歩留まりは、58.3～71.4%で、粉末のわさびを練って表面に塗布した試料の歩留まりが高い傾向にあった。一般細菌数は、無処理、食塩水、わさび(粉末)塗布の試料で高かった。大腸菌群数が多かった試料は、無処理、塩水、わさびなどの保存方法であった。

P-054 万宝料理秘密箱「卵百珍」に掲載されたたまご料理について
○名倉秀子(十文字学園女大)
目的 鶏卵は、奈良・平安時代に食べられた記録は見られず、時を告げる鶏の卵を食べることに罰があたられるとされ、畏敬の念があったと考えられる。安土桃山時代には、ポルトガルからの菓子に鶏卵を使ったカステラなどの料理がみられるようになった。これらが、庶民の食生活に反映されていたとは考えられない。また、江戸時代中期以降には豆腐百珍をはじめ、その後、卵百珍、鯛百珍、高麗百珍などのような材料別料理本が刊行された。ここでは、万宝料理秘密箱にある卵料理について調理学的な視点から分析し、食生活を推察することを目的とする。
方法 「万宝料理秘密箱 卵百珍」は、江戸料理レシピデータセット(COCH作成)にある卵料理106種類を分析対象とした。データより料理名、食材、調味料、調理法、献立における料理の位置づけなどを中心に分類、集計した。
結果 卵料理は106種類の作り方が示され、卵白を用いた料理が12種、卵黄が5種、全卵が89種であった。また、調味料については記載のない料理が38種、醤油や味噌などの塩味系が32種、砂糖などの甘味系が21種であった。調理法は、茹でるが37種、蒸すが32種、焼くが26種、煮るが10種、揚げるが1種、生の非加熱による料理は出現しなかった。料理名には、色、形、長崎などの地名、糟漬などの調理法が含まれていた。料理は、汁物、膾、平皿、菓子などの他、薬として用いられていた。

P-055 女子大学生とその親世代の料理の伝承について
○塚本敦子1, 駒場千佳子1, 卫藤久美1, 神保夏美1, 野原健吾2, 宮下ひろみ3, 松田康子1
(1女子栄養大, 2帝京平成大, 3東都大)
目的 私たちの日常的な食事は家族間で伝承されてきたものが多く、食の多様化により、時代と共に変化している。女子大学生とその親世代の料理の伝承について検討し、伝承の定義を、家でよく食べられる料理の名前、作り方、食材を家族から教えられたり、話をすること、とした。
方法 2019年4月に栄養学を専攻する女子大学1年生と保護者各343名を対象に、質問紙調査を行った(回収率82.8, 70.8%)。家庭で料理を伝承されたか(伝承したか)という設問に「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」と回答した者に、大学生は伝承された料理、保護者には、親から自分が伝承された料理と子どもに伝承した料理の2種について、それぞれ3つの料理名を自記式で回答を求めた。料理は、ID化を行い、様式別、調理法別、主食・主菜・副菜別などに分類した。解析は、親子で共に回答した者を対象とした。
結果 解析対象は173組で、年齢(平均±標準偏差)は親が48.7±4.3歳、子が18.1±0.2歳であった。総料理数770品で、大学生が伝承された料理は276品、保護者が伝承した料理は205品、保護者が伝承された料理は280品だった。様式別では、どの伝承形態でも和食が半数以上を占めていた。すべての伝承の出所と上位料理で共通していたのは、みそ汁、カレールイス、たまごやき、肉じゃが、ぎょうざ、煮物の6品で、日常的な料理が89%以上で、行事食、郷土料理は少なかった。

P-056 インドネシア人日本語教師における来日時の食事に関する調査
○作田ももか1, 郡山貴子2, 飯島久美子1
(1東洋大, 2お茶の水女大)
目的 日本を訪れる観光客は年々増加している。その中で、イスラム教徒(以下、ムスリム)の割合が約9割を占めるインドネシア人も国別で第8位と増加している。イスラム教では食事についてハラルが定められているが、日本ではハラルフードの理解が十分ではないため、来日時に食事をする際に問題が起きていることが考えられる。そこで本研究では、インドネシア人日本語教師が来日時の食事で感じる問題点を明らかにすることを目的とした。
方法 まず調査用紙作成のために来日中のインドネシア人日本語教師6名に「ハラルについての考え方や来日時の食事について感じる問題点」に関して面談会形式のインタビューを行った。調査内容は、家族での外食で困ったこと、ハラルフードの入手方法や入手できない場合の対処法、日本の一般的な食品やハラルフードについて感じることとした。調査はインドネシア在住の対象者にメールにて行った。
結果および考察 インタビューからハラルに関する意識は個人差が非常に大きいことがわかった。調査回答者はインドネシア人の20～30歳代14名であった。外食で困ったことがある割合は64%であった。ハラルフードの入手方法や入手できない場合の対処法、日本の一般的な食品やハラルフードについて感じることとした。調査はインドネシア在住の対象者にメールにて行った。
研究背景と目的 ベトナムは、最終の統治国家になるまで約1000年にわたった中国の支配を受けていた。そのため日頃での豆乳の飲用や、茶（旧正月）の祝いに粽を、中秋節に月餅で祝うなど中国と共通した食文化がある。またフランスの植民地（1887-1945年）の影響で、バインミー（ベトナム風バケロード）や加糖煉乳入りコーヒー、自家製ヨーグルトなどがある。本研究では、日本と同じ米食文化圏あるベトナムでどのような乳製品が受容されているのかを探る。研究方法 2018年、2019年の2月から3月にかけて、北部ハノイ、中部フエ、南部ホーチミンで、文献資料収集および観察調査・聞き取り調査および牛乳利用に関するWebアンケート調査（2019年12月-2020年1月）の結果からその実態を明らかにする。結果 一人当たりの飲料乳の消費量は2008年13kg、2015年20kgで年々増加している。常温で保存可能な加糖煉乳が多用されている。60歳以上の方への聞き取り調査では、煉乳コーヒーは男性が多く、女性は煉乳を湯で薄めて牛乳代わりに飲用していた。煉乳に湯とヨーグルトの種を加え、自家製ヨーグルトを作り「おやつ」として食べていた。フエでは1980年代頃から市場や店で自家製ヨーグルトが販売されていた。Web調査の結果、牛乳は味付きが好まれており、味付きのほうが「食事に合う」と感じていた。摂取時間帯は朝食時・朝食後、昼食後が多い。

研究背景と目的 保育所での食育指導が保護者の食生活に及ぼす影響○曽川美佐子、脇坂しおり（四国大）目的 幼児期の食育は成人的食習慣に影響するため、健康で規則正しい食生活を営むことが必要である。よって、我々は平成18年度から保育所における食育指導に取り組んできた。そこで本研究では、園児への食育指導が食育への関心が少なかった親世代の食生活改善に繋がるかを検討する目的で、保育所における3〜5歳児の保護者を対象にアンケート調査を行い、指導の前後で保護者の食生活に関するアンケート調査を行った。方法 徳島市のB保育所において、令和元年9月の2日間、3歳児10名、4〜5歳児23名に対し、給食後の10分程度の食育指導を行った。授業前に、四国大学附属保育所の3〜5歳児の保護者の方を対象にアンケート調査を実施し、食育のテーマを決定した。テーマに基づいて園児の発達段階に応じた内容で食育実践記録表を作成し、効果的な媒体を作成した。また、食育指導1か月後に保護者の方を対象にアンケート調査を実施し、食育指導前後の調査結果を比較して、園児への食育指導が保護者の食生活に影響を及ぼすか評価した。結果及び考察 指導の前後に行った保護者へのアンケート調査の結果から、園児の朝食内容において主菜や汁物を摂っている園児が増加するだけでなく、保護者の朝食の欠食率も減少するなど、園児・保護者ともに食生活改善が見られた。以上のことから、園児への食育指導が、家庭での食生活の変容を促す効果があることが示唆された。目的 生活習慣病発症予防や心身の健康を視野に入れた食育活動のためには、家庭と幼稚園、研究機関が連携しながら、それらを進めていくことが重要である。本研究では、幼稚園と家庭をつなぐ食育の取組の一つとして、普段は家庭から手作り弁当を持参しているが、月に一回、園児が同じ献立（おかず1品）を食べる「ぱくぱく弁当の日」を実施している幼稚園と、弁当と給食を併用している幼稚園について、保護者の意識と実態を調査し、共通点や相違点を探ることを通して、より効果的な食育について示唆を得ることを目的とした。方法 本研究では、昼食が毎日弁当であるA幼稚園と、弁当と給食を併用しているB幼稚園の保護者に対し、弁当作りに関する意識、弁当作りの実際及び食育に関する調査を行った。令和元年9月に、保護者へのアンケート配付と実施を行い、A幼稚園57名（年少16名、年中20名、年長21名）、B幼稚園53名（年少14名、年中21名、年長18名）の保護者から回答を得た。結果 辛い弁当は6割で通る保護者はA幼稚園では65％であったが、B幼稚園では85％近くであった。また、弁当を作る時に気をつけていることとしては、A幼稚園では「食べやすいもの」が最も多いが、B幼稚園では「栄養バランス」、B幼稚園では「子どもが好き嫌いが少ない」がそれぞれ1番。一方、食べ物や食べ物のことを子どもに愛情を伝えることを意識していない保護者の場合は、A幼稚園では32％、B幼稚園では25％であった。目的 農幼児期の子どもを持つ親の食育としての弁当作り○海切弘子1、川邊淳子2、今川真治2（北海道教育大、広島大）目的 幼児期における食育活動の改善にむけて－弁当作りを行う親の意識調査をもとに－○海切弘子1、川邊淳子2、今川真治2（広島大、北海道教育大）目的 幼児期の食育は成人期の食習慣に影響するため、健康で規則正しい食生活を営むことが必要である。よって、我々は平成18年度から保育所における食育指導に取り組んできた。そこで本研究では、園児への食育指導が食育への関心が少ないと考えさせることを検討する目的で、保育所において3〜5歳児を対象とした食育指導を行い、指導の前後で保護者の食生活に関するアンケート調査を行った。方法 徳島市のB保育所において、令和元年9月の2日間、3歳児10名、4〜5歳児23名に対して、給食後の10分程度の食育指導を行った。食育指導の1週間前に、四国大学附属保育所の3〜5歳児の保護者の方を対象にアンケート調査を実施し、食育のテーマを決定した。テーマに基づいて園児の発達段階に応じた内容で食育実践記録表を作成し、効果的な媒体を作成した。また、食育指導1か月後に保護者の方を対象にアンケート調査を実施し、食育指導前の調査結果を比較して、園児への食育指導が保護者の食生活に影響を及ぼすか評価した。結果及び考察 指導の前後に行った保護者へのアンケート調査の結果から、園児の食育への関心が少なかった親世代の食生活改善が見られた。以上のことから、園児への食育指導が、家庭での食生活の変容を促す効果があることが示唆された。
P-061 重回帰分析を用いた中学生のエネルギー及び栄養素等摂取量と食品群別摂取量との関係
○上海一美（美作大）

目的 中学生の食事に関する様々な問題が報告されている。しかし、中学生の食生活を正確に調査した報告は少ない。そこで、中学生の食生活の実態を明らかにし食育方法を検討することを目的とした。

方法 A地域の4中学校1～3年、530名（男子265名、女子265名）を対象とした。質問紙により年齢、身長、体重、BMI、食生活に関する調査を実施した。食事摂取状況は、簡易型自記式食事歴法質問票（Brief-type self-administered Diet History Questionnaire, BDHQ15y）を用いた。

結果及び考察 日本人の食事摂取基準（2015年版）と適合していない栄養素は、脂質、鉄、ビタミンB1、食物繊維、食塩であった。また、食事摂取状況の結果からエネルギー及び栄養素摂取量がどの食品群から影響を受けているか重回帰分析を用いて検討した。エネルギーは穀類と菓子類の影響が大きかった。脂質は菓子類、乳類、油脂類の影響が大きかった。食塩は調味料・香辛料類、魚介類、油脂類の影響が大きかった。菓子類の摂取の影響が大きいと考えられるため、菓子類の摂取に関する指導が必要であることが示唆された。さらに、今回の調査は給食が実施されていない夏休み中に調査を行った。給食がない日についての食事をどのように指導していくか検討が必要である。

P-062 中学生を対象とした計画的行動理論を活用した食育プログラムの実践報告
○西村末出、山下沙恵、浅井優紀、多田由佳、佐藤瑠香（福山大）

目的 中学生を対象とした計画的行動理論を活用した食育プログラムの実践を報告する。

方法 2019年5～6月、B市F中学校2年生（101名）を対象に、食育プログラムを実施した。ニーズアセスメントは、学校長、生徒へのインタビュー、対象者への自記式質問紙から実施した。計画的行動理論、KABモデルを活用した指導案を作成し、50分2回の食育授業を実施した。事前と、事後は授業終了後・実施4か月後の質問紙回答（回答数99名）を解析し、評価を行った（χ²検定）。

結果 授業直後の回答では「楽しく学べた」99.0%、「自分の食生活で実行したい」97.1%だった。食育実施4か月後では、学習した「食知識」の正答率が高かった。「食態度」は、「食事が重要だと考える」、「栄養バランスを考える」、「好き嫌いをしない」等が改善された（p<0.05）。より良い食生活に変える自信があるのは、「自信がある」「少しある」の合計が有意に増加した（p<0.01）。行動変容ステージの準備性は、無関心期・関心期が減少、実行期・維持期が増加した（p<0.01）。「食行動」では、「栄養バランスを考えて食べる」「主食・主菜・副菜をそろえて食べる」「適量を考えて食べる」が増加した（p<0.05）。

結論 中学生を対象とした計画的行動理論を活用した食育プログラムの実施は、自己効力感を高め、食態度・食行動改善の効果が示唆された。

P-063 子ども期の調理・食環境のパターンによる青年期の自立の差異
○手島陽子1、長谷川智子2、外山紀子1（1早稲田大、2大正大）

目的 自立は青年期の重要な発達課題である。大石ら（2008）が作成した自立尺度では、生活管理や生活身辺処理といった日常生活の営みに関する領域が含まれている。子ども期（幼児期・学童期）の生活状況や家庭環境により、青年期の自立に差異がみられるであろうと考え、食に焦点を当てて、子ども期の調理への関与と家庭の食環境のパターンによる青年期の自立の状況を検討する。

方法 質問紙調査により大学生178名から得たデータを単純集計し、因子分析にて項目をまとめ、下位尺度得点を算出した。その後、子ども期の変数（調理行動、調理心理、料理への配慮、食の教育としつけ）をクラスター分析で分類し、各クラスターを独立変数、青年期の変数（生活管理、肯定的自己認識）を従属変数とする分散分析を実施した。

結果 クラスター分析の結果、子ども期の各得点が高い群（調理環境高群）が他の4群より青年期の調理得点と生活管理得点が高かった。一方、子ども期の調理行動は平均的でも料理への配慮得点が低い群は、調理環境高群より青年期の協調的対人関係得点が低かった。


P-064 大学生の食生活と学童期に受けた食育の関係について
○石見百江1、永尾美佑1、森川真帆1、下岡里英2（1長崎県大、2広島女学院大）

目的 学童期に栄養教諭による授業を受けた経験は青年期の健康行動に関連している可能性について探るために、現在の大学生が受けた食育がもたらしたものは何か、学童期の食生活習慣が大学生となった現在の食生活や食意識にどのように影響をもたらしているかを明らかにすることを目的とした。

方法 調査対象者は、N大学学生167名とH大学学生255名の計462名中397名（対象年齢18～22歳：有効回答率85.9%）とした。調査は自記式記入法によるアンケートで、内容は学童期の食育経験、大学生の食行動・食意識・食態度に関する77項目を調査した。調査期間は令和1年10月とした。統計解析には名義尺度にはχ²検定、選択得点や1・2年生と3・4年生の2群間比較についてt検定を用いた。p<0.05を統計学的に有意差ありとした。

結果 大学生以前の家庭での食環境合計得点は小学校の食育を受けることが多い群（調理環境高群）が他の4群より青年期の調理得点と生活管理得点が高かった。一方、子ども期の調理得点は平均的でも料理の知識が低い群は、調理環境高群より青年期の協調的対人関係得点が低かった。
P-065 食事を通じた楽しい記憶の振り返りの効果
—食べたもの日誌を手がかりにして—
○松葉佐智子1,2, 鶴見早穂2（東京ガス（株）, 東京大学）

目的 日常生活の中でストレスや問題を抱える人が多い現代社会において、生活に必要不可欠である食生活とQOLは関係が深く、重要とされている。そこで、我々は「楽しい」食体験に着目し、どのような食体験を楽しいと思うのか、さらにそれらを振り返ることによる効果を検討した。

方法 大学生・大学院生36名に対して6～8週間わたり毎日の食事写真を撮影し、週1回それらの写真を見て最も楽しかった食事の写真を、食事形態、誰と一緒に、印象に残った点などのコメントと共に提出させた（食べたもの日誌）。加えてその前後に味覚弁別課題、食の意識・実態および個人特性（自己肯定感、自尊感情、価値志向性）調査を実施した。

結果 食べたもの日誌の導入により食事メニューの想起が多くなるなど、食への関心度が高まった可能性が考えられたが、料理頻度や共食頻度などの食行動への変化は見られなかった。また、味覚弁別課題の正答率が上昇し、味への気づきが向上した可能性が示された。

さらに、食べたもの日誌の内容をカテゴリ化し、クラスタ分析により参加者を分類したところ、「付加価値重視派」、「おうち・ひとり食派」、「仲間に鷲わう派」の3群が抽出された。各群における食の意識では食べたもの日誌前後で差は見られなかったが、個人特性では群間に差がみられ、友人などと一緒に食事を楽しむ方が健康的な食生活を送っており、味以外にも食事の価値を感じている方が共食意識が高いなどが示唆された。

P-066 食事バランスガイドを活用した食育教材の開発と地域大学生の朝食の実態調査
○阿部明恵、三澤朱実（東京家政学院大学）

緒言 若年層の食生活改善は課題の一つであり、朝食欠食は若い世代で多い。本研究では、若い世代を中心とした食育の推進の実践を目的に大学生に焦点を当て、地域イベントに出展し、朝食習慣の改善を実施した。

方法 2019年11月に東京都八王子市で開催された第40回八王子いちょう祭りの学生広場で出展した。朝食導入は食事バランスガイドを活用したオリジナルの食育教材を開発し、質問した。同時に、朝食摂取・生活習慣を質問した。調査は記名式質問紙・質問紙形式とした。全体の回収数は364人であり、そのうち大学生63人、有効回答者は60人であった（有効回答率95.2%）。

結果 今回は、1週間当たりの朝食回数が0～3回の者と4～7回の者で群分けし、食生活状況を比較解析した。平日の起床から外出するまでの時間は、男性は朝食0～3回/週の群（75.0±50.5分）と4～7回/週の群（97.7±63.1分）とで有意差はなかったが、女性は0～3回/週の群（106.4±62.8分）は4～7回/週の群（73.0±41.1分）に比べ長い傾向がみられた（p=0.093）。朝食準備時間は、女性は、平日に有意差はなかったが、休日は2群間で有意差があった（p=0.017）。

考察 朝食欠食の理由として、主な回答に「食べる時間がな」が多くの調査で挙げられているが、時間がないからではないことが示唆された。対象者を増やして再検討したい。

P-067 色彩を視点とした食育が食事バランスガイドの各料理の摂取量に及ぼす効果—その2—
スマートフォンのカメラ機能を活用した食事調査による検証
○三澤朱実、阿部明恵（東京家政学院大学）

目的 食事バランスガイドに沿った食事は栄養バランスが良いとされるが、この食事摂取者の割合は年々悪化し、20歳代では約4割しか摂取していない、若女の女性の食事バランスを整えることを目的とし、女子大学生へスマートフォンを活用し、彩を視点とした食育を行ったところ、料理と副菜の摂取量が有意に増加した。しかし先行研究では解析対象者が11人であったため、本報では対象数を増やして本食育の有効性を検証する。

方法 都内栄養士養成大学女子学生64人（有効回答率86.5%）を対象に、食事の彩を5色以上揃えた上で、主食・主菜・副菜を組み合わせて摂取するよう食育した。①食知識・態度の改善状況を把握するため、食生活調査（記名式質問紙調査）。
②食事前に自己の食事をスマフォで撮影する食事画像調査（1週間にわたり平日2休日1計3日）。③食事バランスガイドの各料理群について、食事画像に1SV以上ある場合に1点として採点（1日3回3日摂取で9点満点）評価し、平均値を食育前後で比較した。

結論 ①では1日に必要な野菜の目標量、バランス良い食事や料理の組み合わせ方の理解者が増加した。②では1食に5色以上の彩がある、インスタ映えしている、食事画像が奨められ、美味しかった、友人にも紹介した者が増加した。その結果、食事バランスガイドの主食、副菜、主菜、牛乳、乳製品、果物の栄養区分の摂取量が有意に増加し、本食育の有効性が示された。
被服

6号館 2階体育館（P会場）

掲示時間
30日 12:00-31日 14:10

討論時間 31日
講演番号奇数 13:10-13:40
講演番号偶数 13:40-14:10

P-068 蓄光素材を取り入れた児童向け高視認性安全ベストの提案
○小野寺美和1, 谷明日香2, 竹本由美子3
(1亜南女大, 2四天王寺大, 3武庫川女大)

目的 子供たちを交通事故から守る JATRAS の団体規格「児童及び自転車通学者向け高視認性安全服」に沿って作製された JAVISA の児童向け高視認性安全ベスト（以下ビカピカベスト）を参考に、蓄光素材のテープや糸も取り入れたデザイン性もあり普段着に馴染みのある子供服（以下新ビカピカベスト）の提案を試みた。

方法 現在市販されている胴部だけを覆う高視認性安全服（以下ベスト）（JIS T 8127）だが大人用であり、子供用の服は限定された地域（茨城県水戸市）の行政と地元企業が協業して無償で配布している服や今回 JAVISA より提供されたビカピカベスト素材（不織布とポリエステル55%, レーヨン45%, 洗濯は不可）しかない。本研究では大人用の市販ベスト 3 種と、ビカピカベスト 1 種の計 4 種を用いて、女子大学生109名を対象に講演番号奇数 13:10-13:40、講演番号偶数 13:40-14:10の順に結果を基に新ビカピカベストのデザインを検討した。

結果 ベストの何処に反射素材と蓄光素材を付けるかでは、左腹部上が最も多く、次いで右腹部上、右腹部中央、左腹部中央、右胸周辺の順であった。


P-069 高視認性安全服における反射素材の位置検討
○青木識子1, 朴順子2, 佐藤真理子1
(1文化学園大, 2韓国仁荷大学)

目的 人対車両事故の危険性が高い路上作業者や災害現場で働く人々の作業服は、遠距離からでも認識しやすいデザインであることが求められる。2015年10月に高視認性安全服の JIS T 8127 が制定され、視認性の高い配色や反射素材の活用についての工夫が求められている。本研究では、動作時の高視認性安全服における反射素材の効果的位置について検討を行った。

方法 被験者は健康な成人男性 4 名（年齢 22.2 ± 2.0 歳、身長 169.2 ± 4.9cm、体重 56.8 ± 4.5kg）である。試料はベストと長ズボンタイプの高視認性安全服で、反射素材のテープを、ベストでは肩線1/2から胸下まで垂直に降ろした 1 本と、胴回りに平行に 2 本、ズボンでは膝下部分に平行に 2 本使用した。身体前面の反射テープ上に、ベスト 4 点、ズボン 2 点の計 6 点の赤外線反射マーカを貼付し、試料を着用した被験者の 6 種の動作時におけるマーカの動きを、三次元動作解析装置で収録した。

結果および考察 6 種の動作条件のうち、上肢を挙上する動作で、肩に貼付したマーカの出現率が低下した。胴回りに貼付したマーカは、被験者が頭部位置で上肢を振る、かがむなどの動作により出現率が低下し、特にかがむ動作では、マーカをほとんどとらえることができなかった。高視認性安全服においては、着用する作業者の動作を想定、配置し、かつ、着衣のしわが寄りにくい複数の箇所に反射素材を用いることが多いと考えられる。

ポスター発表 5月31日(日)

P-071 殿溝近傍における蒸散量計測と車椅子着座時の衣服気候の検討
長澤瞭1, 松井有子1, 佐藤真理子1, 諸岡晴美2（文化学園大, 京都女大）

目的 日常生活において長時間座った際, 殿溝に湿り気が感じ, 本研究では, 殿溝近傍における水分蒸散量を計測すると共に, 車いす着座時の座面の衣服内気温湿度から, 星の少ない座面の実現に向けた検討を行った。

方法 1) 殿溝近傍の蒸散量計測 被験者は健康な若年女性5名(年齢21.6±0.5歳・身長158.5±5.0cm・体重50.4±9.6kg), 24℃・50%RH環境下で安静を保持し, エバポリメーター等を用いて, 臥位で蒸散量を測定した。2) 異なるクッション材と衣服気候 被験者は健康な若年女性5名(21.8±0.3歳・160.5±6.2cm・52.8±12.7kg), 24℃・50%RH環境下で車椅子に座り, 30℃・50%RH環境下で異なるクッション素材3種とクッション素材なし(透湿防水布のクッションカバーのみ)の4条件において, 座面の衣服内気温湿度を計測した。

結果 1) 蒸散量計測の結果, 殿溝近傍の値が高く, 関径線近傍の値も高く, 折り込まれる部位の高値傾向が示された。2) 硬さと比重の異なるクッション素材に着座した際, 座部, 大腿部における温度変化の様子は異なり, クッション素材の違いが車椅子座面の衣服気候に影響を及ぼすと示された。

なお本研究は, 科研費19H01616(基盤研究(B) )の助成を受けて行った。

P-072 衣服設計のための立位姿勢の経年変化
○加藤千穂, 上甲恭平, 石原久代（椙山女学園大）

目的 近年, 若年女性の衣服において頸から肩周辺のフィット感がなく, パターン補正をするケースが増えてきている。数年前と比べ大きさはあまり変わらないことを考えると, 姿勢の要因が影響しているのではないかと考えられる。そこで本報では, 若年女性の姿勢の経年変化について検討することを目指した。

方法 女子大学生100名を被験者とし, 立位における正面, 右側面を写真撮影法により撮影した。撮影時期は2017~2019年であり, 比較対象の試料は2004~2007年に撮影した若年女性100名の正面及び側面写真を用いた。得られた写真から, 2次元CADソフトRhinocerosを用いて正面角度5項目, 対面角度5項目を計測した。現在と数年前の角度項目の平均値を求め, 平均値の差の検定を行った。さらに, 角度項目についてクラスタ分析(Ward法, ユークリッド距離)を行い, 被験者の類型化を試みた。

結果 現在と数年前の平均値を比較した結果, 現在は側面における頸の角度が1%, 肩の角度が5%水準で有意に大きく, 体幹の角度, 腰の角度が1%水準で有意に小さく, やき肩傾向があることがわかった。まだ, クラスタ分析により, 計測年に関わらず4クラスタに分けられ, クラスタ毎の人数構成が異なるものの巻き肩クラスタ, 反り腰クラスタ, 背方クラスタ, 標準クラスタのクラスタが存在し, これら肩部周辺の形状の類型化はパターン設計の参考になると考えられる。

P-073 シニア世代の靴着用の現状と課題
高田里実, □角田由美子（昭和女大）

目的 東京都生活文化局による2013年シニア世代3,000人を対象にしたヒアリ・ハット調査では, 近年5年間に履物を着用して転倒あるいは転倒しそうになった人は1,234人であった。これは履物の種類によるが, 足に合わない靴を履いていることもその原因の一つと考えられる。本研究では, シニア世代の靴着用の現状と課題を明らかにするために, アンケート調査および足部の計測を行った。

方法 1) アンケート調査は, 60歳以上の自立歩行可能な男性81名, 女性179名, 合計260名を対象に, 靴の選び方, 靴による足部と体のトラブル, 靴による転倒の原因, 足部計測の有無を調査した。2) 足部の計測は, 男性8名, 女性37名, 合計45名の足長・足幅・足囲を簡易足計測器により測定し, 実際に履いている靴のサイズとの差を求めた。

結果 1) アンケート調査の結果, 60歳以上の自立歩行可能な男性81名, 女性179名, 合計260名を対象に, 被験者の選び方, 靴による足部と体のトラブル, 靴による転倒の原因, 足部計測の有無を調査した。2) 足部の計測は, 男性8名, 女性37名, 合計45名の足長・足幅・足囲を簡易足計測器により測定し, 実際に履いている靴のサイズとの差を求めた。なお本研究は, 科研費19H01616（基盤研究（B））の助成を受けた。

P-074 妊娠後期の腹部形状に沿ったオフィス用パンツデザインの提案
○田中あゆみ, 丸田直美（和洋女大, 共立女大）

目的 共働き世帯の割合は増加し, 出産を経ても継続して働き続ける女性の割合は増加している。特に妊娠後期の腹部形状の変化は著しく, 腹部を圧迫しない設計が必要である。妊娠後期の腹部形状を採取し, 平面展開によるパターン検討を行うことで, 妊娠後期の腹部形状に沿ったオフィス用パンツデザインの提案を目的とした。

方法 2020年1~2月に妊娠中の女性5名（30~36歳: 妊娠25~37週）を被験者とし, 三次元人体計測を行い, データの腹部形状を平面化し, パターンの検討を行った。ボディラインキャナー（浜松ホトニクス（株））を用いてISO20685に基づき, 20cm開脚した立位姿勢で撮影を行った。CLO Enterprise（株）で腹部形状のみを採取し, 約5cmの正方形約90パーツに分割した。腹部形状は, アンダーパスト, 脇線, 腹部で囲まれた部分とした。PatternMagic II (東レ (株)) にてパターンを合わせ, ダーツ分量を検討した。

結果 妊娠5名から得た7データ（2名は2回計測）のパターンを検討した結果, アンダーパストから肢部先にかかる腹部中央部分の上方方向にダーツ分量をとることで, 腹部形状をカバーできる可能性が示唆された。身長, 体重, 妊娠週数の差があっても, ダーツ分量が重要な位置には共通性があると考えられた。得られた結果から, クラスタリングを腹部まで延長して切り替えたらデザインを提案した。
P-075 マタニティウエアに関する研究 —産前産後対応のマタニティウエアの設計—
○小松美和子1, 甲斐今日子2
(1)高橋大, (2)佐賀大)

目的 現在市販されているマタニティウエアの多くは産前産後対応の衣類であり、産後の授乳期に対応できる設計になっていない。これにより、授乳中の生活が困ることがある。そこで今回は、授乳期の生活の安全性を考慮にしたマタニティウエアを提案する。

方法 市販マタニティウエアの各メーカーのサイズ表記とパターン分析をもとに、産前産後対応服のデザインを検討した。シャツワンピースを基準にし、授乳口の位置や長さ、比較検討を行い、産前産後に対応できるマタニティウエアを制作した。

結果 着装評価を行ったウエアについて、着脱のしやすさと素材に対する評価は妊娠期も授乳期も同じであり、着脱には十分な開きが必要であることが明らかとなった。また授乳期に関しては、授乳口は前中心にある方が授乳しやすいため、シャツワンピースを基にデザイン制作し、着装評価を行った結果、産後対応服として有効なマタニティウエアの提案ができた。
P-079 大学のための衣文化継承に関する研究—あずま袋の製作—
○千葉桂子（福島大）

目的 小・中学校及び高等学校の家庭科では日本の生活文化的継承・創造等に関する学習活動の充実が求められている。日常生活で和服やそれにまつわる物や事を学ぶ機会はかなり少ないが、次世代を担う大学生（家庭科教員をめざす者を含む）には、多様な学びの機会が必要と思われる。本研究では、伝統的な袋物（あずま袋）の製作を通して、衣文化継承の学習を行うための基礎的な情報を得ることを目的とした。

方法 筆者が担当する「衣服デザイン実習」において、受講生9名にあずま袋の製作を行わせた。製作後2週間使用させ、製作しての感想や使用の実態、伝統的な袋物の継承の必要性等についてワークシート及び写真により報告を行わせた。それらの記載内容について分析を行った。

結果 製作の前にあずま袋を知っているか尋ねたが、知る者はいなかった。製作直後には「一枚の布から袋ができるということに驚いた」等の感想が得られた。用途としては、お弁当入れや化粧道具入れが多く、使いやすく自分の好きな布やサイズで今後も作ってみたいという意見が複数みられた。伝統的な袋物の継承については「昔の人の知恵と技を受け継ぐべきである」「本人が使う・使わないは別として、存在を知ることは大切だ」等の意見が示された。今回取り組んだあずま袋の製作は、家庭科の学習内容として大きな成果を収めたと考えられる。

P-080 分割型ウェディングドレスの製作と挙式後の着用バリエーションの提案
○安川あけみ、井畑杏莉沙（弘前大）

目的 結婚式で着用するウェディングドレスの入手方法はレンタルが多いが、購入者は挙式後も利用したいと考えている。本研究では、挙式におけるウェディングドレスの入手方法の選択動機等を比較し、挙式後も利用できるウェディングドレスを考案する。

方法 結婚式の衣装に関するデータやウェディングドレスの形状を文献で調べた。それを基に花嫁自身が挙式後も着用し続けることが可能であるウェディングドレスのデザインを考案し、製作した。さらに、そのドレスの各部分を基本に、様々なアイテムとの組み合わせによる挙式後の着用の提案を行う。

結果 結婚式におけるウェディングドレスの入手方法は、購入が約12%、レンタルが約86%、平均費用は約24万円と約26万円であった。レンタルを選択した理由は二度と着ることがない、保管場所がない等であった。購入した場合、小物へのリメイクの例はあるものの自身の衣服として利用する事例はほとんどないことや、ウェディングドレスの形態はワンピース型がほとんどであることがわかった。種々のアレンジが可能な上分カットのドレスを考案し、製作した。これに着べた後、別の服装に組み合わせることが可能であることがわかった。また、既製服のTシャツ、ジーンズ、スカート等と組み合わせたカジュアルウェアとしての着用も提案する。

P-081 ボタンおよびボタンホール設計のための老年期指尖形態の把握
○福田典子（信州大）

目的 様々な着用場面において心身の状態に最も適している着衣が着心地が良く、その時の最大の効力を発揮できる。指尖位は対象が直接的に接触し、対象特性の情報を受容するとともに対象に効率的に作用し、把持または制御操作等を行っている。本研究では自立着脱および着脱支援操作に重要な留め具の1つであるボタンおよびホールの操作快適性向上を目的とし、老年期の指尖形態情報を得ることを目的とした。

方法 被測定者は男性75.1±8.32歳、女性79.9±9.63歳の男性14名、女性18名合計32名であった。測定者は右利きの訓練を受けた2名であった。部位は左右指尖、母指および示指の長径および短径の4箇所合わせて8箇所とした。さらに母指および中指で作られる左右内径も測定した。計測器はシンワDIGITAL CALIPER150mmを用いた。

結果 いずれの手種・部位においても母指が示指より平均値は大となった（p<0.01）。いずれの指種・手種においても長径が短径に比べ平均値は大となった（p<0.01）。女性母指横径（p<0.01）以外に左右間の有意差は認められなかった。右利き内径以外に有意な差が認められた（p<0.01）。これらの老年期指尖計測値および特徴をかけずすの容易な上衣着たてのボタンおよびボタンホール設計に生かせるよう検討を続けたい。

P-082 廃棄衣服をアップサイクルする方法の提案
石井圭都、○須田理恵（文化学園大）

目的 近年産業社会の環境問題の一つに廃棄物の問題があり、それに対するアパレル業界の対策の一つとしてアップサイクルがある。アップサイクルとは、元の製品より価値の高いモニを生み出すことである。本研究では、アップサイクルにおいて服作りの方法を提案することを目的とした。

方法 製作条件は①極力廃棄する布を出さない②平面作図を行わない③元の服よりデザイン性の向上を目的とした。家族知人等の提供による廃棄衣服を用いた10着を製作した。アンケート調査と着用調査を行った。アンケートは女子大学生68名を対象にデザイン性、難易度について、着用調査は20代女性8名を対象に着脱、腕下（歩行）、座位、着心地の3段階評価を行った。

結果 アンケート調査と着用評価では、全10作品全て高評価を受けることがわかった。一方で着脱の問題が見られた。アップサイクルの服作りには、布地から作る服作りよりも着脱方法の重要性が示唆され、特に手の可動域を考慮した工夫がより必要であることが明らかとなった。アップサイクルの方法の提示には①パーツを分解後再構築②土台を変形させた服を縫い付ける③2枚の衣服を縦に繋げるなど、着用の提案が考えられた。
**P-083 天然染料によるポリ乳酸繊維の染色**
○長根直子
（金城学院大）

**目的**
近年、天然染料が見直されてきている。そこで、本研究では非石油系合成繊維であるポリ乳酸繊維を金属媒染剤を用いず天然染料で染色する方法と堅ろう性を検討した。

**方法**
試料はポリ乳酸布、染料は、試薬として販売されている西洋茜の色素アリザリン、キニザリン、日本茜の色素プルプリン、藍の色素インジゴを用いた。分散剤は非イオン界面活性剤を使用した。濃度3％、浴比1：100、60~80℃、10~180分染色後、ソーピングした。インジゴ染色は、アルカリ還元浴で浸漬、空気酸化後、ソーピングした。染色布の表面反射率から表面色濃度K/S値を求めた。耐光（JIS L 0843）、洗濯（JIS L 0844）堅ろう度試験を行った。

**結果および考察**
アリザリンを分散剤を用いてポリ乳酸繊維を染色した結果、K/S値は60℃<70℃<80℃の順に大きくなり、濃色に染まった。これは、ポリ乳酸繊維のTgと関係していると思われる。一方、インジゴは本実験の条件では染まらなかった。次に、アリザリンと構造が似ているプルプリン、キニザリンを80℃、90分で染色した。その結果、プルプリン<アリザリン<キニザリンの順に濃色に染まった。水酸基の位置によって、染色性が異なることが示唆された。キニザリンは耐光、洗濯ともに堅ろう性も良好であった。

**P-084 溶液統計熱力学を用いたHydrotropeによる染料の可溶化メカニズムの解明**
○金崎悠
1, ペリージェームズ
2, 清水青史
1(広島大), 2(ヨーク大)

**目的**
水溶媒中で染色を行う際、染料の溶解性改善を目的として尿素やアルコールといったHydrotropeを添加することがある。Hydrotropeによる染料の可溶化機構については諸説あり、未だ明らかにされていない。本研究では、溶液統計熱力学の観点から染料―水―Hydrotropeの相互作用を求める。Hydrotropeによる染料の可溶化メカニズムの把握を試みた。

**方法**
本研究では、Hydrotropeによる染料の可溶化メカニズムを解明するため、溶液統計熱力学の新しい理論であるFluctuation Solution Theory（FST）を採用した。染料のモデルにはアゾ染料を、Hydrotropeとして尿素およびエタノールを用いた。

**結果**
FSTを用いて、染料―水―Hydrotropeの相互作用を比較した結果、Hydrotropeによる染料の可溶化には2つの相互作用が寄与していることがわかった。1つは染料―Hydrotrope間の非特異的相互作用である。これにより著しく溶解性が増加し、大きな疎水性分子の溶解性を促進することがわかった。2つ目の相互作用は、Hydrotropeの自己凝集による水分活性の低下である。以上の結果は、以前から支持されてきた仮説とは異なるもので、Hydrotropeの凝集により溶解度は増加せず、むしろ溶解度が低下することを示した。
P-087 クロロホルム/エタノール混合溶媒法によ り収縮加工したポリ乳酸繊維布の染色量の 変化
○花田朋美, 竹田涼花
(東京家政学院大)

目的 ポリ乳酸繊維の良溶媒と貧溶媒の混合溶液により収縮加工 した布は、未収縮布に比べ濃色化する結果が得られている。収縮に伴う濃色化の要因を明らかにすることを目的とし て、クロロホルム/エタノール混合溶媒で収縮した試料を分子 構造の異なる3種の分散染料で染色し、染着量と収縮率の相関 関係について検討した結果を報告する。

方法 「テラマック」糸により製織されたトロピカル布帛を使 用してクロロホルム/エタノール混合溶媒により収縮率を段階 的に変化させた収縮加工布を作製し、エタノールに可溶な分子 構造の異なる3種(染料1:アゾ系骨格で単純な構造、染料 2:アノラッキノン系骨格、染料3:アゾ系骨格で複雑な構 造)の分散染料で染色して観察用試料とした。ソックスレー抽出 法により試料から染料を脱着し、吸光度測定を行い染着量を 算出した。

結果 未収縮試料では染料1の染着量が大きく染料3の染着量 が小さくなり、染料の分子構造の相違により染着量が異なる結 果となった。いずれの染料においても収縮率の増大に伴い染着 量が増加したが、染着量の収縮率依存性は異なり、染料1では 緩やかに増加するのに対し、染料3では収縮率15%以上で急激 に増大する結果となった。このことは収縮に伴う分子鎖配列の 変化により繊維と染料との親和力が変化していることを示し、 濃色化の要因は、収縮率の増大に伴い染料分子の大きさに適し た新たな分子間空隙が形成されるためであると考えられる。

P-088 紫外線遮蔽に関する藍染布と市販青色布と の比較
○福井ともこ, 有内則子, 速水多佳子, 福井典代
(鳴門教育大, 四国大)

目的 前報1)では、天然藍と合成藍で染色した布の紫外線遮蔽 に関する比較を行い、染色回数の多い濃色の染色布において合 成藍の方が紫外線遮蔽の効果が高いことがわかった。本研究で は天然藍と合成藍で染色した布が市販青色布の紫外線遮蔽に関 する実験を行った。

方法 (1) 分光測色計 CM-700d(コニカミノルタ製)を用い てL*a*b*値を測定し、藍染布と色相・彩度や明度・彩度が近 い市販青色布を選定した。 (2) 前報1)と同様の天然藍・合成藍 でそれぞれ染色した線100%カナキンと天然藍で染色した 線100%さらに加え、(1）で選定した市販青色布を用いて紫外 線遮蔽の実験を行った。紫外線強度計 UV-340（カスタム製） のUVセンサー上に布を覆い、布を通過した紫外線の量（以下 「紫外線透過量」μW/cm²)を測定し、比較検討した。

結果 (1) 分光測色計を用いて8種類の市販青色布を測定した 結果、合成藍で染色したカナキンと天然藍で染色したカナキ ん・さらしにそれぞれのL*a*b*値が類似している青色布2枚 を選定した。 (2) (1)で選定した市販青色布と藍染布を用いて 紫外線遮蔽実験を行った。各布の紫外線透過量を比較した結 果、合成藍・天然藍で染色した布が青色布より紫外線遮蔽効 果が高いことがわかった。

1) 福井ら:布の紫外線遮蔽に関する天然藍と合成藍の比較 日本家政学会第71回大会研究発表要旨集 p.127(2019)

P-089 天然染料によるクレーズポリプロピレン繊 維の染色と消臭
○小山菜摘, 早津結佳, 佐々木遥, 森俊夫
(東京家政大)

目的 クレーズ化したポリプロピレン繊維(CPP)、ポリプロ ピレン布あるいはポリプロピレンプラスチック板(PP)、ポリ エステル布(PE)について、アルコール中で抽出した天然色 素を使用し、エコカラー染色が出来るか調べるために、色彩画 像解析により、染料の色彩情報量のヒストグラムを算出し、 染色性を明確にすると共に消臭性についても検討した。

方法 試料として、CPP、CPPを120℃で熱処理したPP 繊維(OPP)、PP及びPEを使用した。アルコールで抽出したウコン や紫根など7種類の天然染料を用いて染色した。また、アン モニアと酢酸の消臭実験を行った。スキャナーで取り込んだ画 像をL*（明度）、C*（彩度）、h（色相角）画像に変換し、それ ゾれのヒストグラムおよび平均値を求めた。

結果 各画像分布を比較した結果、CPPはボイド（間隙）が 繊維内部に多数存在していることから、アルコールに溶解した 天然染料の分子は表面張力の小さいアルコールの作用により練 り込まれるようにより染着されると推察した。熟理された OPPはPPよりも濃色になる傾向がみられる。アンモ ニア消臭では、消臭量はCPP、ウコンで染色したWPP（ウコン） で最も大きく、消臭速度はCPP（ウコン）＞CPP（紫根）＞ CPP＞マスク＞PPの順となった。酢酸消臭では、物理的に繊 維の空隙に吸着されるほうが、化学的に染料分子に吸着される よりも消臭効果が大きいことがわかった。

P-090 部分加水分解による羊毛繊維の消臭性向上 －加齢臭に対する消臭機能－
○小原奈津子
(昭和女大)

緒言 羊毛繊維の製造工程や使用済みの衣服から排出される廃 羊毛繊維の有効な再利用法の開発を目的として、これまで種々 の化学処理と羊毛繊維の消臭機能への影響を検討してきた。本 研究では塩酸を用いた部分加水分解により羊毛の加齢臭に対す る消臭性向上させることが試みた。また、各種の未処理繊維 の消臭性も比較検討した。

方法 試料：綿、ポリエステル、アクリル、羊毛、ポリプロ ピレン（未処理繊維）、1～6N塩酸を用いて50℃で1～5時間部 分加水分解した羊毛繊維、加齢臭成分としてトランス-2-ノ ネナール（ノネナール）を用いた。消臭性の評価：ノネナール /エタノール混合溶液を注入した三角フラスコに試料繊維(1g) を加え、フラスコ中のノネナールの濃度変化をガスクロマトグ ラフ法で測定した。

結果 未処理繊維においては、ポリプロピレンと羊毛繊維の存 在下ではノネナールが2時間で初期濃度の30%以下となり、消 臭性が認められた。変更を加え加成した羊毛繊維においては、加成分が消臭性に影響を及ぼすと推察した。消臭性は、未処理繊維よりも部分加水分解繊維で高く、特に6N塩酸による加成繊維で顕著であることがわかった。

緒言 羊毛繊維の製造工程や使用済みの衣服から排出される廃 羊毛繊維の有効な再利用法の開発を目的として、これまで種々 の化学処理と羊毛繊維の消臭機能への影響を検討してきた。本 研究では塩酸を用いた部分加水分解により羊毛の加齢臭に対す る消臭性向上させることが試みた。また、各種の未処理繊維 の消臭性も比較検討した。

方法 試料：綿、ポリエステル、アクリル、羊毛、ポリプロ ピレン（未処理繊維）、1～6N塩酸を用いて50℃で1～5時間部 分加水分解した羊毛繊維、加齢臭成分としてトランス-2-ノネ ナール（ノネナール）を用いた。消臭性の評価：ノネナール /エタノール混合溶液を注入した三角フラスコに試料繊維(1g) を加え、フラスコ中のノネナールの濃度変化をガスクロマトグ ラフ法で測定した。

結果 未処理繊維においては、ポリプロピレンと羊毛繊維の存 在下ではノネナールが2時間で初期濃度の30%以下となり、消 臭性が認められた。変更を加え加成した羊毛繊維においては、加成分が消臭性に影響を及ぼすと推察した。消臭性は、未処理繊維よりも部分加水分解繊維で高く、特に6N塩酸による加成繊維で顕著であることがわかった。
**P-091** 繊維製品の消費性能に関する研究 —ウールニットのピリングに関する調査—
○佐々木麻紀子, 師岡みずき
(東京家政学院大)

目的 現代では、最新の流行を取り入れながらも低価格に抑えた衣料品が大量生産され、販売されているため、衣服に毛玉や毛羽立ち、ほつれ等が出来ても、補修をせず廃棄してしまうことが増えている。ピリングは繊維が絡まり生地表面に毛玉を生じる現象であり、衣服の外観を損ねる。女子大学生のピリングに関する調査を行い、衣服を綺麗に長く着用しながら環境に配慮した衣生活を送るにはどのようにしたらよいのかを考えてみたい。

方法 女子大学生355人を対象に、記述式アンケートによってウールニットに発生したピリングについて意識調査を行った。調査項目は、ピルが出来た経験があるか、ある場合はどのような処理をしたか、どこに出来ていたか、どのような素材に出来ていたか、ピルの数によって着用状況は変わるのになにであろうかでできている。ピリングが発生した衣類を所持している人は全体の約97.7%となり、そのうち63.6%が自分で毛玉を取り除いた経験があった。取り除き方法として1番多かったのは電池式の毛玉取り機であった。また、毛羽立ちや皮膚の処理方法で約20%が失敗した経験があること、ピルの除去をすることなく衣服を廃棄していることが分かった。発生したピル数によって着用場面を選び衣類の廃棄の基準としている傾向があり、ピリングは、衣類の外観に大きな影響を与え、衣類の廃棄に影響することが示唆された。

**P-092** 9種の医療用防水シーツの熱と水分に関する消費性能と快適性
○川崎久子, 牟田緑, 牛腸ヒロミ
(1富山県大, 2実践女大)

目的 医療施設で用いられる業務用防水シーツは、厚労省により規制を受けている。このような医療施設で用いられている業務用防水シーツ3種類と対照とした基本白布の防水シーツとしての基本機能と、シーツを使用する人の快適性に関する性能を測定、評価し、業務用防水シーツ使用における快適性について報告した。今回はさらに6種類の業務用防水シーツを追加して、快適性に関わる熱と水分に関する消費性能を測定し、これらの性質を裏面に接着された各種素材や組織の組の特性を比較考察する。

方法 6種の業務用防水シーツの保温性、接触温冷感、通気性、透湿性、吸水性、はっ水性など防水シーツとしての基本機能を、シーツを使用する人の快適性に関する性能をJISまたはKESに従って測定した。

結果と考察 JISに従って通気性測定を行ったが、6種の業務用防水シーツは、先に測定した3種と同様に、全く通気しなかった。保温性はシーツの伝熱性に依存して、わずかに小さくなった。また、保温率、Qmax値は基本白布より小さかった。透湿量は測定時間に直線的に依存し、基本白布の1/5以下であった。防水シーツの透湿の際の律速は裏面または布間に挟まれている高分子膜部分、例えばポリウレタン、ポリ塩化ビニールなどの部分への水蒸気の溶解性と拡散性が透湿性に関わると推定した。その他、吸水性、はっ水性の結果を合わせて、防水シーツ使用者の快適性について議論する。

**P-093** 赤外線とデジタル技術を活用した常盤紺型の調査
○川又勝子1, 佐々木栄一2
(1東北生活文化大, 2EHS高材研)

目的 筆者らはこれまでに、かつて仙台地方に特有の型染めであった常盤紺形染に用いられた型紙（常盤紺型）の文様や寸法等についての調査と電子保存を行った。現在はこの型紙調査の第二段階として、「商印」「墨書銘」等の調査を行っている。これらに含まれる情報は貴重なものであるが、半世紀以上の経年劣化・変色により、通常肉眼では読み取ることができない。そこで、型紙産地や仙台への流通経路、製造・使用年代など、常盤紺型についての新たな知見を得ることを目的とし、「商印」「墨書銘」について新たな調査を行った。

方法 調査対象は、東北生活文化大学所蔵常盤紺型7枚とした。これらは常盤紺形を発明した最上染工場由来のものである。常盤紺型の分析には赤外線スキャナを用い、型紙の両面を走査し、汎用画像処理ソフトを用いて情報を判読した。

結果 対象型紙のうち5枚は反故紙が用いられた型紙であった。これらの記述内容から地名と年代に関する記述を精査した結果、福島県会津地方の地名が2枚、北埼玉郡との表記が1枚みられた。年代では2枚の型紙が明治30年代の日付が記されていなかった。一方、商印、墨書銘を含む光学的な特徴を示唆するものがあった。型紙が反故紙であること、商印が見られず、墨書銘は見られなかった。これらから、型紙の産地や仙台への流通経路、製造・使用年代など、常盤紺型についての新たな知見を得ることができた。
ポスター発表  5月31日（日）

P-095 天然染色布上タンパク質のビシンコニン酸による簡易定量
○雨宮敏子1, 船澤千穂2, 塚崎舞3, 森田みゆき2
(1)お茶の水女大, (2)東京学芸大, (3)実践女大)

目的 これまで無色のタンパク質汚れを布帛上で直接定量する方法を検討してきた. 本研究では, 高感度なビシンコニン酸(BCA)法で広範囲領域分析ができるかを検討し, さらに標準汚染布中のタンパク質の定量を行った.

方法 (1) BCA法によるタンパク質の定量: 精練白布(2.5cm×2.5cm)に牛血清アルブミン30μLを滴下し標準汚染布とした. BCA法C液0.1mLを滴下し, フィルムで布の裏面を挟み, 所定の温度・時間で反応させた後, 色差計で560nmにおける表面反射率を測定した. (2) 天然襟垢汚染布の調製及びタンパク質の定量: 精練白布(5cm×10cm)を縦半分に折り, 被験者の首後部で摩擦し汚染布を調製した. 5cm×5cmに裁断し, BCA法C液0.4mLを滴下し(1)と同様に測定した.

結果 反応温度と反応時間を変化させBCA法による発色反応を行ったところ, 低温で反応速度を遅らせることで表面反射率の低下を抑制することができた. その結果, 反応温度・反応時間を: i)25℃(室温)・30分, ii) 5℃(冷蔵庫)・30分, iii) 5℃・15分とコントロールすることで, 上限の1/100オーダーまでの広範囲領域におけるタンパク質の分析が可能となった. 天然襟垢汚染布のタンパク質量は4.8~48μg/cm2となり, 本法の濃度範囲において自然タンパク質汚れの定量が可能であることが示唆された.

P-096 機械学習による洗濯堅ろう度の等級判定
○森俊夫, 今井佑衣, 赤城実里, 岩本里沙
(東京家政大)

目的 染色堅ろう度評価には目視評価が多く, 結果にバラツキが生じることがある. 本研究は, 染色堅ろう度評価において試験前後の変退色の状態を試験員が目視により評価判定している試験方法に代わり, 機械学習を活用して判定する方法を提案する. 機械学習には教師データが必要である.明度, 色度, 彩度および色相角の色彩情報量を用いて, 機械学習による洗濯堅ろう度の等級判定を行った.

方法 試料として73種類の染色布を用いて洗濯堅ろう度試験を行い, 目視により変退色の等級判定を行った. これらの色彩情報量を用いて, 機械学習による洗濯堅ろう度の等級判定を行った.

結果 洗濯堅ろう度の等級判定では, 1~5級までの9段階評価では, 2級以下と5級では適合率が1.0であったが, 3~4級の間は適合率が低かった. これはデータ数の少なさが主な原因である. しかしながら, 洗濯堅ろう度が4級にあるかないかを判定するのであれば, 正答率0.95で, 4級未満では適合率0.96, 4級以上では適合率0.94と非常に高い精度で判定できた. テーブルを増大することにより, 正答率や適合率を1.0付近までに高めることができる. 實用的な利用が期待できる.

P-097 ウルトラファインバブルの洗浄効果—水質の変化と洗浄効果—
○下村久美子
(昭和女大)

目的 衣服の洗浄におけるウルトラファインバブルの効果について, 演者のこれまでの実験では明確に示すことができなかった. 本研究では, 市販されているウルトラファインバブルを発生する洗濯機を用い, 効果的に除去できる素材や汚れの種類, 水質を明らかにすることを目的として実験を行った.

方法 市販されているウルトラファインバブルを発生する洗濯機を使用し, 家庭洗濯を想定し, 幹, 水分人工汚染布, 牛乳タンパク質汚染布, 素材(綿, ポリエステル布のメリヤス, 織物), 水質(温度, 硬度, pH, 洗剤の有無)の各条件下での洗浄効果について評価する. 評価方法は表面反射率からK/S値を算出し, 洗浄率を求める. 牛乳汚染布は牛乳を塗布後, 熱蒸着し, 洗浄後の反射率を求める. 牛乳汚染布の色相角を求める. 牛乳汚染布の色相角を求める. 牛乳汚染布の色相角を求める. 牛乳汚染布の色相角を求める. 牛乳汚染布の色相角を求める.

結果 振とう機を用いたアルカリ性下での洗浄効果は, ウルトラファインバブル水の方が, 水のみよりもわずかではあるが洗浄率が上昇した. 水分人工汚染布および牛乳タンパク質汚染布の洗浄効果は, 洗浄率が上昇した. 水分人工汚染布および牛乳タンパク質汚染布の洗浄効果は, 洗浄率が著しく上昇した. 水分人工汚染布および牛乳タンパク質汚染布の洗浄効果は, 洗浄率が著しく上昇した. 水分人工汚染布および牛乳タンパク質汚染布の洗浄効果は, 洗浄率が著しく上昇した.
**P-099**

**衣服のデザイン画を布貼り絵で描く子ども向けワークショップについて**

○池田仁美、坂田彩美

（武庫川女大）

**目的**

近年、衣服の役割や可能性について学ぶ服育の取り組みが注目されている。本研究では、視覚と触覚から着物の素材、色、手触りの違いを感じることで、衣服の主たる構成要素である布の興味、関心を高めることが目的である。

**方法**

2020年2月15日（土）、16日（日）の2日間、ららぽーと甲子園にてワークショップ「世界に一つのオリジナル服作り」のブースを設けた。定員は10名で、両日3回ずつ実施した。参加者は、紙に描かれたボディに上衣や下位、衿など10種類の洋服型のテンプレートで服の枠を作り、その中に色、柄、素材の異なる70種類の布の小片を入れた箱から好きな布を選んで貼りつけ、服のデザイン画を作成した。

**結果**

2日間の参加者は、1歳から12歳の女子46名、男子18名であった。幼児の参加も許可し、最適な対象年齢を検討した。幼児は、様々な布を選ぶことと、布を貼った絵の手触りを楽しんでいた。小学校の低学年からは、アイテムごとに布の色を揃えたものや、上下のコーディネートを意識した構成が見られ、中学年以上では、アイテムに相応しい素材を選び、2種のレイヤード効果を表現するなど、よりリアルクローズに近い作品もあった。今回の取り組みにより、ワークショップは、小学生の男女を対象に衣服が自己表現の手段であることを伝えうる服育実践となる可能性が示唆された。

---

**P-100**

**地域連携ハンドメイドショップの実践と成果**

○田中早苗、髙橋由子、宮武恵子

（共立女大）

**目的**

地域連携ハンドメイドショップの実践と成果の公開講座から。

**方法**

都内家政学科で被服学科に所属する18歳から22歳の女子大生235人に、着物に対する意識や消費者行動について質問紙解答法によるアンケート調査を行った。

**結果**

女子大生の着物に対する意識は「着物を着てみたいか」の問いに約90%が好意的な回答であった。また「着物に抱くイメージ」はプラスのイメージであった。さらに「着物を着ない理由」は着物を着ていく場所がないが上位を占め、着物のコーディネートが自由なら着てみたいかの問いに76%の学生がそう思うと回答した。実際に着物を着る場合、着いでいく場所や、コーディネートが揃っている材料である。一方学士の測食の立場としては「お小遣いに占める被服費」は5,000円以上〜10,000円未満、10,000円以上〜20,000円未満、20,000円以上〜30,000円未満の順であることが分かった。学士が使用できる被服費と着物の価値の差異が問題である。女子大生にとって着物は自分の被服費で購入することのできない特別な服であり、着こなしの上での伝統を守るべき服という固定概念が見られる。

---

**P-101**

**服飾資源を活かす試み—公開講座から—**

○大塚有里、寺田恭子

（東京家政大）

**目的**

2015年の国連サミットで持続可能な開発目標（SDGs）の採択以降、児童生徒を対象に「持続可能な社会の創り手」となる資質や能力を育むことが求められ、学校教育での取り組みが増加している。一方で、これらの取り組みに対する社会人の意識はどのようなものであるのか、エコライフを考える古着や古布の活用、着物リメイクをテーマとして公開講座を通じてその実態を明らかにすることを目的とする。

**方法**

本学公開講座平成30年度「エコライフを考える—古着や古布からコサージュを作ってみよう—」、「着物リメイク—日本の生地をよみがえらせましょう—」、令和元年度「エコライフを考える—古着や古布からティッシュケースを作ってみよう—」の4講座の受講生64名を対象とし、質問紙による調査を行った。項目は受講動機、費用、着物の活用実践例、講座の満足度、受講後の意識の変化等である。

**結果**

受講生は60〜70代女性が大半を占め、動機は「手持ちの布を減らす、着物の有効利用、手仕事が好き、布と遊ぶ、プレゼント作成」であり、愛着のある布を活用していることから、実践例は、リメイクし廃棄までの期間を延長する一方で、掃除用にするなど最終処分を行っていることも分かった。約90%が受講後の意識に何らかの前進があったと回答し、講座の有効性を確認した。

---

**P-102**

**女子大生の着物に対する意識と消費者行動について**

○田中早苗、高橋由子、宮武恵子

（共立女大）

**目的**

自由にファッションを楽しむ人々にとって着物は敷居が高い衣服であるが、近年、伝統的な概念にとらわれず、日常に用いる洋服や小物を取り入れ着物を楽しむ層が存在するようになった。このような着物に対する変化が見られる中、女子大生の着物に対する意識や消費者としての立ち位置について考察する。

**方法**

都内家政学部被服学科に所属する18歳から22歳の女子大生235人に、着物に対する意識や消費者行動について質問紙解答法によるアンケート調査を行った。

**結果**

女子大生の着物に対する意識は「着物を着てみたいか」という問いに約90%が好意的な回答であった。また「着物に抱くイメージ」はプラスのイメージであった。さらに「着物を着ない理由」は着物を着ていく場所がないが上位を占め、「着物のコーディネートが自由なら着てみたいか」の問いに76%の学生がそう思うと回答した。実際着物を着る場合、着いていく場所や、コーディネートが揃っている材料である。一方学士の着物の立場としては「お小遣いに占める被服費」は5,000円以上〜10,000円未満、10,000円以上〜20,000円未満、20,000円以上〜30,000円未満の順であることが分かった。学士が使用できる被服費と着物の価値の差異が問題である。女子大生にとって着物は自分の被服費で購入することのできない特別な服であり、着こなしの上での伝統を守るべき服という固定概念が見られる。
住生活文化の継承と住教育に関する研究
(第1報)
○鈴木佐代1, 田中憂希1, 有友里沙1, 鈴木佐代1, 豊増美喜2
(1 福岡教育大, 2 大分大)

目的 本研究は、若い世代の住まいに関する語句の知識や住生活の経験、関心の実態を調査し、住生活文化の変容や継承の実態を明らかにすること、さらに今後の住教育に活かすことを目的とする。本報では、調査する語句を選定し、語句調査を中学山上に実施した結果を報告する。

方法 福岡県内の大学附属中学校1校の1、2年生を対象に、2019年11~12月にアンケート調査を実施し、226票の有効回答を得た。調査する語句は「家庭科教科書」、「メディア」の2分野とした。「家庭科教科書」の語句は学校における住教育の終了段階の水準と考えられる高等学校家庭科教科書から抽出した。調査対象が中学生であることから中学校家庭科教科書の記載状況も調査した。また「メディア」の語句は住まいに関する社会的課題でメディアを通して知ると思われる語句を選び、過去10年間の新聞掲載件数を確認した。語句の理解度は「具体的な内容まで知っている」から「まったく知らない」まで4段階の自己評価による。

結果 中学生の理解度が高い語句は「ユニバーサルデザイン」、「ハザードマップ」、「マンション」、「熱中症」、「太陽光発電」、「LED電球」など、家庭科以外の教科でも学ぶ語句や日常生活で使用する語句、メディアに頻出した語句である。一方「食寝分離」や「シックハウス症候群」などの理解度は低く、住生活領域履修前は知らない語句であることがわかる。また、1年生よりも2年生の理解度が高いという傾向は見られない。

住生活文化の継承と住教育に関する研究
(第2報)
○古田慧1, 田中憂希1, 有友里沙1, 鈴木佐代1, 豊増美喜2
(1 福岡教育大, 2 大分大)

目的 本研究は、若い世代に伝統的な住生活文化がどの程度継承されているかを明らかにし、今後の住教育に活かすことを目的とする。本報では、日本家屋に関する知識の実態を調査した結果を報告する。

方法 調査対象及び調査概要は第1報に同じ。本報では、写真や図を提示し、日本家屋の各部位の名称や和室の広さの言い表し方について調査した。回答者の現在の住居形態は、戸建住宅が56.6%、集合住宅が40.7%で、和室がある割合は、各々84.4%、70.7%である。また、これまでの居住経験は「戸建住宅のみ」が23.0%、「集合住宅のみ」が28.3%、「戸建住宅と集合住宅」が45.6%である。

結果 各部位の名称については、居住経験に関わらず「畳」、「障子」、「襖」の正解率は8割以上と高く、「欄間」「鴨居」「棟」の正解率は2割以下と低い。「縁側」「すだれ」「敷居」「床の間」の正解率は3~7割で、居住経験により違いがみられ、「戸建住宅のみ」の正解率が高い。特に「床の間」については続き間のある戸建住宅に居住する生徒の正解率が高い。和室の広さの言い表し方については、「4畳半」、「6畳」の正解率は59.7%、73.9%で、現在の住居形態や和室の有無、これまでの居住経験との関係はみられなかった。以上より、日本家庭に関する知識は、継承されているものであろうし、居住経験によっては継承されにくいものもあることが分かった。

住生活文化の継承と住教育に関する研究
(第3報)
○有友里沙1, 古田慧1, 田中憂希1, 鈴木佐代1, 豊増美喜2
(1 福岡教育大, 2 大分大)

目的 本研究は、若い世代に伝統的な住生活文化がどの程度継承されているかを明らかにし、今後の住教育に活かすことを目的とする。本報では、伝統的な住まいやまち並みに対する中学生活の経験や興味・関心、経験意識、学びたい内容について考察した。

結果 伝統的な暮らしの経験では、「畳に座る」「畳に寝転がる」の経験有りは95%を超えていたが、「縁側に腰掛ける」「すだれで日よけ」は約35%、「はうぎで畳の掃除」「畳をあげて掃除をする」に関しては25%未満であった。伝統的な暮し、歴史的なまち並みを実際訪れた生徒は73.0%と多かった。一方、伝統的な生活文化の中では、「和食」の興味・関心(69.0%)及び将来への継承意識(81.9%)が高く、「伝統的な建物」(興味・関心45.6%,将来への継承意識65.5%)や「歴史的なまち並み・集落」(同39.8%,同58.4%)は「和食」に比べて低かった。また、興味・関心があるほど将来への継承意識は高い。伝統的な建物やまち並みについて学びたい内容は、男子は「日本の伝統的な建築デザイン」や「大工職人の技」、女子は「日本の伝統的な建築デザイン」や「昔の暮らし方」などであった。
P-106 中高年の住空間管理をめぐる現状と課題
○金眞均（関西教育大）
目的 戦後高度経済成長期に広まったマイホーム主義はモノの量で豊かさをはかる競争的消費志向を拡大させ、多くの家がモノのオーバーストック状態になり、今に至っている。本研究は徳島県の中高年に対象とした消費者教育のための探索的研究の一部で、中高年のモノの整理・収納をめぐる住空間管理の現状と課題を明らかにしたものである。
方法 2018年9月と10月に実施した「50代からのお片づけ」講座の参加者を対象に、アンケート調査を行った（有効調査数210票）。調査項目の中で住まい関連項目および3件のケーステディの分析を通じて、問題と課題を考察した。
結果 中高年の住まいは、「一戸建（84.8%）」「居住年数20年以上（67.6%）」「現住宅での定住志向（81.9%）」が特徴であった。居住年数が長いほど持ちモノの数も増えており、「モノが多い」が「捨てられない」「片づけできない」ということが多く見受けられた。また、テーブルや家具の上、床などがモノで占拠されていた（67%, 59%）、空き部屋が死蔵品の物置になっていたりと、空間の管理・活用が十分ではない状況も見られた。こうした問題から、①各部屋・スペースにおけるモノの見直し、②合理的な片づけの方法、③空間の活用・管理方法に関する中高年向け成人学習の課題が見られた。

P-108 居住者参加型賃貸コレクティブハウスに関する研究—「コレクティブハウスかんかん森」の16年目の生活実態と居住者評価—
○大橋寿美子1、鈴木歩実1、岡崎愛子2（1大妻女大、2住総研）
目的 本研究は、日本における居住者参加型賃貸コレクティブハウス（共生型集住）のあり方について検討する。本稿は、日本初事例「コレクティブハウスかんかん森」を対象として、居住16年目の生活実態と居住者評価を明らかにする。
方法 ①居住者へのアンケート調査（2019年9月、回答者数・回収率：29人・76%）②ヒアリング調査（2019年10月〜2020年1月、8名）。
結果 ①全居住者の特徴は、単身者が約4割で、家族で入居している人が2割である。また全体の1/4の世帯が30〜40歳代の子育て期で共働き、子どもの数は年々増えており、さらに3年未満の居住者が約半数で、創立メンバーは2人のみになった。②コレクティブ活動への参加や運営は、「ホモミール（CM）は月7〜8回で主に週末に実施され、居住者の半数が毎回参加している。またCMの前後に活動が行われていることがわかった。③共用部の使用は、日常生活と休日とがあり、居住者が自由に使用できるようになっている。

P-109 高齢期の住環境整備に関する一考察—ドイツの取り組みから—
○村田順子1、田中智子2（1和歌山大、2兵庫県大）
目的 本研究は、高齢化が進展しているドイツにおける高齢期に安心して暮らすための住環境整備事例として事業主体の異なる取り組み実態を複数把握し、高齢期の住環境整備の示唆を得ることを目的としている。
方法 ①連邦政府の支援を受けた住宅協同組合による多世代住宅プロジェクト、②保険会社、大学、住民、住宅公社が協力した多世代・高齢者住宅事業、③労働者社会福祉団体による近隣交流集合住宅の3所の訪問調査を実施した。調査地は2都市（ベルリン、ハンブルク）。
結果 ドイツでは、在宅生活継続のためには住環境全体の整備が必要と考えられ、安全に年を取るための新しい住環境モデルへの関心が近年高まっている。キーワードとして住宅+近隣、およびIT技術の活用があげられる。連邦政府では、モデル事業の実施とともに情報提供を行っている。訪問先の①と②にはバリアフリー設備やITを活用した安全を見守るシステム等のモデルハウスが設置され、地域内外の情報提供を行っている。また、いずれの事業も地域の交流を図る取り組みがなされ、住民間の互助を促している。この活動は介護予防にもなり在宅生活継続に寄与している。
本研究はJSPS科研費JP15K00758の助成（代表田中智子）を受けた。
P-110 生活環境が幼児の手首の動きに及ぼす影響
○正岡さち, 水師美佳
(島根大)

目的 保育施設や家庭の設備の実態と、幼児の手首の動きを伴った生活動作の実態を把握することを目的としてアンケート調査を行った。さらに、幼児の手首の動きの問題点を探究することを目的として実験を行った。

方法 ①出雲市・松江市内の保育施設9園の児童と保護者を対象としてアンケート調査を行った。内容は、設備環境、幼児の生活動作の習得度、手首をひねる動作に対する意識について等である。有効回収数は、園長用9票、クラス担任用38票、保護者用460票である。②現在の園に多く採用されている3種類の蛇口の実物大模型を作成し、それを開け閉めしらる実験を行い、動作及び力等の問題点について検討した。被験者は3・4・5歳児クラスの児童56名である。

結果 ①園ではドアの取っ手はくぼみ、水栓はハンドル式が多い、家庭では扉はレバー式、水栓もレバー式が圧倒的に多かった。②生活動作の習得度は、年齢が上がるについて上昇していたが、複雑な動きを必要とする動作でひとりでできる割合が低かった。また、動作自体を行う機会がない動作もあった。③道具・設備の変化や生活の変化による「手首をひねる動作」の減少が見られ、それによる影響を危惧している保育者・保護者が多かった。④実験により蛇口をひねる力と動作を分析した結果、力が弱いという結果は得られなかった。しかし、動作の面で、肘や肩から動かす等、適切な動きができない児童が見られた。

P-111 美術館の外部空間とロビーにおける人の行動と心理に関する研究—建築形態により心理の影響—
○ロクンジョ, 藤本麻紀子
(共立女大)

目的 近年、美術館などの展示施設の急激な成長とともに、展示空間以外の空間も注目を浴びてきている。これらの空間は、作品と触れ合った感動をじっくりと温めたり、美術にまつわる知識を深めたりできる、創造的で生き生きとした場であるとともに、誰かと待ち合わせたり、展覧会を見終えた後に休憩できる場でもある。本研究は、日本と中国の美術館の外部空間とロビーにおける人の行動と心理について研究するものである。

方法 文献調査においては、東京都内の美術館に絞り、設計者、構造、規模等を分析する。現地調査においては、外部空間の境界、構造、展示、緑、水、舗石、出入り口の数、型、立面の高低差について調査する。内部空間においては、天井、壁、床の仕上げ、照明計画等を調査する。更に、休憩エリアとしての場所、椅子、テーブル、パーティションのタイプ、配置形態について調査する。アンケート調査においては、現地にいる被験者に対して、広さ、ソファーの数、座りやすさ、温冷感、街路の眺め、デザイン、自由度、落ち着き、解放感を調査する。中国美術館調査においても、東京の調査と同様の調査を行う。

結果 以上の調査より、東京都内の美術館の外部空間とロビーにおける現状を把握でき、更に空間の違いによる心理状態の変化を把握することができた。また、日本と中国の美術館の違い、利用者の意識の違いなどを把握することができた。

P-112 韓国・家庭科教育における実践的推論プロセスへの哲学的アプローチ
—『実践的問題中心カリキュラムに基づく家庭科授業：理論と実践』(ユ・テミョン、イ・スヒ著、倉元綾子翻訳、南方新社、2020)から—
○倉元綾子
(西南学院大)

目的 韓国では、2007年改訂でカリキュラムに「実践的推論プロセス」が導入された。そのための研究の成果である哲学的アプローチについて明らかにする。

方法 『実践的問題中心カリキュラムに基づく家庭科授業：理論と実践』(ユ・テミョン、イ・スヒ著、倉元綾子翻訳、南方新社、2020)および関連資料を調査した。

結果 (1) 著者、ユ・テミョン氏とイ・スヒ氏はいずれも韓国家政学・家庭科教育を代表する研究者・リーダーであり、韓国家政科カリキュラムの進歩に重要な貢献をしてきている。
(2) 本書は、家庭科・家庭学に関わる人々が新しい観点・実践的問題中心カリキュラムに基づく家庭科授業を実践するに必要なコンピテンシーの強化と授業能力向上、実践的問題中心カリキュラムの理論的基礎であるブラウンやハバーマスなどの批判的観点（実践概念、行動体系概念、知的思考能力等）の的確な理解を意図している。
(3) ブラウン、パオルチの「家庭学の使命」、IFHE ポジショ ン・ステートメント2008などを的確に位置づけ、家庭科・家庭学が「個人・家族・コミュニティ・社会におけるウェルビーイ ングの向上をめざしている」ことを理解できるようになっている。これらは、家庭科・家庭学に対する理解と認識を促すものとなっている。
P-113 フあなたの家事参加が定年を迎えた夫に対する妻の意識に与える影響
○小林陽子①, 井元りえ②, 小野瀬裕子③
(群馬大学①, 女子栄養大学②, 共立女子大学③)

目的 本研究は, 定年を迎えた夫を対象に, 経済活動の変化と意識に与える影響を検討したうえで, 妻の意識を中心に生活のウェルビーイングを高める要因について明らかにすることを目的とする。

方法 調査対象は, 定年を迎えた60代から70代の女性1,800名である。2020年1月にインターネットを介した質問紙調査を行った。調査内容は, 経済活動の変化と意識を中心に, 妻の活動の多様性を検討したうえで, 経済活動の変化と意識に与える影響を明らかにすることを目的とした。

結果 本研究は, 定年を迎えた夫を対象に, 経済活動の変化と意識に与える影響を検討したうえで, 妻の意識を中心に生活のウェルビーイングを高める要因について明らかにすることを目的とする。

P-114 時代背景と生食生活から見る世代区分ごとの「性別役割分業」に関する実態と意識
○木村康代, 松葉佐智子, 榎本淳史
(東京ガス(株))

目的 本研究は, 近年の急速なIT化に伴い, 現代の大学生たちにとって携帯電話の所有は当然のこととなり, それらの日常生活の様々な場面において必要不可欠な存在となっている。特にスマートフォンの普及とSNSの利用拡大により, 学生たちの生活は大きく変化したと言える。本研究では, 大学生の携帯電話の使用状況と使用意識の傾向について, 主に男女比較からの検討を行い明らかにすることを目的とした。

方法 2018年7-10月, 関東圏の6つの大学に通う大学生(男子325名, 女子498名)を対象に, 質問紙調査を実施した。携帯電話の使用状況と使用意識についてSPSSver.25を用いて分析を行った。

結果 本研究は, 大学生の携帯電話の使用状況と使用意識の傾向について, 主に男女比較からの検討を行い明らかにすることを目的とした。
P-116 エンゲル係数からみた食料消費に関する分析
○谷岡子, 草鹿仁
(高崎健康福祉大)
目的 戦後, ほぼ一貫して減少傾向であった日本のエンゲル係数が2014~16年の間に大きく上昇したため, 改めて国民の生活水準の変化について論議がなされている. 本研究は, エンゲル係数の変動要因について検討し, その背景にある消費者行動の規定要因について考察した.
方法 分析方法は, 総務省『家計調査』『消費者物価指数』のデータを用いて, エンゲル係数の変化を「物価変動要因」, 「食料支出増加要因」, 「消費支出減少要因」のそれぞれに要因分解し, 寄与度・寄与率を推定した1).
結果 その結果, 2014~16年にエンゲル係数が1.8ポイント上昇した要因は, エンゲル係数の分子である食料支出が, 価格の相対的な上昇により0.97ポイント, 購入量の増加により0.21ポイント, それぞれ増加したことと, エンゲル係数の分母である家計の消費支出が, 購入量の減少により0.69ポイント減少したためであることが示された. 消費者属性を考えると, エンゲル係数が相対的に高いシニア世帯の割合が増えたことなどの傾向的変化も「物価変動要因」を上昇させる要因として重要である. 一方, 近年の短期的な急騰については, 「物価変動要因」に示される食料価格の相対的上昇が0.97ポイントで, 全体の変化分の半分以上を占めることから, 円安が亢進して輸入食品の価格が上昇した影響が大きいことが示唆された.

P-117 妻の働き方が子育て家族の「性別役割分業」と「生活意識」に与える影響
○津田圭子, 松葉佐智子, 木村康代, 榎本淳史
(東京ガス(株))
目的 近年共働き世帯が増加傾向にあるが, 共働き世帯の中で妻の働き方は様々なである. 妻の働き方は就労時間によって, 家計意識や家事分担が異なると考えられることから, 妻の働き方の違いが子育て家族の「性別役割分業」と「生活意識」に与える影響を検討する.
方法 28~44歳の既婚かつ高校生以下の子あり男女を対象にインタビュー調査(12名)およびWEBアンケート調査(1248名)を実施. 妻の働き方・就労時間について, ①フル共働き(妻が会社員・正規職), ②準共働き(妻が非正規で週30時間以上就労), ③補助働き(妻が非正規で週30時間未満就労), ④片働き(妻が専業主婦・無職)の4タイプに分類を行い, タイプ毎に分析を行った.
結果 性別役割分業については, 夫婦間の「家事分担度合い」「家計管理の実態」について聴取し, 生活意識については「現在の生活満足度」「生活全体のストレス度合い」について聴取した. その結果, 性別役割分業については①フル共働きが最も男女平等意識が高く家事・家計共に夫婦で分担している傾向がみられた. 一方, その他のタイプについては, 家事・家計共に妻が中心に行っている傾向がみられた. 生活意識については, ①フル共働きが妻の生活満足度が高く, ②準共働きと③補助働きは夫婦共に生活満足度が低く, ④片働きは妻の生活満足度が高いという傾向が確認された.

P-118 ニュージーランドにおけるエシカル(倫理的)消費に関する一考察
○財津庸子
(大分大)
目的 消費者庁「倫理的消費調査研究会」(平成29年4月)において, 女性が「食事の管理, 住まいの手入れ・整理, 衣類などの手入れ, その他の」について費やす時間が週平均1時間減少していることを示しており, エシカル(倫理的)消費の必要性と意義について示されている. また, SDGsの12番目の目標にも「つくる責任・つかう責任」が掲げられ, 持続可能性の観点からエシカル消費の重要性が強調されている. 本研究は, エッジカル(倫理的)消費行動を推進することの意義について検討し, 近年のエシカル(倫理的)消費の増加要因について考察した.
方法 エシカル消費とされている, ベアト rendre, 環境配慮, チャリティ消費, 地産地消にかかわる商品を扱っている店舗の実態およびインタビュー調査を実施し, その実態の把握を試みた.さらに, 環境教育や環境配慮行動にも影響があるとされているPMI大学の調査をもとにした.
結果 11店舗, 2ファーマーズマーケット, 2環境団体, マオリ学校の訪問調査を実施した結果, 日常生活の生活圏に多くのエシカル消費が存在することを示唆した. また, エコライフを尊重していること, 自然環境への関心が高いこと等が関連している. 環境配慮意識が高まっていることやチャリティショップや地産地消のファーマーズマーケットの利用が多かったことが確認された.

P-119 女性の家事労働時間/外部化志向に世代差はあるか
○渡瀬典子
(東京学芸大)
目的 総務省統計局「社会生活基本調査」によれば, 平成8年から28年の間に, 6歳未満の子どもをもつ世帯の妻が「食事の管理, 住まいの手入れ・整理, 衣類などの手入れ, その他」のため費やす時間は週平均1時間減少していると示されている. それでは, 家事労働時間の縮小化は全ての世代で均一に進行したのだろうか. そこで, 本研究は, 家事の専業化が進む傾向を示す方法で, 年齢層におけるエシカル消費行動の影響を考察した. さらに, 家事労働時間の縮小化が持続可能な社会を形成するための要因を明らかにすることを目的とした.
方法 分析にあたり, 以下の2つの視点のデータを用いる.
①日本家計社会学会による「第4回 家計に関する全国調査(NFRJ18)」の調査票(若年票~高年票:28~72歳), ②平成期(平成3~28年)に実施された「社会生活基本調査」
結果 食事の準備時間を短縮化がありつつも, 「夕食の調理をしない(外食・出前・市販の弁当等で済ませる)」という問いにおいて高齢期は回答割合が低い傾向にあり, 世代差が認められた.
ポスター発表  5月31日（日）

P-120 性別役割分業意識と実態
—韓国の未就学児の親調査にもついて—
〇李景媛1, 朴貞玉2, 山根真理3, 平井晶子4
(1岡山大, 2昌文星大学, 3愛知教育大, 4神戸大)

目的 本研究の目的は、韓国の昌原市における未就学児の保護者の性別役割分業意識と実態を明らかにし、韓国における変化を探究することである。
方法 2016年9月から10月に昌原市の保育所等の協力を得て、父親、母親、祖父母をセットにした500部の質問紙を配布、父親票217票、母親票257票、祖父母票54票を回収した。本報告では父親と母親を分析した。
結果 平均年齢は父親が59.4歳、母親が57.6歳。子ども数2人以上が多い（父親58.1%、母親60.3%）、家事・育児は、概ね妻が行っているが、妻の4割、夫の3割は、家事・育児遂行の現状に不公平と感じているが、妻の5割、夫の2割は、今より夫の育児担当を増やしたいと希望していた。妻の5割、夫の6割は、性別役割分業を支持する一方で、6割の妻と夫は、逆性別役割分業の形も支持していた。夫と妻の8割以上が家事・育児を平等に分担すべきと考え、妻の6割、夫の5割が生活費を平等に分担すべきと考えていた。本調査では、性別役割分業を支持しながらも、夫婦における逆の分業形式を支持したり、多くの人が家事・育児、生活費を夫も妻も平等に分担すべきであると考えるなど、人々の意識と実態に変化がみられていることを確認することができた。
※本研究は科研「ケア関係と『性の基盤』の再編に関する日韓比較」研究代表者：山根真理）研究結果の一部である。愛知教育大学「倫理委員会」の承認を得て行った。

P-121 父親の育児参加や養育態度が未就学児の知的好奇心に与える影響
〇高橋桂子1, 倉元綾子2, 笠井直美3, 長谷川宏之3
(1実践女大, 2西南学院大, 3新潟大)

目的 「非認知能力」を幼少期に体得すると、その後の人生のパフォーマンスが高いことが報告されている（中室2015）。知的好奇心、自己効力感やGritといった非認知能力を体得することが求められる現代の子どもたちの資質はどのように育まれているか。本研究では、家庭における父親の育児参加や養育態度に着目し、どのようなプロセスで子どもの知的好奇心に影響を与えているか、アンケート調査から検討を行う。
方法 調査は2019年11月、N県N大学教育学部附属幼稚園とF県S学院幼稚園・保育園に通う子どもの父親を対象に、留置き法で実施した。回収した155サンプルのうち、欠損値を除く3～6歳児の子どもをもつ父親139サンプルが分析サンプルである。
結果 パス解析から、①育児に参加すると、子どもと会話が増える。子どもとの会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増える。子どもと会話が増えると、子どもが増え

P-122 農村直系制家族における世代形成と世代更新の世代的変化
—結婚コーホート間分析—
〇佐藤宏子（和洋女大）

目的 伝統的に同居規範の強い直系家族優位地域において、1980年代から近年までに生じた農村家族の世代形成と世代更新の世代的変化を結婚コーホート別に明らかにする。
方法 対象者の結婚コーホートを「昭和20年代（MC-1）」、「昭和30年代（MC-2）」、「昭和40〜54年（MC-3）」に3区分した。世代形態は「子世代更新」、「孫世代更新」、「更新困難」、「更新未確定」に分類し、二元配置分散分析、順序ロジスティック回帰分析等を行った。
結果 (1) 3つの結婚コーホートの次世代更新率は2005年から2014年かけてほぼ一定で、14年には世代更新がほぼ終息している。14年の次世代更新率は、「MC-1」が70.1%、「MC-2」が37.9%、「MC-3」が26.0%である。(2) 2014年における「MC-1」の次世代更新率は、結婚時期が遅い「MC-2」および「MC-3」より有意に高い。(3) 結婚コーホートと時点の二元配置分散分析から、時間的な経過による世代形態の変化は「MC-1」の次世代更新率が「MC-2」および「MC-3」より有意に高い。結婚コーホートと時点の二元配置分散分析から、時間になる経過による世代形態の変化は「MC-1」の次世代更新率が「MC-2」および「MC-3」より有意に高い。
ポスター発表 5月31日（日）

P-123 夜型子育てサロンの実態
○岡本千晴,岡田みゆき
（北海道教育大学）

目的 子育て支援センターや子育てサロンの他に、2018年頃より夜に行われる子育てサロンの活動が少しずつ広がっている。夜の子育てサロンがどのようなものであるか全容を明らかにして、母親が求められる子育て支援のニーズに応える支援のあり方が、方針について検討することを目的とする。

方法「夜型子育てサロン」の全容を把握するために、2018年7月に夜型子育てサロン開催の中に子育てサロン支援者と、夜の子育てサロン参加者の父親・母親にインタビューを行った。データ収集は、半構造化面接として行い、聞き取り内容は、調査協力者の許可を得てICレコーダーで記録したのち、速記録に起こした。この速記録データを、修正版グラウンデッド・セオリー法を用いてカテゴリー化し分析した。

結果 ①夜型子育てサロンでは、支援者や仲間から自分を受け入れられたと感じると、居心地がよくなり、そこが居場所になる。②夜型子育てサロンでは、母親自身が受容・承認されることが、育児不安が解消し自信に繋がる。③支援者は、現代の母親の生活スタイルを含め、全ての母親を丸ごと受け止める努力をしている。そのような支援者の柔軟で多様な考えが、新しい支援の形を生み出すことに繋がることがわかった。

P-124 家族意識の変化が墓と葬送の多様化に及ぼす影響
○牧野晃子
（東海大高輪）

目的 多死社会の到来に向けて、家族とは異なる新しい墓や葬法が誕生している。本研究では、家族意識の変化が墓の多様化の過程と、現代の墓制に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。

方法 墓の多様化を促す家族の変化について『個人化する家族』（目黒,1987）等の先行研究を検討する。また、墓の多様化、現代の墓制について、『お墓の社会学』（槇村,2013）、『墓と家族の変容』（井上,2003）、意識調査等を分析、考察する。

結果 ①都市化、家族意識の衰退、少子化、家族化、個人化によって、人々の墓や葬法に対する新たなニーズが拡大している。②近年成長するライフエンディング産業は、消費者のニーズに合う墓や葬法を供給し、墓の多様化が促されている。②第一生命研究所の調査では、依然として7割弱の人が「墓を子孫に継承してほしい」と回答しており、墓の継承を望む意識は根強く残存している。③墓の多様化は、墓の継承を容易にするために、複数の家の墓を祀る「墓の合理的継承」の側面と、継承意義の希薄化による「墓の非継承化」の側面がみられる。④墓の無縁化も深刻化しており、熊本県人吉市や福岡県久留米市では半数以上の墓が無縁化している。しかし、多死社会へ向けた課題として「無縁墓地の増加」を挙げた自治体は1割にすぎず、無縁墓地問題を重要視する自治体は少数派であることが明らかになった。

P-125 お片づけ実践からの家族研究・家族生活教育への示唆
○黒川衣代
（鳴門教育大学）

目的 戦後、日本は高度経済成長期を経て物質的豊かさを実現した。一方、平均寿命の延びと共に、中高年人口はますます増加している。概して中高年は、もったいない精神からモノを捨てることができず、モノで溢れた居住空間を何とかしたいと考えている者が少なくない。そこで、2018年に中高年向けのお片づけ講座を実施し、その受講者の中からお片づけの実践を行っていた者を募集し、事後に実施した聞き取りから家族研究・家族生活教育への示唆が得られたので報告する。

方法 2018年9月、10月に徳島県内の中高年を対象にお片づけ講座を実施し、受講者から3名のお片づけ実践者を募集した。実践では整理収納の専門家の指導を受けることができるが、お片づけ前後の写真公開と半構造化インタビューに応じることの同意を得た。後に実施した聞き取りから家族研究・家族生活教育への示唆が得られたので報告する。

結果 モノの管理状況からファミリーライフステージの移行に対応し、成人子が離家するまでの暮らしぶりを継続してきたことが推察された。また、モノが溢れて整理収納ができないことと、共働きであるのでお片づけの仕事とされる性格を担う家事が重なることがうかがえた。お片づけ実践後については、本人の気持ちの変化だけでなく、子ども達の行動への影響、家族の相互関係の好転、夫の変化等が語られ、モノと空間の管理を見直すことが家族関係の改善につながることが示唆された。

P-126 親との関係が大学生の将来の家庭展望に及ぼす影響
—家族観形成を媒介して—
○渡辺朗生,今川真治
（広島大）

目的 本研究では、親との関係が家族観形成を媒介して、大学生の将来の家庭展望に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。親との関係が家族観形成を媒介して、大学生の将来の家庭展望の構築及び肯定的捉えに及ぼす影響を明らかにする。

方法 調査対象は大学1年男性79名、1年女性93名、3年男性88名、3年女性72名である。調査期間は2019年12月、調査項目は親との関係16項目、家族観25項目、将来の家庭展望16項目である。家族観タイプはクラスター分析によって検討した。各項目の因子間関係は共分散構造分析及びχ²検定及び残差分析によって検討した。

結果 クラスター分析の結果、大学生の家族観は「統制重視型」、「協働重視型」、「自立重視型」及び「全志向重視型」の4タイプに分類された。次に、共分散構造分析の結果、異性的親とのコミュニケーションが多く、同性的親との心理的距離が近いと感じているほど家族観が形成され、家族観が形成されることが推察される。また、親との関係が家族観形成を媒介して、大学生の将来の家庭展望の構築及び肯定的捉えに及ぼす影響を明らかにする。

結果 クラスター分析の結果、大学生の家族観は「統制重視型」、「協働重視型」、「自立重視型」及び「全志向重視型」の4タイプに分類された。次に、共分散構造分析の結果、異性的親とのコミュニケーションが多く、同性的親との心理的距離が近いと感じているほど家族観が形成され、家族観が形成されることが推察される。また、親との関係が家族観形成を媒介して、大学生の将来の家庭展望の構築及び肯定的捉えに及ぼす影響を明らかにする。
P-127 親からの愛情認識と青年期女子の結婚・出産に対する意識との関連
○権田あずさ
(山陽学園短大)

目的 本研究は、女子短大生が幼少期から現在まで親と日常的にどのように関わり、親からの愛情をどう認識しているかを明らかにし、そのことが、女子短大生の結婚や出産に対する考え方と関連があるかを検証することを目的とした。

方法 A短期大学に所属する女子学生106名に対して質問紙調査（無記名自記式）を実施した。得られた回答は得点化し、親との日常的な関わりについての回答を「関わり得点」、親からの愛情の認識についての回答を「愛情認識得点」として分析を行った。親からの愛情をどのように認識しているかが、調査対象者の将来の結婚や出産への意識に関連があるかどうかを検証するために、愛情認識得点が平均点以上であった回答者を愛情認識得点高群、平均点以下の回答者を愛情認識得点低群とし、χ²検定にて検証した。

結果 (1) 母親の関わり得点と愛情認識得点との間には正の相関が認められた。 (2) 学生の結婚や出産に対する意識は、厚労省（2015）が実施した全国調査の結果と同じ傾向であった。 (3) 愛情認識得点が高かった学生は低かったよりも、両親のような夫婦関係をうらやましく思っていた。 (4) 結婚相手の条件として、愛情認識得点が高かった学生は「価値観が近いかこと」と回答した割合が高かった。

P-128 ペットに対する考え方や行動と生活意識との関係
○隈元美貴子,柳田元継
(山陽学園大)

目的 ペットに対する考え方や行動は、ペットの飼育経験の有無や、犬好き猫好きといった嗜好によって異なるかどうか明確にすることを目的とした。また、こうした差異が、普段の生活意識と関係が認められるかどうかも併せて検討を行った。

方法 大学生を対象として集合調査法による質問紙調査を行った。実施時期は2019年11月、対象人数は160名で回収率は100.0%であった。有効回答数は112名で有効回答率は70.0%であった。調査項目は、基本属性、ペットに対する考え方や行動に関する18項目、生活意識に関する73項目から構成されている。統計分析は単純集計と因子分析、t検定を行った。

結果 ペットの飼育経験の有無により対象者をグループ分けし、ペットに対する考え方や行動を測定する各項目への反応を因子分析したところ、異なる因子が抽出された。同様に、犬好き猫好きといった嗜好によりグループ分けしても、異なる因子が抽出された。これらの結果から、属性間においてペットに対する考え方や行動に差異がある可能性が示唆された。また属性間により、生活意識の質問に対する回答得点の平均値に差が認められ、これらが、属性間のペットに対する考え方や行動の相違を説明することができる可能性が示唆された。
P-130 表現活動に必要な指導に関する考察
○中村三緒子（筑徳大短）

目的 3法令が改定され、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園では保育実践が共通のものとなり、子どもの表現活動がさらに重要視され、この教養を通して、実習中に学生が体験した表現活動の学びから、今後必要な指導について検討する。

方法 教育実習終了後、実習中に学んだ表現活動について調査を行った。学生に記録してもらった内容を整理してまとめた。

結果 実習中の表現活動における体験を通して、幼児期にふさわしい教育の根幹となる3つの力（部分的に）学んだ様子がうかがわれた。

領域「表現」には、子どもの感性と表現は、子ども一人ひとりの生活と切り離せない理念が貫かれている。しかし、現実は運動会や発表会などの作品の出来栄えに力を入れたり、領域「表現」の理念が保育実践として実現されず、子どもの生活とのつながりが見いだせないような表現活動が行われる実態も少なくない。

幼保教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領に書かれていることは、各園の教育・保育の質の改善の方針である。

今後は保育者として子どもの発達にふさわしい教育がなされる援助ができるように、幼保教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を読み、実践しながら指導していく必要がある。

P-131 現代の輝く女性を探る（第2報）—「ミス・ユニバース・ジャパン」日本代表候補者たちに対する先入観—
○金笑榮（笑田嶋（株））

目的 前報では、厳しい訓練や内面・外面を高める努力を行っている「ミス・ユニバース・ジャパン」日本代表候補者たち、＜現代の輝く女性＞のロールモデルの存在になりうることを示した。ロールモデルとして受け入れられるためには、彼女たちに対する実像と異なる先入観への配慮が必要と考えられる。本研究では、女性たちによる代表候補者に対する先入観を把握し、ロールモデルを示す際の配慮点を検討することとした。

方法 まず、前報と同様の（日常や考え方など）から成る質問紙調査を、女子大学生64名を対象に2018年11月に実施し、前報の結果と比較して、女子大学生による先入観を把握した。次に、代表候補者たちの実像（前報で得られた、日常や考え方に関する点）を示す講義を、女子大学生60名を対象に2019年11月に実施し、その直後の質問紙調査により、代表候補者に対する先入観を把握し、ロールモデルを示す際の配慮点を検討することとした。

結果 代表候補者たちは妻、母親、社会人として前向きに生きようとしている一方、女子大学生による代表候補者たちへの視点は、内面よりも外見に向きがちで、否定的先入観もみられた。しかし、代表候補者たちの実像を示す講義を受けることで、それぞれの先入観が解消する傾向が見られた。ロールモデルを示す際に、これらの点に留意することが必要と考えられる。

P-132 食品のDNA検査を体験する授業が高校生の食意識に及ぼす効果
○藤田宏美1, 北原敦子2, 野坂奈緒美1, 大塚譲3, 上田悦子1
(1鸟取大, 2米子南高, 3お茶の水女大)

目的 高等学校家庭科における食生活の学習では、生徒が食生活に関わる情報を適切に判断し、自立した生活者として安全でより良い食習慣を身につけることを目指している。そこで、安全で食食物供給のための科学的検査の実態を意識させる体験的教材を開発し、高校家庭科授業を実施した。生徒へのアンケート分析を通じて教材の有効性や授業での課題を検討した。

方法 豚肉の品質に影響を及ぼすことが知られている遺伝子を例に、その塩基配列の変異を調べるDNA検査の一部を体験する実験教材を開発し、家庭学科「食品衛生」科目において出張授業を実施した。授業前後に生徒への実験授業および食の安全に関するアンケート調査を行い評価した。調査項目は教材の操作性、実験授業の内容、食の安全の課題に関する理解と意識等である。集計および分析にはMicrosoft Excel, IBM SPSS Statistics 25等を用いた。

結果 ほとんどの生徒が実験授業に積極的に参加したと評価し、実験そのものも成功したと感じていた。授業後には食品のDNAに関心を持ち、遺伝子を扱う技術や研究が「食の安全・安心」に役立っていることが理解された。本実験教材は、実験操作の難易度が適切であり、「食の安全」「遺伝子組換え食」学習に有効な教材であると認められた。生徒の「理科」履修状況を把握し、理科教員との情報共有や連携をスムーズに行うことで、より効果的な授業が期待できる。
P-133 家庭科における魚を題材とした授業の開発
○遠水多佳子,玉城千裕
(鳴門教育大)

目的 平成25年12月、和食;日本人の伝統的な食文化がユネスコ無形文化遺産に登録された。これにより日本人が育んできた和食が国際的に認められると同時に、食文化の保存に対する危機感を広げること。和食を支えてきた魚食文化がある。しかし、近年はかつて見られなかったほど若者の「魚離れ」が顕在化している。本研究は、魚に触れたり、魚を丸ごと感じたりできるような教材の開発に取り組み、その教材を取り入れた授業を考案して実践し、効果を検証することを目的とした。

方法 魚の皮（たい、はまち、すずき等）になめしを行うことで耐久性をもたせた教材を作成した。その教材を活用して、令和元年12月に中学校1年生2クラス77名、2年生2クラス80名を対象に授業を実施した。その授業前後にアンケート調査を実施、授業の効果を検証した。

結果 中学校1年生は食生活領域において「魚博士になろう!～調理実習に向けて～」、中学校2年生は衣生活領域において「基礎縫いマスターになろう!～オリジナルの魚を作ろう～」の授業を実践した。魚の皮を実際に手にして触れることで魚の大きさやうろこや形状を感じ取ることができ、魚に対する興味・関心をもつ様子が見られた。また、魚の栄養的特徴や調理上の性質などを学ぶことで魚に対するイメージが変化していた。

P-134 子育て支援のための手仕事体験講座における保護者の変容—異世代交流による「背守り」刺繍実践を通じて—
○梶山曜子,中村誉子,魏暁敏,竹吉昭人,村上かおり,鈴木明子
(広島大)

目的 手仕事などのものづくりは児童生徒の自己肯定感につながることが明らかになっている（鈴木2011）。地域の子育て世代間や異世代との相互交流の場にもなる手仕事体験を媒介に協働的な学びの場を設定することによって、子育て世代の自己肯定感の向上や育児や家事に主体的に関わる態度の育成等に貢献できると考えた。そこで、近隣にある大学と高等学校とが連携し、親と子を対象とした異世代交流による「背守り」刺繍体験講座を実施し、保護者の変容を捉えることを目的とした。

方法 小学生とその保護者を対象に2回の講座を実施した。個別指導は高校生が行った。第1回（2019年8月）は11組、第2回（2020年1月）は14組の参加があり、両回とも参加した親子は5組であった。各講座終了後に参加親子に自記式調査を実施し、両回参加親子には1回目受講から2回目までの変化を問うた。

結果 参加保護者全員が手仕事体験を通して異世代交流ができてよかったと回答しており、「子どもの真剣な表情、完成したときの輝いた表情が見られたのがよかった」 「自分も集中し、子どもも新しいことにチャレンジでき有意義だった」等の回答があった。第1回から第2回までの変化として「子どもとの会話が増えた」 「子どもへの思いが強くなった」 「家事に前向きになった」等の回答があり、親子での手仕事体験や異世代交流は親子の関係性や家事意識等にも影響を及ぼす可能性が示唆された。

P-135 教科誌の構築を目指す家庭科教員養成カリキュラムに関する研究—シンポジウム参加者の認識から捉える課題の整理—
○鈴木明子1, 平田道憲2, 工藤由貴子3, 岡陽子4, 正保正恵5, 佐藤ゆかり6, 村上かおり1, 富永美穂子1, 梶山曜子1, 今川真治1, 松原主典1, 髙田宏1, 金崎悠1
(1)広島大, (2)元広島大, (3)元横浜国大, (4)佐賀大, (5)福山市大, (6)上越教育大)

目的 家庭科の意義が子供たちに伝わりにくい要因の一つとして教科観の確立の弱さが挙げられる。本研究では、教員養成課程で自己の教科観を構築する重要性を認識できるカリキュラムの考案を目指す。本報告では、本研究に関連して開催したシンポジウム参加者の認識をとおして課題を捉えることを目的とする。

方法 2019年10月、広島大学にて、家庭科教育、家政学諸分野で異なる専門性をもつ5名をパネリストとするシンポジウムを実施した。企画段階で、家政学と家庭科教育、理論と実践、指導方法と内容、汎用性と固有性など、異なる視点で課題を捉えるよう構想した。終了後、参加者への質問紙調査を行い、家庭科教員養成の課題、教科観育成の重要性、家政学と家庭科の関係性への気づきなどについて回答してもらった。

結果 パネリストとコーディネーターを除く参加者は51名（大学教員、指導主事、中高長、家庭科教育論、学生等）で、各パネリストから提示された課題の観点や、家庭科の共通性の必要性、「家庭科の固有性、資質・能力」、「家庭科専門（内容）の在り方」などであった。調査票回収率は84.3%であり、回答者13名41名が家庭科教師の能力や教員養成段階の課題を取り上げ、パネリストが提示した情報や課題を自分の課題と結び、調査票に記載していた。さらに、42名が家庭科の教員への必要性を認識し、27名が家庭科と家庭科の関係性についての気づきがあると回答した。

P-136 女性の素養として推奨された生活技量—女性誌に連載された「家庭科」講座を例に—
○高橋洋子
(新潟大)

目的 NHKの放送講座（ラジオ「女性教室」1950-1965年・テレビ「ホーム・ライフライブラリー」1953-1959年）を例に、女性の素養として推奨された生活技量について考察し、2018年と2019年の日本家政学会大会で報告した。本報では、女性誌に連載された「家庭科」講座を例に、同様の考察を行う。

方法 (1)雑誌記事データベースWeb OYA-bunkoを利用して、タイトルに「家庭科」という語を含む連載を検索した。 (2)検索された講座各々について、連載各回のテーマを一覧表にまとめた。さらに、連載各回の頁を文献複写で入手し、内容を調査した。

結果 (1)女性誌7誌（週刊2誌・月2回刊1誌・月刊4誌）について、タイトルに「家庭科」という語を含む連載が検索された。いずれも1988年以前に連載されたもので、1誌につき1連載。連載回数は8～100回、各号の掲載頁数は1～2頁。講師は大学関係・業界関係・各分野の評論家・研究家・作家・アドバイザーなど様々であった。 (2) 講座の内容は、学校教育の家庭科で履修することのない、酒・薬・美容・救急処置・園芸・冠婚葬祭等のマナーなど、前述の放送講座の内容と同様に、広範囲を網羅していた。このことから、連載タイトルの「家庭科」という語は、「より快適で心豊かな家庭生活を創造するための技量」というような概念として用いられていると考えられた。
ポスター発表
5月31日（日）

P-137 「シルバーリハビリ体操」を教材とした高校家庭科授業の実践と検討
○佐藤ゆかり,石引公美
(上越教育大,都留文科大)

目的 「シルバーリハビリ体操」（以下、「体操」）は、茨城県で始められた介護予防体操として知られている。日常生活を営むための動作の訓練にもなることや自動・互助の仕組みによっ
て、その普及が指されていること等がこの体操の特徴である。介護保険法第四条によれば、介護予防は高齢者に特化するものではなく、全世代に求められるものである。このことは高齢期を今の自分とつながるものとして考えさせることの必要性を示唆する。そこで、高校家庭科において実践的・体験的学習として「体操」を教材にした授業実践を行ったので報告する。

方法 茨城県立牛久高校1年生6クラス239名を対象に、2019年9月に各クラス1時間（50分）ずつ実施した。「体操」は牛久市シルバーリハビリ体操指導士会との連携により行い、実技の後、その意義や県内・牛久市での普及状況の解説を加えた。なお、授業で記述を求めた3項目（実技の感想、高齢者にとっての体操の役立ち、わかったこと）についてテキストマイニングを行い、生徒が学習したことを整理した。

結果 「からだがのびて気持ちよかった」等の今の自分を起点とした「体操」の感想に加えて、高齢者にとっての「体操」の効果について、地域社会における高齢者自身の超高齢社会への取組を知ることができた等の記述がみられた。このことから「体操」の実技導入の授業からは、自身の介護予防に加え、「高齢者理解」の教材としての可能性が示唆された。

P-138 中学生のエシカル消費に対する意識の変容—「総合的な学習の時間」での実践を通して—
○三宅元子,白井靖敏
（名古屋女大）

目的 中学校の家庭科で学習する「自分や家族の消費生活が環境や社会に与える影響」については、教科の視点だけで捉えられない内容を総合的に活用し様々な角度から考え生活に活かすこととを目的に「総合的な学習の時間」での実践を通じたエシカル消費の授業を行った。その効果検証を行う。

方法 愛知県N市立中学校2年生229人は対象として、2019年9月に「フェアトレードからエシカル消費を考える」の授業を行い、記述式のアンケート調査から授業前後の意識変容を検討した。

結果 授業前には、フェアトレードやエシカル消費という用語の認知度は全体の20%以下で、関心度も低かった。一方、授業後の「身体でできそうなエシカル消費」の自由記述では、授業で扱ったフェアトレード商品購入の記述が回答数の約半数を占めた。次いで、商品につけられている表示やマークに関心を示した生徒が多かった。一方、環境に関する内容としてエコバッグの持参という記入がみられた。エコバッグについては、小学校から学習している内容であり、家庭で使う身近な物である。小学校や家庭での既存の知識と今回の学習で得た児童労働の問題、表示やマークの知識を組み合わせて商品を選ぶ時の選択肢にあたっていること、エシカル消費を理解し実践する上で重要である。これからの組み合わせが意識の変容を抑制し行動変容を促すと考えられることから、「総合的な学習の時間」での実践は有効と考えられる。

P-139 サイレント・カリキュラムの視点からみた教師の服装
○内田直子
（大妻女大）

目的 教育を取り巻く環境について、教室内環境や対人環境もサイレント・カリキュラムとして影響を及ぼしているといわれているが、生徒の眼前にいる教師の服装もその一つであると考える。本研究では、教科領域によってどのような教師の服装がふさわしいのかについて検討した。

方法 中高の座学系、実験系、体育、家庭、技術、音楽、美术の7領域について、男性および女性教師の各7種類、計14服装写真を評価者に提示し、教科領域別にふさわしいかどうかを5段階評価で尋ねた。さらにその14服装写真別に着装に違和感のある年齢範囲を回答してもらった。調査は2019年7月、女子大学生106名対象に実施した。

結果 番学系の教師の服装はフォーマル系、カジュアル系ともにスーツが最もふさわしい服装となったが、どの教科領域でもラフな私服や露出の多い服装はふさわしく、年齢の許容範囲で20-30代が主流であった。ジャージは体育系、白衣は実験系などと教科によりふさわしさの度合いが顕著になる服装もある。男性教師の白衣はジャージよりも、また女性教師の白衣よりも年齢の許容範囲が広く、どの年代の教師でも着ることができる服装であった。より、教科によりふさわしさとされる服装は様々だが、その教科に目的を合った服装で、年齢に見合った服装をうまく活用できれば、それを見出す生徒側にとって違和感のない学習環境作りのきっかけになると考えられる。

P-140 家庭科教育における「持続可能な開発目標（SDGs）を達成するための6つの変革」
○竹下清子
（愛媛大）

目的 SDGsと家庭科教育の関連性について明らかにするため、6つの変革の観点に基づいて、家庭科教育の学習内容を整理し、その広がりについて検討する。

方法 （1）2019年に国際調査機関の持続可能な開発ソリューションネットワーク（SDSN）が出版した“Six transformations to achieve the sustainable development goals (SDGs)”の“6つの変革"の概要を日本語でまとめた。（2）小学校、中学校、高等学校の学習指導要領、教科書から「6つの変革」に整理し、これからの持続可能な社会のための家庭科教育のあり方について検討する。

結果 SDGsでは、私たちの世界を変革することが求められている。SDSNの「6つの変革」の概要を日本語でまとめた。
P-141 『装い』教育についての戦後の家庭科における変遷
○柴田優子
（和洋女大）

目的 生活の中で状況に応じて被服を自由に選択し「装う」こととは、保健衛生的な機能だけではなく、社会生活での文化的・儀礼的な機能も満たし、自己表現をすることができる。また、被服は家庭で縫製され管理をされていた時代から、既製服の大量消費と管理サービスの社会化の時代へ大きく変化し、被服教育に求められる内容も変化してきた。

そこで、家庭科で「装い」に関する教育の変遷を追うことにより、過去から現代までの時代背景と「装い」教育との関連を把握することを目的とした。

方法 戦後から今日までの中学校及び高等学校それぞれの学習指導要領（中学校：平成29年告示、高等学校：平成30年告示）および解説、開隆堂・東京書籍の家庭科の教科書を資料として、「装い」に関わる部分を抜粋した。これによりテキストマイニング分析を行った。

結果 戦後間もない頃はよい身なりとして被服だけでなく身体が清潔であるかどうかの指導までされ、身だしなみチェックの項目では被服の清潔さよりも身体の清潔さの方が重視されていた。昭和30年代では保温性や吸湿性など繊維の機能性についての記述が多くなり、被服の重ね方が具体的に記述されるようになった。昭和50年代の内容はそれ以前のものとあまり変わらないが、平成に入ると、「自分らしさ」という表現が目立つようになった。

P-142 ファッション雑誌におけるファッションアイテムのトレンド調査
○坂野世里奈1, 林谷伸子2
1（株）アダストリア, 2文化学園大

目的 衣料廃棄が問題となっている現況を踏まえ、余剰在庫削減の1つの方法としてファッションのトレンドを把握することを本研究は目指している。すなわち、ファッショントレンドを明らかにすることで、商品生産数をコントロールし、余剰在庫の削減ができるかとの視点に立ち、トレンドアイテムの基礎情報を集積する目的である。

方法 女性向けファッション雑誌4種（『ViVi』, 『VERY』, 『CLASSY』, 『MORE』）について、2015年1月号から2019年12月号まで各誌60冊、合計240冊を調査対象とした。モデル着用の写真および広告を含む商品の写真から、レオパード（ヒョウ）柄、パイソン（ヘビ）柄に着目し、ファッション雑誌に掲載されたこれらの柄のアイテムを数量的に把握した。

結果および考察 その年のトレンドのアイテム、素材とレオパード（ヒョウ）柄、パイソン（ヘビ）柄は組み合わせて掲載されており、レオパード柄は秋冬の掲載が多く、一方、パイソン柄はシーズンに問わず掲載されていた。また、雑誌によりその取り扱い方が異なっていた。20〜30代の対象の雑誌ではファッション小物で使用されるコーディネートのワンポイントアイテムとして、ピーシャツ系アイテムが取り入れられていることが確認された。

P-143 生活者の処分衣類に対する意識
○熊谷伸子1, 岡林誠士1, 小林幹彦1, 北方晴子1, 森岡千里2, 井田民男2
1文化学園大, 2近畿大学

目的 日本の衣類廃棄物の排出量は年間100万トンといわれているが、そのうちリサイクルされるのは10%程度に過ぎず、ほとんどがゴミとして焼却され、環境省が推奨する循環型社会の形成には解決すべき問題が山積している。本研究は、このような現状に対する一助となることを目指し、衣類の処分に対する現在の生活者の実態と意識を明らかにすることを目的とした。

方法 衣類を種類で2分類した場合の衣類の処分に対する現在の生活者の実態を明らかにするために、衣類の処分方法、環境行動等に関する意識について2020年2月にインターネット調査会社を用いて実施し、471名の有効回答を得た。

結果および考察 その年間のトレンドのアイテム、素材とレオパード（ヒョウ）柄、パイソン（ヘビ）柄は組み合わせて掲載されており、レオパード柄は春の掲載が多く、一方、パイソン柄はシーズンに関わらず掲載されていた。また、雑誌によりその取り扱い方が異なっていた。20〜30代の対象の雑誌ではファッション小物で使用されるコーディネートのワンポイントアイテムとして、ピーシャツ系アイテムが取り入れられていることが確認された。

本研究の一部はJSPS科学研究費J19K21730の助成を受けたものです。
目的
衣類における次世代3Rのサイクルに着目した基礎的
研究を実施している中で,特に,使用用途が明らかになってい
ない処分衣類の再資源化を,その方法の一つとして,布の高密
度固形化およびバイオコーチェ化を検討する。
方法
成型装置の主要部分は,油圧プレス機,環状型電導電気
炉,反応シリンダー,デジタル式温度コントローラーにより構
成されている。前処理工程において布帛（綿,羊毛）を30gに
裁断し,初期含水量を計量,反応シリンダー（直径3cm）に充
填し,加圧加熱成型を行なった。成型は,前処理を行った布帛
に一定荷重（20t）を加え,加熱設定温度まで昇温した。設定
温度に達してから,15分間加熱温度を保持し続け,そ
の後,40℃まで冷却し取り出した。
結果および考察
綿は120℃から280℃の間で成型を行ったが,
240℃以上では熱処理を施しても黒色化せずに焦げる傾向が確認さ
れ,ウールは200℃まで温度を上げると茶褐色に全体が変化し,
成型されないことが確認された。ウールは温度上昇中には特に
問題なく進んでいくが,200℃で成型を行う際は,設定温度到
達後の保持時間に煩わしい,焦げなどを含む白色が発生した。
なお,本研究から,各布における高密度固形化およびバイオ
コーチェ化的最適加熱温度は,異なる可能性が示唆された。
本研究の一部はJSPS科学研究費JP19K21730の助成を受けたも
のです。

目的
台風19号により浸水した郡山市の放射線量
と化学物質について
○影山志保,諸岡信久
（郡山女大）

目的
ウィッグの内側は装着者の頭皮に直接触れか
れが特に闘病中の患者の頭皮は弱くなっているため,メディカルウィッグ
の内側が装着者に及ぼす影響の理解は重要である。本研究では
患者のQOL向上のために,ウィッグ内側の状況に関する知識
を得ることの効果を検討することとした。
方法
「2019ミス・アース・ジャパン ビューティトレーニ
ング」において,著者を講師に出席した女性30名（平均
23.25歳）を研究対象とした。講義では,ウィッグが頭皮に触
れることや内側が不衛生であることの影響,メディカルウィッ
グを使用する患者の実例,患者の声を代替して発信することが
社会貢献に繋がる可能性などを示し,さらに各自がメディカル
ウィッグを装着した。講義直後および講義後に質問紙調査を実
施し,ウィッグ内側に対する認識の変化を検討した。
結果
講義前には,特にウィッグによる圧迫,重さ,頭皮との
接触による身体,頭皮への影響を,概ね7割以上が気づかなかっ
た。不衛生,蒸れ感,臭いに関して気づかなかったのは,
約3割であった。しかし講義後には,その観点に対して約8
割が「気になる」と回答し,ウィッグ内側について知識を得る
ことの効果が認められた。さらにウィッグを通して,視野の広
まりや社会貢献への意欲の高まりがみられた。知識を得る機会
や,それに携わる人々の養成が課題になると考える。
P-147 福島県相双地区における保護者の精神的健康度が子どもの食・肥満へ与える影響（2）
○今野暁子, 小泉嘉子, 池田和浩
(高橋学院大)

目的 福島県相双地区は原発事故によって多くの住民が避難を余儀なくされ、生活習慣が大きく変化した。前報において、精神的健康度が高い保護者は食事作りのためのストレスが低く、子どもの食物摂取頻度得点の高さと、う蝕のなさにつながっていることが報告された。本報告では、2年後の同地区の子どもと保護者の状況を探ることに加え、子育て支援の視点を加えて保護者のゆとり感と親子間の関わり方及び夫婦の役割分担について検討を行った。

方法 相双地区の保育所及び幼稚園に通う3〜6歳の子ども1772名とその保護者を対象に2018年2月に無記名自記式質問紙を配布した。回答が得られた1418名から、回答に不備がなかった915名を分析対象者とした（回答率51.6%）。精神的健康度の調査には、抑うつ障害、不安障害、強迫性障害などの精神疾患症状の発見・評価に有効なGHQ-12を前報同様に使用した。

結果 精神的健康度が高い保護者（リスク低群）は635名（69.4%）、リスク高群は280名（30.6%）で、2年前と大きな差はみられなかった。共分散構造分析の結果、「精神的健康度の高さ」と「配偶者との育児協力」を経由して「子どもの食物摂取状況」につながっていること、加えて「精神的健康度の高さ」は「食事作りのためのストレスのなさ」や「う蝕」、「配偶者との育児協力」をそれぞれ経由して「暮らし向きのゆとり」につながっていることが確認された。

P-148 男性の身体障がい者の体組成分
○田中佑季, 金谷由希, 綾部園子, 大和田浩子
(高崎健康福祉大, 山形県立米沢栄養大)

目的 男性の身体障がい者は身体障がいによる長期の安静の影響で、健康者と比較して骨密度が低下すると予想される。L2-4の腰椎、大腿骨頸部、Total hipの骨密度は骨粗鬆症の判定に用いられるが、健常者においてこれらの骨密度が全身の骨密度と関連することが示唆されている。本研究は男性の身体障がい者を対象に骨粗鬆症のリスクを指標とした計測を行い、骨密度に影響する因子を検討することを目的とした。

方法 目標に障がいを有する男性の身体障がい者28名（平均年齢：61±8.7歳）を対象とした。身長は五分割法、体重は車いす式の体重計で測定した。体組成はDXA法によって骨密度、骨塩量、脂肪組織重量、筋肉組織重量を測定した。得られた測定値はSPSSを用いて単純集計し、主成分分析によって測定項目の分布を調べた。

結果 被検者の平均身長は164.0±8.1cm、平均体重は53.0±10.3kg、平均BMIは19.7±3.8であった。主成分分析の結果、固有値1以上の3つの成分が抽出された。これら3つの成分の累積寄与率は83.5%であった。得られた第一主成分と第二主成分をプロットした散布図により、頭部を除く全身、大腿骨頸部及びTotal hipの骨密度はまとまった範囲に集まっており、相関係数行列からもこれらの骨密度同士が有意に相関した。
P-151 官学連携事業としての「ケアラーズサロン」運営上の課題

目的 ケアラーサロンは福祉学では認知されているが、人間の幸福を追求する家政学においても検討すべき課題である。そこで、ケアラーサロンの一つであるケアラーズサロモンを官学連携のもとで実施し、継続的な運営の上での課題点を明らかにするとともに、今後のアプローチ方法を検討することを目的とする。

方 法 ケアラーズサロモンを官学連携のもと行い、参与観察とケアラーズサロモン企画・運営者、参加者、行政担当職員それぞれの実践前後の意識・学び・課題を半構造化面接法によるインタビュー調査により明らかにし、今後のケアラーサロンの推進を検討する。

結果 日本のケアラーサロンでは主に高齢者介護が中心となっており、今回は介護のみならず、子育てや引きこもりに悩む人々、サマーケアーサロンなどを対象にした。しかし、来訪したケアラーは40代以降であり、介護ケアを担っている人がほとんどであった。また、来訪者にとって語れる場の必要性は明らかになったが、ケアラーズサロモンをすべての人々の語り合いの場にするという目標は果たせずに課題が残った。

ケアラーズサロモン主催者側のインタビュー調査の結果、実践後は企画・運営者側も当事者であることを認識した者もいたが、多くは支援という意識であった。企画・運営者も行政担当者とともに当事者意識をもったライフベースアプローチの必要性が示唆された。また、ケアラーサロンも地域包括ケアシステムに取り入れるべきであると考えられる。

P-152 盛岡市内企業における女性活躍推進の効果的な手法の開発と検証

目的「女性活躍推進に関する事業所調査（盛岡市：2018年度）」において、盛岡市内事業所における女性活躍推進の課題として最も多かった回答は、「女性社員の理解・行動・意識改革・キャリア形成支援」であった。このことから市内事業所の女性社員の育成に対するニーズが浮き彫りにされた。この課題に応えるために2019年11月に盛岡市男女共同参画推進室と岩手県立大学吉田仁美研修室が共同で、盛岡市内企業の女性社員向け（管理職を除く）に人材育成研修を実施した。そこで本報告では2019年度に実施した人材育成研修が、参加者にどのような影響を及ぼしたのかを主に検証する。

方法 2019年11月に実施した研修の直後と研修1カ月後に受講者及び受講者の上司に対して質問紙調査を実施した。本報告では質問紙調査の結果を用いて受講者の意識や行動の変化を分析する。

結果 1) 靴の着脱は、いつ頃から取り組み始めてているか→平均14.6か月
2) クラスや子供の月齢や発達に応じて、保護者が声掛けを工夫しているか→はい35(100%)、いいえ0%
3) 子どもへの支援を行うか→はい34(97.1%)、いいえ1(2.9%)
4) 保護者に対する支援があるか→はい31(88.6%)、いいえ4(11.4%)
5) クラスの状態（人数、編割れ支援など）で靴の着脱の仕方や子供の習熟度などに注意があるか→はい31(88.6%)、いいえ4(11.4%)
6) 子どもと同士で靴の着脱について学び合いなどの様子は見られなかったか→はい33(94.3%)、いいえ2(5.7%)

各質問には自由記述を設け、子どもに意欲を持たせるための具体的な声掛けの例や靴を履きやすくなるための工夫、その他意見などをカテゴリー化し分析した。

P-153 保育園における子どもの靴の着脱への支援

基本的な生活習慣形成の確立は大切であり、特に乳幼児期では、通所、食事、排泄、睡眠、着脱、着脱の5つが大切であると言われる。そこで、歩行ができるようになってからの子供の靴の着脱に着目する。

目的 乳幼児期(1,2歳頃)の子どもに対して、保育園ではどのような支援や援助の工夫をしているのかを明らかにする。

方法 実施 2019年10〜11月、東京都内の保育園4園（各園の園長、主任、1、2歳児担当の保育経験のある保育士）の教員を対象に、有効回答数35
結果 1) 靴の着脱は、いつ頃から取り組み始めているか→平均14.6か月
2) クラスや子供の月齢や発達に応じて、保護者が声掛けを工夫しているか→はい35(100%)、いいえ0%
3) 子どもの自主性を重んじる支援を行っていると思うか→はい34(97.1%)、いいえ1(2.9%)
4) 保護者に対する支援をおこなっているか→はい31(88.6%)、いいえ4(11.4%)
5) クラスの状態（人数、編割れ支援など）で靴の着脱の仕方や子供の習熟度などに注意があるか→はい31(88.6%)、いいえ4(11.4%)
6) 子ども同士で靴の着脱について学び合いなどの様子は見られなかったか→はい33(94.3%)、いいえ2(5.7%)

各質問には自由記述を設け、子どもに意欲を持たせるための具体的な声掛けの例や靴を履きやすくするための工夫、その他意見などをカテゴリー化し分析した。

福 祉

6号館 2階体育館（P会場）

掲示時間 30日12:00〜31日14:10

討論時間 31日

講演番号奇数 13:10〜13:40
講演番号偶数 13:40〜14:10

POSTER BANR 5月31日（日）
家族介護者への情報提供
—生活ガバナンスの視点から—
○倉田あゆ子
（日本女大）

目的
高齢化率の上昇に伴う要介護者の増加により、家族介護者への生活支援が重要性を増している。特に介護生活を継続する上での家族介護者に必要な情報が届けられなければならない。しかしその情報提供は依然として不十分であり、情報収集の負担が指摘されている。家族介護者への情報を提供する主体には様々なものがあるが、本研究では家族介護者への情報提供のあり方を「生活ガバナンス」の視点から明らかにすることを目的としている。

方法
生活の個人化や社会化が進んだことを背景として、「生活ガバナンス」という考え方が登場してきた。まず生活ガバナンスとは何かを先行研究から明らかにし、さらに家族介護者への情報提供を介護保険制度の保険者である市町村（行政）だけでなく、個人、さらに他者との協働であるNPOの活動等も含めて捉える。それぞれの提供主体が優先する社会的価値からの比較も行う。

結果
行政による情報提供が公平・平等という性格を持つのに対して、生活ガバナンスの主体であるNPOによる情報は生活・生命・共生という社会的価値を追求し、体現するものである。介護者経験した個人や家族介護者支援に取り組むNPO等の多様な情報提供主体が、今後はネットワークをつくり協働・協治するという方向性が示唆される。家族介護者への情報提供の制度化を進めている。

介護施設に入所している高齢女性に対する
メイクアップとハンドマッサージの効果
○内田幸子1, 傳法谷郁乃2
（1高崎健康福祉大, 2神奈川大）

目的
超高齢社会を迎えた現代社会では、身体的・生理的健康だけでなく、精神的健康を維持・促進するための取り組みも重要であり、その効果も期待されている。本研究では介護施設に入所している高齢女性に対しメイクアップとハンドマッサージを施した効果について調べることを目的とする。

方法
高齢女性へのメイクアップはメナードシャールアドゥール高崎店のご協力を得てエステスタッフによるご協力を頂いた。また、学生は事前にメナードからハンドマッサージの講習を受けて、高齢者に施術した。対象者はT市の特別養護老人ホームK館に入所する高齢女性で、施術前後に聞き取り調査を実施した。

結果
介護施設入所の高齢女性を対象にメイクアップとハンドマッサージを施した結果、軽快、満足感、元気、心地よい、緊張したなどの肯定的感情状態が上昇し、恥ずかしい、頼りない、緊張したなどの否定的感情状態が低下し、陽性気分の改善が認められた。寄せられた自由回答から、エステスタッフによるメイクアップは外見を美しくすることのみならず、日常生活とは違う刺激を受けることで気持ちを明るく前向きにしてくれる効果が、学生によるハンドマッサージは肌へのタッチング刺激と若者とのコミュニケーションを通じて喜びをもたらす効果があることが示唆された。
P-157 災害時における要配慮者への給食提供に関する給食業務従事者の意識
○上田悦子1, 藤田宏美1, 野坂奈緒美1, 坂井美栄2, 船原千恵子2, 熊谷麻依子2, 三嶋碧2, 井田優也2, 河原千秋2, 森本美由紀2, 澤裕子2
(1鳥取大, 2鳥取県栄養士会)
目的 ライフラインが断たれるような災害発生時には食事環境が一変し、特に入院患者や要介護者、乳幼児などのいわゆる災害弱者はその影響を強く受ける。そこで、「平成28年鳥取県中部地震」発生時の給食施設での対応に関するアンケート調査を行い、要配慮者への災害時の食事提供体制の整備のための基礎資料を得ることとした。
方法 地震1年後に、震源地に近い「特定給食施設」「その他の給食施設」において給食業務に従事する者を調査対象とし、自記式アンケート調査を実施した。調査項目は、地震発生時の業務に関する体験や、災害時の給食提供に関する意見提案等である。Excel、SPSS statistics 25等を用いて集計・分析を行った。
結果 調査協力が得られた施設数は81で、アンケート回収数は371であった。そのうち当該地震により何らかの被害を受けた給食施設の割合は62%で、そこでの従業者は234名であった。
「業務中的被災体験とその対応」に関する記述では、調理・配膳・収穫・洗浄に関する内容が最も多く、ライフラインに関する内容、食材確保に関する内容の順であった。また「食防災のための意見・提案」の記述は、ライフライン対応、備蓄品、人命・安全確保に関する項目の順に多かった。体験に基づく具体的な提案を今後の食防災行動に生かすために、被災体験情報の共有が重要であることが認められた。

P-158 東日本大震災後の生活再建過程における衣生活の課題と解決方法〈第3報〉—岩手県陸前高田市・大船渡市での調査—
○菊池直子1, 佐々木啓2, 久慈るみ子3, 山岸裕美子4
(1岩手県立大盛岡短, 2日本女大, 3尚絨学院大, 4群馬医療福祉大)
目的 甚大な津波被害を受けた岩手県では、未だに数百名が仮設住宅での暮らしぶりを余儀なくされているが、被災者の多くは恒久的な住宅に転居し生活を再建している。流波という現実を受け止められて暮らす被災者の生活の質は、心の充実で高められるものであり、衣生活においては「装い」による精神的な充実感が密接に関わっている。今回は、第1,2報に引き続き、衣生活の満足度を調査した。
方法 陸前高田市の災害公営住宅である下和野団地の居住者にインタビューを行った。また、大船渡市総合福祉センター職員にインタビューを行った。調査内容は、流失した衣服への思いや支援物資で届く衣服の受け止め方、衣生活の満足度等である。調査時期は2017年10月である。
結果 流失した衣服については「目に浮かんで眠られないこと」があるという回答があり、特に和服を思い起こすという回答が多く認められた。親から譲り受けた着物や神聖な気持ちで仕立てた黒紋付等があげられ、和服に込められた尊しい思いが流波によって一層強くなると考えられる。また、支援物資の衣服に対し、汚れ・傷み・臭いの甚だしい中古衣料への不快感や落胆の感情が生じていた。その一方、支援物資の衣服をきっかけにファッションを楽しむようになり「明るくなった」という回答がみられ、支援で届く衣服には、気持ちを高揚させる働きがあることが認められた。
### 口頭発表 5月30日（土）

<table>
<thead>
<tr>
<th>2D-01</th>
<th>自治体と民間との連携による危険空き家の予防対策に関する調査研究</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>09:30～</td>
<td>○大谷由紀子（摂南大）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

目的  空き家法が施行され、市町村は空き家の実態調査、対策計画の策定、所有者への情報提供等を行っている。しかし、年々増加する空き家に自治体の対策は迫られ、近年は、自然災害による危険空き家も急増している。また、行政代執行は公費で解体し、その多くは解体費が未回収である。そのため、自治体の空き家対策は危険空き家の予防の取組みを把握する。

方法  自治体と民間の連携による危険空き家の予防対策の情報収集し、大阪府下で最も対策が進む市と連携して予防策を推進する民間団体に聞き取り調査を行った。主な質問は連携によるメリットと予防策の内容である。

結果  ①危険空き家予防は、未登記による所有者不明や相続放棄、所有者の意思決定が困難など、大半が何らかの課題をもつ。背景には、登記手続きの問題だけでなく、単身高齢者や認知症、離婚の増加などがある。②自治体と民間との連携による予防策は、双方の強みを活かし、課題をもつ空き家を利活用することである。③連携の形は2者連携型、プラットフォーム型などがあり、市では市を中核に、市が所有者の条件整理を行ったうえでスムーズに民間につなげ、売買・賃貸・土地活用を促している。④民間は市との連携により所有者の信頼を得やすく、全国的な中古市場で取引できる。

### 2D-02  子ども食堂の小学校開催における現状と課題

| 09:45～ | ○前田博子（豊田工業高専） |

目的  2015年の国民生活基礎調査によると、17歳以下の子ども7人に1人が経済的に困窮した状態にあると言える。解決策の1つとして子ども食堂が出現し、近年全国各地で急増しているが、現在は理想とされる小学校区に1ヶ所には及ばない。そこで、小学校区に1ヶ所を実現するための、1つの方法として小学校開催について、その現状と今後開催する際の課題について明らかにすることを目的とする。

方法  小学校で開催している子ども食堂に対し、実態を明らかにするためにアンケート調査および訪問調査を実施する。さらに愛知県T市を事例に、今後の開催における課題と可能性について、行政および小学校へのヒアリング調査を行う。

結果  小学校での開催は11件確認できた。開催日程についてはばらつきが見られるが、開催頻度は、月1回程度が6件であった。校内の開催場所は、家庭科室利用の他、地域コミュニティルームであった。セキュリティについては、鍵の管理は全て小学校で管理しており、学校とは別の入り口がある小学校、使用教室のみセキュリティを別管理できる小学校と様々である。T市でのヒアリング調査からは、個人情報保護や備品管理の点での懸念があることが指摘されたが、地域コミュニティの窓口に実施の可能性があることが明らかになった。また新設小学校では地域活動を考慮した平面計画およびセキュリティ管理において、子ども食堂の小学校開催に対する可能性があることが確認できた。

### 2D-03  地域活性化のための「場」の形成に関する研究

| 10:00～ | —伊予を想う会の事例— |
|         | ○柳井妙子、柳井徳磨（一社1）、栁井徳磨（2） |

目的  これまで人の集う場のほとんどない地域に、新たな地域活性化のための継続的な「場」の確立には、次の要素が必要不可欠と考える。①キーパーソンの存在、②参加しやすい場所の設定、③関心の持てるテーマの設定。今回は、「伊予を想う会」の取り組みから、新たな「場」の創設に関する現状を知り、その概念をアンケート調査の結果も併せて報告する。

方法  2019年度に新たに創設された「伊予を想う会」が主催した「地域について気軽に話し、仲間の輪を広げよう会」における4回のアンケートの調査結果から「場」形成の意義についてみる。

結果  2019年6月に今治市において「伊予を想う会」が設立され、今治市商店街振興組合所有「ほんからどんどん」を会場に市民集いの「場」の確立を試みている。本会では、毎回、テーマを掲げ、その専門家が分科会講演後、その後5～6人のワークグループに分かれて自己紹介と話し合いを実施。参加者は14～20人。テーマは、「まちづくり、食の安全、街歩きなどである。計4回のアンケート結果の通り、テーマを設定した講演では「大変興味がもてた」と「まあまあ興味がもてた」との回答は70%以上。また、ワークグループでの話し合いでは、「十分話して満足した」と「まあまあ満足できた」との回答が70～80%。

「伊予を想う会」の活動の継続を通じた、人々がつながる「場」の形成が地域活性化の一環と考える。
口頭発表  5月30日（土）

2D-04  10:15～
低層集合住宅における管理組合活動及び共用空間利用からみたコミュニティ形成に関する研究
○古賀繭子, 定行まり子 (日本女大)

目的：多摩ニュータウンは1971年に入居が始まり、初期の入居地区の高齢者の増加及び少子化が進行している。居住者の高齢化が進行する集合住宅においては、管理組合運営や自治活動の継続、コミュニティの希薄化が課題である。そこで建設後40年が経過した低層集合住宅を対象とし、これまでの管理組合活動及び居住者間コミュニケーションの現状及び今後の課題を明らかにすることを目的とする。

方法：調査対象は多摩ニュータウン初期入居地区であるタウンハウス諏訪を対象とし、アンケート調査及びヒアリング調査を実施した。アンケート調査は居住者全58世帯を対象に、2019年11月に実施し、回収数は33部、回収率は56.9%であった。ヒアリング調査は管理組合4名、居住者1名を対象に、2019年10月に実施した。更に39年分の管理組合議案書及び広報誌の分析を行った。

結果：回答世帯の約7割が65歳以上の高齢者のいる世帯であり、入居年数は30年以上が約4割を占め、共用部の会話は促されている。入居後から管理組合主催で実施していたイベントは、居住者の高齢化により簡易化されたが、アンケート回答者の9割以上が現在も参加し、近隣づきあいに満足している。一方、住宅内部の老朽化・バリアフリー化、高木化した樹木の管理等のハード面整備が今後の課題である。

2D-05  10:30～
小中学生を対象とした洪水の経験を伝承する防災絵本の読み語り
○田中麻里、岩下朋美 (群馬大)

目的：防災教育で重要な要素はいくつかあるが、自然の恩恵を享受しながら、自分が住む地域への愛着や誇りを持ち、災害時には主体的に避難できるようにすることが大切である。そのためには、身近な地域で過去に実際にあった災害について知り、自分ごととして捉えることが重要である。本研究では、過去の洪水経験を伝承する防災絵本の読み語りを行い、その効果を検証することを目的とする。

方法：前橋市内の小中学生56人、中学生143人に対象に、防災意識に関する質問および防災絵本の読み語りを行い、読み語り後の感想シートに記入してもらった。読み語りを行った防災絵本は、日本および海外で過去に起こった洪水の調査、経験者へのヒアリングなどをもとに洪水の経験を伝えるため地域の子どもたちと大学生が共に制作したものである。

結果：住んでいる地域の災害について話を聞いたことがある学生は39%、中学生は45%である。県内で発生した洪水についての絵本では、中学生は全体的に捉えているが、小学生は昔の人の知恵などエピソードの詳細な内容にまで注目した記述が多く見られた。一方、海外の洪水絵本では、日本と異なる洪水そのものや洪水対応に見られる生活文化の相違点についての記述が多く見られた。読み語りを行うことによって過去の洪水の経験を伝えるだけでなく、自分の住む地域へ関心を向けることにについても一定の効果が検証できた。

2E-01  保護者の視点から見た衣生活を形成する小生学生親子のファッション観
○増田智恵1, 本多実鶴喜2, 村上かおり3 (1 三重大, 2 津市立修成小学校, 3 広島大)

目的：近年、小学生的ファッションへの興味が高まっている。小学生の衣生活管理は保護者の衣生活スタイルが主体と考えられ、ファッション観への影響も強と思われる。本研究では、現在的小学生とその保護者の衣生活スタイルをもとにしたファッション観について調査を行った。

方法：1. 調査期間 2018年11月～12月, 2. 調査方法 アンケートによる留置調査法, 3. 調査対象者 小学生（平均学年3.4年）の保護者406名（男子204名、女子202名）, 4. 質問項目 基本属性と保護者から見た子どもに関してのファッション観とその意識, 子ども服の調達スタイル, 家庭科教育教材の要求度など主に5段評価を実施, 5. 基本統計と多変量解析を用いてSPSSにより処理した。

結果：1. 保護者は小学校家庭科教材の要求度はほぼ高く、縫製関係に関しての保護者の方が要求がやや高い。2. 男女の子ども保護者と保護者から見た子どものファッション観（意識・管理）と衣生活調達行動に関して、男女の子ども別に主成分得点によるクラスター分析を行った結果、男女別に4つの類似したタイプのグループが認められた。保護者と子どものファッション意識と管理が似ているタイプと異なるタイプの組合わせがあり、子どものファッション観の高低により、保護者が主体の場合、保護者と子どもが一緒に話しあう場合、子どもが主体傾向の場合の衣生活調達スタイルの行動が認められた。
口頭発表 5月30日(土)

2E-02 近代女子教育における園芸
—樟蔭高等女学校の植物園からの考察—
○小出治都子（大阪樟蔭女大）

目的 近代の女子教育において園芸は情操教育の一環として取
り入れられていた。本発表ではその具体例として、大阪樟蔭女
子大学の前身である樟蔭高等女学校に配置された植物園に着目
し、当時の女子教育に対する重視を明確にした「外見」と「内面」に
ついて考察する。

方法 まず、園芸の歴史について述べた。近世に流行した趣味
としての園芸から、近代の女子教育に取り入れられるまでを考
察する。

次に、近代の高等女学校で使用されていた園芸の教科書につ
いて調べた。その上で、植物園を詳細に観察し、当時の女子教育において重視された「外見」と「内面」について考察する。

結果 樟蔭高等女学校の植物園を具体例として考察した結果、
当時の女子教育において園芸は女性の「外見」と「内面」を育
むために必要なものとして考えられてきたことが確認できた。

2E-03 18歳、19歳女性における裸体時と着装時の
自己の身体に対する評価
○羽成隆司（椙山女大）

目的 本研究は18歳と19歳女性の裸体時と着装時の身体意識に
ついて、同年代他者と比較して自身の身体の魅力をどう評価し
ているのかを、心身の主観的健康度やダイエット経験等との関
連から分析することが目的であった。

方法 調査対象は女子大学生381名、平均年齢は18.5歳であっ
た。質問紙調査では、裸体時と着装時それぞれの身体部位に
ついて自己評価を求め、その経験がどのように身体の魅力を表
しているのかを分析した。

結果 1）すべての身体部位で裸体時よりも着装時の方が相対
的な自己評価が高く、他者との比較において裸体よりも装いや
化粧によって装った時の方が、自己がより魅力的であると捉
えていた。

2）身体部位で胸のみは体重やBMIが大きい方が自己評価が
高いことや因子分析の特徴から、胸が他の部位と異なる独自の
位置づけがなされていると推計された。

3）裸体時と着装時いずれも、現代に於いては、身体の健康度
と自己評価の関連が明確に現れ、健康度が高い群において自己評
価が高くなっていた。

4）現在ダイエット中の者は、過去の経験者や経験がない者よ
り装いや化粧品の購入額が大きく、装いへの志向が強いと推計
された。ダイエット経験と健康度には関連が見られなかった。

2F-01 大学生における手縫いの基礎的技能に関す
る実態調査
○前田亜紀子（群馬大）

目的 小学校家庭科における被服領域の学習では、衣服の手入
れとして「ボタン付け」や基礎的・基本的知識・技能である
「手縫い」の指導を行っている。これら手縫いの技能を児童に
習得させるため、教師による適切な指導が必要である。本研究
では、家庭科の被服製作における児童の手縫い技能の向上を目
指し、これらの技能を分析・把握することで、教師による適切
な指導の方法を検討・提案することを目的とした。

方法 小・中学校、高等学校で家庭科を学んできた大学生888
名（男子186名、女子694名）を対象に質問紙による手縫いおよ
び家庭科に対する意識調査を行った。また、大学生104名を対
象に手縫いの実技試験および終了後アンケートを実施した。有
効回答数（率）は90名（95.2％）であり、うち52名は意識調査
と実技試験において同一の被験者であった。

結果 大学生を対象とした質問紙調査と実技試験から、手縫い
の技能の実態と経験、習熟度を明らかにした。また、習熟度の高い
なことは、小学校での学びがその後の学校段階で固定さ
られてしまうことから、正しい方法を教えることが重要であ
った。一方、低習熟度の学生において、教員が手縫いの基本的
な指導を行なうことが必要である。手縫いの技術を活かすため
に、より具体的な指導が必要であると指摘された。

2E-04 低酸素状態におけるアロマテラピー繊維の
身体に及ぼす心理的効果
○高橋哲也1, 林誠2, 渡邉裕大2, 松本健太郎3, 庄野栄作3
(1島根大, 2ダイワボウレーヨン(株), 3大和紡績(株))

目的 アロマテラピーは、認知症の進行を遅延するなどの嗅覚
作用療法として期待されている。しかし、加齢に伴って嗅覚
が低下することも知られている。低酸素環境は血中酸素濃度
を下げるため、模擬的に高齢者の心肺機能を再現するものと推
定される。本研究では、低酸素状態でのアロマテラピーによる心理的効果を検討し、生理応答に及ぼすリラックス効果を計測した。

方法 ラベンダー精油を芯剤とするマイクロカプセル（粒径：
2.0~2.3μm程度）を付着させたポリオレフィン系不織布をマ
スクに装着して使用した。近赤外線分光法 NIRS、心拍変動、
血中酸素濃度の測定を行った。女子大学生に限り30人を対象と
した。

結果 低酸素状態では、前レストから聴香タスクにかけて
NIRS の Hb 変化信号の値が低下した。つまり、香りの影響
を受けて生理応答としてはリラックス状態になっていることが
分かった。また、聴香タスクから後レストにかけては再びその
値が上昇していた。つまり、聴香を終えた後レスト時では、脳
の活動が活性化していることが分かった。一方、低酸素状態にお
いては、前レストに比べて聴香タスクにかけて HB 化学量の
値が下降するものや、後レスト時にはさらに低下することも分
かった。このことは、園芸の身体に及ぼす心理的効果に関する
考察である。
目的：幼児期における手指の巧緻性の測定方法に関する検証

○高橋美登梨1, 鳴海多恵子1, 道下彩子1, 川端博子2
(1) 東京学芸大, (2) 埼玉大

方法：2011年~2017年に東京都および埼玉県内の幼稚園3園に通園する3歳児学年~5歳児学年の延べ575名(12グループ)の幼児を対象に手指の巧緻性を測定した。検査項目は「ペグ移し」,「ビーズ通し」,「ひも結び」,「ひもとき」の4種である。

結果：(1) いずれの測定項目でも月齢との間に有意な相関がみられ,月齢とともに発達するといえる。ペグ移し,ひも結び,ひもときは月齢が低いほど個人差が大きいのに対して,ビーズ通しは月齢に関わらず一定の個人差が見られた。 (2) 被験者のグループごとに男女間でt検定をした結果,ビーズ通しは5グループ,ペグ移しは2グループ,ひも結びは4グループ,ひもときは4グループで有意差が認められ,いずれも女児のほうがよい成績であった。男女差が認められる場合には女児の手指の巧緻性は高いことが示唆された。 (3) 学年ごとに検査項目間の相関をみると,ビーズ通しのみがいずれの学年でも他の項目と有意であった。ビーズ通しは他の3種の動作の特徴を含み,検査も簡便でありかつ測定誤差も少ないことから,幼児期における手指の巧緻性を測定する方法に適していると考察される。

目的：日本人女性の下腿と足における冷感受性

○深沢太香子
(京都教育大)

方法：各群の被験者は,7名から10名であった。被験者にはトップスとショートスパッツを着用させた。実験は,気温28.2±1.1℃,相対湿度40.1±5.2%,風速0.3m/sの温熱環境下で実施した。

結果：初期皮膚温には,年齢と部位による差異が認められた(各p<0.001)。特に,20代群の足の皮膚温は,他群のそれよりも低い状態にあった。また,下腿の皮膚温は足のそれよりも高値を示した。冷覚知覚時(20代群の冷覚知覚皮膚温は,20代群のそれよりも低値を示す傾向にあったもの)の有意差が認められたのは,20代群と30代群の足底足幅内側の部位であった。冷覚知覚時の熱流束を閾値とした場合,年齢と部位による違いが認められた(各p<0.01)。20代群の冷覚閾値は,30代群と40代群のそれよりも小さく(各p<0.01),冷たさを知覚しやすいことがわかった。下位検定の結果,20代群の足底足幅外側の冷覚閾値は,他2群のそれよりも有意に小さいことが明らかとなった。

目的：布・空気積層系の熱伝達におよぼす布の作用

○今井素恵, 藤澄美仁, 上甲恭平
(椙山女大)

方法：閉鎖系測定ユニットを有する熱伝達測定装置により温度測定を行った。測定部は熱源平板とシリコンゴムシートを密着させ,試料および空気層,ポリカーボネートで構成した。試料は単一布2種,積層布1種および接着試料2種の計5種を用いた。閉鎖系測定ユニットに試料を挿入した場合と未挿入の場合の系の放熱量,系の温度差,総合熱伝達係数を検討した。

結果：閉鎖系測定ユニットに試料を挿入した場合の熱伝達は,未挿入の場合よりも低くなった。試料を挿入した閉鎖系内の総合熱伝達係数は,未挿入の場合よりも小さいが,空気層の厚さが大きくなると小さくなった。この原因は,系内の熱伝達が対流,伝導,放射によるもので,対流による熱伝達の寄与が大きいことに関係していると考えられる。
口頭発表  5月30日（土）

21-01  福島県における江戸期婚礼献立の比較
09：30～  一福島市・郡山市・相馬市—
○津田和加子1，菊池節子2
（1佐原大，2郡山女大）
目的  福島県中通りの福島市，郡山市及び北の相馬市の江戸期婚礼献立を比較し，地域の特徴を明確にすることを試みた。
方法  福島県内の博物館，歴史資料館等に寄託されている献立と日記を紹介し，献立構成や使用されている食材を比較した。
献立A（嘉永5年：1852）は白河藩分領，上飯坂村（現福島市飯坂町）の堀切家の資料である。献立B（安政5年：1858）は二本松藩領，大槻村（現郡山市大槻町）の安斎家のものである。
献立C（慶応2年：1866）は，相馬鎮中村（現相馬市）の吉田屋の番頭源兵衛によって書かれた日記を基にした。
結果  献立A，Bは，現在の三々九度にあたる「酒礼の部」の後に，飲物と肴が出される「酒肴の部」があり，最後に飯汁のある「本膳の部」が出された。献立Cは「本膳の部」の後に「酒肴の部」があった。献立Aは三ノ膳まで，献立B，Cは二ノ膳まで出されていた。

21-02  居住形態の異なる大学生における日本の家庭料理（和食）の喫食状況の違い
09：45～
○平島円1，磯部由香1，堀光代2
（1三重大，2岐阜市立女短大）
目的  これまでの調査では，大学生の和食の認知度は高く，喫食経験は多かった。しかし，多くの和食を作ることができなかった。そこで今回は，学生の居住形態により喫食状況を分析し，今後の和食の選ばれ方を検討した。
方法  和食24種と緑茶の喫食頻度と供食方法（手作り，購入，外食）の調査を平成28年度に学生509名を対象として行った。学生を自宅生と下宿生に分類し，喫食頻度と供食方法の違いについて分析した。有意差検定にはχ²検定を用い，有意水準は5％とした。
結果  全学生が月に1回以上食べる喫食頻度の高い和食は，25種中12種だった。これらの12種について居住形態により比較すると，みそ汁や焼き魚など10種の和食において自宅生のほうが下宿生よりも喫食頻度が高かった。差のなかったものは緑茶と豚汁だった。また，手作りの料理を食べること割合75％以上と高い和食は14種だった。これから16種の和食について居住形態の違いをみると，肉じゃがやかぼちゃの煮物など15種の和食で，自宅生の方が手作りのものを作る割合が高かった。ゆずの果実レモンに関する表示を気にする学生は極少数であったが，そのような表現から受けた印象は「良い，美味しい，個性的，食べたい」と答える学生が過半数を占めた。しかし，値段が高い印象を持つ学生も多く，購買意欲を持つ率は低かった。試食後，日頃から食べている醤油を好む学生と木桶醤油の複雑な味わいを好む学生にそれぞれ分かれた。

21-03  木桶仕込み醤油に対する印象と評価
10：00～  木桶仕込み醤油に関する印象と評価
食品・栄養系大学生へのアンケート調査および官能評価の結果
○福留奈美
（東京聖栄大）
目的  近代工化の中で発酵・醸造用木製容器の使用は激減した。伝統的な木桶仕込み醤油は全生産量の1％程度とされ，日本の発酵文化における木製醸造の存続が危ぶまれている。若い世代の大学生がこうした伝統的製法の調味料にどのような印象・評価を持つかについては管見の限り先行調査はなく，和食文化の保護・継承の観点からも概要をとらえる必要があると考えた。本調査はその第一歩として，木桶仕込み醤油に対する大学生の印象・評価を明らかにすることを目的とする。
方法  管理栄養，食品学科の大学生各約80名を対象に2つの調査を行った。醤油に関する授業の前後で行ったアンケート調査では，「木桶仕込み」等の表記が醤油ラベルにある場合の印象と食品表示で気にする項目について質問した。官能評価では，木桶仕込み醤油2種と大手メーカーの醤油1種を実際に味わい，味，香り，好みの評価を行った。
結果  ラベル表示で気にする内容は，会社名に次いで銘柄，成分に関する表示を選ぶ率が高かった。仕込み容器や天然醸造に特に気を使う学生は極少数であったが，そうした語句から受けた印象は「良い，美味しい，個性的，食べたい」と答える学生が過半数を占めた。しかし，値段が高い印象を持つ学生も多く，購買意欲を持つ率は低かった。試食後，日頃から食べている醤油を好む学生と木桶醤油の複雑な味わいを好む学生にそれぞれ分かれた。
目的 1970〜1990年代にかけ、旧久美浜町（現・京丹後市）川上小学校では「地域にねざした教育」が展開された。それは、時代の影響などから子どもたちに生じた変化を教員らがいち早くとらえ、地域や保護者とともに学校教育を創造するものだった。なかでも1976年から実施された米飯給食は食育の先駆けとされ、食教育分野で注目されてきた。本研究では、給食を通じた教育活動が盛んに実施されたと考えられる1976〜1987年度頃を経験した卒業生に対してインタビュー調査を実施した。当時の給食について話を聞き、卒業生の視点から見た川上小学校の給食の特徴を明らかにする。

方法 2019年6月及び7月、同意を得た川上小学校卒業生を対象に、同一調査者による個別インタビュー調査を実施した。本研究の分析対象は小学校在籍期間が1973〜1990年の間にあたる、40代から50代の卒業生6名（男性3名、女性3名）である。インタビュー時間は1人約2時間だった。インタビュー内容は、給食の印象や好きなメニュー、給食の様子について覚えていっていること、給食に関するエピソードなどである。

結果 インタビュー結果について、共通して語られる内容を中心に整理したところ、卒業生（当時の児童）にとって①学校だけでなく家庭や地域の人たちが関わる給食の営みであったこと。②作り手や食材について日常的に理解を深める教育環境であったことが給食の特徴として挙げられた。

目的 ピビフェリン酸はヒノキ科サワラから単離されたジテルペンで、ローズマリー由来カルノシン酸と類似の化学構造を有する。これまで我々はピビフェリン酸の血管新生及びリンパ管新生抑制作用を見出しているものの、ピビフェリン酸の経口摂取による有効性は未解明である。そこで、ピビフェリン酸摂取による抗老化効果を明らかにするため、老化促進マウスへの投与実験を行った。

方法 早期学習記憶障害モデル動物として確立されている老化促進マウス（P2/P8 line of the senescence-accelerated mouse model: SAMP8）を用いて検討した。12ヶ月に亘ってピビフェリン酸溶液を自由摂取させた。対照群には蒸留水を自由摂取させた。飼育期間中に老化判定や新奇物体認識試験等の行動科学試験、握力測定等の運動機能測定を行った。また、飼育終了後に筋肉量の測定や血液生化学検査を行った。

結果 老化判定について、「眼周囲病変」や「毛の光沢」の項目について、対照群と比べピビフェリン酸摂取群で老が抑制されていることが分かった。また、新奇物体認識試験において、対照群では既知物体と新奇物体へのアプローチに差がなかったものの、ピビフェリン酸摂取群では既知物体に比べ新奇物体に対するアプローチが増加し、加齢に伴う脳機能低下に対する保護効果が示唆された。握力や筋肉量について両群に有意な差は見られなかった。
目的 青森県産りんごの収穫量は年間約45万6千トンで、日本
のりんご収穫量の約60%を占めている。りんごはバラ科のりん
go属であり、近年では新品種の試作が盛んで、たくさんの品種
が市場に出回っている。りんごは乳幼児から高齢者まで栄養を
補うのに適している食材であり、また、食生活に彩りを与えて
くれる親しみのある食材でもある。

本研究では、青森県産りんごの品種の異なる食品成分の特性
を比較するため、糖質、有機酸、硬さ、色彩を測定した。さら
に、簡単なアンケート調査を行ったので、報告する。

方法 試料は令和元年9月から11月に青森県で収穫されたりん
ごを用いた。品種は、ふじ(サンふじ、有袋ふじ)、早生ふじ、
シナノゴールド、ジョナゴールド、紅玉、陸奥、ぐんま名月、トキ、王林、金星について調べた。各種糖量および有
機酸量は、NH2P-504EカラムおよびKC-811カラム(Shodex)
を用いてHPLCにて測定した。硬度は果実硬度計KM-1、色彩
はコニカミノルタCR-400を用いた。

結果 各品種の糖量は14.1~9.5%で、早生ふじ、サンふじ、
トキの順で糖量が多かった。硬度はサンふじ、陸奥、シナノ
ゴールドが高かった。色彩を測定した結果、果肉のL*(明度)
が最も高かったのは紅玉であり、a*(赤色)は早生ふじ、b*
(黄色)は王林が最も高かった。

※本研究は青森県りんご対策協議会の協力により行いまし
た。心より感謝申し上げます。

目的 近年、健康寿命の延伸につながる老化の進行抑制に関心
が高まっている。食生活の観点から注目されているのが、腸内
環境を適正に維持するのに役立つ発酵食品である。われわれは
発酵食品に使用される食用微生物について検討を進め、納豆
摂取が老化の進行を遅らせる可能性を見出している。本発表で
は、その有効性の再現実験と作用機構の検討結果について報告
する。

方法 実験動物として、老化促進モデルマウス（senescence-
accelerated mice P8: SAMP8）を使用した。飼料は、殺菌済
み納豆菌体（池田糖化工業（株））をMF飼料（オリエンタル
酵母株式会社）に0.1%および1%配合した飼料（0.1%および
1%納豆菌投与群）を含まない飼料（対照群）を一定期間投与
した。脳機能の評価は行動科学試験によって行い、運動機能の
評価は握力測定で行った。老化度の評価は老化度評点法で行っ
た。作用機構については消化管を中心に検討した。

結果 平均体重は2つの納豆菌投与群の方が対照群よりも重
く、体重変動のパターンは前回の投与実験と似ていた。一方、
行動試験（オープンフィールド試験、新奇物体認知試験）およ
び握力測定も前回と同様に納豆菌摂取の影響は見られなかっ
た。一方、老化度評価では、納豆菌投与群で老化の進行が抑制
されており再現性が確認された。また、その作用機構として消
化管保護による可能性が示された。

目的 閉経前女性における口腔内脂肪酸感受性は、加齢、血中女性ホル
モン濃度、高脂肪の食習慣、気分プロフィールなどの影響を受
けると考えられるが、その詳細については不明な点が多い。近
年、脂質摂取量に影響を与える要因として口腔内脂肪酸感受性
が注目されている。そこで本研究では、若年と中高年の閉経前
女性を対象に、加齢が口腔内脂肪酸感受性を変化させ、脂質摂
取量に影響を与える可能性について検討した。また、気分プロ
フィール（POMS）の影響についても検討を加えた。

方法 健康な若年女性19名（19歳～22歳）と中高年女性9名
（44歳～51歳）には、月経期の任意の1日に実験に参加いただ
き、口腔内脂肪酸感受性を測定した。濃度の異なる21種類のオ
レイン酸サンプルを用い、全口腔法・3肢強制選択法にてオレ
イン酸検知閾値を測定した。さらに、実験日後2日間の食
事・活動量調査を行った。加えて、陰性感情の指標として
POMSよりTotal mood disturbance（TMD）を評価した。

結果 若年と中高年女性を比較すると血漿エストロゲン濃度に
は差がなかったが、プロゲステロン濃度は、中高年では若年女
性的約60%に減少した。しかし、閉経前女性において、口腔内
オレイン酸感受性は年齢差は見られず、脂質摂取量においても
加齢の影響は認められなかった。加えて、TMDは若年女性に
比べ中高年女性では高値を示したが、TMDと脂質摂取量との
間に関連はなかった。
家政学原論・家族・児童
1号館 2階（K会場）
9:30～10:45

口頭発表 5月30日（土）

2K-01 持続可能な社会を創るグローバルシティズンシップの理論構造
―国際連盟『連帯』の自然共生と共生社会の原理から―
○小野川裕子（共立女大）

目的 国連の2030年までの「持続可能な開発目標（SDGs）」では、「地球上的誰一人として取り残さない」と人間生活に着目しており、目標4教育の7に示された人権とグローバルシティズンシップは、SDGs達成に必要な人間の資質と考えられる。本研究では、人権の実践的理論といわれる社会保障有志の国際連盟『連帯』から、持続可能な社会を創るグローバルシティズンシップの理論構造を分析する。

方法 (1)国際連盟のパンフレット『連帯』について、著者の経歴と国際連合への影響から国際的意義を考察する。 (2)「連帯」第一編『自然共生の科学的原理』と第二編『共生社会の実践的原理』の内容分析から、グローバルシティズンシップの理論構造を分析する。

結果 (1)国際連盟の前身である国際連盟の初代議長であるレオン・ブルジョワは、19世紀後半の産業革命による格差問題解決を、慈善活動に頼らず、個人の平等な権利実現のための正義の重要性を明確にし、人権の実践的理論として『連帯』を集成した。国際連合の世界人権宣言の第25条と第29条に影響を与えている。 (2)人間は自然と共生し、科学研究として連帯しているが、その相互依存関係は必ずしも平等ではない。しかし社会的存在である人間は実践的義務として連帯している。協働して対話により正義を見出し、共生社会が形成される。自由権・参政権・平等権・社会権の発展過程からグローバルシティズンシップの理論構造を具体化した。

2K-02 地方の家庭科研究会だよりにみる小学校家庭科の展開
―「鹿内瑞子旧蔵資料」をもとに―
○八幡彩子（熊本大）

目的 演者は「鹿内瑞子旧蔵資料」をもとに、戦後における小学校家庭科の展開過程について研究を進めている。すでに、全国小学校家庭科教育研究会の発足過程について報告を行ったが、地方の研究組織の発足・展開過程の検討は十分ではない。今研究では、「鹿内瑞子旧蔵資料」に散見される地方の家庭科研究会だより資料として、地方における小学校家庭科の展開過程を検討することを目的とする。

方法 国立教育政策研究所教育図書館所蔵「鹿内瑞子旧蔵資料」の中、各都道府県等の小学校家庭科研究会が発行した家庭科研究会だより（横浜、山形、群馬、東京、近畿等）を抽出し、地方における小学校家庭科研究会の動向を把握・検討する。

結果 (1)検討資料中最も発行の早い「東京都家庭科ニュース」（昭和33年9月10日発行）は、昭和33年8月の学習指導要領改訂がどのように受け止められたのかを費用する資料である（資料番号365）。 (2)「山形県小学校家庭科教育研究会だより」No.1（1964年2月発行）によれば、同研究会の設立は昭和38年9月18日、全国小学校家庭科教育会の発足と連携して組織化が進められた（資料番号355）。 (3)全大会の地方開催を機に、ブロック研究会が立ち上げられていたことが確認される（資料番号356）。

本研究の一部は、JSPS科研費17K00758の助成を受けた。

2K-03 高校生向け伝統工芸デザインコンクールの開催意義と進路選択に及ぼす効果の考察
―伝統工芸品「博多織」の後継者育成に向けた取り組みを通じて―
○大淵和憲（九州産業大）

目的 「博多織デザインコンクール（以下、博多織DC）」は、国指定の伝統的工芸品「博多織」の製織技術後継者を育成している。この学校が主催する「博多織デザインコンクール（以下、コンクール）」には、多くの高校生が寄向向けの意匠作品を応募し、優秀作品については博多織DCの学生が意匠データを作成し製織作業を行ってきた。本研究では、伝統工芸品の後継者育成に向けたコンクールの開催意義を検討し、高校生の伝統工芸に対する興味関心の向上に寄与しているかを考察することを目的としている。

方法 コンクールの開催状況や参加人数等の基礎データを集約した上で、優秀作品の意匠データ作成から製織作業に至るまでの工程を整理した。また、作品を応募した高校生に記入式の質問紙調査を実施し、「着物や帯、博多織への関心の変化」および「将来、着物や帯を作ることについているか」等の質問項目について回答を求め、コンクール参加を通じた高校生の興味関心の向上に寄与しているかを検証する目的をもとに採択した。

結果 コンクール優秀作品が博多織後継者候補者の製織技術向上に生かされている現状を通じて開催の重要性が明らかとなっただけ、高校生への質問紙調査を通じて、コンクールへの応募を契機に和装・博多織への興味を増している可能性があることがわかった。しかし、進路の選択肢に相談・博多織業界を含めるまでには至っていない可能性があることも判明し、今後開催意義の再検討が求められるこ指摘した。
目的

口頭発表 5月30日（土）

2K-04 母育中女性が働く場としてのNPO活動の検証

―均等法第一世代のキャリア変遷におけるNPOの位置付け―

○赤松瑞枝（跡見女大）

目的 我が国では少子高齢化に伴う労働力減少への対策が喫緊の課題である。筆者は育児中女性の働き場を多様化し復帰率向上に努めることができ有効と考え実証を試みている。今回はNPOに着目し育児と両立しうる職場となり得るかの検証を目的としてした研究（小田急財団2018年度研究助成採用）を行った。その中からメンバーのキャリア変遷におけるNPOの位置付けについて分析した結果を報告する。

方法 神奈川県横浜市で育児中女性の再就職支援を行っているNPOの主要メンバー12名を対象にヒアリング調査を行った（2019年8月〜9月）。実施にあたり跡見学園女子大研究倫理審査委員会の承認（承認No19-003）。

結果

（1）対象者のうち8名が均等法第一世代で、全員結婚や出産に就職活動で大学卒業後得到した仕事を退職したが、その後資格取得やアルバイトなどでセカンドキャリアを構築した。（2）その経験から対象者達は、育児中でも本人が希望するなら仕事をすべき、周囲も支援すべきと考えている。またNPO活動をセカンドキャリアを活かして社会貢献する場として捉え、収益を上げられる事業として安定的に継続させることを目指している。（3）従って当該NPOは育児中女性が働きやすい環境にあると言える。学童期の子を持つメンバーも「育児しながら実践的な経験とスキルを得られる」と評価している。これは、事業収益確保については未だ課題が多いことも明らかになった。

2K-05 幼児期の食育についての意識

―箸の作法を中心に―

○篠原久枝（宮崎大）

目的 我が国における「箸」の使い方や作法の指導は食文化の継承として大切なものである。食事スキルの獲得として、幼児期に食具の正しい使い方を定着させること、学童期に食事マナーを確立させることが望まれている。そこで本研究では、幼稚園児を持ち保護者と教員養成系の大学生を対象に箸の作法や食事マナーの指導の意識について調査した。

方法 2019年12月にM大学附属幼稚園保護者とM大学生を対象に質問紙調査を実施した（保護者配布数119部、有効回答数101部、大学生配布数138部、有効回答数127部）。

結果 箸の持ち方については、幼児の約6割、保護者の約9割、大学生の約8割が「伝統型」と回答しており、保護者は就学前に正しく持てるようになることを望んでいた。矯正箸の使用の効果について「正しい指の位置がわかる」、「自然ときれいな持ち方になる」などの利点が見られた一方で、「なかなか箸に移行できない」などの欠点も見られた。保護者も大学生も、伝統型の持ち方をしている方は母親、家族から厳しい指導を受けていた。嫌い箸の指導については、保護者も自分が受けた指導と同じものを幼児に対して行っていた。食事マナーの指導については、家庭で行うべきと考えていた。一方、大学生はこれら指導の難易度や学習方法についても考慮しており、指導意欲は高かっただろう。それにより、箸の作法や食事マナーの指導については、家庭と園・学校の更なる連携が望まれる。
104

食 物

6号館 1階（B会場）
9:15～10:45

3B-01 グルテンフリー米粉パンの製パン性に対するアミロース含量と加水温度の影響
○大河内万彩1,齋藤公美子1,武智多与里2,畠中芳郎3,萬成誉世1,高村仁知1（1奈良女大,2千里金蘭大,3（独）大阪産業技術研究所）

目的 これまで私たちは、米粉パンを調製する際に加える水の温度（加水温度）を高温に設定することで、デンプンを部分的に糊化させ、生地粘度を上昇させることにより、製パン性を向上させることを明らかにしてきた。一方、米粉のアミロース含有率はデンプンの糊化特性に影響するが、米粉パン調製においても品質に影響することが明らかになっている。本研究では、グルテンフリー米粉パンの製パン性に対するアミロース含量と加水温度の影響を明らかにすることを目的とした。

方法 アミロース含量の異なる米粉を用い、加水温度を50～80℃、2℃刻みで変えて生地を調製し、生地の物性評価（粘度測定、糊化度測定）および形態評価（電子顕微鏡観察）を行った。同様の条件で米粉パンを焼成して、製パン特性評価（発酵性、品質等）を行った。パン生地の糊化度と焼成パンの品質を比較検討し、パン生地のアミロース含量と加水温度が製パン性に及ぼす影響を解析した。

結果 高温の水を添加することで、温度上昇とともに生地粘度が上昇した。パン生地調製時、高アミロース米では高温の水の添加により焼成パンの品質が低下したものの、低アミロース米では加水温度が66～70℃の時、製パン性の向上が認められた。パン生地の糊化度測定および製パン特性評価の結果から、低アミロース米では糊化度5-10%の範囲で品質の良いパンを焼成できることを確認した。

3B-02 生地の特性がキヌアパンの製パン性に与える影響
○石井和美1,小林三智子1（十文字学園女大・院）

目的 雑穀粉を主材料としてパンを調製することが最終目標である。本研究では、キヌア粉を主材料として増粘多糖類を添加して食パンを調製し、生地の特性が製パン性に与える影響を検討した。

方法 キヌア粉に増粘多糖類3種を添加し、粉の特性として糊化特性を測定した。また、キヌア粉と基本的な副材料を使用して卓上ミキサーで生地を調製し、発酵試験を実施した。生地の動的粘弾性は20℃から90℃まで昇温して温度依存性を測定した。ドライイーストを添加して食パン型でパンを焼成し、パンの特性として、比率、テクスチャー測定を実施した。

結果 キヌア粉（以下、コントロール）の糊化開始温度は62.8℃で、MCE-4000を添加すると低下した。他の2種はコントロールとはほとんど変わらなかった。MCE-4000を添加した場合、ピーク粘度および最低粘度はコントロールより高くブレインダウンも高かった。しかし他の2種は粘度のカーブが突然コントロールより低かった。動的粘弾性の温度依存性は、初期の貯蔵弾性（G′）はコントロールが最も低く、G″の最大値は最も高かった。損失弾性率のカーブも同様だった。焼成したパンは、MCE-4000を添加して調製したもの以外はケーシングを起こした。増粘多糖の添加で膨張性が増し、粘度要素は増加すると考えられ、溶存の段階で気泡を維持できず、ケーシングを起こしたと考えられた。

3B-03 ホワイトソルガム粉の製パンへの利用Ⅱ
○片山佳子1,大貫拓馬1（東京聖栄大）

目的 ホワイトソルガムとはグルテンを含まないことから小麦アレルギーの人々には小麦代替品として利用されている。しかし、ソルガム粉を用いたパンは風味が無く、焼くと焼くと硬くなりバタつきのある食感という問題があり、それらの改善が求められている。本研究では、ホワイトソルガム粉を用いた食パンの製造を目的とした。

方法 試料調製はソルガム粉を主原料に米粉、ヒドロキシプロピル化タピオカデンプン、もち種とうるち種のコーンスターチ、ヒドロキシプロピル化リン酸架橋馬鈴薯デンプンを副原料として出発し配合した製パンを行った。物性測定は透視顕微鏡測定と肉眼での観察を主にした。結果物性測定の結果から市販品配合のパンは、最も硬くもろいパンで弾力性に欠けることが多かった。他の配合では、粘りさしごりや差は見られなかったが、馬鈴薯デンプンは、最も柔らかく弾力性に富んだパンとなり、ホワイトソルガム粉を用いた製パンには複数の特性が見られた。
**3B-04**

ミルクゼリーの性状に及ぼす植物性ミルクの影響

○松本美鈴

（大妻女大）

目的：豆乳、アーモンドミルクなどの植物性ミルクには乳糖やカゼインが含まれないため、乳糖不耐症や牛乳アレルギーの人の中牛乳代替品として利用される。植物性ミルクがゲル化剤の調理性に及ぼす影響はあまり報告されていない。本研究では、数種のゲル化剤を用いミルクゼリーを調製しその性状に及ぼす植物性ミルクの影響を検討した。

方法：<材料・配合>

- 植物性ミルク：豆乳とアーモンドミルク、対照として牛乳を用いた。
- ゲル化剤の使用濃度：粉末寒天0.6%，ゼラチン2.5%，コーンスターチ10.0%，各種ミルク濃度は50.0%，上白糖濃度は8.0%とした。

<試料調製>

- 各ゲル化剤は、所定の方法で膨潤溶解あるいは加熱糊化し、10℃で18時間冷却後、直径3cm円柱状に成形し、測定試料とした。

<測定項目>

- 色調、離漿率を測定し、破断試験、官能評価（7段階尺度評点法）を行った。

結果：ミルクゼリーの色調は、いずれの試料も白色系であったが、豆乳試料は他のミルク試料よりb*値が高値で黄色みを帯びていた。破断試験の結果、寒天の場合、破断歪率、破断応力ともに牛乳試料が最も低値であり、植物性ミルク試料のほうがかたく崩れにくかった。ゼラチンの場合、いずれのミルク試料間にも有意な差が認められなかった。コーンスターチの場合、破断歪率、破断応力ともにアーモンドミルク試料が最も高値で、次いで牛乳、豆乳の順であった。ミルクの種類よりゼリーの物性が異なった。

**3B-05**

天ぷらのおいしさの評価—蛋白質食品と野菜類について—

○小林由実

（中部大，*石田康行1, 小川宣子1）

目的：おいしい天ぷらを揚げるために揚げ温度や時間を調整するが、家庭では温度計やタイマーに頼らず視覚的に判断することが多い。これまで油の表面情報から天ぷらの出来上がりが推測できる可能性を澱粉性食品から報告してきた1）。本研究では、蛋白質食品、野菜類について、揚げ過程の油の表面情報から天ぷらのおいしさが評価できるか、揚げ過程の油の表面情報と素材、衣の変化を調べた。

方法：天ぷらは蛋白質食品としてえび、野菜類はアスパラガスを用い、揚げ温度はえびは180℃、アスパラガスは170℃で作成した。天ぷらの指標として素材の硬さ（クリープメーター）、水分量（常圧乾燥法）、えびは水溶性蛋白質（電気泳動）、アスパラガスはVC量（HPLC）、衣のサクサク感は破断強度解析（クリープメーター）の微分波形から調べた。また、官能検査（順位法）によるおいしさの評価を行った。揚げ過程の油の表面情報は天ぷらの指標や官能検査に深く関わっていることがわかった。

文献
1) 小林他：日本家政学会第70回大会研究発表要旨集，p61（2018）

**3B-06**

栄養学専攻女子大学生の食事づくり力と自己評価料理作成能力及び食行動の関連

○駒場千佳子

（女子栄養大，*神保夏美，*野原健吾）

目的：食生活が多様化する中、食事を整える力の低下は食事の質や健康に影響する懸念がある。そこで、女子大学生の食事づくり力（自分の心身にあった食事を構想し、整える力）と自己評価による料理作成能力及び食行動の関連を検討した。

方法：2019年4月に栄養学専攻女子大学1年生343名を対象に質問紙調査を行った（回収率82.8%）。属性、食事づくり力、58料理（肉じゃが、生姜焼き等）の認知、自己評価料理作成能力（本などを見ずに作ることができる，本などを見ながら作ることができる，作ることができない）、食行動との関連を検討した。食事づくり力は駒場らが開発した質問紙（2014）で、小学校時代の食事づくりの手伝い、中高校時代の主体的な食事づくり、食事づくりのイメージを描く力、調理に対する家族の積極的な態度の4つの下位尺度（18項目最高90点）である。

結果：有効回答者249名の食事づくり力得点（平均±標準偏差）は58.1±13.9点で、三分位で群分けした（高群79名74.0±5.5点、中群84名59.1±4.4点、低群86名42.6±7.0点）。食事づくり力高群は、58料理のうち知らない料理数が低群より少なく、自己評価料理作成能力では、本などを見ずに作ることができる料理数が、中・低群に比べて多かった。さらに高群は、主食・主菜・副菜の揃った食事をする頻度や、親や祖父母と食事を作ったり食べたりする時に料理の作り方を聞かれる頻度が高かった。

**3C-01**

瀬戸内海沿岸で養殖されたマガキ含有成分の季節および地域差の解析

○山下晴美

（岡山県大）

目的：Crassostrea gigas（マガキ）は、日本を含む世界中の多くの地域の沿岸部で養殖が行われ、食用とされている二枚貝であり、栄養価が高いことが知られている。本研究では、瀬戸内海沿岸の主要な養殖地域である広島、岡山、兵庫で養殖されたマガキに含まれる主要成分の分析を行い、収穫時期および養殖地域による違いについて解析し、その特徴を明らかにすることを目的とした。また周年成分変動についても検討した。

方法：試料は、2013年11月から2014年4月までの月々に岡山県、広島県、兵庫県で養殖、水揚げされたマガキを用いた。水分、灰分、タンパク質、および脂質の含有量は常法により、グリコーゲン含有量はアンスロン法により、脂肪酸組成はガスクロマトグラフィーを用いて、ミネラルは原子吸光光度法により、遊離アミノ酸はアミノ酸自動分析計を用いてそれぞれ測定した。

結果：測定した3つの地域のマガキに共通して11月から4月にかけて水分含有率の減少とグリコーゲン含有量の増加がみられた。マガキにはEPAやDHAの含有量が高く、遊離アミノ酸としてはグルタミンが最も多く含まれていた。岡山県および兵庫県産マガキは広島県産と比較して、水分含有率が低く、グリコーゲン含有量が高かった。広島県産マガキは塩分含有率が高い。マガキの水分、グリコーゲン、遊離アミノ酸、脂肪酸組成は季節によって変動することが示唆された。
目的 グルテンを用いない米粉パン製造は米粉バッタータイプが開発事例では多い。コメタンパク質はグルテンを形成することができず、それ故に米粉単独では十分な製パン性が得られない場合が多く、米粉パン製造においても鰹汁パン粘性を調整することにより製パン性が向上することを見出しているが、詳細な製パン条件を検討したので報告する。

実験方法 原料米粉は市販の米粉パン用米粉を用いた。米粉15gにミリQ水15mLを加え掻拌した後、RVA4500にて一定速度（800rpm）で攪拌続けたときの粘度を測定した。米粉バッターに20倍量の2% -SDS;5% -2ME を加えたものをSDS-PAGEで解析した。製パンはホームベーカリーを用いて行った。

実験結果 米粉/タンパク質分解酵素系では攪拌中の粘度上昇がみられたものがあった。米タンパク質のほとんどは水あるいは食塩水不溶性であるが、粘度上昇が見られたものについては、水可溶性画分が増加していた。この時、不溶性画分のSDS-PAGEではグルテリン画分が消失していたことから、不溶性のグルテリンが分解されることで可溶化され、粘度上昇を引き起こしたものと推察された。酵素なしの米粉パンの比容積は3程度であったが、バッター粘度上昇させる酵素を製パン材料に加えた場合、比容積が約4程度であった。米粉中のタンパク質分解を適切に制御することで良好な製パン性につながることが示唆された。

目的 新タマネギの葉は、通常可食部である球部分の出荷時に廃棄されているが、比較的抗酸化能が高いことが示されており、食品として利用する価値があると考えられる。一方、これまでに検討された新タマネギ葉の抗酸化能や味に関する検討は部分的なものであり、その特徴は明確でない。そこで、本研究では、新タマネギ葉の抗酸化能および嗜好性を詳細に明らかにした。

方法 新タマネギは淡路市産の極早生種である戎珠とし、その葉を用いた。比較には類似食品であるコネギ（伊万里市産）を用いた。両者は2019年2月に収集し、抗酸化能（総ORAC値およびDPPHラジカル消去活性）、抗酸化物質（総ポリフェノールおよび総ビタミンCなど）含量、味覚応答（味覚装置）および呈味物質（糖組成など）含量を測定した。嗜好性については中で状態で官能評価を行った。

結果 新タマネギ葉とコネギの抗酸化能および総ビタミンC含は同等であったが、新タマネギ葉の総ポリフェノール含量がコネギよりも高値を示した。新タマネギ葉の渋味刺激がコネギよりもやや低値を示したが、他の味覚応答および糖組成は両者で差はみられなかった。官能評価では、新タマネギ葉の色がコネギよりもやや悪く評価されたが、食感、呈味および香りの強度や好みと総合評価に差はみられなかった。以上より、新タマネギ葉はコネギと同等の抗酸化能と嗜好性を有し、特にポリフェノール類の供給源として有用であることが示唆された。

目的 日本酒は、我が国の伝統的な発酵食品である。日本酒は米・米麹・水を原料としてつくられ、酒粕は日本酒を搾った後に生成される副産物である。酒粕は、粕漬け、粕汁など様々な料理に利用されている。酒粕は、日本酒由来の香りや風味、旨味を呈し、アミノ酸やビタミン、ミネラルなど各種栄養成分を多く含んでいる。中でもレジスタントプロテインは、血中コレステロール低下作用や脂質代謝改善作用を示すことから、近年、健康効果も期待されている。一方、酒粕は副次的な食品であることに加え、食の洋風化などにより、家庭内での利用が減少している。そこで本研究では、酒粕を「松風」という蒸し菓子に添加した場合の物理特性や食嗜好性に及ぼす影響を検討した。

方法 松風の基本の材料は、薄力粉、砂糖、卵白、シロップ、イスパタとした。酒粕は、薄力粉の代替として0～50%まで段階的に添加した。松風は、高さ、膨化率、保形率、色彩構成、水分含量、かたさなどを測定した。官能評価は大学生を対象に試験を行った。

結果 酒粕の添加がかたさに及ぼす影響を検討したところ、酒粕の添加割合の増加に伴い、有意に低下した。膨化率は、酒粕添加割合の増加とともに有意に低下した。官能評価において、酒粕の添加により、松風のしっとり感と甘みが有意に強くなった。総合評価の結果から、酒粕10～30%の添加により松風の嗜好性が向上することが示唆された。
3C-06
口頭発表  5月31日（日）
黑茶の成分と味覚センサー値から見た風味の特徴
○内山裕美1, 伊藤淳子1, 長田朱美1, 阿南豊正2, 伊藤淳子2, 丹羽千秋2, 今井久仁子2, 大山佳夏2, 大沼弥恵子2, 越智桂2, 小川英之2, 岩崎剛3, 大森正司2, 武田善幸2
(1浦和実業高等学校, 2日本食行動科学研究所, 3埼玉県茶研)

目的 後発酵茶は黒茶とも呼称され、その製造工程に微生物が関係するところから、後発酵茶と呼称されているが、本来的には「発酵茶」と呼称されるべきものと考えられる。この意味は、紅茶、烏龍茶の製造工程である発酵工程には微生物の関与は認められない。つまり、茶葉そのものに含まれているカテキン類の酸化反応によるところが大であり、科学的には「発酵」とは区別されるべき現象であると考える。ただ、紅茶、烏龍茶は慣習的に長く、発酵・半発酵という言葉が用いられてきたので、急に言葉を変更することは混乱を招くことになるので、発酵操作には「酸化反応」と付記した方が好ましいと考えられる。日本や中国にはこれら黒茶に分類される茶が多数存在し、その嗜好性や効果効能などについても着目されてきているので、黒茶の化学成分と味覚センサーによる測定を行い、特徴について比較検討した。

方法 試料としては、日本国内における石鎚黒茶、碁石茶、阿波晩茶、バタバタ茶の4種、及び、プアール茶・茯茶・竹筒酸茶、ラペー茶、ミャンを用いた。各茶葉5gを1ℓの沸騰純水で5分間煮沸・浸出後、急冷・ろ過して測定用試料液とした。これを利用してカテキン、カフェイン、アミノ酸をHPLCで分析、次いで味覚センサーで各味覚強度を測定した。

結果 結果、いずれの黒茶においてもガレート型カテキンが大きく減少し、味覚センサーによる測定の結果、各黒茶におけるプロファイルはそれぞれ異なるものとして示された。

3D-01
3次元ディスタンスフィールドに基づく個別型トルソーの開発
○山本高美1, 中山雅紀2, 藤代一成2
(1和洋女大, 2慶応大)

目的 アパレル業界では、生産の流れに沿ったCAD・CAMシステムが導入されてきている。そこで本研究は、3Dスキャナによって採取した人体表面のポリゴンモデルから、3Dディスタンスフィールドを表現するボリュームモデルを構成し、密着衣料を主とするアパレルアイテムの設計を行うことを目的とする。そのため、人体のボリュームモデルを用いて、左右対称の3Dモデルを作成し、個別型トルソーを開発する。

方法 計測誤差を含む実験協力者の人体スキャンデータを用いて、ボリュームモデルの生成を行った。モデルデータの空間周波数における高周波成分を除去する3Dの平滑化フィルタリング処理をまず施すことで、計測誤差を除去した。次に、左右方向の体幹の傾き、正面方向の角度のずれを補正した上で、左右対称化のための対称軸を決めた。左右対称軸を中心にボクセルをコピーし、重複、非重複、空ボクセルの3種に分け、それぞれにスカラー値を与え、非重複ボクセルから周囲のボクセルへスカラー値を振り分けた後、一定の閾値で左右対称3Dモデルを作成した。そのデータを用いて、3次元切削加工機で発泡スチロールを造形し、個別型トルソーを開発した。

結果 開発した個別型トルソーを用いて、特に人体の凹凸が影響する、密着衣料のドレス等を作成する。これにより、一般的なトルソーでは得られないパターン作成ができるものと考える。

3D-02
3次元ディスタンスフィールドに基づく個別型トルソーの開発
立位と座位姿勢に適したズボンパターンの検討
○雙田珠己1, 角田千枝2, 阿崎誤公子3, 徳永千尋4
(1日本女大, 2相模女大, 3東京ちどり病院, 4日本医療科学大)

目的 高齢者が着脱しやすく、座姿勢に適し立位のシルエットも損なわないズボンパターンを作成し、前報1)の外観評価に続き着脱のしやすさについて改善効果を検証した。

方法 被験者は脳血管疾患による片麻痺患者で、立位でズボンを着脱する男性6名(58～85歳)。標準パターン（文化式製図法）と、それを立位・座位用に修正したパターンを作成しズボンを作製した。被験者は2種類のズボンを膝～胴囲間で上げ下げし、所要時間、上げ下げの操作回数、心拍数、加速度、作業療法士による動作評価を行った。また、3か月間着用し着脱性等を比較した。さらに、スウェットパンツを加え、2名について着脱時の筋電図と重心移動を測定した。

結果 (1)修正パターンは標準パターンに比べ、所要時間が短く、操作回数も少なかったが、心拍数と加速度には違いはなかった。修正パターンは、指・掌が入りやすいため生地を掴みやすく、過度な握りこみもなかった。また、後面を掴みやすいため体幹の回旋が減少し、効率よく操作できた。 (2)排泄時の着脱性の評価は分かったが、ゴムの強さ、生地の硬さに課題が残った。 (3)着脱時の積分筋電図(iEMG)と、重心移動(外周面積)は、スウェットパンツが最も少なく、修正パターンは標準パターンよりも少なく。 
本研究は平成29年度科学研究費基盤(C)17K00794の助成を受け行った。

文献1) 雙田珠己ら：家政学会第71回大会要旨集,p. 90(2019)

107
口頭発表 5月31日（日）

3D-03 高校生と母親の睡眠および皮膚温に関する検討
○水野一枝1, 水野康1, 前田亜紀子2（1東北福祉大, 2群馬大）

目的 高校生の睡眠に関する調査は多数報告されているが、睡眠と睡眠時の皮膚温に着目した研究は著者が知る限り見当たらない。そこで、本研究では、高校生の睡眠と睡眠時の皮膚温を、母親と比較検討することを目的とした。

方法 被験者は、書面による同意の得られた健康な高校生（男女、各11名）と母親の22組であった。測定期間は9月下旬～10月とし、測定はすべて被験者の自宅で行った。アクチグラフ、寝室内温湿度、皮膚温、寝床気候を測定し、睡眠前後に就寝状態や睡眠感、温冷感等を申告してもらった。

結果 寝室内温湿度は母親、高校生ともに21.2±0.6℃、60±2%であり、寝具や着衣の枚数に差は見られなかった。高校生で母親よりも起床時刻が遅く、活動指数が高かった。高校生と母親で睡眠効率や睡眠時間に差はなかったが、両者ともに平日の睡眠時間は6時間未満であった。睡眠時の胸の皮膚温、足部の皮膚温は高校生で母親よりも有意に低かった。高校生で母親よりも有意に主観的な就寝時の覚醒回数と発汗が少なかった。

結語 高校生では母親よりも睡眠中の活動量が多く、胸の皮膚温や足部の皮膚温が低く、睡眠時の体温調節機能が異なる可能性が示唆された。

＊本研究は平成29年度東北福祉大学特別助成研究費の補助を受けて実施された。

3D-04 3Dスキャンを用いたファウンデーション着用効果の測定
○潮田ひとみ（東京家政大）

目的 骨盤や姿勢などの各部位に応じて異なる補正効果を謳ったファウンデーションが広く販売されている。ファウンデーションの構造・構成によって補正効果がどのように異なるのかを明らかにすることにより、目的に応じた機能を持つファウンデーションを提案したいと考え、以下の測定を行った。

方法 骨盤矯正を目的として販売されているファウンデーション3種類とボディタイツ1種類を準備し、それぞれのファウンデーション着用直後と着用30分後について、立位時・階段の高さのあるごとの衣服圧ときつさなどに関する官能評価を被験者4名について行った。加えて、3Dスキャナを用いて、それぞれのファウンデーション着用直後と着用30分後の被験者2名のシルエットを測定した。

結果 腹直筋、中臀筋、大臀筋、大腿筋膜筋、大腿四頭筋、大脛二頭筋の6部位の衣服圧をエアパック法によって測定し、t検定によって測定値の差を検定した。着用直後と着用30分後の各部位の衣服圧を比較した結果、着用時間は経過しても衣服圧はかわらなかった。しかし、官能評価の結果からは、着用直後と着用30分後とは、大脛筋膜筋筋、中臀筋、大臀筋のつきさ感などに差が生じるファウンデーションがあった。3Dスキャナによって測定した着用直後と着用30分後のシルエットを比較すると、機能に付加されたいファウンデーションのいくつかについては、直後のシルエットよりも30分後のシルエットに姿勢矯正効果がみられた。

3D-05 夏季における大学生の温熱環境の実測調査—温熱環境の経時変化と環境評価の関係—
○萬羽郁子（東京学芸大）

目的 外気温の上昇により夏季の熱中症対策が課題となっている。また、夏季には冷房使用による体調不良など生じる場合もあり、適切な温熱環境への調整が難しい。近年では、IoTの進歩により、身の回りの環境の把握が容易になった。本研究では、小型の温湿度記録計を用いて大学生の夏の周囲温熱環境を把握するとともに、自らが暴露されている温熱環境の把握が環境調整行動に及ぼす影響について検討した。ここでは、温熱環境の経時変動と環境評価結果に着目して報告する。

方法 2018年7～9月に、大学生7名（男性2名/女性5名）を対象に実施した。温熱環境測定には環境センサ（OMRON、2JCIE-BL01）と専用アプリを用いた。被験者は、5日間、環境センサを携帯し、身の回りの温熱環境測定、環境評価、生活行動記録を行った。後半の3日間は、アプリを開いてデータを確認してよいこととした。

結果 環境測定より、著しい場面によって温度値は変化し、教室や飲食店、図書館の温度は自宅や電車に比べて低かった。環境評価では、30℃を超えると不快側の評価が増えるものの、個人差が大きく測定値と環境評価の相関は低かった。自宅以外での衣服等での環境調整行動は少なかった。熱中症危険度などをアプリで確認する様子もみられたが、活用頻度や方法にはばらつきがあった。

研究に協力頂きました東京学芸大学（当時）野口綾香氏、調査対象者の皆様に深く感謝致します。
3D-06 局所暖房器具使用による冷えの軽減に効果的温める部位に関する研究
○佐々尚美, 前田秀香, 山浦真唯
(筑波大学女)
目的 冷えを感じる人が多く、効果的に冷えを軽減できる事が求められている。本研究では、局所暖房器具を用いて、省エネを考慮しつつ、冷えが軽減できる部位を検討した。
方法 人工気候実験を2019年2～3月末に行った結果、皮膚温等の主観申告等を測定した。
結果 各部位の皮膚温は、手足に比べて上昇し、「脛」条件下で頭部が、「腹」条件下で腕部が、lıklでは頭部の方が上昇し、部位別の温感差は、皮膚温が上昇した部位は暖かい傾向を示したが、腕部はいずれの条件でも「やや暖かい」であり、条件による差は認められなかった。
全実験後の評価では、冷え軽減に効果が高かったのは、全身おおよと上半身の冷えでは「腹」、下半身の冷えでは「脛」であった。冷えを軽減したい部位により、温める部位を変更する効果が認められた。

3D-08 居心地の良好さを創出するグリーンインテリアに関する基礎的研究
○延原理恵, 田中靖香
(京都大学)
目的 今日のストレス社会において、オフィス環境にはストレス軽減効果を期待して、自然を取り入れた空間デザインを導入する企業が増えている。居心地の良い場である住まいでは、どのようなグリーンインテリアが居心地の良い場を創出しているのか、本研究では住空間におけるグリーンインテリアの居心地の良い構成要素を明らかにすることを目的とする。
方法 2019年10月～12月に、10代後半から20代の13名（男性10名、女性3名）を対象に、評価グリッド法によるインタビュー調査を行った。若年者を想定した部屋と異なる12種類のグリーンインテリアを用意し、グリーンインテリアを置いていない場合を含め計13種類の画像を用いて、居心地の良さの評価とその理由を聞き、評価構造を抽出した。
結果 グリーンインテリアの種類によって、居心地の良い評価の相違がある。グリーンインテリアのない部屋よりも良い評価のグリーンインテリアが存在している。それらは、エアプランツ、床置きサボテン、壁掛け多肉植物であった。評価が高かったのは、卓上サボテン寄せ植え、卓上ペペロミア、卓上多肉植物テラリウム、ポット紺土鉢などで、同種の植物でもその置き方やサイズで評価が異なっていた。「落ち着く」、「安らぐ」、「リラックスできる」空間は居心地が良いと評価され、それらにはグリーンインテリアの色やサイズ、種類、器のデザイン、好みなどが影響していることがわかった。
3D-10 社会実験への反復参加による道環境への意識の変化

○原わかな，薬袋奈美子（日本女大）

目的 住宅地内の道において，地域住民の滞留等生活行為を促し，歩きたくなる空間にするための社会実験を行う過程において，被験者が数回同じ社会実験に参加することにより，道環境や道における生活行為に対しての意識が変化するかを調べた。

方法 道路空間に，一回目の社会実験はベンチとプランターを配置し，二回目の社会実験は路面装飾の設えを施し，地域住民にそれらの空間を通行する体験してもらい，アンケート及びインタビュー調査に回答してもらった。一回目と二回目は二か月の間をあけて実施した。二回の実験の参加者（リピーター）と一回のみの参加者（非リピーター）の設えへの評価，道での生活行為への受容性等を比較分析した。

結果 リピーターは非リピーターと比較して，二回目の社会実験での設えへの評価が高く，特に「安心して歩ける」「楽しく歩ける」「人が優先の道と感じる」への五段階評価のTop1回答者が多い。且つ，各評価項目のbottom1の回答者が非常に少ない。また，リピーターの第一回と第二回の評価を比較することにより，非リピーターの結果よりも肯定的な評価が増加している。特に「安心して歩ける」「高齢者がゆっくり歩ける」「通常の状態と比較して歩きが楽になる」への評価は大幅に増加している。社会実験に参加して体験をすることで，新しい考え方を取り入れた道環境への受容性が高くなる傾向があると考察できる。

3D-11 婦人雑誌掲載記事からみた住居管理の変遷—1946年から1955年を中心として—

○藤平真紀子（奈良女大）

目的 本研究では，居住者を主体とする住まいの管理の変遷をたどり，これからの恒常的な住居管理のあり方を考察することを目的とする。住居管理のあり方の変遷を視点に，時代の流れて，人々の考え方，社会のありようが表れやすくなかった，生活に影響を与えると考えられる婦人雑誌掲載記事に着目した。

方法 1903年創刊の『婦人之友』を閲覧し，住まい，生活，住居管理に関する掲載記事を収集した。『婦人之友』は家庭生活の合理化を目指す中流知識層を読者とし，生活改善から社会を豊かにしていくという理念に基づき，生活改善運動の主導的役割を果たしたと位置づけられる。本報では，1946年から1955年に発刊された115冊のうち，閲覧できた60冊からの結果を報告する。

結果 第二次世界大戦終戦後の日常生活に厳しい時代であるが，住まいや住居管理に関する記事が掲載されており，整頓された家，使いやすい家，美しい清潔な家が求められていた。整理整頓，掃除，点検，補修・修繕など住居管理の多くは家事に含まれており，日頃のこまめな手入れにより，美しく能率のよい住生活環境を整えること，住まいは使い続けていく中で補修が必要であり，家計の中に補修費用の予算立ての必要性が示されていた。さらに，住まいに関する課題解決において，科学的視点，共通の必要性が述べられており，より良い生活の実現に向けて前向きに取り組む姿勢が読み取れた。

3D-12 日本女子大学出身者による住居学の研究の歴史

○薬袋奈美子，矢島浩子（日本女大）

目的 日本の家庭を改善することを目的に1901年に創立され，開学当初から存在していた家政学部での住居学の研究・教育は，日本の住居学の草分け的存在である。日本女子大学家政学部住居学科出身の研究者による研究の傾向を把握し，日本の住まいに関する研究の歴史を体系づけるための基礎的資料とする。

方法 戦前の研究者については建築学会の名簿より，また戦後については日本女子大学家政学部住居学科出身者の名簿研究者を抽出する。そのうえでこれらの研究者の論文をCiniiより探し，その分野と傾向について，社会的な住まいに係わる課題との関係性を踏まえて，考察を行う。論文タイトルを用いたテキスト分析を行う。

結果 住居学を専門的な領域として確立をしたのは，井上秀男，柴谷邦であることが明らかとなった。佐藤功一等による教育の影響を受けつつも，生活改善同盟会等，学外で社会的な住まいに対する改善の動きに参加しながら，それを教育・実践を日本女子大学で学生とともに，学問と社会を結びつけていた。こういった取り組みは，戦後非常に多くのが研究者を輩出してからも，実践的な生活環境形成の視点を大切にしていることが確かめられた。研究分野についても，専門性が細分化される中で，計画，経済学，環境学，政策学等に拡がった。
目的 近年、フェアトレードという言葉を最近は珍しくなく聞くようになった。しかし、多くの人々がまだ具体的な商品を認知しているとは限らない。そこで本報告では実際にフェアトレードのファッションを好んで購入している顧客の属性と心理を明らかにすることを目的とした。そのことによって、さらにフェアトレードの市場が広がる糸口になると考える。

方法 フェアトレード商品を販売している店舗での、実際に商品を購入した顧客に対してインタビュー調査を実施した。事前に質問項目を作成し、インタビューの時間を約20分とした。期間は2019年11月20日から12月26日までとした。インタビューで得た回答をデータとして、テキストマイニングと因子分析を用いて分析した。

結果 購入者の共通した心理には強くフェアトレード商品であることを意識していることがわかった。また、「支援」したいという気持ちも明らかとなった。これら以外にも、自分に「似合う」、「ふさわしい」、「自己表現」、「満足」などのキーワードとなるワードが得られた。

考察 因子分析によって購入心理には「理解」「支援」「継続」の因子が得られた。支援をしたいという気持ちの背景には、フェアトレードのコンセプトへの理解があることが考えられる。また、リピーターとして購入しつづけたいという希望があることもインタビューからわかった。これが継続の因子とつながっていると考えられる。
目的 大学生は小学校から高校まで家庭科を学んだ結果、被服の保健衛生および社会的機能や基本的縫製技能を身につけていることが期待される。本研究では教育学部の学生を対象に衣生活全般に関わるアンケート調査を実施し、学生の実態や意識を捉え、不足する知識や必要な学びに関する知見を得ることを目的とする。

方法 小学校教職科目の履修者279名を対象に、家庭科の被服領域の授業4回中の途上と終了時にアンケート調査を実施し、終了後に衣生活の改善点を記述させた。調査の分析により学生の実態把握と必要な学びを検討する。

結果 衣装規範に関する項目は得点が高いが、購入時の品質表示、取り扱い絵表示確認、廃棄時のリサイクル行動は得点が低かった。因子分析により、被服規範やファッション意識、被服購入時行動、保守や管理の自立、環境配慮意識等の7因子が抽出された。因子間の相関は高く、特に「廃棄時環境配慮」と「被服保守自立」 「被服購入時品質確認」は高い。洗濯実践等の「着用被服管理自立」は男女差よりも当事者意識が高い下宿生か否かで有意な差が示された。補修技能が必要な「被服保守自立」は女子が自宅生男子よりも有意に高かった。自由記述には、素材や洗濯に関する知識の乏しさ、当事者意識の低さが記述されていた。自立した衣生活と環境配慮まで意識した被服行動の実践を喚起するには、衣生活に対する関心を高め、知識と意識を深めることが重要であることが明らかとなった。

目的 アパレル分野において服装のコーディネートは重要であり、色彩の調和が審美性に大きく影響する。我々はこれまでに色相角を均等にした色票試料を作成し、2色配色として色相の調和について報告し、さらに、その配色をTシャツとミスカートで再現し、調和について視覚評価を行い、色票とは異なる結果を得た。本報では、アイテムによる調和度の違いを検討するためにシャツブラウスとパンツを用いた視覚評価を行い、組み合わせるアイテムの違いによる影響を検討した。

方法 実験色は、第2報で作成した高彩度20色、高明度20色の計40色とした。試料はファッションコーディネートソフトi-Dfit（(株)テクノア）にて、シャツブラウスとパンツで再現し、調和について視覚評価を行い、色票とは異なる結果を得た。本報では、アイテムによる調和度の違いを検討するためにシャツブラウスとパンツを用いた視覚評価を行い、組み合わせるアイテムの違いによる影響を検討した。

結果 調和領域はTシャツとミニスカートの配色と同様に同一色相が最も調和し、色相が離れるほど評価が下がった。また、高彩度、高明度ともにトップス色として赤や黄赤、ボトムス色として青系を配した場合の評価が高かった。さらに、スカートスタイルの評価と比較すると、上下のアイテムの色相差はdh0～54度ではスカートスタイル、dh108度以上ではパンツスタイルの評価が高く、アイテムによって調和領域が異なることが分かった。

目的 近年の国内外の子ども服市場において、女の子用をピンク、男の子用をブルーとしたジェンダーによる色の区分を見直す動きがある。背景の一つに、女の子にはピンクとする風潮を危惧した消費者や研究者による言説の出現が挙げられる。本研究では、これらを手掛かりに、子ども服の色とジェンダーにおける問題の本質を探り今後の課題を検討する。

方法 第一に、文献調査を主体としてピンクをめぐる言説の内容を分析し、問題意識が生まれた背景や論拠とする事例を整理する。第二に、抽出した要素間の関係性を考察する。

結果 先行研究によると、アメリカでは第2次世界大戦後にピンクが女の子の色として一般に認識され、日本では1980年代より同風潮が浸透し始め、1990年代にはあらゆる市場でピンクが出回ったが、2010年代に入り批判的な言説が出現した。例えば、子ども服における它是販売促進を目的に操作した企業や親の責任であるとし、多様な感性の尊重と選択肢の提供を求んだ。国外では、ピンクは女の子かつ無垢の証拠の提示であり価値観の押しつけとする言説もあった。ピンクに付される意味や子ども観は時代や文化により異なることから、言説に至るまでのが個々に精査する必要がある。日本においては、伝統色である桃色などの歴史やかわいい文化から独自のピンク志向が見出せるだろう。さらには、ピンクを能動的に選択している女の子や供給者側を視座とした分析も不可欠である。
児童

口頭発表 5月31日（日）

3E-08 保育所の食事場面における保育者の子どもへの働きかけ
○佐々木郁子, 吉川はる奈（埼玉大）

目的 就学前の子どもに質の高い保育を保障することが求められているが、その中心を担う保育者の質の向上には課題が多い。保育者の専門性の1つとしてされる保育者の働きかけ方について取り上げる。保育者は、予備的な調査として給食場面での保育者の働きかけの特徴を分析し、その結果について報告する。給食時の働きかけに限定したのは、子どもと保育者が時間的・空間的に枠組まれ、かつ子どもと保育者が共存する特性のある数少ない場面であることから、より保育者の働きかけの特徴が明らかになると考えられた。

方法 観察法により給食時の場面での保育者と3歳未満児と年長児の働きかけを観察し、そのエピソードから分析する。調査内容をもとにテキストデータを作成し、さらにテキストデータにおける保育者の働きかけの特徴の観点から分類し、考察した。その結果、子ども年齢に応じて、集団食事場面における保育者の言葉かけ、働きかけに特徴があることが分かった。

3E-09 家庭保育と集団保育における子どもの要求表現と迂回
○寒河江芳枝1, 柳本亜紀2, 浅野浩美1, 金田利子4（昭和女大, 清瀬ゆりかご幼稚園, 東京国際福祉専門学校）

本研究は、家庭保育と集団保育の場における子どもの要求表現と迂回の出現について検討する。方法は、家庭保育児1名と集団保育児37名を対象に、共通する食事場面を選び観察結果から分析を行う。観察の視点は、食べる、人との関わり、しつけ（食事方法の文化化）の3点から捉える。この3点を踏まえた保育者との関わりにおける迂回をもとに、具体的には、食事場面でのエピソード分析による。家庭保育は、食事時の一対一場面と家族と親族の外食場面である。一方、集団保育は昼食（お弁当 or 給食）場面である。

結果として、家庭では一対一の場面においては食べたくないという意味で「つかれた」という言葉を発し、家族と親族の外食では親の視点で食事を表現する傾向を示した。一方、集団保育では、食べたくない理由が母親の子育て経験から抽象化されており、保育者との関わりにおいては、具体的な要求表現が見られた。

3E-10 子育てにおけるスマートデバイス活用について
―保護者の子どもの頃の経験が及ぼす影響―
○神宮文代, 岡野雅子（東京福祉大）

目的 スマートデバイスは、子育てにおいても切り離せないものとなっているが、その積極的な活用の賛否に関する情報が錯綜する中で、保護者のスマートデバイス使用状況に関して十分な情報が整理されているとは言いがたい。本研究では、保護者のスマートデバイス活用の実態を把握することを目的とした。

方法 未就学児の保護者計300名を対象に質問紙調査を行った。資料収集時期は、2019年3月～6月である。

結果と考察 ①多くの家庭がスマートデバイスを所有していることが確認できた。②スマートデバイス使用場面は、自宅と自宅外で違いが見られ、自宅外では「使わせることが全くな」という割合が自宅での使用よりも高い傾向にあった。③保護者のスマートデバイス使用状況は、子どもと子ども以外で違いが見られ、「子育てにおいて視聴制限や時間などを決めて見させる」という割合が高かった。④結果から、保護者の子どもの頃のテレビゲーム等の使用状況は、保護者の半数以上が身近にあったことが窺えた。自分自身のためにスマートデバイスを活用している保護者は、子どもの頃にテレビゲーム等に対して親和性がある傾向が見られた。以上より、スマートデバイスは生活の中に深く入り込んでおり、保護者の子どもの頃の経験が現在のスマートデバイス活用に影響を及ぼしていることが考えられる。
目的 近年子育てに対して孤独感や育児ストレスを感じる親が増加しているが、子育てのプロである保育者でもわが子の子育てに育児ストレスを感じるのだろうか。保育者としての経験はわが子の子育てにどのような影響を及ぼしているのだろうか。本研究は、保育者のわが子の子育てと園での保育経験の関連について明らかにすることを目的とした。

方法 北関東の私立保育所19カ所に勤務する保育者を対象に質問紙調査を行い、有効回答336を得た。資料収集時期は2018年11月。

結果 ①「いつもイライラする」はどの場面でも「わが子」が「園児」よりも割合が高かった。「全くイライラしない」は「なかなか寝ない時」「駄々をこねる時」「行動がのろい時」は「園児」の方が割合が高かった。

②わが子の子育てで心がけていることは保育士として心がけていることと類似し、1.子どもとの関わり方、2.親(保育者)自身のあり方、3.教育(保育)方針について、であった。

③保育者であることはわが子の子育てへのプラス面は「子どもに慣れている」「子どもの発達段階を知っている」「保育者としての工夫をわが子に実践できる」「子育て情報が得やすい」等であり、マイナス面は「ない」が多いが「成長が早い子とわが子を比較してしまう」「行事の時期が重なるのでわが子の行事に参加できない」等であった。

したがって、園では子どもに適切な援助を行う配慮がうかがわれるが、わが子に対してはイライラする姿が認められた。

目的 第二次世界大戦（太平洋戦争）の終結からおよそ75年の時間は当時の体験記憶を持つ人々の高齢化や経験者の他界によりその記録の伝承が難しくなっている。また、地球上的紛争は絶えることなく生活する子どもへの直接的、間接的な影響は計り知れない。本研究は、かつて、日本にもあった学童疎開という政策を通しての被災体験と平和の意義について語り継いでいる人々の存在を探る。また、戦争がもたらす負の連鎖を断ち切ることの意義を考察する。

方法 日本各地にあった学童疎開の記録もその経験者の高齢化と他界により、その記録の伝承が難しくなっている。そのため、当時の記録は地域の資料館への寄贈等による一部保存や、体験談として文書に置き換えるという形をとっている。これら伝承・保存の難しい事例を聞き取りにより、地域交流の場で伝承が引き継がれている例を検証する。また、検証を通して存在する個々の困難性とその課題を明らかにする。

結果 戦後に実施された厚生省調査により、学童疎開体験者は日本全国に存在することが明らかになった。この戦争期に、学童疎開を体験した人々の年齢は、戦後の時間経過によりおよそ80歳代、もしくはそれ以上の年代となっている。そのため、経験者自身も自身の経験伝承と資料等の継続、保存に悩むことの問題が明らかになった。本研究では、各地に残っている例を基に学童疎開の記憶と記録の一部を明らかにした。
3F-01  尿ケア専用ナプキン吸収体部の構造と快適性
○渋田英美、小柴美波、松井みのり
（東京家政大）

目的：現代では、尿ケア専用ナプキンを使用する人が増加しており、若い女性から高齢者まで幅広い年代の人が使用している。本研究では、ナプキン吸収体部の構造（特に開孔フィルムの有無）と吸収量の違いによる、排尿時の経時変化に伴う物性と快適性について検討する。

方法：試料は、吸収体部の構造が異なるもの、吸収量が異なるものの計5種を使用した。試料に0.9%生理食塩水を吸収させ、経時による物性変化を調べた。物性については、摩擦特性、圧縮特性、接触冷感、表面水分率、吸収率の測定を行った。また、ナプキンを腕に装着した場合と手触り感による官能評価を行い、物性結果と官能評価との関係性を調べた。

結果：本研究結果より、尿ケア専用ナプキンの快適性は、①表面のなめらかさ、②表面のさらさら感、③水分の吸収の速さ、④表面水分率、⑤表面の接触冷感、⑥肌・ナプキン間の適温差に関係すると考えられる。また、被験者が試験の結果から、湿潤時の肌・ナプキン間の湿潤度は乾燥時に比べ劣悪であり、不快感との関連関係も見られた。本研究では特に、吸収体内の開孔フィルム有無による特性の違いに着目し、開孔フィルム有の試験の特性は、①表面を平滑にする、②水分が表面に溜まらない、③液戻りを防止する、であった。吸収体内の開孔フィルムを加えることにより、トップシートを変更しなくても、接触冷感や表面水分率、表面のなめらかさやさらさら感の評価が向上した。

3F-02  乳幼児の口周り用清拭素材についての実態調査
○松栄久仁子1, 中村邦子2, 大野淑子3, 美谷千鶴1
（1日本女大、2大妻女大、3山野美容芸術短大）

目的：乳幼児の口周りの肌トラブルは、口周りの汚れを除去するために行われる“拭き取り”も原因の一つになっている。近年、拭き取り用素材が多様化しており、実態を把握するために、乳幼児を持つ子育て中の母親に対して、毎日どのように清拭を行っているか、とその原因を聞いたもののである。また、その選択理由などに関する調査を行うこととした。

方法：WEBアンケートを行い、20歳から45歳までの女性に配信し、スクリーニングをかけ2歳5カ月以下の子どもを持つ母親を調査対象者として抽出した。割付は子どもの月齢を3ヶ月刻みとし、各グループのN数は23名で計1,030名から回答を得た。

結果：単純集計の結果、拭く対象となる口周りの汚れは食べ物が8割で最も高く、よだれが58%、鼻水が50%、飲み物が42%であった。拭き方で気をつけている点は、やさしく拭く、痛くないように、ごしごしこすらないようである。口拭きはティッシュペーパーとウェットティッシュがそれぞれ56%で最も高く、次いでガーゼハンカチが49%であり、タオルやガーゼなどは使わないという回答が上位にあった。また、肌の痛みを感じることがないか、肌に傷つかないか、肌を傷つけないかの選択が上位にあった。

3F-03  ブランドマネジメントを通じた地域産業活性化と社会人基礎力育成プログラム
―青苧の前処理加工と被服制作―
○井上美紀, 川又勝子
（東北生活文化大）

目的：本研究では、地域産業の活性化と専門の人材の育成を目的とした教育プログラムを検討し、東北の素材を用いたブランドマネジメントを実践している。本研究で着目した青苧は、江戸時代に高級織物の糸として利用されていた伝統的な素材である。商品企画にあたり、これまで青苧の原麻・糸・ロープ・青苧混合和紙・和紙糸・織物・編物等、様々な段階での利用を検討してきた。本報告では、青苧原麻の前処理加工方法と加工繊維を用いた被服・雑貨の制作を検討した。

方法：本学服飾文化専攻3年次「ブランドマネジメント演習」の授業で2017年度と2018年度に実践した。試料には、青苧の表皮から得た原麻を利用した。前処理は、カーディング、または試験による加熱処理を行った。

結果：青苧は産学連携の連携先が栽培し、苧引き工程より関与された。青苧の前処理方法を検討した結果、カーディングのみでは硬い部分が開繊できず、試薬浸漬のみでは繊維がほぐれず、両工程の併用とした。原麻を割いて短く裁断し、脂肪酸ナトリウムでの浸漬処理後、風乾中と後にカーディング工程を行わせ、さらにお浸けし繊維を作製した。得られた青苧繊維10〜20%と羊毛を混紡後フェルト状にして制作に用いた。商品は、製品ラインブランド「Nature clothes」では婦人用コート、ブランド「Maboela」ではスカート、紳士用ズボン、がま口パック、クラッチパックを企画し製造した。
3F-04 織物の埃付着の評価に関する研究
○井上真理（神戸大）

目的 冠婚葬祭に用いられるブラックフォーマルは黒地であるが、特に黒布の埃付着が目立つ場合がある。エアダストが目立つ場合がある。エアダストの評価方法として、目視による評価や付着した埃の重量測定法がある。重量法では定量が可能であるが、目視の評価で僅かな埃付着の差を見分けが困難である。本研究では、黒字の布は黒布の付着をカバーない程度を対象とした。

方法 試料は、一般的に織物に用いられる加工方法を付与した黒色の織物16種である。クレームのあるなし、ブラック加工、柔軟加工の有無によって比較を行う。繊維屑と珪藻土の2種類の模擬埃による埃付着試験を行った。各試料10×10cmの試験片を切り出し、模擬埃と共に箱に入れ埃を付着させ、不要な埃を取り払い、付着評価に供した。重量法、表面粗さ法、二値化法の3つの方法により評価を行った。また、KES(カトーテック(株))を用いて物理特性を測定する。また、分光光度計で、L*・a*・b*を、摩擦帯電圧測定法を用いて帯電性を測定した。

結果 埃の付着度合いの新たな評価法として、表面粗さ法と二値化法による評価を検討した。その結果、二値化法が埃の付着度の評価に有用であることが明らかになった。また、珪藻土のように埃が大きい場合には表面粗さ法によっても埃の付着度合いを評価することが可能であった。参考文献
(1) Sang-Ho Rhee, et al., Ultrasonics, 47, 55-63(2007)

3F-05 ラム波を用いた織物の力学物性評価
○赤坂修一1, 西川晃司1, 浅井茂雄1, 牛腸ヒロミ2（東京工業大, 実践女大）

目的 布の力学物性の評価法としては、布の一軸、二軸伸長が知られているが、これらは布を大きく伸長させるため、織物の変形の特徴である縦糸（経糸）と横糸（緯糸）の交差角の変化の影響を免れない。特に布のバイアス方向（経糸方向に対して45°となる方向）の引張では、この影響が大きい。本研究では、織物の構造を大きく変化させない微小な歪領域における非破壊・非接触の力学物性評価法として、ラム（Lamb）波を用いた評価法（Dispersion method）を検討した。

方法 ラム波は、平板上の材料中を伝搬する弾性波である。金型枠に固定したサンプル布に音波を照射し、サンプルの面内方向の振動速度をレーザードップラー振動計により、伝搬方向に一定間隔で計測した。二次元FFTにより得られたラム波の伝搬速度の周波数依存性に対して、直交異方性材料中のラム波の伝搬速度に関する理論式（文献1）をフィッティングすることで、弾性率を算出した。

結果 本測定法により得られた、径糸、緯糸方向の弾性率は、動的粘弾性測定の結果とよく一致し、本測定が妥当であることを見た。また、径糸、緯糸方向間で15度おきに測定したところ、弾性率は連続的に変化し、織物の弾性率の面内異方性を評価することができた。参考文献
(1) Sang-Ho Rhee, et al., Ultrasonics, 47, 55-63(2007)
目的「しっとり」という言葉は触感や食感のみならず、音楽、人の物腰など広範囲で用いられる。布を触った時に「しっとり」を強く感じる布はあたたかく、圧縮やわらかく、せん断力たいことを報告した1)。本研究ではアパレルCADにより作製したスカート画像から受ける「しっとり」の印象と手で触って感じる「しっとり」の関係を調べ、将来触感情報を画像に表現する上で考慮すべき点を明らかにする。

方法 45種の布を手で触って実施した官能検査結果に基づき「しっとり」の差が明確な6種を選定した。
(1) テクノ社製のi-Designer上でバーチャル布を6種作製した。用いた値は目付、厚さ及びKESで得た曲げ・せん断・引っ張り特性である。
(2) ギャザースカートを作図し、3Dバーチャルフィッティングソフト上で6種の着装を行った。
(3) 画像を被検者に提示し「しっとり」「やわらかい」「重い」「美しい」「かわいい」「ドレス」「好み」についてSD法で値を得た。

結果 画像から受ける「しっとり」は「重い」を除く5項目と正の相関がみられた。触感評価の「しっとり」が低い布の物性値を基にした画像が「しっとり」が高くなる場合がみられた。

※本研究の一部は文部科学省科学研究費基盤研究C(課題番号19K02348)の助成を受け実施した。
目的 幼児期は、基本の運動能力を獲得する重要な時期であるが、生活習慣等の変化による運動不足から運動機能低下に陥る幼児が増えている。本研究では「子どもの健全育成」に必要な項目を見出すことを目的に、幼児の体格及び体筋力と生活習慣・食事摂取状況の実態調査を行った。

方法 平成30年2月に新潟市立保育園2園で同意を得た園児（3～6歳児）とその保護者63組を対象とし、園児の身体及び運動機能測定、生活習慣及び食事摂取状況調査、観察による食事情報調査を実施した。運動器チェックの結果から4項目すべてできた園児をできた群、1項目以上できなかった園児でできなかった群に分け、各調査結果を比較した。

結果 できた群は55.6%、できない群は44.4%であった。運動器チェックは、年齢が高いほどできない割合が小さくなった。身長、除脂肪体重、体水分量は、できない群に比べできた群で有意に高くなり、握力は、できた群で有意に高くなった。生活習慣では、パソコン・スマホ使用時間はできた群が短くなる傾向にあった。食事摂取状況は、できた群のパンばかり質、脂質摂取量が有意に高かった。これらを相関解析したところ、身長、体重、除脂肪体重と給食米飯摂取量、給食喫食割合との関係に正の相関が認められた。以上から、体筋量が多い園児ほどよく食べ、口腔筋力が強い園児ほど体を動かす遊び時間の長い傾向にあることが示唆された。
目的 東京都の貧血調査では、月経が始まる中学2年生より貧血率が上昇し、鉄摂取量向上が重要としている1)。本研究は、鉄の摂取状況とそれに伴う貧血症状について現況調査する。また、調理体験介入を行い、調理に対する自己効力感をあげることで、子どもの食選択力と健康行動の実践能力の向上を目指す。

方法 1) 横断研究: 令和元年9月に福島県M市の小学校5年生120名、中学2年生144名を対象に、食物摂取頻度調査と合わせて貧血症状、食生活状況に関するアンケート調査を実施した。2) 同年8月にK市の小学校3年生から5年生の児童7名を対象に、一人で作れ、鉄を強化した調理教室を実施した。

結果 1) 横断研究の有効回答率は89%で、小学生の鉄摂取量平均は7.6±2.8mg、中学生は7.6±3.4mgであった。鉄の推定平均必要量を満たさない者の割合は、小学生は50.8%、中学生は61.8%であった。貧血の症状として訴えが高かったものは、小学生では「氷をかじる」、中学生では「疲れやすい」であった。2) 料理教室参加の児童の感想では、実践した内容について理解を示す記述が認められた。

考察 調査対象となった小・中学生において、鉄の摂取は推奨レベルを下回り、貧血の典型的な症状も認められた。今後は、料理教室の規模を拡大して展開していくことが望まれる。

[文献] 1) 前田美穂; 東京都予防医学協会年報, 42, 53-56 (2013)
目的 札幌市内の中学生が食物アレルギー症状を持つ割合は13.2%(2016年4月札幌市調査)と、全国的にも非常に高い。K中学校の食物アレルギー生徒も、2019年4月調査で3年前より2.0%増加し14.0%となり、全員が安全安心に参加できる食物アレルギー対応調理実習を実践してきた。その中で食物アレルギーの有無による学習獲得内容や家庭での調理経験との比較調査を行い、食物アレルギー生徒の食生活や調理技術における課題を明らかにした。本研究では、家庭科担当教員の調理実習における食物アレルギー対応の実態を調査し、今後の家庭科の調理実習のあり方について考察する。

方法 札幌市・石狩管内中学校の家庭科担当教員を対象に郵送法による質問紙調査を実施した。配布数は公立・私立校を合わせた計144部、回収数は64部、回収率は44.4%だった。調査期間は2019年11月〜2020年1月である。

結果 (1) 自校の食物アレルギー生徒の割合を把握している教員は54.7%である。2) 保護者から調理実習における食物アレルギー対応を求められたことのある教員は37.5%で、その内容は使用食品を事前に知らせることや食材の除去・変更等である。3) 調理実習では、食物アレルギー生徒のみ原因食品除去メニューにする対応が多い。4) 食物アレルギー対応実習例が教科書に掲載された方がよいと考える教員は75.0%で、3大アレルゲン対応、米粉のレシピの充実を望む声が多い。

目的 洋服に対する消費者の嗜好が多様化し、現代社会において洋服は選ぶ時代へと変化している。衣服を選ぶ際の一般的な基準として、流行、デザイン、価格、サイズ等が挙げられるが、衣服に関する基本的な知識があいまいな状態で既製服を購入している消費者が多い。そこで本研究では、小学校から高等学校までの家庭科の教科書の中で、既製服の選択に関する学習はどのように位置づけられているのかを明らかにすることを目的とした。

方法 (1) 小学校から高等学校までの各種学校科目において、被服の入手に関わるような内容を学習するのか、平成29、30年告示の家庭科の学習指導要領解説中の記述内容を抽出した。分析に用いた教科書は、小学校「家庭」2冊（平成27年発行）、中学校「技術・家庭（家庭分野）」3冊（平成28年発行）、高等学校「家庭基礎」10冊（平成29年発行）である。ここで、高等学校の科目の中で「家庭基礎」2単位の教科書を取り上げたのは、教科書の採用状況が7割近くを占めていたからである。

結果 (1) 学習指導要領解説の中で、既製服の選択に関する内容は、衣生活と消費生活の中で具体的な学習内容が記載されており、既製服を購入する際必要な基本的な情報は、中学校段階までに学習済みであることがわかった。(2) 衣生活の中で、表示やサイズ以外に環境に関しての学習内容も取り入れられていた。
目的 近年、子どもの家庭での生活体験が乏しく、日常の家
お手伝いについてもその機会が減っている。子どもの家
事経験の乏しさは、その後の生活において家事に関する知識
不足、更には苦手意識につながることが懸念される。本研究の目
的は、子どもの頃のお手伝いと若年層の家事実態との関連を大
学生へのアンケート調査から明らかにすることである。
方法 佐賀大学生を対象に授業時間を利用してアンケート調査
を行った。期間は2019年の10月。主な内容は(1)小学校高
年時のお手伝いの実施状況(2)現在の家事の実施状況(3)現
在の自分の気質や行動傾向である。
結果 540票の有効回答を得た。性別は男性255人(47%) ,女
性284人(53%) ,居住形態は実家暮らしが207人(39%) ,一人
暮し327人(61%) 。現在の家事は女性の方が男性より,一人暮
しの方が実家暮らしよりも頻度が高く,時間も長かった。子
どもの頃の手伝いの頻度が高いほど,また時間が長いほど,現
在の家事の頻度が高かった。その傾向は男性の方が女性より,
実家暮らしの方が一人暮らしよりも強く表れた。実家暮らしが
子供の頃に手伝いを「ほとんどしていなかっ
た」56人のうち,40人(71%)が現在も家事を「ほとんどしな
い」。また,手伝いの種類による実施率の男女差がみられ,
衣食に関する手伝いは女子の,ゴミ出しや風呂洗いなどの住
に関する手伝いは男子の実施率が高かった。
K-01
大学生の外食店舗選択行動および消費行動に関する考察 —性差・地域差からの検討—
○和泉志穂
(武庫川女大)
目的
大学生の情報探索手段としての検索ツールが、検索エンジンからSNSの活用へと変化している昨今、外食の分野において新たな店舗選択行動が登場してきている。そこで、大学生の外食店舗選択行動と消費行動の傾向を性差や地域差によるセグメンテーションで検討することで、新たな外食に対する消費行動の傾向を見出しを目的とした。
方法
首都圏(東京・神奈川・千葉・埼玉)と京阪神奈(京都・大阪・兵庫・奈良)に住む17大学に通う日本人大学生835人を対象に、食への関心度や食に対するライフスタイルに関する項目、外食店舗選択時の項目別重視度や外食店舗情報の受信状況などについてWebアンケート調査を実施し、t検定と一元配置分散分析を行った（有効回答745人、平均年齢20.3歳、SD=1.2）。
結果
性差による検討の結果、外食店舗情報探索度は女性が高いが、情報発信度は男性が高いこと、女性は味よりも価格重視であるが、男性は味を重視することが明らかになった。また、地域差による検討の結果、首都圏の大学生はキュレーションサイトを利用した外食店舗情報探索度が高いが、京阪神奈の大学生は新店舗探索意向度が高く、特にインスタグラムでの情報探索度が高いことが示された。消費者の属性を細分化することで、属性により外食消費で重視する点に傾向があることが明らかとなった。
本調査は、日本フードサービス学会(第15回助成研究)の助成を受けたものです。
口頭発表  5月31日（日）

3K-04  わが国の女性労働問題に対する意識調査
―女子留学生を考える就労支援―
○赤羽根和恵
（愛国学園大）

目的 卒業後に日本での就職を希望する外国人留学生は多いが、就職に至らない理由には、日本語能力の問題、就職活動の方法が無く、日本企業での理解不足が挙げられる。全学的な就職支援の取組みが急務である。本研究の目的は、2、3年次選択科目「女性労働論」の受講者を対象に、わが国の女性が抱える問題とその支援を講じ、キャリア意識に変容が見られる事実を明らかにする。

方法 調査対象は、「女性労働論」受講者18名（内訳：2年生9名（日本人1名、ベトナム7名、ネパール1名、モンゴル1名）、3年生7名（中国1名、ベトナム4名、スリランカ2名）、4年生（日本人1名））である。

調査方法は、(1)アンケート調査（性別と日本語能力、キャリアと就業）、(2)個別インタビュー調査、(3)レポート3題（仕事観、女性労働問題、働き女性への支援）の内容及び記述回答をグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。

結果 14名の留学生が日本での就職を希望しているが、自覚する日本語能力と希望職種で必要な日本語能力には大きな差が見られる。希望する在日就労期間は、初回ヒアリングの8名から「5年」5名、「10年」4名と延長した。留学生によって、予定結婚年齢が上がり、子どもの数が減るが、留学による借金返済が影響している。留学生が考える働く女性への支援では、国や企業が行う支援に加え家族の役割に期待する回答が多く見られた。

3K-05  ひとり親世帯における体験活動の意義と影響
○大藪千穂,木原悠花
（岐阜大）

目的 近年、ひとり親世帯の子どものうち2人に1人が貧困の状況にあり、ひとり親世帯における子どもの貧困率が高い。貧困は経済格差や教育格差を生み、貧困家庭で育った子どもが大人になっても貧困を脱することができない場合、世代を超えても貧困が連鎖する。日本では「子どもの貧困対策に関する法律」に基づき、子どもの貧困に対する大綱が作成され、重点的な支援として教育の機会や体験活動の提供が位置づけられている。本研究ではひとり親世帯に対して、より有効で参加しやすい体験活動を提供するために、ひとり親世帯における体験活動の意義と影響を明らかにする。

方法 一人親世帯に対する学習支援をしているスクールでの子どもの観察と、2つのアンケート調査を実施した。第一に大学生(239人)、岐阜市の母子・寡婦世帯(60人)に対して、体験活動の経験について調査した。第二に、経験した体験活動に関する意識調査を大学生(204人)と愛知県の母子寡婦世帯(250人)、一般(215人)に調査し分析した。

結果 一人親世帯は文化系の習い事や部活動が多かった。また費用の高い体験活動や送迎の伴う体験活動には参加しにくく、参加したくても経済的理由から参加できない活動も多いことが分かった。今後は送迎や費用面の補助が必要となる。また公的支援だけでなく、地域の人との交流やサポート体制を構築することが重要であることが明らかとなった。

3K-06  長期家計簿からみた生活史と生活設計（第2報）
―1967年から1999年の核家族世帯の家計管理の事例から―
○中川英子1,重川純子2
(1宇都宮短大,2埼玉大)

目的 高度経済成長期に家族を形成した雇用者世帯（A家）が老後期に安定した経済生活を実現した要因を明らかにする。

方法 A家の家族構成からの20年間[1]に、その後の子どもの出発までの10年間を加えた家計簿から資産形成過程を焦点的に分析をする。

結果 資産0から出発したA家が老後期の資産（居住用資産（土地400平米家屋180平米）、収入用資産（マンション2部屋））を保有を可能にした主な要因が、(1)住宅：住宅ローン返済等が経済環境に後押しされたこと、(2)教育：3人の子どもの教育費を早期段階から計画的に貯蓄したこと、(3)老後：妻が54歳（夫61歳）から常勤職に就いたこと、(4)総合口座を活用したA家の特有の家計管理の方法（月々の支出は必要最低額に予算化、余剰は預金する一方で、赤字分は半年毎に預金した定期預金からマイナスする方法）を実行していたことなどであることが明らかになった。

[1] 中川英子「夫の順調な収入の伸びに支えられた専業主婦の家計」、357-372、中村隆英編著『家計簿からみた近代日本生活史』、東京大学出版会、1993
3L-01 大豆の加工時におけるリポキシゲナーゼの脂肪酸含量への影響
○黒田久夫
(東京家政学院大)

目的 前報（第71回大会）にて、家政・栄養学系テキストにおける脂質酸化及び脂質酸化酵素に関する情報を調査したところ、いくつかのテキストでリポキシゲナーゼ（LOX）が脂質の栄養価を低下させるという記述を見た。一方、LOXが働かすことにより食品中の脂質含量が変化するかどうかについて調べた限り文献情報がなかった。そこで、この記述が妥当かどうかを調べることにした。

方法 LOXアイソザイム3種類を欠失する大豆品種「すずさやか」と普通品種「とよまさり」を用いて、豆乳を作製した。乾燥種子と豆乳から脂質を抽出し、ガスクロマトグラフィーによりステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸を定量した。

結果と考察 乾燥種子に含有される4種の脂肪酸を比較したところ、両品種間には有意な差が見られなかった。また、豆乳の脂肪酸については、普通大豆の方が、LOX欠失品種に比べてわずかに高い傾向が見られた（有意差なし）。従って、少なくとも大豆の加工食品においてはLOX活性が脂質の栄養価を低下させる可能性は非常に低い。LOXは食品中の脂質含量には影響しないと推察される。今後は、他の加工食品や加工調理法について検討を進める。

3L-02 新潟砂丘さつまいも“いもジェンヌ”の冷蔵及び常温保存による品質変化
○春日景太, 石黒志実, 西村健一郎, 小倉優次, 大野晴彦, 筒井さとみ, 西海理之, 山口智子
(新潟大)

目的 新潟市西区の特産品にさつまいものブランド品“いもジェンヌ”がある。我々は大学院食づくり実践型農と食のスペシャリスト養成プログラムにより、いもジェンヌの認知度のさらなる向上を目指した産学官連携プロジェクトに携わっている。現在、業務用冷凍品として販売されているいもジェンヌペーストを一般家庭でも広く普及させるため、使いやすい形態を検討している。家庭では常温もしくは冷蔵で保存できることが望ましいと考えられることから、本研究では、常温及び冷蔵保存中のいもジェンヌペーストの品質変化を明らかにすることを目的とした。

方法 いもジェンヌペーストをナイロンポリバックに包装し、85℃で30分加熱殺菌後、常温（25℃）、冷蔵（10℃）で保存した。水分、糖分、色調、物性及び味の評価と微生物試験により、保存による影響を調べた。

結果 常温及び冷蔵保存1ヵ月後において、水分と糖分には変化はみられなかった。色調では、常温、冷蔵共に薄栄色に変化はみられない。味覚性は低下し、硬さや付着性が低下しながらも品質を評価した。微生物試験については、1ヵ月後には常温保存で一般生菌数が6.2log CFU/gまで増加し、加熱殺菌試験でグリセロール及び耐熱性芽胞形成細菌を確認した。一方、冷蔵保存では菌の増殖はみられず、品質が保持されていた。

3L-03 高脂質ゲルにおける油脂の冷凍耐性への影響
○中島聡史, 松本拓矩, 秋山亜希子, 増田麻衣, 鎌田宣孝, 渡邉裕一, 上田佳宏
(ソマール(株))

目的 油脂と水を含有するエマルションは、食品・医薬品・化粧品等の様々な分野に用いられている。一例として、脂質を多量に含んだことで効率よくエネルギー摂取が可能であり、摂食しやすいラムのような高い氷点ゲルが挙げられる。水溶性多糖類ゲル化剤を用いて油脂を高温で含有する高脂質ゲルの報告は少なく、我々は油脂を最大85%含有する高脂質ゲルについて、多糖類ゲル化剤の選択と基本的な物理的特性について過去に報告した。さらに、今回大会では、高脂質ゲルにおける油脂種類の物理的特性への影響を明らかにした。本研究では、主に油脂種類が冷凍-解凍における高脂質ゲルの安定性への影響について検討した。

方法 数種類の液体油脂を用いて高脂質ゲル（液体油脂含有量：85%）を作製し、冷凍-解凍における高脂質ゲルの安定性を評価した。X線結晶回折による低温（-25℃）時、脂質ゲル内部結晶構造変化観察や高速液体クロマトグラフィーによる液体油脂の由来成分の分析から、冷凍-解凍による高脂質ゲルの変化を検証した。

結果 原来のゲル構造の変化が冷凍-解凍における安定性に影響するものであることを確認した。油種差により差異が確認されたが、油種に関係なく、冷凍-解凍における安定性は油脂の組成に大きく依存する。
ナノセルロース摂取が肥満と腸内フローラに与える影響
○長野隆男1, 矢野博己2
(1)石川県大, (2)川崎医福大

目的 ナノセルロース（NC）は、植物セルロースを微粒子化した製品である。私たちは、NCは水に分散して高粘性を示す特徴を有することから、「腸内フローラに利用され易く、肥満抑制効果がある」との仮説を立てた。そこで本研究では、高脂肪食肥満モデル実験系を用いてNC摂取による肥満抑制効果と腸内フローラに及ぼす影響について検討した。

方法 実験には、普通脂肪食摂取群（NFD群、n=8）、高脂肪食摂取群（NC0%群、n=8）、0.1%NCと高脂肪食摂取群（NC0.1%群、n=8）、0.2%NCと高脂肪食摂取群（NC0.2%群、n=8）の4群で7週間行った。NCは、マウスに給水瓶で飲料水として自由摂取させた。腸内細菌叢の解析は、結腸便を試料として、16SリソソームRNA遺伝子のアンプリコンシーケンス解析により行った。

結果 実験7週間後のマウスの体重を測定した結果、高脂肪食摂取によってマウスの体重は増加した。一方、NCの摂取量が増えるに従って体重は減少する傾向があり、NC0%群と比較してNC0.1%群では有意な体重増加の抑制は認められず、NC0.2%群では有意な体重増加の抑制が観察された。さらに、腸内フローラ解析結果について主成分解析を行った結果、高脂肪食により腸内フローラの細菌組成は変化すること、その変化はNC0.1%群では抑制されないが、NC0.2%群では抑制されることが示された。

福島県産山菜の放射性セシウム濃度の動向と問題点
○広井勝, 影山志保, 諸岡信久
(郡山女大)

目的 2011年3月の福島第一原子力発電所の事故により、福島県内には多量の放射性セシウムが飛散した。それに伴う食品の放射能汚染が現在でも問題視されている。特に山菜やきのこは、除染が進んでいないと山林で採取されることが多く、一般の野菜に比べ汚染が深刻である。原発事故から9年が経過し、放射性セシウム濃度がどのように変化しているか、福島県内の山菜を中心に検討したので報告する。

方法 2013年から山菜の放射性セシウム濃度を報告してきているが、その後の比較のために県内でよく利用されている、コシアブラ・タラノメ・タケノコ・ワラビ・ゼンマイ・コゴミなどを中心に検討を行った。また、郡山市内で採取したゼンマイ、ヨモギについては採取場所の違いによる放射性セシウム濃度の比較を行った。

結果 郡山市内で採取した山菜は2013年では、コシアブラ、タラノメ、ゼンマイ、コゴミ、タケノコなどで放射性セシウム濃度が100Bq/kgを超えるものが見られたが、2018年以後はコシアブラ、ゼンマイ以外100Bq/kgを超えるものは見られなかった。郡山市内で採取したコシアブラでは、栽培年に1000Bq/kgを超えるものは見られなかった。ヨモギでは駐車場の縁石脇で採取したものに数千Bq/kgの放射性セシウムを含むもののが見られた。ゼンマイは採取場所、部位により放射性セシウム濃度に違いが見られた。


3M-02 婦人科がん患者の医療用帽子に関する研究
○水谷浩
（東北生活文化大）

目的 現在「悪性新生物（以下，がん）」の進行を抑制し，症状を緩和するため，抗がん剤治療を受ける患者も多い。しかしその副作用として，脱毛症状を伴うことがある。このような「見た目」の変化に対して，彼女たちのこころを支え，前向きな気持ちを保つための試みのひとつ，アピュアランスケアが注目されている。

本研究は，婦人科がん患者の顔映りに焦点をあて「疾病の受容（見た目と気持ちの変化）への配慮」と「保健衛生的機能（汗のシミや化粧汚れを防ぐための工夫）」の観点から，医療用帽子の設計要件を明らかにしていくことを目的とした。

方法 東北大学病院 産婦人科医局内の婦人科がん患者の会「カトレアの森」会員を対象にして，医療用帽子の利・活用についての無記名式アンケート調査を実施し，その集計・分析を行った。

結果・考察 今回の調査から，医療用帽子は，婦人科がん患者の闘病生活のなかで有用な商品であることが明らかとなった。また，その利・活用にあたっては，1)見た目の変化に対応し，身体的な印象を整えるための配慮に加え，2)地肌に接触することから，汗のシミや化粧汚れを考慮した機能性が求める。さらに，3)部屋着や外出着とのコーディネートを重視し，生活の質を高めていくためのデザインが，ますます重要な役割を果たすことになる。

今後，これら3つの要件を考慮し，医療用帽子の開発に取り組むことが望まれる。

3M-03 臀部の圧力には性差はあるのか
○貝淵正人
（新潟リハビリテーション大）

はじめに 殿部圧分布における体型差による圧変化は，ヤセ型は屈曲位によって尾骨部の突出が出現しやすく，体圧・ずれ力が大きくなっているが，男女間における殿部圧分布の性差に関する研究は少ない。

目的 各角度ギャッジアップ時の殿部圧量を測定し，それぞれの角度間における殿部圧量の増加・減少量の目安を検討する。また，男女で殿部圧変化量に有意差がみられるのかを検討する。

方法 実験の目的と手順を説明し同意が得られた14名を対象とし，ベッドは3モーター式ベッドを使用した。また，殿部圧分布および圧量の測定にはコンフォライトを用いた。

結果 個人間の体圧変化量では，左右ともに有意差は認められず，個人間における殿部圧量の差はないという結果が得られた。また，各角度においては，それぞれの角度間において有意差が認められた。男女それぞれの各角度変化における圧変化量を比較すると，全角度変化において男女間で有意差は認められなかった。

考察 今回の実験結果から，背上げ角度を大きくすることにより，有意に殿部圧量が増加するし，それに併用して足上げを利用することにより殿部圧量が減少した。ベッド操作をする際に殿部における圧変化を予測し，褥瘡予防を図ることが可能となる。性差による殿部圧量の変化は認められず，男女の違いによる殿部圧量に対するアプローチ方法を分ける必要性はないことが示唆された。

3M-04 家庭における親子の省エネルギー意識・行動の推進に関する研究
―その3 介入方策が居住者の意識・行動およびエネルギー使用量に与える影響―
○高田宏1,水馬義輝2,小松朋弘2
（1 1広島大,2広島ガス（株））

目的 家庭における親子の省エネ意識・行動及びエネルギー消費の実態を明らかにすることを目的とし，2014年8月からモニター住宅を対象に調査を行った（Ⅰ期，Ⅱ期）。2017年11月から新規住宅において同様の調査（Ⅲ期，Ⅳ期）を行っている。1年目のⅠ・Ⅲ期は普段どおりに生活し，2年目のⅡ・Ⅳ期には省エネ行動目標の提示と生活の振り返りの介入方策を取り入れた。本研究は介入方策が居住者の意識・行動およびエネルギー使用量に与える影響を検討する。

方法 広島市・呉市近郊の11世帯を対象として，Ⅰ期，Ⅱ期（2014年8月～2016年9月）の調査を，また新規10世帯を対象として，Ⅲ期，Ⅳ期（2017年11月～2019年11月）の調査を行った。各期3季節（夏・秋・冬）に省エネ意識・行動の質問紙調査と水・ガス・電気使用量の実測調査を行った。

結果 省エネ意識・行動について，目標提示と振り返りにより，大人，子ども共に意識が高まり，省エネ行動を推進させる可能性が示唆された。生活における省エネ行動は，親の実行割合が高いほど子どもの実行割合が高くなる傾向があり，特に小学校低学年の子どもにその傾向が強くみられた。エネルギー使用量をⅠ・Ⅲ期とⅡ・Ⅳ期に比較すると，目標提示により電気・ガス使用量が減少し，また振り返りにより電気・水使用量が減少する可能性が示唆されたが，気候条件，居住者の成長，生活スタイルの変化など様々な要因が関係すると考えられる。

3M-05 高校生を対象とした防災グッズ提案ワークショップの効果と課題
○生田英輔
（大阪市大）

目的 高校生の防災意識構造は「地域・共助」と「個人財産」が2要因として挙げられているが，後者は高校生でも取り組みやすい対策であり，効果的な防災意識向上の為に優先して取り組むべき課題であると言える。そこで，個人財産として身近な物品としての防災グッズを提案することが防災意識の向上に資すると考え，防災グッズ提案ワークショップを実施し，効果と課題を考察する。

方法 2018年12月に大阪市のT高校においてワークショップを実施した。対象は2年生236名でファシリテーターは各クラス2名を配置した。ワークショップは個人での防災グッズのイメージ創出，グループでのイメージ共有及び逆発想，個人での防災グッズの提案，クラス全員でのアイデア共有，グループでの防災バッグの提案とした。各課題の記録を基に分析を行う。

結果 防災グッズのイメージでは「重い」が124件（52.5%），「大きい」が72件（30.5%）等であった。逆発想は「軽い」，「嵩張らない」等であった。これらの意見を基に個人で防災グッズを提案し，クラス内で共有し，グループでの防災バッグの提案案では価格が1,000-4,000円未満が20件（55.6%）であったが，10,000円以上が5件（13.9%）あった。販売場所（複数回答）では，コンビニーが最も多く13件，次いでインターネット，スーパーマーケットが同数で12件であった。
目標 VDT 作業負荷時に好みの香りを付与し,疲労の軽減や作業効率への影響を検討する。

方法 一般的な VDT 作業環境を想定した実験 1 と人工気候室で環境を制御した実験 2 を行った。いずれも被験者は若年女性10名であった。VDT 作業として、数字の入力作業を20分間負荷した。香り刺激は、精油ブレンドを4種類準備し、被験者が最も好んだ香りを実験に使用した。測定項目は、主観評価（臭気強度、香りの快・不快度、疲労度、自覚症状、疲労部位）に加え、実験 1 は、唾液アミラーゼ、実験 2 は、心電図、脳波とした。作業効率は、入力数とエラー率から評価した。実験 1 は、加熱したコップに精油ブレンドを滴下したものをパソコンの横に置き、香りを吸いながら入力作業を行った。実験 2 は、26℃、50%RH の人工気候室で脳波と心電図を測定しながら、カット綿を入れたシャーレに5分ごとに精油ブレンドを添加し、常に香りを感じるようにした。

結果および考察 実験 1 の疲労度は10例中7例、ねむけ感は10例中8例が香りにより軽減された。唾液アミラーゼは10例中7例が減少した。香りがある方が入力数は多く、エラー率は、わずかではあるが有意な傾向がみられた。対象者による差異は香りがある方が有意に低く、ねむけ感は10例中6例が軽減された。

2つの実験より、VDT 作業時に、好きな香りを嗅ぐことで疲労が軽減され、作業効率も向上することが示唆された。

目的 農村部在住高齢者における生活行動が活動量・睡眠に与える影響、さらに健康関連 QOL との関連を検討する。

方法 奈良県川上村在住の男性11名（70.9±5.9歳）、女性19名（71.5±7.1歳）を対象に、2019年7月～9月のうち1週間、生活行動の実測調査を行った。対象者には普段どおりに生活してもらい、活動量、睡眠、生活行動、体力、健康関連 QOL（SF-36）等を測定した。本研究は奈良女子大学倫理委員会の承認を受けた。

結果 平均歩数は男性4789±1944歩、女性5714±2298歩、平均睡眠時間は男性397±47分、女性373±48分であった。生活行動は男性より女性で家事割合が高く、睡眠・くつろぎ割合が低い傾向にあった。性別・年齢を考慮したうえで生活行動と活動量との関係を検討すると、仕事や家事が多いほど睡眠時間が短く、仕事や運動が多いほど体力があり、農作業や運動が多いほど睡眠の質が高くなる傾向を示した。さらに生活行動と QOL との関連については、身体的・精神的側面では関連はみられなかったが、社会的側面の QOL のみ1日あたりの外出割合と正の相関がみられた。以上より、生活行動の内容にかかわらず外出が高齢者の社会的側面の QOL の維持・向上に関連することが示唆された。

本研究は科研費（B）16H03027、特別研究員奨励費19J22081、平成31年度川上村大学連携事業補助金の助成を受けて実施した。

口頭発表 5月31日（日）

3M-06 好みの香りが VDT 作業に及ぼす影響
○長谷博子1、平林由果2
(1)株式会社シャローム、(2)金城学院大学

3M-07 農村部在住高齢者における生活行動と活動量・睡眠・QOL の関連
○城戸千晶1、久保博子2、東実千代3、佐々尚美4、須川真奈江5、星野聡子3、磯田憲生6
(1)奈良女子大学、(2)渋谷大学、(3)武庫川女学院大学

127
人名索引

あ
相原美輝 2J-03
青木香子 P-069
青木友香 P-047
赤坂修一 3F-05
赤羽根和恵 3K-04
赤松瑞枝 2K-04
秋山亜希子 3L-03
秋山聡子 P-031, P-038
秋山純一 P-150
秋山珠実 3M-05
浅井茂雄 3E-09
浅野由貴 P-062
浅海真弓 3F-07
東珠実 3E-13

い
李璟媛 P-120
飯島久美子 P-056
伊江邦男 P-146
五百藏良 P-053
五十嵐清子 3M-05
生田英樹 P-017
池上志津 P-014
池田健次 P-046
池田良美 P-099
池田昌代 P-031, P-038
石井和美 3B-02
石井和男 P-082
石黑智男 P-003, 3L-02
石田遙香 2J-02
石田康行 3B-05
石津奈樹 2J-02
石原克之 P-001, 3L-05
石原久代 P-072, 3E-05.
石引公美 P-137
伊豆南浦美 P-010, 2F-05
和良志穗 3K-01
遠田憲生 3M-07

え
遠藤久美 P-055, 3B-06
樋本淳史 P-114, P-117
海老塚恵子 P-027
江村義明 P-115

お
呉貞吾 P-120
大河内万彩 3B-01
大坂恵美子 P-151
大澤朋子 P-155
大間さわ子 3E-13
大谷真広 P-003, 3L-02
大谷山紀子 2D-01

か
甲斐今日子 P-075
海切弘子 P-059, P-060, 2J-02, 2J-04
貝田正人 3M-03
柿崎礼香 P-034
柿原文子 3F-06
影山志保 P-145, 3M-01
笠井直美 P-121
日本家政学会第72回大会 協賛企業・団体一覧 企業展示配置図

①株式会社武蔵製薬
②関東食品株式会社
③公益財団法人生命保険文化センター
④株式会社竹内刃物製作所
⑤一般社団法人日本食品添加物協会
⑥東機産業株式会社
⑦株式会社メディア・アイ
⑧株式会社山電
⑨ヒューテック株式会社
⑩インターホロス株式会社
⑪株式会社ノビテック
⑫コニカミノルタジャパン株式会社
⑬株式会社 NAMOTO
⑭日本色研事業株式会社
⑮株式会社デジタルメディック
⑯株式会社エイエムアイ・テクノ
⑰東京書籍株式会社
⑱実教出版株式会社
⑲一般財団法人放送大学教育振興会
⑳株式会社メルシー
株式会社クリマ
味の素冷凍食品株式会社
株式会社西尾家具工芸社
実教出版株式会社
一般財団法人放送大学教育振興会
実教出版株式会社
味の素冷凍食品株式会社
株式会社西尾家具工芸社
実教出版株式会社
第72回大会 協賛企業・団体一覧

（一社）日本家政学会第72回大会の開催にあたり、ご協賛を顶きました企業・団体は下記の通りです。厚くお礼申し上げます。

### ランチョンセミナー（五十音順）
- NPO うま味インフォメーションセンター
- 花王株式会社
- 群栄化学工業株式会社
- ケンコーマヨネーズ株式会社
- 東京ガス株式会社
- 東洋水産株式会社
- マックス株式会社
- 株式会社ロッテ

### 企業展示（五十音順）
- 味の素冷凍食品株式会社
- インターコース株式会社
- 株式会社エイエムアイ・テクノ
- 関東食品株式会社
- 株式会社クリマ
- コニカミノルタジャパン株式会社
- 実教出版株式会社
- 公益財団法人生命保険文化センター
- 株式会社竹内刃物製作所
- 株式会社デジタルメディック
- 東機産業株式会社
- 東京書籍株式会社
- 株式会社 NAMOTO
- 株式会社西尾家具工芸社
- 日本色研事業株式会社
- 一般社団法人日本食品添加物協会
- 株式会社ノビテック
- ヒューテック株式会社

### 一般財団法人放送大学教育振興会
- 株式会社武蔵製菓
- 株式会社メディア・アイ
- 株式会社メルシー
- 株式会社山電

### 要旨集広告掲載（五十音順）
- 株式会社朝倉書店
- 花王株式会社サニタリー事業部
- 花王株式会社生活者研究部
- 桐生大学
- 群馬ヤクルト販売株式会社
- 株式会社建帛社
- 実教出版株式会社
- 高崎健康福祉大学
- 株式会社デジタルメディック
- 東京ガス株式会社
- 株式会社西尾家具工芸社
- 日本電色工業株式会社

### 協賛金（五十音順）
- 花王株式会社
- 高崎健康福祉大学
- マックス株式会社

### 製品提供（五十音順）
- キッコーマン飲料株式会社
- 株式会社武蔵製菓
賛助会員名簿
（2020年4月現在）

花王株式会社 生活者研究部
株式会社光生館
日清食品ホールディングス株式会社
ライオン株式会社 ファブリックケア研究所
味の素株式会社 食品事業本部 食品研究所
株式会社建帛社
不二製油株式会社
山崎製パン株式会社 中央研究所
大阪青山大学
株式会社アイ・ケイコーポレーション
株式会社朝倉書店
株式会社ADEKA
恵川商事株式会社
エスピー食品株式会社
大阪ガス株式会社
大阪桐蔭女子大学 図書館
開隆堂出版株式会社
株式会社霞が関トラベル
株式会社カネカ
首公学生服株式会社
サッポロビール株式会社 生産技術本部製造部
実教出版株式会社
修紅短期大学 図書館
一般財団法人住総研
公益財団法人生命保険文化センター
株式会社大修館書店
株式会社ダスキン ダスキンお掃除教育研究所
東京ガス株式会社 食情報センター
東京書籍株式会社
株式会社西尾家具工芸社
日清フーズ株式会社 加工食品事業部
日本女子大学 通信教育部
日本和装ホールディングス株式会社
別府満部学園短期大学
ユニ・チャーム株式会社
株式会社ロッテ 中央研究所
# 日本家政学会第72回大会 大会実行委員会 委員一覧

## 実行委員長
綾部 園子（高崎健康福祉大学）

## 副実行委員長
上里 京子（群馬大学）
内田 幸子（高崎健康福祉大学）

## 群馬県実行委員（五十音順）
- 安達 正嗣（高崎健康福祉大学）
- 今井 麻美（高崎健康福祉大学）
- 甲賀 崇史（浜松学院大学短期大学部）
- 小林 陽子（群馬大学）
- 曽根 保子（高崎健康福祉大学）
- 田中 進（高崎健康福祉大学）
- 田中 麻里（群馬大学）
- 谷 顕子（高崎健康福祉大学）
- 中島 君恵（桐生大学短期大学部）
- 西齋 大実（群馬大学）
- 前田 亜紀子（群馬大学）
- 村松 芳多子（高崎健康福祉大学）
- 山岸 裕美子（群馬医療福祉大学）
- 吉野 真弓（育英短期大学）
- 谷 顕子（高崎健康福祉大学）

## 犬山支部実行委員（五十音順）
- 丸中 早苗（東京家政大学）
- 浜口 順子（日本女子大学）
- 滨田 仁美（東京家政大学）
- 早川 文代（農研機構）
- 藤井 恵子（日本女子大学）
- 松尾 久仁子（日本女子大学）
- 松本 美鈴（大妻女子大学）
- 丸田 直美（共立女子大学）
- 三神 彩子（東京ガス（株））
- 三宅 紀子（東京家政学院大学）
- 村田 あが（跡見学園女子大学）
- 柳澤 幸江（和洋女子大学）
- 山村 明子（東京家政学院大学）
- 吉川 はる奈（埼玉大学）
- 米山 雄二（文化学園大学）
- 田中 早苗（東京家政大学）
- 鈴口 順子（お茶の水女子大学）
- 濱田 仁美（東京家政大学）
- 大石 恭子（和洋女子大学）
- 山岸 裕美子（群馬医療福祉大学）
- 早川 文代（農研機構）
- 松梨 久仁子（日本女子大学）
- 松本 美鈴（大妻女子大学）
- 丸田 直美（共立女子大学）
- 三神 彩子（東京ガス（株））
- 三宅 紀子（東京家政学院大学）
- 村田 あが（跡見学園女子大学）
- 柳澤 幸江（和洋女子大学）
- 山村 明子（東京家政学院大学）
- 吉川 はる奈（埼玉大学）
- 米山 雄二（文化学園大学）

## 会場校実行委員（五十音順）
- 猪俣 遥香（高崎健康福祉大学）
- 前田 亜紀子（群馬大学）
- 内田 薫（高崎健康福祉大学）
- 村松 芳多子（高崎健康福祉大学）
- 大塚 有里（東京家政大学）
- 倉持 清美（東京学芸大学）
- 大塚 恭子（和洋女子大学）
- 千葉 千恵美（高崎健康福祉大学）
- 内田 慶子（高崎健康福祉大学）
- 塩原 みゆき（（株）晋遊舎）
- 野口 礼於奈（高崎健康福祉大学）
- 坂本 弥生（横浜国立大学）
- 丸山 まいみ（高崎健康福祉大学）
- 鈴野 弘子（東京農業大学）
- 渡辺 由美（高崎健康福祉大学）